

でいぼいだらけの道2

奥村清志

「坊っちゃんだより」(二)

■ヤング・ジャパン(一)

(二〇〇二年六月十六日《日》)

幕末の動乱期に、十数年にわたって日本に滞在したJ・R・ブラックという人物がいる。一八五八年、米欧五カ国との間で通商条約が結ばれ、横浜に外国人居留区ができた。ブラックはそのとき居留区民に向けて英語新聞「ジャパン・ヘラルド」を発刊した。明治三年には英文雑誌「ファースト」も創刊する。

幕末から明治初頭にかけて動乱の日本を、鋭い批判精神と洞察力で描き続けたたぐいまれなヨーロッパ人(スコットランド人)ジャーナリスト、それがブラックだった。

その彼が、一八五八年の条約締結から二十年を経て、『ヤング・ジャパン』という著書を著した。やっと成人に達したばかりの若い日本という意味である。

通常の歴史書がもつ味気ない語り口とは違い、同時代人である新聞記者が、幕末の日本を生き生きとリアルに、まるでニュース映画を見ているように描いている。

桜田門外の変、生麦事件、攘夷を叫ぶ浪人による度重なる外人襲撃事件、英艦による薩摩攻撃、関門海峡を通過する船舶への長州砲台からの砲撃、それに続く欧米列強による長州攻撃、幕府による長州征伐等々、幕府崩壊に向けて流れていく一連の事件を、過去の単なる歴史的事実としてではなく、その時代にタイムスリップした感覚で、現場に居合わせたかのごとく生々しく描いてくれている。

死んで乾いた過去の歴史にすぎなかった幕末が、私の中で、生きた命をもって輝きはじめた。少し紹介してみる。桜田門外の変である。

一八六〇年三月、井伊掃部頭は駕籠に乗り、家臣に囲まれて、江戸城に向かっていった。堀にかかった橋の上には、紀州侯の行列がいた。さらに同じ地点へ尾張侯の家臣が向かっていた。大老はこういうわけで橋のたもとで二つの行列の間をいた。そこは橋へ通じる大通りであって、広場になっていた。雨合羽に身を包んだ二、三のまばらな人群れが、近くにいただけだった。

その時、突然、このぶらぶらしているように見えた一人が行列をさえぎって、飛び出し、またたくまに大老の駕籠の前に出た。駕籠の両側にいた家臣たちは、この先例のない妨害、決死的行動に向かって、飛びかかった。明らかにこの襲撃は事前にくらまれたものだ。というのは、このすきに、家臣たちのいなくなった駕籠の両側を、突然大地から湧き出したように、鎖かたびらを着た十八人か二十人の一団がおさえてしまった。不運にも、家臣や従者は不意を打たれ、雨具が邪魔になって、刀を抜く間もなく、主君をふせげずに倒された。寸秒間の出来事だった。

その時一味の一人が、血だらけの戦利品を手にして、土手道を走っていく姿が見えた。乱闘で、双方とも多数の者が倒れていた。重傷した二人の襲撃者は逃走不可能と見て、逃げるのをやめ、追っ手に対してこれ見よがしに、落ち着き払って切腹した。

大老の従者の多くは、襲撃者のそばで死傷し、地上にのびていた。生き残った家臣は、死闘から解放されると、この短時間の間に主君がどうなったかど駕籠のほうを振り向いた。あるの

は、ただ首のない胴だけだった。

こうなるともはやニュース映画ではないか。

この種の政治的的重大事件のみならず、江戸時代の庶民の暮らしぶりについても、『ヤング・ジャパン』は新鮮にみずみずしく描いてくれている。次は、江戸の正月風景である。

元日、夜が明けるにつれ、家の戸は順次正面からはずされ、家族の者は盛装して訪問者を待つ。あるいは、年始廻りに出かける用意をする。

しかしながら、元旦には、たいして年始廻りをしない。訪問は一般に二日目にまわされる。役人達は家来を連れて、三々五々年始廻りに往來している。というのは、これは厳しくお上から申し渡されているからだ。役目を持つある階級の家臣達は、礼装をして、上役の所に行き、新年の祝賀を述べることになっている。

これは面白く、絵のような光景だ。豪華な絹の服装と、肩の上に面白い翼のようなものをつけた衣は、この光景に美しさと奇抜さを添えている。

日が高くなるにつれ、街路は人で混んで来る。だが、普段見られるような、せかせかと不安げな群衆ではない。それどころか、天気の良い時には、なんと愉快な光景となることだろう。男の群、女の群、子供の群が、みんなタコをあげたり、羽根をついたりする。タコの形はいろいろで、大きさも違い、老いも若きも一所懸命あげている。

だが面白くて、愉快なのは羽根つきだ。六人か八人で一組になって、羽根をつく。みんな一張羅を着ている。髪は黒く、つややかで、女の場合は、色のついたちりめんのきれとか、サングのこうがいや、鼈甲の櫛をさしている。みんな、明るくて楽しそうだ。しばらく羽根をやり取りしたあげく、羽根が地面に落ちると、しくじった方は罰としてみんなから背中をピシヤリとたたかれ、時には墨で顔に印をつけられるという有難くない罰を受けねばならない。こんな時、ドツと笑いがわき起る。しかし、みんな順々にこれを我慢しなければならなかった。そこには、ただ喜びと陽気があるばかり。笑いはいつも人を魅惑するが、こんな場合の日本人の笑いは、ほかのどこで聞かれる笑い声よりも、いいものだ。彼らは非常に情愛深く、親切な性質で、そういった善良な人達は、自分ら同様、他人が遊びを楽しむのを見ても、うれしがる。

江戸の人々の笑い声がじかに聞こえてくるようだ。大名行列の描写なども圧巻だ。

『ヤング・ジャパン』の世界がなぜこのように清新でリアルなのか。新聞記者としての著者の取材能力と洞察力の鋭さ、これももちろんあるだろう。だが、それだけではない。

外国人の目で見たが故に、いっそう今のわれわれにリアルに迫ってくる。この点が見逃せないと思う。当時の日本人にとっては、描かれているすべてがあまりに当たり前の光景であった。その子孫である歴史家も、無意識のうちに「当たり前」という、描写以前の土俵にはじめから乗せられている。そこがブラック氏との見る目の違いであろう。

「当たり前」の土俵上では、ものごとを印象深く感動を持って描くことはできない。異邦人にして初めて、「当たり前」のヴェールをはいで真実を描き、感動を与えることができるのである。

『ヤング・ジャパン』は、歴史書としては完全性や正確性を欠くものかもしれないし、素人ものにすぎないのかもしれない。しかし、読む人を生き生きとその時代に連れ戻し、その空気を吸い、その場の人々と生きた交わりを持たせてくれるのは、歴史書ではなくて『ヤング・ジャパン』の方

だろう。

この効果を思うとき、たとえば科学の専門家でない人が科学を感動的に描くことも許されるのだと思いついた。

科学のプロである専門家が科学を語るとき、確かにそれは誤りなく、体系立ってはいるけれども、書かれていることすべてが本人にとっては当たり前であって、感動がない。感動なしに、ただ誤りなく書くことにのみ精力が注がれている。そのため読者に感動をもって伝わってこない（ことがよくある）。

専門家でない異邦人（直接の研究者ではないが、研究者の論文や書物を読んで学んだ人）にして初めて、科学に感動の明かりがともされる。

■ヤング・ジャパン(二)

(二〇〇二年六月二十二日《土》)

『ヤング・ジャパン』は、幕末の動乱期を、外国人ジャーナリストの目で、生き生きと克明に描いた興味深い著作である。私はこれによって初めて、幕末の諸相を、通り一遍の歴史の世界から、眼前の映像へと昇華させることができた。さらには、その時代の空気を吸いながらその世界に身を置く感覚を味わうことができた。

『ヤング・ジャパン』がなぜこのように真に迫る力を持つのか。前回、外国人という異邦性が、真実をつかみ出す客観性の源であろうと考えた。生まれながらにして身を置いている世界に対しては、人は真の客観性を持つことができないものである。

著者であるブラック氏の異邦性は、単に生まれ育った世界が違うということだけではないように思われる。日本人と日本の国土から異邦であるだけでなく、同じ居留地に住む他の外国人からも、さらには居留地を取り仕切る各国の公使や軍の司令官などからも、彼は異邦性を保って自由である。これが『ヤング・ジャパン』の魅力の根本にあると思われる。

自由と独立の精神。これが同時代の人々や文化からの異邦性をもたらし、ひいては、時代そのものからの異邦性を可能としたのである。時代に埋没しない客観性をブラック氏の言葉は持ちえている。百数十年を隔てた今の私たちにも、同じ空気を吸っているかのごとき親近感と迫真性をもたらす要因は、時代そのものからの異邦性にあるのだと、読み進んでいくうちに気づいたのだった。

居留地の住民や、その指導者たちから、彼の視点が独立していることを示す一つの例を挙げてみる。イギリス軍人を殺害した攘夷の志士の話である。

一八六四年十一月、鎌倉に向けて馬でピクニックに出かけたイギリス軍人二人が、日本刀を振りかざした二人の男に切りつけられ、一人は即死、一人は重傷を負った後、数時間後に死亡した。

数日後、殺人犯の一人が捕らえられた。直ちに裁判が行われ、判決は「横浜の市街引き回しと斬首、さらにその首を大道にさらす」というものだった。十二月三十日が処刑の日と決まった。

処刑当日、彼は固く縛られ、荷馬に乗せられ、居留地と日本人街を引き回された。荷馬の周囲には次々と人が集まり、長い行列ができた。そのときの様子が記されている。

彼は決然とした激しい外人憎悪の態度を示した。その全道中、あらん限りの声で、外人に対する憎しみを表している文句を歌い、同国人に自分と同様に歌えと呼びかけた。彼は外国人か

ら呼びかけられると、それにも答え、自分の行為を誇っていた。外国人については一般に行き渡っている感情がどんなものであろうと、そのとき彼に対して強い同情がもたれたことは、まったく明らかだ。徹頭徹尾貫かれたその男らしい態度を考えてみると、このことは、ほとんど不思議とするに足りない。

新聞記者として行列に同行したブラック氏が、自分と同郷の軍人を殺害した犯人に対して、一般の居留民が抱くような憎しみの情を表に出さず、ひたすら客観的に、日本の民衆が犯人に抱く感慨を観察し、犯人の雄々しい思想性を評価しようとしているのがわかる。

行列はいよいよ最後の処刑場へと向かった。しかし、日が暮れたため処刑は翌日に延期されることになった。

本人は大いに残念がったが、命を一日延ばすことができた。

翌朝、ついに処刑のときが来た。日本人も、外国人も、横浜中の人々が処刑を見に集まってきた。慣例では、こうした場合、囚人は目隠しをされた上、麻薬を飲まされ、最後の瞬間が本人には自覚できないようにされたそうである。しかし、この犯人は違っていた。

数名の刑吏に付き添われて、一台の乗り物が、監獄から、畑のうねうねとした細道を進んでくるのが見えた。到着すると乗り物の棧がはずされ、殺人犯人は縛られてはいたが身軽に出てきて、役人に丁寧な礼をした。明らかに麻薬を飲まされていなかった。というのは、刑吏が目隠しをしようと布を持って進み出ると、彼は「こんな屈辱は容赦してもらいたい」と熱望し、役人は聞き届けたからだ。彼はすぐに身も軽く、陽気に穴のところへ歩いていき、その前にひざまずいた。介添人がいつものように、取り押さえて連れて行く暇も与えなかった。

執行人の前で彼は「ちよつと待ってくれ」と頼んだ。そして上体をそらせて、一篇の詩を歌った。それから位置につき、介添人が彼の衣服を正していると、彼は執行人を見上げ、「俺の首はたいそう厚いが、お前の腕は確かか」とたずねた。執行人はこれを聞いて、少したじろいだようだった。

もう一度調子の狂った猛烈な叫び声を外国人に向かって発したあとで、「さあ、やれ」といった。一瞬、刀は宙にひらめいた。

刀が振り下ろされたとき、騎兵隊は一発を発射した。この音を、殺人者は自分の意識がなくなる前に、最後の音として聞いたことであろう。

すべては終わった。この男が死に面して示した雄々しさは、多くの人々の胸に、一種の哀れみの情を引き起こした。

事件後、すぐにもひとつとらえて処刑せよと、興奮して叫び続けた居留地の人々との間に、『ヤング・ジャパン』は明瞭な一線を画している。かといって、もちろん殺人を容認しているのではない。人を殺し、自らの死をも潔く受け入れる犯人の行動の原動力を、その場に流れる憎悪の感情から一步はなれた地点から、冷静に見つめようとしているのだ。そして、殺人犯の、やむにやまれぬ一徹の理念をも、それはそれとして理解しようとするのである。

ニューヨークにおけるテロと、それへの報復といった、時代の感情に押し流された地点からの報道ではなくて、まさに時代を超えた地点、個々の主義・主張・宗教を超えた地点から、時代の諸事象を眺め、伝えようとしている。これが『ヤング・ジャパン』の特徴だと思う。

時代から自由であり、独立を保っている。だからこそ、今を生きる私たちに当時の姿をリアルに

伝える迫真力を持っているのである。

■ケータイなしでは死んだも同然

(二〇〇二年七月二十四日《水》)

百年前まで、自然に同化したゆったりとした生活が地球上にはあった。今はどこを見ても、歩きながら、自転車をこぎながら、街角に立ったまま、さらにはろばた路端にしゃがみこんで、まるで勤勉の元祖二宮金次郎ばりにケータイを前に掲げ、ピコピコ指を動かしている「ケータイなしでは死んだも同然症候群」の若者が目に飛び込んでくる。

彼らを見ていると、人間は本当によい方向へ進化を遂げつつあるのだろうか、ふと人間の本性への疑いを抱いてしまうことがある。

ローラ・インガルス『大草原の小さな家』に、次のような一節がある。秋口になって、父さんが、馬車でたっぷり二日はかかる最寄りの町まで出かけることになったときの話だ。

「本当なら行かなくてもすんだのにな」

父さんは言います。

「どうでもいいことで、始終町へ行くことはないんだ。スコットが、もといたインディアナで作ったあのきざみタバコは、あまりうまいとはいえないが、まあ我慢できる。来年、ここでタバコを作って、スコットに返せばいいんだ。エドワーズから釘を借りさえしなかつたらな」

「でも、たしかに借りたんですからね、チャールズ」

母さんは答えます。

「それに、きざみタバコのことにしても、もうこれ以上借りたくはないでしょう。私だっぴいやですから。おこり熱の薬のキニーネもいりますよ。ひきわりトウモロコシもずいぶん節約したけれど、もうほとんどないし、お砂糖だってそうですよ。ミツバチの巣のある木を見つけないことはできても、私の知ってるかぎりじゃ、ひきわりトウモロコシの木なんかありませんし、来年にならなければトウモロコシの収穫はないでしょうに。それに、塩漬けの豚肉が少しあったら、鳥や獣の肉ばかりのあとだから、きつとおいしいだろうと思えますよ。それにチャールズ、ウイスコンシンの身内の人たちに便りもしたいし。いま手紙を出せば、この冬に向こうで返事を書いてくれるでしょうから、来年の春には、みんなから便りが来るでしょうし」

人と人の愛情というのは今のようには敏速性だけに頼るものではないのである。敏速性にこそ価値ありと考えるのは、どこか狂っている。

バレンタインデーのチョコレートが菓子業界の発案で広められたように、ケータイも、本来の必要性をはるかにこえて、情報産業の巨大資本の手によって、はやり熱のように広められている気がしてならない。これを進化の方向と呼ぶのだろうか。人間性を喪失した退化の方向と呼ぶべきではないのだろうか。遠からずきつとそれを知るときがくる。

■貴人の冠

(二〇〇二年八月二日《金》)

夏休みの最初の仕事は、たまっていた手紙類の返事と、ちよつとした原稿書き。一段落ついた昨

日、それらを荷かごに詰めて、管轄する郵便局の本局まで自転車を走らせた。我が家の目の前に郵便局はあるのだが、そこでは足せない用があったものだから。道のりは片道4キロ。行きは軽い上り勾配だ。目の限り緑が広がる田園。風が光となって稲の穂先を流れて行く。太陽は頭上から直射。むき出しの腕がじりじりと音を立てる。自転車は快速調だ。

頭のとっぺんにほつれ穴のある野球帽をかぶり、一人野中の道を行く私を、高みからカラスが笑った。カラスは長生きするという。このカラス、二十年前に俺が短歌に詠んだ、あのカラスかもしれん。そんなことを考えたりもした。

用を終えると、帰りは遠回りだが、重信川の土手道へ。土手の取っ掛かりはやや急勾配の登り。それが二百メートルばかり続く。一気に駆け上がる。そこまではよかった。だが、登りきると、さらに長い橋を対岸に向かう気になった。橋の半ばまでは再びゆっくりした登り。その途中で息が切れてきた。

懐かしいなあ、この息切れの感覚。東京の府中でN社に勤めていた頃、同僚と一緒にジョギングを始めた。昼休みに会社の周囲を約二キロ走る。その初日、走り終わるとフェンスに手をつきゼーゼーハーハー。あのときのあの息切れだ。二十代半ばだった。

空気が希薄に感じられ、血中酸素が不足してくる。心臓がそれをカバーすべく猛烈な早さで脈打っている。頭がガンガン鳴って、立ってはいられない。あれだ。

何日か走っているうち、息切れの感覚は消えていった。距離を伸ばしても大丈夫。

以来四半世紀、よくぞ走り続けてきたもの。五十歳にして病に倒れて入院するまで、毎日のように走り通したのだった。

今、日々の運動は散歩か自転車だ。ジョギングの頃には、自転車なんて運動ではないと思っていた。風を切って爽快にはちがいないが、体への負荷などみじんもないと思っていた。

それが、歩くことが日常となった今、自転車は立派な運動だと知った。ことに上り勾配を精一杯こぐ、これは十分すぎるほどの心臓への負荷だ。

老化とはこうして進むものらしい。楽にできていたことが困難になってくる。なんでもなかったことができなくなってくる。これは誰しも突き当たる現実の壁だ。昨日はそのわずかな兆候を味わったというわけだ。

ひと月前に義母が死んだ。二年前には義父も死んだ。彼らの最後の旅立ちを見ていると、あらゆる生命活動が負荷となり、生きていくことにさえ耐えられなくなった瞬間、命が果てる。それを痛ましくも眼前に見せつけられた。

そういえば昨夕、犬を散歩させていると、大きな団地のフェンス沿いの道で、五十メートルほど歩いてはフェンスに手をつき、一休みし、そしてまた五十メートル歩く。それを繰り返している老人を見かけた。ジョギングを始めた初日、会社のフェンスに両手をつけてゼーゼーハーハー言っていた、まさにあのときの自分の姿だ。

老人のシルエットは、わが身の過去であり、同時に、やがて来るであろう未来の姿でもあった。夕日を背にした、なんと物悲しく、かつ慕わしいシルエットであったことか。

住む人がいなくなった妻の実家をとまどき訪れる。先日、清思庵と名付けられた義父のアトリエに入ってみた。義父の死後、義母もほとんど入ることはなかったようだ。

晩年の義父はそこで、絵を描き、版画を彫り、短歌や俳句を作ったりしながら、一日の大方をす

ごしていた。

義父が最後にこのアトリエで仕事をしたのは、三年前の初冬だったろうと思われる。死を前にした入院の数日前だ。以来、誰も入っていなかったのだろうか。

入ってみると、やりかけの仕事の蹟を残したまま時は凍りつき、机には筆や硯が、翌日また使うからと言わんばかりに、帰ることのない主人を待ちつづけていた。

床には埃がたまり、版画、水彩画、焼き物などが所狭しと並べられている。書棚の一つに目をやると、手帳がうずたかく、棚からこぼれ落ちんばかりに積み重ねられていた。義父は絵や版画のほかに、短歌、俳句、川柳もやっていた。いつも手帳を持ち歩き、ふと一句浮かぶと、書きとめていた。母屋にはそうした手帳が何冊もあった。それをまとめて遺作集を作つてあげようかと考えたこともあった。それが義父の文芸創作のすべてだと思つて。

だが、アトリエに入つてみて、母屋にあるのはほんの一部にすぎないとわかつた。義父の創作のほぼすべては、この清思庵にあった。驚きであり、感動だつた。

スケッチブックもうずたかく積まれていた。そう言えば、手帳とスケッチブックは義父の外出の必需品だつた。町を歩いて、電車に乗つても、車で遠出をさせてあげても、ふと何かに目が留まると、その場ですぐに手帳やスケッチブックを取り出した。スケッチには、淡い水彩や色鉛筆で色をつけた。手早さと見事さに、いったい何度感嘆したことか。

義父の生きてきた証しがこのアトリエに詰めこまれていた。この発見は、考古学者が何千年も昔の貴人の冠を掘り出したのに匹敵する貴重なものであつた。

■生麦事件

(二〇〇二年八月十四日《水》)

先日、高校総合文化祭の引率で横浜に行った。「ヤング・ジャパン」によつて、開港当時の横浜の様子が、まるで見てきたように頭に焼き付いていたものだから、これまで歩いたどの横浜とも違い、今回はタイムマシンで懐かしい故郷を訪れたような、そんな気分になつた。

JR 関内駅から港にかけての広々とした緑地帯。いま横浜スタジアムがある辺り。そこが開港当時、居留民のために幕府が提供した公園だつた。イギリス人はここでクリケットや乗馬を楽しんだ。驚くほど広い空間だ。

周囲の町から町筋が四十五度傾いている一角、いまの中華街だが、ここが外国人居留地だつた。広大な緑地公園は、居留地と日本人街とを仕切る、安全のための緩衝地帯でもあつたのだつた。

百数十年の昔に戻つた気分、私は横浜の町をひととき楽しむことができた。

引率のわずかな隙を縫い、生麦事件のあつた生麦にも行つてみた。

なんと言ふこともない旧東海道筋だつた。

居留地から川崎大師まで馬でピクニックに出かけた、女性一人を含む四人のイギリス人。彼らが折悪しく遭遇したのが、江戸から国許に帰る途中の薩摩藩主名代・島津久光の行列だつた。

彼らは土下座することなど知らず、騎馬のまま行列とすれ違い(そう、すれ違ふと言わねばならないほど東海道は狭かつた)、そのうちの一人は無謀にも行列の中に馬を乗り入れた。リチャードソンという、香港に長く滞在していたイギリス商人だ。中国人や日本人を「土人」として見下す横柄

な性格だったと『ヤング・ジャパン』には記されている。

「大名の行列がなんだ」

と、彼は家来どもを半ばからかいながら行列の中に分け入った。

大名行列同士のすれ違いにおいてさえ、格下の大名は駕籠から降りて、他方の行列が通り過ぎるのを腰を落として待たねばならなかった時代である。

行列のさきがけは、礼儀を知らない彼らに再三目配せで注意したという。リチャードソンを除く他の三人は、馬を止めて行列の通り過ぎるのを待つよう、先頭を行くリチャードソンに声をかけた。しかし、リチャードソンは聞かず、馬を進め、挙げ句に行列の中に割り込んだのだった。たまりかねた家来の一人が太刀を浴びせ、リチャードソンは重傷を負ったのち死亡した。

他の三人は斬りつけられたものの、死にはいたらなかった。特に女性は帽子が幸いして軽症ですんだ。血を流しつつも、ほうほうの体で横浜に逃げ帰った。彼女の報告が事件の第一報となったのである。

薩英戦争の引き金になったそんな事件を、車が走る東海道筋に二重写しにしながら、しばらく町角に立ってぼんやりしていた。

■シシやるんけ

(二〇〇二年八月二十九日《木》)

先日、大型犬のリヨウを散歩させていたときのこと。

さわさわと風が渡る田の畦を歩いていると、よく実った稲田の前方に、自転車を止めて突っ立っているおじさんが見えた。

おじさんが立っているのは畦道が農道にぶつかる地点。つまり、私と犬とが数分以内に間違いく到達する地点である。畦は一本道だから、引き返さない限り、犬と私はおじさんにつつかる羽目になる。

顔見知りだろうかと、とっさに脳内をかき回した。記憶の糸をまさぐるが、検索の網にかかる人物は浮かばない。つまり初顔である。

おじさんは狭い畦道の出口(入り口でもある)にでんと立ちふさがったまま動かない。おまけに自転車でバリケードまで作っている。

そのうち気づいてくれるだろうと、犬の歩みをリードで加減しながらゆっくりと近づいた。気づいてくれたなら、体をちよつと脇に寄せてくれるはずだ。

ところがおじさん、視界の隅にこちらを入れておくことをにおわせながら、半身に構えて視線を横に向けている。

ひよつとすると、これは危険なケースかもしれない。待ち伏せ殺人とか、出会い頭の発作的殺人、こんなのが最近ちよくちよくニュースになっているではないか。

だけど、このおじさん、どう見ても純朴な田舎のおじさん顔で、危険の「キ」の字も感じられない。野良焼けした顔が夕日に照っている。

とうとう一メートルにまで接近した。まぎれもないニアミスである。それどころか、互いが譲らなければ衝突である。

「ちょっとすみません」

声をかけようとしたが、一瞬、相手の方が早かった。振り向きざまに声が飛んできた。

「おおけえのう、その犬」

そうか、そうだったのか。これを言うために、おじさん、わざわざ自転車を止めて、通せんぼまでして、私と犬を待っていたのか。

松山弁丸出しのおじさんだった。私も松山に生まれ、松山で育ち、その後、京都と東京で十年近くを過ごしたものの、いままた松山の人々と交わっている。けれども、本物の松山弁からは遠く隔たったままだ。三年前に腸の病気で入院したとき、入院患者のおばちゃんたちが生粋の松山弁を話していて、そうそう言えばこんな言葉があったよなど、懐かしく聞きほれたのだった。

それ以来かもしれない本物の松山弁。続いて、

「この犬、シシやるんけ」

ええ、何を言ってるの。まったく意味不明。

「はあ？」

と、百パーセント意味不明という思いを込めて、力なく聞き返す。するとまたも、

「シシやるんけ」

おじさんは結局三度同じ言葉を吐いた。

そのつど私も

「はあ？」

と、これまた同じ反応。ようやく意味が通じていないことに気づいたらしい。聞き方が少し具体的に変わった。

「イノシシじゃがな。イノシシかましやせんのか」

「ええ？ イノシシ？」

意識の根本のずれにおじさんも気づいてきた。

「わしや、あっちの山の人間よ」

おじさんが指差したのは北の山。かつてジョギングを日課にしていたころには、月に二、三度、小野川沿いに谷を遡上して、おじさんが指差したあたりの山道を走ったものだ。山の中腹から見える松山平野が私の気に入りであった。

「あっちじゃのう、犬にイノシシかますんじゃがな。十頭ぐらい犬連れてのう。逃げてても逃げててもイノシシかますんじゃ。しまいにやイノシシぐったりじゃげ。それを人間がとるちゅうわけじゃ。ハハハハハ」

おじさんは畦道をせき止めたまま、イノシシ狩りを事細かに説明し始めた。そして最後に、「イノシシはゼニになるけに、イノシシやらんどのう。おおけえ犬にタダ飯は食わせられんぞな」おじさんの松山弁に私は松山弁で対抗できない。私の言葉はどこか着飾っていて、土着のにおいがしない。

「そうですか」

などと答えてみるが、場の空気から明らかに浮き上がっている。かといって、

「ほーお、ほーかえ」

などとは、死んでも私には口にできない。

独演会がすむと、やっと道があげられた。真っ赤に焼けていた西空がいつしか光を失い、静寂が漂う。

しゃべり疲れたのか、おじさんは自転車に乗ろうともせず突っ立ったままだ。犬と私は紫色にたなびいている西に向かって歩み始めた。背後から、視線とも風ともつかないものが、いつまでもすがすがしく吹きつけていた。

それにしても、この人懐っこさはなんだろう。見も知らぬ赤の他人にいきなり立ち話を吹っかけてきて、しかも、それがまるで旧知の間柄のようになれなれしい。

自分の関心は万人の関心。おじさんの人生観の、これが中心柱だ。というよりも、農耕文化に長く染まった日本人の、これは自然な人生観なのかもしれない。松山弁が忘れ去られるとともに忘れ去られようとしている、これぞ土着の人生観だ。

定着し、土地を離れない農耕文化では、互いの関心も必然同じものになっていく。顔見知りであろうと、なかりうと、関心はみな同じなのだ。お互いみんなそう信じている。

イノシシをしとめた場面を語るときのおじさんの満面の笑顔。私が一緒に嬉しがっていると信じきっている。口から泡を飛ばし、顔が崩れてしまいうそである。

この日本人の人懐っこさは、江戸から明治にかけての日本文化論で必ず語られる特徴的な現象である。欧米流の個人主義からは想像もできない日本人のなれなれしさ。その根源はこれなのだ。ハタと今思い当たった。

子供のなれなれしさに通じるなれなれしさだ。

「マーちゃんがねえ、これくれたの」

マーちゃんなど知らない初対面の大人にも、子供は平気でこうしゃべりかける。子供においては、自分の世界は、疑う余地なく万人のものなのだ。

日本の農村で、長く培われてきたこの精神的一体感が、都会では突き崩されている。都会に限らず、地方の小都市、あるいはその周辺の農村、いたるところで日本的感性は突き崩されている。生き残っているのは、農山村の、ごく限られた身内集団だけなのかもしれない。

良し悪しを言っているのではない。事実を言っているのである。

都会の雑踏では、人間一人一人に、蟻一匹ほどの値打ちもありはしない。互いに視線をそらしあい、無視しあって歩いている。田舎の畦道では、遠くからやって来る見も知らぬ人を、わざわざ自転車を降りて待つ人がいる。

■ローラのいつ

(二〇〇二年九月四日《水》)

つい最近まで、テレビドラマの『大草原の小さな家』に出てくるローラを、フィクションのヒロインだとばかり思っていた。

十年余り前、娘が小学生だったころ、子ども向けに書き直した『大きな森の小さな家』と『大草原の小さな家』を買ってやり、娘は読んだだろうが、私は開いてみることもなかった。それを先日、娘の本箱に見し、手に取り、読んでみた。

ローラの物語が実名で綴られた、ローラ自身による自伝物語であることを知ったのは、そのとき

だった。

夢中になって二冊を読み通し、すっかりローラのとりになった私は、ローラの他の物語や、ローラについての解説書を、図書館から次々に借りてきては読んだのだった。

ローラ・インガルス・ワイルダーが子供時代を振り返って第一作『大きな森の小さな家』を書いたのは一九三二年。ローラ六十五歳のときだった。出版されるや、たちまち全米のベストセラーとなり、続きを期待する多くの読者にせかされながら、「小さな家」シリーズを書き継ぐことになった。大戦後は五十カ国以上で翻訳された。日本でも戦後早い時期に翻訳されて、焼け跡の子供たちからたくさんのファンレターが届いたという。

彼女の文章には、芸術家的なきらびやかさや、感性の飛躍があるわけではない。田舎の女性のストレートな感性によって、周囲の出来事や自然の変化を、あるがまま、感受性豊かに、しかも能動的に受け止めている。

ローラは決して傍観者にはならない。貧しさにも、災害にも、病気にも、苦しい労働にも、いつでもローラは自らかかわり、悲観することなく目いっぱい対処していく。しかも楽しみながら……。これがローラの魅力であろう。何ごとからも逃げることはない。

ローラの作品が多く読者に感動を与えるのは、開拓時代を自由に生きた少女とその家族の、生きざまの魅力によるだけでなく、ローラ自身が天性のものとして備えている豊かな楽天性によるところも大きいのだと思う。

ローラは子供のころから詩や作文に秀でた子として評判だったようだ。そのころの詩や文章は、家族によって大切に保管され、今も残されている。老齢になってから書かれた作品とは別の味わいで、これらも魅力的である。

結婚して、サウスダコタ州の両親の元を離れ、ミズーリ州オザーク丘陵のマンズフィールドに住むようになった。そこでは、地元「ミズーリ・ルーラリスト」という新聞の専属コラムニストになった。それが子供時代の資質を開花させるきっかけになった。書いたのは、農家の主婦の生活、自然の魅力、ニワトリの飼い方など、生活に密着したものばかり。連続して何十回もニワトリの品種と飼い方を紹介する記事を書いたのは、娘のローズもあきれたという。ニワトリの研究は、ローラの生涯にわたるひそかな楽しみであった。

こうした地方紙の書き手としての経験がローラの筆力を高め、世界的名作を生み出す下地になったであろう。しかし、プロの目からすると、その文章力はなお稚拙であり、ローラ作品には、一人娘であるローズの手が加えられているという説が根強くある。

母ローラが第一作目を書いたころ、ローズはすでに、全米に知れ渡った人気作家であった。

ローラ原稿はどれも安っぽいノートに鉛筆書き。それをローズに送り、ローズがタイプライターで清書して出版社に送る。こういう方式をとっていた。第一作目では、ローズはすぐに清書せず、筋立て、言葉の調子、焦点のあてどころなどを母親にアドバイスして返却し、ローラはそれに従ってすっきり書き直したという。

さらには、清書の段階で、ローズが手直しすることも、おそらくあっただろう。ローラ自身、後になって、

「ローズの手直しがなかったなら、私の物語がこんなにも多くの人に読まれることはなかったでしょう」

と語っている。

こういう裏話を知ってもなお、ローラの作品からローラらしさや魅力が減じることはない。彼女の作品の魅力は、芸術的な感性や技巧の輝きによるのではない。自然の中に満ち満ちている土と水と光の素朴な輝きが、作品に浸透しているところに、その魅力はある。このような輝きは、プロの手直しによって生まれてくるものでは決してなく、場合によっては、手直しによって、かえって伸びやかさを失い、屈折してしまふ危険性さえある。ローズによる手直しというよりは、ローズのアドバイスをもとにしたローラ自身による書き直しというのを私は信じたいと思う。

ローズは清書したものを必ずローラに送り返し、それにローラが手を加え、再びローズに送る。このような往復が何度も繰り返された後に、やっと出版にこぎつけるといのが現実だった。だから、清書段階でローズが手を入れた箇所は、あったとしても必ずローラの承認を得ていることになる。しかも、ローズの加筆は微細であって、作品の生命は、ひとえにローラの実力に負っているというのが、多くの研究者の一致した見解のようである。ローズもやがて、

「母の文章は直す部分がないくらい一級品です」

と言うまでになったのである。

ローラは文字通りのパイオニア・ガールであった。パイオニア・スピリットを父さんの血から受け継ぎ、母さんや姉メアリーが現状維持志向であったのに対して、父さんとローラは「西へ、西へ」のパイオニア・スピリットを持ち続けていた。より開放的な生活の場をと、何度となく移動する父さんに、母さんは半ばあきらめ顔で付き従い、ローラは父さんとともに期待に胸躍らせて旅するであった。

ローラはいつでも目標を高く持って生きていた。学校の先生になることが少女期のローラの夢であった。姉のメアリーが盲人大学に通うことになり、その学資を援助しようと、ローラは教員免許を取るための厳しい勉強に打ち込んだ。そのころのローラの詩がある。

何をやるにも

一生懸命やることです

つまらないことにとらわれず

正しいと信じたら

とにかくやること

一生懸命やることです

味付けも何もないが、ローラの覇気が伝わってくる。今の日本に、胸を張ってこう言える若者がどれだけいるだろう。

ローラは幼いころから、メアリーとは志向を逆にしていった。メアリーは内向的、ローラはその逆。姉のしとやかさにわざと反抗することもしばしばだった。しかし、高熱の病によってメアリーの視力が失われた一八七九年（メアリー十四歳、ローラ十二歳）を境に、ローラはメアリーから内面の豊かさを吸収しはじめた。そのときのことを、ローラは次のように語っている。

メアリーの目がまったく見えなくなってしまった悲しい日、父さんはローラにこう言い渡しました。

「これから、おまえは、自分が見たものを何もかもメアリーに伝えてやって、光と色と動きの架け橋になってやるんだぞ」

そこでローラはすぐさま、すべてのものを二度見ることにしたのです。一度目は自分のため、二度目はメアリーののために。これは、ローラの生涯続く習慣になりました。

病氣の間、メアリーは文句一つ言いませんでした。目が見えなくなってからも、めそめそしたりはしませんでした。辛抱強く、自分の身に降りかかった不幸をあるがままに受け入れ、父さんや母さんや妹たちの親切に感謝したのです。ローラは、そんなメアリーから、多くのことを学んだのでした。そして、メアリーに刺激を受けながら、忍耐強さ、明るさ、やさしさを自分のものとしていきました。

ローラの写真はいくつもあるが、私は、メアリー、ローラ、キャリーの三人が並んだ写真が好きだ。メアリーが失明した翌年のものだ。おそらく一家が冬の間住んだデ・スメットの町の、できたばかりの真新しい写真館で撮ったものだろう。

この写真は、三人の姉妹の、それぞれに異なる立場や性格の違いを、見事に撮し取っている。

ローラは父さんの言いつけどおり、いつでもメアリーのそばにいて、見えるものすべてを言葉にして伝えたのだった。刻々と変化する夕焼けの色調を見事に伝え、

「あんたのおかげで私も一緒に夕焼けを見ているようよ」と、メアリーが心からローラに感謝した話が残っている。

この写真の一年後、メアリーはアイオワ盲人大学に入学し、さらにその一年後、ローラは十五歳で教員免許試験に合格した。そして、自ら学校で学びつつ、頼まれると数ヶ月間ずつ各地の学校で臨時教員として働くという生活が始まったのだった。

■コスモス草原にくり返される有為転変

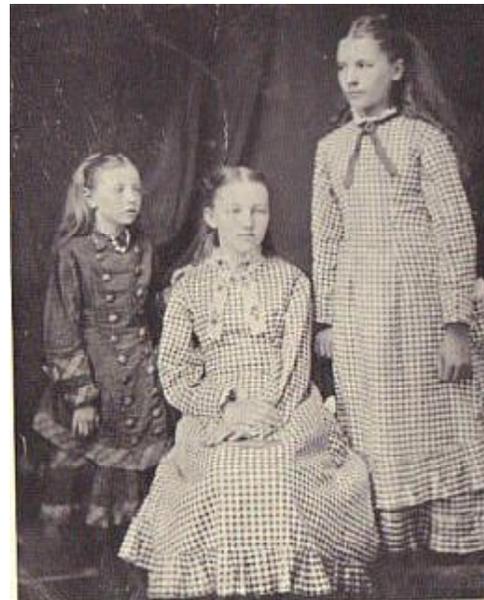
(二〇〇二年十月二十六日《土》)

町を歩いていると、キンモクセイの花びらが歩道に丸く集まっているのをよく見かける。塀から突き出した枝々から落ちた花びらだ。キンモクセイは、花びらは小さいけれどもぼつりしているから、桜のように風に吹き流されて花吹雪になったりはしない。まっすぐそのまま落下する。そのため枝の下に丸く集まって散り敷くことになる。散ってからでさえ、黄色のかたまりが人の目を楽しませ、驚かせてくれる。

アベリアの白も見事だ。アベリアは一メートルほどの低木で、生け垣や街路樹として、あるいは大きな街路樹の下植えとして、いたるところに植えられている。

開花期間は驚くほど長い。春から初冬まで花が咲く。特定の盛りの時期というものがない。だが、彩りが際立つのはやはり今だろう。やわらかな秋の光にしっとり溶けて、白く清楚な輝きを放っている。

コスモスのすがすがしさは言わずもがなだ。庭先や道端に咲くコスモスの風情もたまらないが、



左からキャリー、メアリー、ローラ

コスモスがコスモスらしく、巨大な銀河のようにみごとに群れ咲くのは、ゆったりと起伏する丘陵だ。長めの散歩道に、コスモスが乱れ咲くそうした草原がある。赤、ピンク、白、……、とりどりに彩られた無数のコスモスが、いつときも休むことなく、波打ち、渦をなし、揺らめいている。

見つめていると、コスモスの原を、ときおり、さあっと秩序ある風紋が押し寄せてくることがある。目前まで来ると、風紋は碎け、無秩序なゆらめきとなって、一輪一輪の花びらを脈絡なく揺する。しかしその無秩序もいつときだ。ランダムな揺らめきの中から、やがて共鳴しあったかすかな律動が生じ、それが神秘の秩序となり、成長し、輪となり、渦となり、統合されたもろもろが右に左に揺れ動く。しばらくすると、その輪も渦もふたたび活力を失い、緩んだ一本の紐のようになって、どこか遠くへ流されていく。するとまた、一瞬のしじまの奥から風紋が押し寄せてくる。

永遠にとどまることのない有為転変が、コスモスの原に繰り返されている。

見つめていると、私までが巨大な力に呑みこまれ、カオスと秩序の、永遠の繰り返しの中に溶け込んでしまう。醒めているのか夢なのか、それすらわからず、なんとも不思議な気分にも包まれる。

ただ一つ確かなもの、確かだと思えるもの、それは自分の人生だ。生まれ、育ち、歩んできた一本の道。そこには迷いがあり、挫折があり、偶然があり、必然があり、出逢いがあり、別れがあり、諦念があり、喜びがあり、そして永遠の悔恨、つまり自己非容認がある。容認を願いつつも容認しえない道。この道の尖端に今の自己があり、自己に対する動かざる实在認識こそがもろもろの实在認識の根源的確認であるとすれば、この一本の道こそ絶対的にたしかな实在である。

確として実在している自分の人生。過ぎ去り、流され、無と化した過去の遺物ではなくて、確かな実在として現存しているこの人生。それを一本の道として見通し、証しすることができるのは、当事者であるこの私のほかにいはいはない。

■多磨霊園駅

(二〇〇三年十二月二十三日《火》)

もう三十年近く前のことだ。東京の府中でN社のコンピューター部門に勤めていた私は、毎日がコンピューター、コンピューターの生活に堪えられなくなって、思い悩んでいたとき、校長から誘いがあった、今の学校に数学教師として転職することになった。

話が決まったのは秋だった。会社に退職願を出したのは年明けの二月。唐突な退職願に、課長はもちろん、同僚みなが青天の霹靂だと言って驚いた。だが、私の気持ちは揺るがなかった。

三月末、いよいよ引越しの日が来た。すでに結婚していて一軒家を借りていたため、運送屋はよほど荷物が多いと踏んだのだろうか、大型トラックの手配してくれた。朝、家の前に止まったトラックを見て仰天した。これなら荷造りなどいらぬ。家ごと積み込んでしまえそうさ。

こちらが手を出すまでもなく、作業員がきばきと荷物を積み込んでくれた。家の中が空っぽになった。さあ出発という段になってトラックの荷台を見ると、幌をかけた荷台はほとんどが空。隅っこに小さく寄り集まって肩をすくめているのが我が荷物たちであった。

トラックは去っていった。もう後戻りはできない。大家さんに最後の挨拶をし、妻と二人で京王線府中駅まで歩いていった。会社の行き帰りに毎日自転車で行った道だ。自転車で妻を乗せ、何度走ったか知れない道でもある。

親しくなった定食屋さんを横に見、学園通りを横切る。大通りをしばらく行くと、農工大の塀に沿って斜めに入る旧道が現れる。閑静な住宅地を抜けている一本道だ。春たけなわとなれば、家々の庭にとりどりの花が咲き乱れ、見事な花園となる細道だ。

思い出多いこの道を、二人は言葉少なに歩いていった。所々に散在している小さな空き地は、どれも関東ローム層の黒い畑だ。

府中に来て真っ先に驚いたのが、黒い畑だった。生まれ故郷の松山にも、学生時代をすごした京都にも、決して見られなかったまっ黒な土。初めて見たとき、土の黒さは異様だった。だがすぐに、中学の地理の時間に関東ローム層という真っ黒な土があるのを習ったことを思い出した。それがこれかと納得した。その昔、富士山が噴火して振りまいた火山灰だ。どことなくほくほくと暖かな感じのする土であった。(関東ローム層が黒い土というのは記憶違いかもしれない)

富士山は、晴れた日には、会社の屋上から毎日のように遠望できた。特にすばらしいのは日没前だ。西空を見ると、丹沢の山塊が左斜面の一部に食い込んでいる富士山が、鮮やかなシルエツトとなって浮かび上がっている。まるで片肌を脱いだ秋祭りの若い衆だった。

そんな富士の姿も、もう見ることはないのだろうか。寂しさがこみ上げてくる。

小道はやがて住宅地を抜け、広いケヤキ並木にぶつかる。大國魂神社おおくにたまの参道である。この道を遠い昔、徳川家康が馬で詣でたという話が残っている。樹齢数百年の巨大なケヤキが両側に並ぶ。府中の目抜き通りである。

われわれの新婚旅行は、松山から府中までの、四泊五日の列車の旅だった。大阪までは船に乗り、そこから金沢へ。さらに黒部峡谷、白馬岳、美ヶ原などの山歩きを楽しみながら、最後は中央線の八王子駅に降りた。八王子の駅前で食べたトンカツの美味しかったこと。

八王子から府中までは京王線。五月初頭の夕暮れどき、二人は府中駅に降り立った。そのとき、妻と二人で最初に歩いた府中の町が、このケヤキ並木だった。

妻にとっては初めてのこの道を、今とは逆に、府中駅からケヤキ並木を通り、さらに住宅地を斜めに抜けて、新居へと向かったのだった。

新居の借家には、ひと月前から私が一人で住んでいた。

萌えはじめたばかりのみずみずしいケヤキの新緑が、私達の門出を祝ってくれた。

小道に沿った家々の庭には、色とりどりの見事な花が咲き乱れていた。

「きれえねえ。いいところみたいね」

「うん、静かで住みやすいところだよ、府中は」

今、府中をあとにしながらか、私はあの日のことを思い出していた。妻には申し訳ない思いでいっぱいだった。あのとき抱いていた夢と希望には、今日のこの転職はただの一片も想定されていなかったのだから。

私にとって、これは自分を生かすためのやむにやまれぬ選択なのだと自分に言い聞かせ、同時にそれが妻にとっても幸せの道なのだと、彼女を説得し続けた結果の転職だった。無限の希望が未来に向かって広がっているのを感じる一方で、後悔がないと言いつ切る自信もないのだった。はたしてこれが人生に充足感をもたらしてくれるのかどうか、確信がなかったのである。

目の前にぶら下がった餌にただ食らいついただけかもしれない。

肝要なのは自身の志向性だった。自分が理系向きなのか文系向きなのか、そもそも、そのとこ

ろの分別がついていなかった。コンピューターであれ、数学であれ、これは明らかに理系の仕事である。しかし、純粹に理系の立場で、生涯、仕事を貫く気持ちにはなかったのである。教師であれば、とりあえずの専門を数学としながらも、多様な可能性に柔軟に対処できるのではなからうか。つまり文系の志向性にも対処できるのではなからうか。

私にとつての無限の希望とは、ただそれだけのものだったのかもしれない。

ともあれ、乗り出した船だ。この旅路を大いに楽しみ、先々に夢を追い求めようではないか。不透明な未来に萎縮するよりは、不透明であるが故に今は見えない可能性に期待しよう。そんな気持ちで、新宿行きの特急に乗り込んだ。

新宿行き特急は、これまで必ず帰りのある「往き」であった。今は違う。帰ることのない片道切符の新宿行きに乗り込んだのである。

就職して最初に府中にやってきたとき降りた駅は、多磨霊園駅だった。独身寮が多磨霊園のそばだったのである。真っ黒な畑に驚いたのも、駅から独身寮に向かう道すがらだった。

そういえばあのとき、未来に限りない希望を抱いて弾むように歩いたのだったな。近ごろ多磨霊園は生活圏からすっかり遠のいてしまったな。

そんなことをふと思ったとき、特急は多磨霊園駅を猛スピードで通過してしまった。

駅のプラットフォームをなつかしく眺めることもできなかった。湧き上がる感慨に身をまかせたかったが、そのゆとりさえ与えることなく、特急は見る間に多磨霊園駅を走り去っていった。

過去を捨てよと、冷徹な声が天上から届いたようにも思えたのだった。

■沈丁花

(二〇〇三年十二月二十四日《水》)

数年の会社勤めの後に、私は、自分の母校である中・高等学校に数学教師として戻ってきた。ずいぶん昔のことになる。

故郷に戻るようになったのではあるが、住むところがない。アパートでも借りようかと、両親に手頃なアパートが空いていないか調べてもらうことにした。

そうこうするうち、妻の実家から知らせがあって、古い納屋に手を加えれば、夫婦二人くらいなら住めるという。納屋の一部はすでに義父のアトリエになっている。だが、まだ空隙があった。そこを若夫婦が住めるように改造すればよいというのだ。是非そうしなさいと、半ば命令口調の勧めであった。

私は気が進まなかった。これでは妻の両親との同居とも言える事態になるではないか。だが、妻は乗り気である。

「家賃は払うことにしましょう。そうすれば親に養ってもらうことにはならないでしょう。台所は一緒になくなってしまいうけど、食事はわたし達分だけ納屋に運んでもいいわけだし。アパートに住むより便利でいいかもしれないじゃない。ねえ、そうしましょう」

一人でとんとん事を進めてしまいう勢いであった。

「そうは言ってもなあ、俺は養子じゃないんだからな。おまえの親父さんと一緒にしてもらっちゃあ困るんだ」

妻の父は養子だった。生まれは関東で、はるばる松山の一人娘の家に養子に來たのである。と言っても、若い頃には義父母（妻の祖父・祖母）から離れて、九州や台湾に住んでいた。そのころ義父母は朝鮮総督府に勤めていて、松山の家と土地は不在地主になっていた。敗戦後、みんな松山に帰ってきたが、若夫婦の方は市内のアパートに独立して住んだのだった。しかし、夫を亡くして一人暮らしになった義母が歳をとってくると、いつまでも別居しているわけにもゆかず、アパートを引き払って同居することになったのだった。

同居と言っても、義母には古い家に住んでもらい、自分たちは同じ敷地内に新居を建てて住んだのだった。考えてみるとその事情は、いま私に強力に勧めている納屋住まいと、どこか雰囲気似ているではないか。

妻の祖母はなお健在で、私達が住めば三世代同居ということになる。しかも、外から見ると養子の養子だ。おぞましくてならない。

「本当は私は松山に帰りたくなかったのよ。府中で友達もたくさんできていたし、ピアノのレッスンだってうまくいったのに。あなたがどうしてもというから、仕方なく帰ることにしたのじゃない」

それを言われると言葉がなかった。ここは一つ妻の言い分を通してやる必要がある。長居はしない。あくまでも仮住まいという条件つきで、妻の家の納屋に住むことにしたのであった。

仮住まいをおわせていたにもかかわらず、妻の両親は私達が住むとなると納屋の内装にも外装にも手をかけた。なんだかこぎつぱりした新築家屋風に仕上げてしまった。送られてきた写真を見たとき、私は気が重くなった。これなら気軽にアパートを借りた方がよっぽどましだ。

だが、すべては動き出したのである。後戻りはできない。

府中からの引越し荷物を積んだ大型トラックが、妻の実家のそばにある空き地に巨体を乗り入れた。荷下ろしには私の父も加わった。

荷物がすべて納屋の新居に運び入れられると、

「あとは自分たちでなんとかするから」

と運送屋にも父にも家内の両親にも引き揚げてもらった。妻と二人、顔を見合わせてほっと一息ついたのだった。そのとき、入り口をとんとんと叩く音がした。妻の祖母であった。皆が荷運びであわただしくしている間は古い家に引っ込んでいた。

「きよしさん」

妻との結婚が決まった頃から、祖母は私のことをそう呼んでいた。

「きよしさん、よう帰ってきたなあ。あんたは私の実の孫みたいなものじゃ。疲れたじゃろ。これお上がり」

金柑入りの手作りゼリーと、急須に入れた熱い茶を持ってきてくれていた。妻と二人でゼリーを平らげていると、また戸口を叩く音がする。

「沈丁花が咲いとるよ。出てきてごらん。ええ匂いがするよ」

ふたたび祖母であった。祖母は庭でたき火をしていた。出て行くと、腰くらいの高さの木を指さしながら、

「ジンチョウゲって言うんよ。私の大好きな木。ほら、いい香りがするじゃろう」

私は祖母というものを知らずに育った。母方の祖母は、私が生まれるよりもはるか昔に死んでいた。父方の祖母も、私が五歳のときに死んだのだった。

妻は私の逆で、おばあちゃんっ子だった。幼いころから両親よりも祖母になついていた。結婚してからそれは変わらず、私も思わず知らず、妻の祖母を自分の祖母のように感じて、甘えるようになっていた。祖母の部屋に入ると、なぜか気分が落ち着くのがあった。初めて知った祖母の味であった。

祖母が大事にしていた沈丁花は、その後も、春になると強い芳香を放って私を迎えてくれた。

やがて祖母は死んだ。気がつく庭から沈丁花が消えていた。植わっていたはずの場所にあるのはスイセンや野菊ばかり。沈丁花が見当たらない。ひよっとすると祖母は、自分の死期が近いことを覚って、沈丁花を掘り起こしてしまったのだろうか。いや、そんなはずはない。不思議でならなかった。

祖母の死を知った沈丁花が、供をして人知れず身を枯らして、ついて行ったのだろう。私にはそれしか納得できる考えはなかった。そう考えることにした。

■ディレッタント

(二〇〇四年一月八日《木》)

ディレッタント。この言葉は私にとって、急所を突かれたようなトラウマになっている。これを聞くと心が凍る。

これまでの長い人生、いろいろな道をまさぐってきた。だが、所詮はどれも素人芸だった。プロにはなれなかった。しかも、悪いことには、どれもそこそこ上達はした。

「愛好家」、「好事家」、辞書を見るとたいいていこんな言葉で「ディレッタント」を説明している。なんと悲しい。

N社を辞めて教師となった二十代後半、

「おまえはボタンを掛け違えた人生を歩み始めたぞ」

心の奥でたしかに誰かがささやいた。私はそれを黙殺した。新しい道に広がる新奇な光景が、私の目を奪い、夢中にした。内なるささやきは、聞きもしないで絶対零度の意識の底に沈めてしまった。

時とともに足はずるずると泥田に深く引き込まれていった。私はそれに気づきもしなかった。無情な時の流れに、ただ身を任せているばかりだった。

内なる声は、その間も、風化することなく、執拗にささやき続けた。雨だれのように、とりついて離れない響きとなって、どこまでも追いかけてきた。

あるときようやく声に気づいた。その意味を知った。だが、時すでに遅し。事は果てたあとだった。逆行できない無情な時間の彼岸、戻れない過去の世界に、それは凍りついていった。

ディレッタント。この言葉だ。根深い劣等意識に融合し、そこに横たわっていたのは。

プロにはなり得ない。それでいて、夢を捨てることもできない。ただ好奇の目をして、うろろうとさまよい歩く劣等生。それが私だった。

ときおりテーブルから、誰かがしゃぶった骨のかけらが投げ捨てられる。喜び勇んで飛びついて

いき、かすかに味の残ったそれを後生大事にくわえ込む。そして、

「どうだ、やったぞ、すごいだろう」

と聴衆に向かって誇らしく叫んでみたりする。それも私。犬のような私。

会社勤めから逃げ出したくなった心底の理由は、大学に戻って勉強し直したかったこと、第二の人生を研究者として歩みたかったこと。実際、そのとき私は出身大学にその可否を問い合わせ、道が開けていることを確認した。あとは書類を整え、提出するだけであった。

だが、できなかった。自らその道を捨てたのではない。強い外力が、私からそれを奪ったのである。

強い力とは、義母の頑迷な抵抗だった。

娘を嫁入らせた相手が、せっかく情報通信のトップメーカーに入っておきながら、そこを辞めて、無収入の学生生活に戻ろうとしている。いったいなんのために結婚を許したと思うの。これは結婚詐欺ではないのとまで言いたげな、不満たらたら口のふりだった。

義母には私の夢は、語っても語っても、理解の外だった。現実生活の零落が目に見えている。それを、先の定まらない夢が補いうることは、現実主義者の義母には、およそ考えられない蜃気楼だった。

「絶対に認められません」

義母はかたくなに拒みつづけた。

義母との戦いの中で、私の母が折衷案として、勤めながら少しは勉強できるかもしれないからと、学校に勤める案を出してくれた。

さっそく、私の母校と、母につてのある高校の校長を訪ねてみた。すると、思いもよらないことに、数日後、母校の校長から「来てほしい」との返事が届いたのだった。

私は飛びついた。あのとき、もう少し冷静な心があったなら、ボタンの掛け違いに苦しむことはなかったのかもしれない。

突然開けたこの道が、抱えている逼塞感を解き放ってくれる、唯一の特効薬に見えたのだった。進みたい本当の道と齟齬はないのかと、内なる声は問いかけてきたが、あえてその声は押しつけた。というよりも、新しいこの道が、進みたい道にもつながっているのではないかと、ありえない夢を見てしまったのだった。

私のプロフェッショナルな分野は何だろう。それに対する答えは「数学教師」。これしかない。「数学」とは答えられない。「情報処理」とも「コンピューター」とも答えられない。悲しいけれど、これが現実だ。

趣味ならいくつもある。ああ、今「趣味」と言ってしまった。そこに落とし穴がある。その趣味こそがディレタントなのだから。

いや、実を言うと、趣味がディレタントなのではない。それなら劣等感を抱く理由など、なにもない。趣味はあくまで趣味なのだから。もともとそれは素人芸なのだから。

そうではない。プロたるべき仕事において、私はディレタントなのだ。専門分野は「数学です」と答えられないだけでなく、「数学教師です」とも答えられないのだ。何だと問われれば、「それも趣味です」としか答えられない。自分を教師と認めることに抵抗がある。ましてや、教育者などと言われると背筋がぞくつと凍えてしまう。

数年前、全国各地の学校説明会に出かけて行って、学校のPRをする仕事についていたことがある。たいていは校長か教頭と二人で出かけた。あるとき、説明会が終わり、お世話になった地元の父母会役員と打ち上げの夕食会をもったとき、その席でA教頭が言った。

「私は骨の髄まで教育者ですから、自分の子供にも学校と同じ厳しい姿勢で臨んでいます」
 平然と、ためらいなくそう言われるのを、隣に座っていた私は、「ああっ」と声にならないうめき声を上げて聞いたのだった。

「教育者か。そうか、おれもひよつとしたら外見には教育者なのか」
 それにしても、自分を教育者だと、誰はばからず口にするのを聞いた、それは初めての体験だった。人から「教育者ですね」と、お世辞でもって言われることはなくはないだろう。だが、みずから自分を教育者だと言うのを聞くことは、まず普通にはない。これが抵抗なく言えるようになれば、たしかにその人は紛れもなく教育のプロなのであろう。他薦ではなく、自薦によるプロ。なんだか薄気味悪いプロではあるが。

高い高い壁、深い深い溝、A教頭と私との間にとてつもない隔りがあるのを、そのとき私は実感した。これは一人A教頭との隔りであるのみならず、教育というものとの隔りであった。

私はとても教育者にはなれない。その道を究めようと努力したことさえない気がする。長い年月を惰性で過ごしてきただけだった。この道のプロとはとても呼べないのだ。

心の奥では、教育のプロになることよりも、やはり私は数学（またはコンピューター・サイエンス）のプロになりたかった。そのための勉強を一人コツコツやって来たのはたしかだった。しかし、独力で数学を極めることは不可能だったし、コンピューターもまた、新しいソフトを作って発表するくらいが関の山だった。とてもコンピューター・サイエンスと言える領域には至らなかった。

長い歳月は、決して私をプロに近づけてはくれなかった。「デイレットメント」、この言葉が奥深くしみこんでいく悲しい歳月にすぎなかった。私の劣等感の根源はそこにあったのである。

漂泊者、戯れ者、アウトサイダー、冷めた者、熱血を注がない者、まあいくらでも呼びようはある。これぞ我が道と呼べるものがない悲しきピエロ、それが私なのである。

■カリンの命

(二〇〇四年一月十三日《火》)

庭のカリンは心を癒やしてくれる。四季折々、千変万化の姿を楽しませてくれる。

暖冬のせいか、この冬は赤く色づいた葉がいつまでも散らなかつた。正月前、やっと散り始めた。散り始めると止まらない。色彩のパッチワークだったカリンが、たちまちモノトーンの世界へと変わり果てていった。

昨日、ついに最後の一片が落ちた。枝と梢ばかりのカリンになった。といっても、まだ残っているものがある。熟し切った果実だ。真っ黄色に脂ぎったのが数個、満月のように冬空に浮かんでいる。それらが落ちてしまふとき、カリンは裸身の梢を天に晒すのみとなる。

これでよいのだ。カリンは冬のまどろみに入るのだ。梢を鋭く天に突き刺したまま、カリンはしばし眠りに落ちるのだ。

カリンは夢を見るのだろうか。

人は老いると夢を見なくなると、ある人が言っていた。戦列から離脱すると、人は夢を必要としなくなるらしい。壮絶に生き、必死に戦うところのみ、自在に羽ばたく夢が必要になる。夢は力と戦いの補完物だろうか。激するものを鎮める安定剤なのだろうか。

カリンはきつと夢を見る。やがて冬の眠りから蘇生するのだから。春には激しい戦いが待っているのだから。その日のために、カリンは深い休息に入る。夢とともに休息に入る。

冬の薄日を、凍える夜気を、しみいる雨を、舞い散る雪を、カリンはエーテルを吸って眠る手術患者のように、裸身をさらして受け止める。苦痛もなく受け止める。

玄関先に二本のカリンがある。元は実生のカリンだった。カリンが私の家にやって来たのはあの日だ。妻の実家の納屋住まいから、T町の新居に移ったあの日だ。暑い暑い夏の日だった。

納屋住まいは三ヶ月で終わった。労任協が開発して売り出した住宅団地に応募したところ、二〇倍ほどの倍率をくぐり抜けて、当たってしまった。

「もう六回目なんですよ。くじ運がないのね、あたしたち。何回応募してもいつも落ちてばかり」「うちもそう。もう何回くじを引いたかわからないわ」

そんな会話を耳にしながら、名前を呼ばれて正面に進み、コーヒーマイルのようなハンドルを回すと、穴からぽとりと玉が落ちてきた。それが競争相手の十人を蹴落とす玉だった。

たった一度のチャレンジで引き当ててしまった。高台のミカン畑を整地して作った、なかなか大規模な団地だった。

早速引越した。六月末、梅雨の晴れ間の暑い日だった。

学校に勤め始めて三ヶ月。そのころ私は物理のK先生が主催する勉強会に参加していた。シュポルスキーの『原子物理学』を読む会だった。何でもいい、とにかく勉強したかった。

抽選に当たってT町に移ることになったと話すと、K先生が、

「うちの庭は雑木林そのままだから、余るほど木があるよ。来て好きなのを取っていったらいい」そう言ってくれた。引越しの前々日、K先生のお宅を訪ねた。訪ねたと言っても、私はまだ運転免許もないし、車も持っていなかった。送り迎えともK先生がやってくれた。私はただ運ばれて行き、運ばれて帰っただけだった。

庭は樹々が茂る林だった。どの木がいいのか見当もつかない。そのときK先生が、

「これはまだ小さいけど、いい木になるよ」

と勧めてくれたのがカリンだった。林を突っ切る細道の脇に植わっていた。

「カリンは必ず二本を対にして植えるものなんだ。そういう決まりなんだよ」

なぜ決まりなのか知らなかった。いまだに知らない。調べたこともない。本当かどうかもわからない。しかし、言われるままに二本のカリンを根っこから引き抜いた。

高さはせいぜい五、六十センチ。幹の直径は二センチにも満たない幼いカリンだった。

「実生のカリンだよ、これは」

カリンは、新居の庭に植えられた。

それから一年も経たないころ、うっかり二本のうちの一本を、幹の半ばからポキッと折ってしまった。首が皮一枚でぶら下がった。K先生に申し訳ないことをしてしまったと後悔したが、後の祭りだった。

だが、木には、接ぎ木ということがあるではないか。ひよっとしたらくつつくかもしれない。か

すかな期待を抱いて、折れた切り口に添え木をし、その回りを布きれでぐるぐる巻いた。それから毎日、大丈夫だろうか、枯れていないだろうか、まるで病弱な子をおしむように、カリンの様子を見続けた。

やがて布きれが雨風でぼろぼろになったころ、そっと布きれを外すと、カリンはみごと、元通りにくっついていて、かすかな傷跡はあるが、すっかりくっついていて、命のしたたかさに感動した。T町には十年住んだ。そして今の家に引っ越した。カリンも一緒に引っ越した。

それから、はや二十年。カリンはどんどん成長した。放っておけば、とうに二階の屋根のてっぺんまで届いていただろう。折れた傷口など、どこを探しても見当たらない。折れたのがどちらであったのかさえ、今となってはわからない。三十年間、私はカリンとともに生きてきた。

カリンは私のすべてを見続けてきた。私もカリンのすべてを見続けてきた。

春、桜が葉桜になるころ、カリンはみずみずしい若葉を身にまとう。仮象の老いを放り捨て、見ている夢を振り切って、カリンは新しい命を覚醒させる。過ぎし日の受粉も、繁栄も、実りも、紅葉も、落葉も、すべてを夢とともに忘れ去り、カリンは一巡りした輪廻の先で蘇生する。前世の栄光を、カリンの新生の命は知ることがない。何もかもが新しい。

カリンの目覚めは、生まれ出た赤子のようだ。無垢で純である。時間がそこから開始する。

ふと思う。この私が、五歳の私と同じ私だと自覚するのと同様に、カリンは仮象の死に先立つ過去の自己を、はたして同じ自己と自覚しているのだろうか。自覚が当たらなければ、それははたして連綿たる一つの命とみなしうるのだろうか。接ぎ木によって生命を維持する機能があることを思うとき、私は「一つの命」という概念が、果たしてそこに成り立つのかと疑ってしまう。

個々のカリンの命というよりは、カリンにはすべてを包括した一つの命があるのではなからうか。彼らの命は広大な命のネットワークの中に、茫漠とした網のように存在しているのではなからうか。もはや「私」と呼ぶべき個別の自己などは、カリンにはないと言うべきではなからうか。

ああ、思えば思うほど、わからなくなるなあ。

若葉が五、六分茂ると、淡いピンクの小さな花が咲き始める。桜が散り終る頃、カリンの木では、したたるような緑の若葉とピンクの花が、春を歌って競い合う。

ああ、カリンよカリン、お前の命はいつどこに秘められているのだ。お前をバサツと切ったとしても、お前は決して死なないだろう。切れ端からさえ、新しい命が芽生えるだろう。二つのカリンを接合すれば、そこにもまた新しい命が生まれるだろう。

人の宿命は死。だけど、カリンよカリン、お前の宿命は生きつづけることなのか。

■時間の真空地帯

(二〇〇四年五月二十二日《土》)

つい先日のこと、高三の授業の途中で、授業がまだ終わってもいないのに、突然終了のチャイムが鳴った。腕時計を見ると、まだ十五分ある。

チャイムの故障だろうと決め込んで、黒板に解かせていた作業をそのまま続行し、やがて解説をしようと、その横に数式を書き始めると、生徒たちがざわざわし始めた。いつもなら私語などするはずのない真面目な生徒までが何やらぶつぶつ言っている。どうも様子がおかしい。

「どうした」
と聞くと、

「先生、もう時間です」

何人もがそう言う。女子生徒は、

「次、体育の時間です。早く終えてくれないと、着替える時間がありません」

「なに？」

時計を見るが、まだ時間はたっぷり残っている。さてはみんなで申し合わせて、ドッキリごっこでもやっているのか、そんな気にさえなつた。

それにしても合点がいかない。ドアを開けて廊下を覗くと、たしかに隣の教室では授業は済んで、生徒らが入りしている。頭が錯乱状態になってきた。どういうことだ、これは。

いきなり時間の真空地帯に投げ出されたよう。なにもかもが変だ。夢だろうか。

老人の認知症とはこういうことなのか。通い慣れた道なのに、突然自分がどこにいるのかわからなくなる。自分がどこに行こうとしているのかもわからなくなって、まるで夢遊病者のようになてどなくさまよう、これは認知症ではよくあることだと聞くが、人ごとではない。

今は、空間的なそれではなくて、時間の真空地帯に投げ出されたらしい。何度も何度も時計を確かめるが、やっぱり変だ。

それにしても生徒らがあまりに騒ぐものだから、寄る辺のない虚無の感覚を引きずつたまま、授業を中断し、とりあえず職員室に戻った。そして居合わせた同僚に尋ねた。

「今日は授業時間の変更になってたんですかねえ」

「いや、そんなことはないよ」

「今、まだ授業が終わってもいない時間に戻ってきたんだけど、これはきつと生徒らに担がれてるんだ。もういつペン教室に戻ってやり直そうか」

「……？」

私は本当に戻りかけた。しかし、職員室の雰囲気といい、校内全体の雰囲気といい、どこか変だ。パニックになっているから、冷静にそれを読み取ることができない。

変なことだけはわかる。頭のどこかが狂っていることもわかる。時間の立脚点を失っていることもわかる。

気持ちを落ち着かせようと、お茶を一杯飲むことにした。そして再び時計を見る。

「あれ？」

時間が進んでいないではないか。なんだ、そうだったのか。腕時計が止まってるんだ。

それで思い出した。さっき授業が始まる前にトイレに行き、あわてて大便所にしゃがみこんだ拍子に、腕にはめないで手に持ったままにしていた時計をタイルの上に落としたのだった。コツンと落ちないで、ペチャッと落ちた。時計のおもて面がタイルの面に平行になって落ちたものだから、ペチャッと、えらく大きな音がした。

しばらくはそのまま動いたようだが、授業の途中で止まってしまったというわけか。

そうとわかると、錯乱状態から解放された。事態のすべてが読み解けた。もちろん直ちに教室に戻って、生徒らに謝つたの言うまでもない。

新しい時計を買うまでの数日間、ケイタイを時計代わりに使うことにした。教室に行くと、まず

ケイタイを教卓の上に置く。

生徒に言われた。

「先生、授業をしているときは、ときどき時計を見てください。授業が終わっても知らんふりして授業を続けるのは先生だけです。他にそんな先生はいません」

そして昨日、新しい時計を買ったのである。

■哀れな人間よ

(二〇〇四年五月二十七日《木》)

人の性格はいつ、どのように形作られ、どの時点で固化するのだろうか。人生の初期には流動性と可塑性に満ちた時期があるのだろうか、それとも可塑性は幻想にすぎず、各人に定められた宿命のまま、遺伝子通りに性格は成っていき、固化してゆくものなのか。

固化した後も、強い外力が働けば性格は粘土のように変形するのだろうか、それとも内面の力が強硬に原型復帰をうながすのだろうか。

あるいはまた、環境という弱い力が長期にわたって働き続ければ、性格は変容するのか、それも、それすらありえないのか。

自分では答えをはじめ出すことのできない難問であると知りつつも、こうした問いを、なんとしばしば、自身に向かって問いかけ続けてきたことだろう。

どうしてこうも執拗に、同じ問いをくり返す必要があったのだろうか。理由は明らかだ。自分にとってただ一つしかないこの人生、これだけが自分の究極の所有物であるこの人生、これを本当ならもう一度やり直したい、だけどそれは決してできない。このやり直し不可能な悲哀と悔恨を、胸の内にあふれるように持っているから。これがその理由である。ひと言で言うなら、今ある自分に満足できない。なんとかしたい。その思いが、執拗に同じ問いを発するエネルギー源になっているのだ。

自分の性格に絶対の自信を持つ人は幸せである。私のように、幼いころからずっと、自信をもって生きてこられなかった人間は、ことあるたびに力ない自分を情けなく思い、消え入りたい気分になり、同時に、逃れようのない力に拘束されているんだからと自分を赦し、慰め、励まし、所詮は変えようのない自分なんだとあきらめ、最後には、これが自分なんだ、これしかないんだと、他と融合できない自分を逆に、宇宙でただ一つの存在として、内心誇らかに思うことさえあったのである。

こうして、不安定な自分の立場に内面の補償を与えることによって、荒波にもまれる小舟でありながら、水面下の平衡力で何とか沈没を免れている。

二十歳をすぎた頃からの、つまり自立を意識してからの、これが私の人生行路の基本路線なのである。

力ある自信家になりたい、そう願ったこともないわけではない。周囲に人の輪を広げ、うまく世間を渡って、外連味なく己が道を行く人を見てみると、うらやましく思うこともある。その一方で、彼らの内面のもろさ、薄さを想像し、反吐を吐く思いになったりもする。

「所詮それは俺の道ではない」、最後に到達するのは良くも悪くもこの思いである。

結局は孤独を守って生きるしかない人間なのだ、この俺は。その生き方しかないのだ。これを性格と、世間では呼ぶ。これがいつから我がものとなったのか。いつから私の中に取りついたのでか。幼いころを振り返りながら、この答えをまさぐることも、私の長年の課題であった。それなりの結論に到達しているとも言えるが、まだよくわからない。

たいていの人は、飲んで騒げば、憂さは晴れる。だが、私はそうではない。飲んで騒げば、憂さはかえってつのるばかりだ。皆に芯からとけ込めないうつぶんがたまっていればかり。

ああ、哀れな人間に形作られたものよ、この俺は。

■鼻くらむ犬

(二〇〇四年五月三十一日《月》)

暗がり歩いてみると、車のヘッドライトに思わず目がくらむことがある。人が受ける刺激の大半は視覚を通じたものだろう。だから、目がくらむと、その瞬間、外界との接点を失い、虚空をさまよう不安な頼りなさに突き落とされる。

私は数年前まで、毎日ジョギングを欠かすことがなかった。走るのはいよいよ昼間だけど、ときには夜になってから、思い出したように走りに出ることがあった。

街灯のない夜道は怖いので、夜は車のよく通る国道を走った。歩道には一定間隔で街灯があり、さらに通り過ぎる車のライトで歩道は常に明るい。

ただし、危険なのは、歩道に浮き上がって張っている街路樹の根っ子だ。歩道はいたるところでコボコボしている。つまずいてころぶと大変なことになる。

明るければ問題はないが、光の死角が点々としている。死角の大半は街路樹の陰だ。街路樹の下は半端な暗さではない。真に真っ暗だ。

ライトが当たっている箇所と陰になっている箇所のコントラストが苛烈なのだ。

だから、光の世界からいきなり闇の世界に突っこむと、目が慣れるゆとりがない。しかも、闇の世界は街路樹の下。張った根が浮き上がってポコポコしている。

足裏に全神経を集中し、何か異常があれば即座に反応する身構えで走ることになる。

そんなときには、周囲の状況など、見えるはずがない。人がすぐ脇を歩いていても気づかない。向こうから自転車がやってきても気づかない。

これと似たことが犬にもあることを、今日知った。日暮れ方、いつものように犬を散歩させていた。コースはいくつもあるが、今日のコースは、途中に二、三百メートル、川に沿った道がある。道のそばに建ったばかりの家があり、まだ塀のできていない庭に犬小屋がぼつんと置かれている。小屋の犬は敏感な柴犬で、私が犬を連れて歩いていると、五十メートルも手前からワンワンと吠え始める。目の前まで来ると、猛烈に吠えかかる。いつものことだ。

ところが今日は様子が違っていた。いっこうに吠え声がない。

見ると、庭に小型の焼却炉が置かれ、家の主がゴミを焼いていたらしい。主はもうそこにはいず、焼けこげた臭いと煙だけがあたりに立ちこめていた。

人間の私ですら煙の臭いが鼻をつく。まして犬だ。この臭いはヘッドライトの直射にも等しい激しさだろう。目がくらむのと言いたいところを、犬だから鼻がくらむ。その犬、私たちが近づいた

ことをまったく感知できなかった。

「もうとても堪えられません。勘弁、勘弁」

とでも言うように、犬は小屋の前に立ちつくし、呆然としていた。その彼のすぐ目の前を、私と二匹の犬は平然と通り過ぎたのだ。いつもならさんざん吠えかかられるところ。

明らかに犬は目でもものを見ていない。鼻で見ている。外界からの情報のほぼすべては鼻からのものだ。それを今日、まざまざと知らされた。

目が見えないのではない。だが、見たものが、鼻からの情報と連動しないかぎり、それを感知できない。逆にまた、曲がり角の向こうに気になるものがあれば、目では見えなくても、鼻で感知して、それを認識する。

外界を認知する手段は、生き物それぞれ千差万別、多様なのだ。たとえば、人間には検知できない高周波音を、コウモリは発し、また認識する。クジラもそうだ。

■金星の太陽面通過(一)

(二〇〇四年六月七日《月》)

わくわくするような瞬間が近づいている。金星の太陽面通過だ。金星は半年も前から巨大な涙星となつて、日没後の西空を電灯のように明るく照らし続けてきた。夕方の散歩が日課となつている私にとつて、この半年、金星は常に友人であつた。濃紺の西空に金星が白い一番星となつて輝き始めると、私はなぜかほつとする。これは子供のころからの感覚だ。幼友だちと「一番星、二番星」と指さしながら、星を見つけあつたころからの感覚だ。やがて空が光を失うにつれ、金星はしつとりとした艶やかな金色に変わっていく。

冬空、春空、そして初夏の空、金星は私ともずっとあつた。今は太陽に近づきすぎて、その姿は見られなくなっている。

そして、ついにそのときが来る。二〇〇四年六月八日午後二時十一分、金星は太陽の中に埋もれる！

太陽に比べると、はるかに小さなシミに過ぎない金星。それが太陽の辺縁に接触するのが二時十分。そのままゆっくりと太陽の中を移動して、六時間かけ太陽から抜け出るといふ。

姿を消していた金星が、そのときだけ目に見えるのだ。白い輝きではない。金色の涙でもない。輝く太陽の前をよぎる黒いシミとなつて……。

地球と太陽の間に金星が合あつた。しかし、公転軌道のずれにより、合になつてもめつたに地球・金星・太陽が一直線に並ぶことはない。たいていは太陽の上か下かを通過する。今年は特別なのだ。

今年のように一度太陽面通過が生じると、八年後にもまた生じるといふ。公転軌道のずれ幅はわずかだから、八年後の合には再び太陽面を通過してくれるのだ。

前回の太陽面通過は、一八七四年と一八八二年のペアだった。今回は、今年(二〇〇四年)と二〇一二年のペア。それを逃すとその次は二一〇七年と二二二五年のペアになるらしい。その頃には、地球上の人類は、ほぼ総入れ替えになつていよう。

■金星の太陽面通過(二)

(二〇〇四年六月十一日《金》)

六月八日の金星の太陽面通過、楽しみにしていたのに、残念ながら見えなかった。

その日、仕事を終えると急いで帰宅した。日没までにはまだ三十分ほどあるからと、夕日のよく見える池の土手まで歩いていった。家を出るとき、

「これを逃したら、もう一生見られないぞ」

と妻を誘うが、

「ああ、そうなん。でもまあ、そんなの見れなくてもいいわ」

とそっけない。宇宙への壮大な夢やロマンは男だけの特権なのか。

土手までは歩いて三分。途中、太陽は西空に輝いていた。曇り空ながら、雲間にはっきり顔を覗かせている。これなら大丈夫と、勇躍土手道を駆け上がる。

そして、夕日を眺めるのに絶好の、気に入りの定位置に。丈高い草が開け、西には地平線まで、さえぎる人工物はない。夕日が瀬戸内海に沈むのを、最後のひと雫になるまで見届けることのできる場所だ。

ところがである。定位置につくやいなや、太陽の前を真っ黒な雲が覆ってしまった。巨大な山脈のように横にたなびく雲である。風がないので、この雲、いつこうに動いてくれない。

薄雲ならむしろ歓迎だった。雲を透かすことで目を痛める光が多少とも和らげられる。だのにこの黒雲、透かすどころか、太陽を影も形もないまでに隠してしまった。黒いセルロイドの板と双眼鏡を手に、私は分厚い黒雲を呪い続けた。

残された時間は二十分ほど。とてもその間に立ち退いてくれそうな雲ではない。

今の今まで見えてたのにな。それが、観察しようとして位置に着いたとたん、あつという間に姿を消してしまった。なんとということ。私はあきらめきれずに、じつと西空を凝視した。雲の山脈の上方は、この下に太陽があるぞと指し示すように、茜色に照っている。

刻々と時間は流れていく。『走れメロス』のメロスの気分だ。日が沈んでしまえば、すべてはあっけなくおしまいだ。

あまりに悲しげに立ちつくしていたからだろう。犬を連れて土手に上がってきた若者が、そのまま逃げるように土手を降りてしまった。近寄れない悲しみのオーラ、危険なオーラを私は発散していたのだろうか。

■イソップ物語

(二〇〇四年六月二十日《日》)

イソップ物語は童話や絵本で昔からなじみ深い。しかし、その種の絵本を通してしか、私はこれまでイソップを知る機会がなかった。

先日、岩波文庫の『イソップ寓話集』を読み、初めて原典の味に触れることができた。原典とは言っても、イソップは書き残す人ではない。聴衆に向かって語る人だった。

紀元前六百年ころの人物とされている。彼が語った物語は、年を経るにつれ、他の物語をも雪だ

るまのように取り込んでいった。それらすべてにイソップの名が冠せられ、書物として集大成したのは紀元前三百年ころのことらしい。だが、最古のそれは現存せず、今に伝わる最古のものは紀元一、二世紀のものだという。

イソップ物語は、早い時期から様々な文化圏に広がっていった。どこにおいても砂漠に水が沁むように、それぞれの文化になじんで愛読者を広げていった。古代ギリシャで生み出された数多い物語の中で、イソップほど全世界に愛読者の輪を広げた物語はないと言える。

日本に伝わったのは秀吉の時代であった。宣教師が持ち込み、「伊曾保物語」の名で一五九三年に翻訳された。

興味深かったのは、日本でも類似の物語が、おそらくイソップとはまったく独立に、伝承されていることだった。これはおそらく日本だけではないだろう。人類に共通の神話的原型が心の働きの中にあるのではないのか。ユングが「集合的無意識」や「原型」を言い出した理由が、イソップを読んでいるとわかる気がしたのだった。

例を挙げると、「金の斧、銀の斧」と呼ばれている物語である。日本にもよく似た物語が民話として伝わっている。イソップ版は次の通り。

ある男が川の側で木を伐っていて、斧を飛ばしてしまった。斧が流されたので、土手に坐って嘆いていると、ヘルメスが憐れに思っただけで来た。そして泣いている訳を聞き出すと、まずは潜って行って、男のために金の斧を持って上がり、これがお前のものかと尋ねた。それではないと答えると、二度目には銀の斧を持って上がり、飛ばしたのはこれかと再び訊いた。男が首を振るので、三度目に本人の斧を運んで来ると、これこそ自分ののだと言うので、ヘルメスは男の正直なのを嘉して、三つとも授けた。

男は押し戴くと、仲間の所へ行って、一部始終を語った。聞いた一人が羨ましくなって、自分も同じ目に遭いたいと思う。そこで斧を取り上げると、件の川に出かけ、木を伐りながらわざと斧先を渦に投げ入れて、坐って泣いていた。

ヘルメスが現れ、どうしたのかと訊くので、斧を失くしたことを語った。ヘルメスが金の斧を持って上がり、失くしたのはこれかと尋ねたところ、欲呆け男は先走りして、正にそれだと答えた。神はこれを与えなかったばかりか、自分の斧も返してやらなかった。

神意は正しい者の味方をする、そして同じ程度に悪人の敵にまわる、ということはこの話は説き明かしている。

説き明かしの解説まで入っているのがイソップ物語の特徴である。

それにしても日本の民話と何とよく似ていることだろう。そっくりだと言ってもおかしくはない。もう一つ例を挙げる。

農夫の息子たちが喧嘩ばかりしていた。いくら言っても聞かせても、言葉ではどうも改心してくれないので、行いで教えこむしかない悟り、棒の束を持ってくるよう命じた。息子たちが言いつけどおり持ってくると、農夫はまず、棒を束のまま渡して、折ってみろと言った。いくら力を入れても折れないので、今度は束をほごき、棒を一本ずつにして渡した。息子たちが易々と折っていくのを見て、農夫が言うには、

「よいか、お前たちも心を一つにしている限り、敵も手が出せまい。しかし、内輪もめをしていると、容易に敵の手に落ちるぞ」

内輪でもめるほど敵に敗れやすく、一致団結するほど強くなる、ということはこの話は説き明かしている。

この話も、「三本の矢」として日本でよく知られた話だ。毛利元就が三人の息子を諭す話である。元就は伊曾保物語が翻訳されるよりも前の人だから、元就がイソップ物語を知っていたはずはない。それにしても、二例とも、筋立てといい、教訓の内容といい、日本における同類の話にぴったりだ。あまりの一致に驚いてしまう。それぞれが別の文化圏で、独立に生まれ、独立に伝承されたとは考えられないほどそっくりだ。

人の思考のバラエティーや獨創性は、一般に考えられているほど変化に富んだものではないのかもしれない。これは私自身の体験からとも言えることである。

何かの拍子にふっと思いついて、これは忘れないうちに書きとめておかないと、書き記した文章が、過去の日記にそっくりそのまま記されているのを知って嘩然としたことが、私にはこれまで、一度ならずある。表現の細部にいたるまで一致していて、なんだなんだと、進歩のなさに情けなくなったこともある。

ある場面に遭遇したとき、そこから受ける印象と、それを表す表現とは、案外いつでも同じなのだ。その瞬間には、黄金のひらめきのように思われたのに、実は同じ場面に遭遇したとき、過去にも同じ表現が頭に浮かんでいる。悲しいまでのワンパターンであったりするのである。

一人の人間の固有性を越えて共通する場合には、集合的無意識と呼ばれたり、神話的原型と呼ばれたりするのである。イソップ物語は、神話的原型の急所をついた物語なのである。だから、あらゆる国々、あらゆる文化圏で受け入れられ、時代と地域を越えて愛読されつづけた物語となったのであろう。

■ネコのうと

(二〇〇四年六月二十八日《月》)

ネコが人の手で飼育されるようになったのは、犬ほど古くはないものの、紀元前二五〇〇年ころまで遡れるという。紀元前二〇〇〇年ころのエジプトの絵には、首輪をつけたネコが描かれているものがあるらしい。

日本には土着のネコはいなかった。日本にネコが入ってきたのは、平安初期だという。

面白いのは、エジプトにおいても、ヨーロッパにおいても、中国においても、日本においても、ネコは常にネズミを捕る目的で飼われていたということだ。ネコがネズミを捕るのは、今も昔も変わらぬ宿命的習性のようなのである。

ネズミが穀物を食い荒らし、人に嫌われるのを宿命の習性とするなら、ネコがそれを捕獲して人に益をもたらすのも、これまた宿命の習性なのである。

元来は人とは無縁の習性であるにもかかわらず、たまたまそれが人の利益に関わる習性であったが故に、一方は害獣とされ、他方は益獣とされたのである。

それはそうと、ネコがネズミを捕る場面を、近ごろほとんど見かけなくなった。理由は、言うまでもないが、ネズミが棲みついている家が減ったことである。ネコを飼う人は多いが、ネズミ退治のために飼う人はほとんどいない。

ネコが、ネズミとの遭遇機会をもたない環境で飼われていれば、そしてそれが何代にもわたって続くなら、ネズミを捕獲の対象としなくなるネコが現れないとも限らない。

いやそれはないだろう。何万年、何十年もの年月をかけた猫の進化的習性は、そう易々と変質したりはしないだろう。都会棲まいで、ネズミなど一度も見たことのないネコであっても、田舎に連れて行き、穀物倉にでも放してやれば、たちまちネズミを見つけて捕獲するはずだ。

私は過去に何回か、ネズミをくわえて、いたぶっているネコを見たことがある。妻の実家の庭だった。ネコはネズミを簡単にかみ殺したりはしない。口にくわえて振り回し、そっと放してやる。まだ生きる余力があれば、ネズミはその瞬間起き直り、逃亡を図る。すると再び狩りの本能を呼び覚まされ、ネコは一瞬にしてネズミを前足で取り押さえる。口にくわえる。ネコの一瞬の素早さはネズミのそれをはるかにしのぐ。

こうした動作を何度も繰り返し返すのだが、ネコは結局のところ、ただ遊んでいるだけのように見える。ネズミは最上の遊び道具なのだ。

ネコは動いているものに素早く反応する。動いているものだけではない。それ自体は動かなくても、たとえば新聞紙を丸めて目の前に投げてやると、自分でそれを前足で突っついて、あちこち飛び回るのを見ては、追いかける。自分で突っついて、自分でそれを追いかけるのだ。そっとしておけば動かないのに、突っつくから動く。ネコはそれに気づいていない。

単純きわまりない短絡反応だ。

ネズミの場合、突っつくまでもなく勝手に走り回ってくれる。ネコにとって、これくらい楽しい遊び道具はないわけだ。

ネズミが生きる力を失って、口から放しても身動きしなくなったとき、それはネコにとって遊び道具でなくなったことを意味している。そのときネコはネズミを食べたりはしない。少なくともネズミを食べているネコを、私は見た覚えがない。ネコの興味はその時点で失せ、ネズミはただの動かざるモノに成り下がっている。

もちろん、人が餌を与えない自然環境下では、ネズミだろうがスズメだろうが、猫はそれを捕って食べると思うが……。

ネコの本能は残虐だ。そしてかぎりなく幼稚である。残虐と幼稚は、たいていの場合同居する。人間世界にもネコのタイプがいる。喧嘩好き、戦争好きな人は、残虐さの裏に必ず幼稚さを秘めている。用意周到であればあるだけ、残虐は倍加し。幼稚もそれにつれて倍加していく。目的が衝動に由来するとき、詭弁が論理を打ち破る。そのとき残虐と幼稚は極まり尽くす。

■寺山修司に出会う旅

(二〇〇五年八月二日《火》)

高校総合文化祭の引率で青森県の三沢市を訪れた。

私にとって初めての地だ。こう言っては三沢の人に失礼だが、私の想像を超えて小さな町だった。市として成立しうるぎりぎりの人口か、そんな感じだった。

米軍基地があることはもちろん知っていた。米兵とその家族が一人あまりいて、それが人口の三分の一に当たるとの話だった。

私にとっての収穫は、寺山修司記念館を訪れることができたこと。寺山修司は、生まれは弘前だが、三沢で多感な少年期を過ごした。

私の机上には、昔から「寺山修司歌集」が置かれている。読めば直ちに本棚に直行する本とは違い、机上の本立てに並ぶのは、いつでも手に取る愛読書ばかり。中でも寺山修司は別格だ。

いやな思いになったとき、悲しくなったとき、仕事を終えてほっと一息ついたとき、つまり気持ちがあふつと揺らいで当て処がなくなつたとき、必ず手にとるのが寺山修司歌集なのである。感性がきらきらしている彼の歌を前にすると、心の底をかき回されるようで、力が漲ってくる。

寺山修司は学生時代から心の故郷だった。何度彼の歌を読み返したことか。歌集は手あかで真っ黒だ。

引率の隙を縫って、バスで記念館に向かった。車窓からの眺めは、ただ青々と広がる草の原ばかり。稲田ではない。畑だろうか、牧草地だろうか。会津の落人たちがやってきて切り拓いた斗南藩というのはこのあたりだろうかとか、さまざま想像を巡らせているうち、バスは記念館に着いていた。人の気配も人家のにおいもない、小高い草原の中だ。

「百年たったら帰っておいで、百年たったらその意味わかる」

若い女優が早口でこのセリフを繰り返す、迫力ある舞台の映像が映し出されている。

寺山修司の世界を堪能した後、裏の丘に登る。山頂から見下ろした小川原湖、なんとすばらしい光景だろう。ひとときベンチで思いにふける。あたりは人っ子一人いない死んだような空間。静寂の中で無窮の時にひたることができた。

■プロ野球観戦

(二〇〇五年八月七日《日》)

昨夜、坊っちゃんスタジアムで阪神・広島戦を見た。公式戦の観戦は初めてだった。オープン戦は二度ばかり見たことがある。雰囲気はまるでちがっていた。球場は実にきれいに手入れされているし、選手のすばらしいプレーを間近で見られるし、応援もすさまじい。思わず知らず、雰囲気呑み込まれていた。

結果は阪神の圧勝。一方的な流れだったが、それはそれで楽しめた。

実はN社時代、後楽園に巨人戦を見に行きかけて、途中でやめてしまったことがあった。入社したばかりの夏だった。会社の同僚三人と約束ができ、チケットを買い、出かければよいだけになっていた。そして実際、出かけたのだった。座席は予約されているので、現場集合の約束だった。

独身寮は多磨墓地のそばにあり、いつもは会社に行くのに京王線を使っていた。だが、たまには気分を変えてみようとして、西武多摩川線に乗った。

電車は、国木田独歩の『武蔵野』を彷彿させる緑豊かな林を突っ切り、小川を渡り、真っ黒な畑を横に見ながら、武蔵境駅に着く。そこで中央線に乗り換えた。休日だから混んではない。ゆったり座って外の景色を眺めているうち、眠りこけたらしい。

やがて吉祥寺あたりで誰かがとんとんと肩を叩く。ふつと気づいて目を開けると、眼前に大学時代のサークル仲間が立っていた。「あっ」と声を上げた。広い東京のこんなところではばったり出くわすとは、いったい何としたことだ。

話しこむうち、野球のことなどどうでもよくなった。というより、忘れてしまった。友人と半日過ごした。彼も私と同様、情報通信関連の会社に勤めていた。私は作る方、彼は使う方の会社だった。仕事のことや先々のことなど、話題は尽きなかった。

翌日、会社で

「どうして来なかったの」

と問いただされて、初めて野球をすっぱかしたことを思い出したのだった。

あれ以来、プロ野球とは縁がなかった。そして昨夜だ。きれいに整備された球場、鋭い打球、華麗な守備、そして応援団のすさまじい鳴り物。プロ野球の醍醐味を初めて味わうことになった。

「父さんと母さんで行ったらいいよ」

と娘がチケットを買ってくれなければ、今回もプロ野球を見ることなど思いもよらなかっただろう。

■卒業生と碁を打つ

(二〇〇五年八月十七日《水》)

先日、盆休みに帰省した棋道部のOBが我が家にやって来た。N社に勤めていて、その意味ではぼくの後輩だ。

会社のことなど、懐かしく聞く。かつてのN社とはずいぶん様変わりしたらしい。事業所が統廃合され、巨大化している。新しい事業所もできたようだ。府中事業所はどうやら昔のままらしい。府中がコンピューター事業の拠点であるのは変わらないようだ。

彼はいま、囲碁部の部長だか幹事だかをしている。かつて相手をしていた高校時代から見ると、たしかに二子くらいは上達している。

高校時代に出場した全国大会では一回戦を勝ち抜けるかどうかだったと記憶しているが、今回手合わせした彼の碁は、当時のようにヤワではなかった。こちらのヨミが外されてハツとすることもあった。こうなると真剣にならざるをえない。久しぶりに精力を注ぎ込む碁を打った。

二局打ったが、結果はまあ、年の功と言っておこう。それにしても、こんなにも力のこもった、楽しい碁を打ったのは久しぶりだった。

盆が終わると秋風が立つ。夜にはチロチロと虫の音がする。声の主をさぐるうと、耳をそばだて近づくが、夜の葉陰に彼らの姿は見つからない。ガリバーのように突っ立った足元から、相変わらずチロチロ、チロチロ、澄んだ恋の歌が響いてくる。

夏はいよいよ終章だ。

■春来ぬうちに

(二〇〇五年八月二十日《土》)

(一)

とにかく行くことにした。行けばどうにかなる？ いやならない？ それは誰にもわからない。とにかく行くことにした。

少し時間がある。もうしばらくは書斎にいるよ。ちょうど今、マーラーを聴いているところなん

だ。シンフォニー六番をね。頭にヘッドフォンをかぶって、君へのメールを指先からはじき出しているところなんだ。いつものことだ。曲は第四楽章にさしかかってきた。

マラーにつながる共鳴空間は、外耳道から、たかだか内耳の蝸牛管までだ。わずか数立方センチのこの空間に、シンフォニーの絶えざる荘厳が鳴り渡る。有限が無限に転化する魔性の時空、これをとりあえず仮想空間と呼んでおこう。

ああ、仮想空間、仮想空間。イマジネーションが唐突に騒ぎ始めた。

仮想空間。これは疑うべくもなく実空間に対立する。言葉がロゴスである限り避けようのない必然の対立だ。

ロゴスの対立は、真実の対立を前提としなければならないのか。それは少々疑わしい。言葉とは、思うに慣用的論理の代用物だ。慣用的が不鮮明なら、進化的論理的、実存的、あるがまま的、まあどう言っただって同じことだ。

要は、我々人間が漸次的にたどってきた認識の進化過程を、言葉の論理は宿命的に背負わされているということだ。潜在する無数の糸から、ある一本が偶然の光によって選り出され、たぐり寄せられた。それを我々は唯一のリァリティーとせねばならない宿命を負っている。人類のロゴスには進化の過程が重しのかぶさっているのだ。

さらにやっかいなことには、言葉がもつ本質的限界を言葉で表現せねばならないという、我々にとつてどうにもならない自家撞着が、我々を縛っている。その縛りから逃れる試みが無意味であることは、ゲーデルが不完全性定理をもって、あますところなく示しているではないか。一つの体系の内部でその体系の矛盾を導くことは不可能だとね。

現実の問題にもどうだろう。実のところ。仮想空間なるものと実空間なるものとの間に、画然たる境界線を引くことはできるのか。有理数を二つに切断し、その境界上に無理数を導き出したデデキントのような、数学者を震え上がらせる見事な切断の論理をそこに見出すことはできるのか。

ぼくはそれを不可能だと思う。

仮に、そのような切断があったとしてみよう。たとえば実空間とは我々の実体験に基づくものの総体であり、仮想空間とは、それ以外の総体である、と定義してみよう。両方に属するものはないはずだし、いずれにも属さないものもない。

さてそこで、いまぼくがヘッドフォンの中に聞いているシンフォニーだが、これはいずれに属するのだろうか。これももし実空間に属するとすれば、シンフォニーの実体験が付随しなければならぬ。だが、この音は現実にはコンピュータがコンパクトディスクから情報を取り出し再構成したものであり、しかもそれをぼくの想像力が受け止め、感じとっているものにすぎないのだから、それはおかしい。かといって、逆に仮想空間に属するものとすれば、何らの実体験をも有してはならないことになるが、現に音響というリアルな実体験をそれは伴っている。これもおかしい。すなわち、ヘッドフォンの中のシンフォニーはいずれにも属さないことになり、これは切断の定義に反している。

少々論理が崩れていると自分でもわかっているが、それは許してくれ。

詰まるところ、切断はないのだ。これは、実はラッセルのパラドックスなのだ。およそ考えられるあらゆるもの（この言い方の中にすでに矛盾の萌芽があるのだが）を、一つの集まりと、それ以外の集まりとに分割しようとする、その操作自体から必然的に矛盾が導かれてしまう。これぞ有

名なラッセルのパラドックスだ。

真実はしたがって、いつでもぼやけている。ぼやけたものこそ真実である。何十年かを生きてきたぼくの結論はこれだ。切断は、あるといえはある、ないといえはないのだ。対立概念も、あるといえはある、ないといえはないのだ。そこに矛盾を感じることも自体、すでに認識の限界に縛られた幻想なのだ。

何千人もの聴衆を前にオーケストラが高々と奏でている曲が真実で、その録音を数立方センチの空間に聴くのは仮想。まだこんなことを考えている人がいるとしたら、その人にぼくは尋ねよう。

舞台のオーケストラが奏でる響きに酔っているあなた、目をつぶってごらんさい。あなたの耳にいま響いている曲は、真実の音楽ですか。あなたの耳穴に飛び込み、あなたの鼓膜を振るわせ、あなたの聴覚を刺激しているこの音波は、真実の音楽ですか。ヘッドホンから響いてくる音波はあなたの耳に贗物として響きますか。

それともですよ、いまあなたが目を開けたとき、舞台に見える団員の奇妙な指先の震え、あれが真実の音楽ですか。団員が激しく弦をかき鳴らしている、あれが真実ですか。目の前の彼らから発せられる音波だから、この響きを真実の音楽だというのですか。しかし、団員たちのあの激しい動きは、光と呼ばれる波とも粒子ともつかない不可思議な媒体があなたの網膜を刺激した結果にすぎないので不是吗ですか。あなたにわかるのは、本当のところ、媒体たる光ですらないのですよ。結果の刺激だけなのですよ。

ちょうどコンピューターがコンパクトディスクからの情報を再構成したように、網膜が受けた刺激をあなたの中の何ものかが再構成した結果が、あなたが外部に実在すると確信しているそのものの真の姿なのですよ。

あなたの感覚への刺激とその再構成物を、外部の実在だと証明するための、絶対不動の実体を、あなたはどうかやれば認識できるのですか。

隣の人も、前の人も、後ろの人も、この会場にいる人はみな一樣にうっとり耳を傾けているのだから、ここに真実の音楽が奏でられているのを疑うことはできないではないか。

そうあなたは反論するでしょうか。あなたの論拠はそれだけですかと、逆にぼくは尋ねます。映画館のスクリーンを数百人の観客が見つめ、一様に涙している悲劇のラストシーン、それは真実の世界ですか。スクリーンの世界と、いまあなたが舞台に見ているオーケストラの団員と、実存としてのあなたの肉体が受け止める感覚にはたして違いはあるのでしょうか。あるとすれば、それはあなたの先入観がなさしめた違いにすぎないのですか。オーケストラの団員は真実の肉体を持った人間であり、スクリーンは単なる虚像にすぎないと、そうあなたは刷り込まれているのではないですか。

あなたが夏の夜空に見る天の川。あれはあなたにとって真実ですか。真実なら、いかなる真実ですか。我々の銀河の深部を見ているのだと、あなたは答えるのでしょうか。あなたが理屈を好む人ならば、星が幾重にも重なっているからあのように見えるのだと、さらに一言つけ加えたくなるのではないですか。あるいは、天にたなびく巨大な野焼きの煙だと、あなたは答えるのでしょうか。それとも、神が放った射精の跡だと答えることはないでしょうか。

実はぼくは、神の射精の跡だと答えるのです。ぼくの主観は、そこに何かある激しい生成と死滅を見るからです。

あなたがもし、天の川を無数の星の凝縮であり、それ故に、水蒸気や煤が背景を不透明にする野焼きの跡と差異のない実体だと感じるとすれば、あなたはすでに自由度を二つも三つともぎ取られただるま人間だということになります。つまりは、いたってノーマルな進化的普遍人間だということですね。

ここが大事ですが、すべてはいつの日かくつがえされるのです。あなたにもそれはわかっているはずですね。ところが、神をも越える傲慢さで、科学は常に、その時々々の最先端であり、到達可能な最高地点だとする論を主張し続けてきました。実際、この主張なしには科学は存立し得ないでしょう。科学が傲慢な自信を失った日、世界は奈落の底に突き落とされてしまいます。というのも、今の世界はすべて、今の科学（今の到達点）が絶対的に正しいという仮定を土台にして作られているからです。

もし、世界を奈落に落とすことなく、科学がどこまでも進化するものだとしてみましよう。つまりそれは世界の無限持続性の仮定です。その仮定の下では、一つの論が不変であり続けることは不可能です。「無限」はいかなる不変をも否定します。ある事柄が永遠に不変であり続ける確率は、数学を多少ともかじった人には直ちにわかるでしょうが、ゼロです。確率ゼロとは、絶対に起こりえないことと同義です。

無限という怪物は、この意味で実に冷酷無比です。人知の及ぶところではありません。無限の下ではすべてが否定され、永久不変の概念など幻想にすぎなくなってしまうのです。

科学はこのパラドックスを隠蔽するために、科学がくつがえるとき、世界も同時に崩れると主張するので。科学の絶対真理性が前提とされるのなら、この論理もあるいは正しいでしょう。絶対真理は、世界内真理だからです。だけども明らかにこれは保身のための詭弁です。自らの死滅を認めたくない進化的論の人間の論です。進化的論の普遍人間に言わせれば、科学もまた自然淘汰による進化過程を経て進歩してきたのだから、そこにはおのずからなる客観的真理が付与されるはず、とまあこういうことになります。オプティミズムです。ある種の信仰です。客観的真理の何たるかを検証しないまま、ただ信じよという信仰です。

詭弁を前提とする以上、科学はくつがえされ続けるのです。容易に想像できるでしょうが、今日の科学をもって、百万年後の科学を論ずることはまずもって無意味でしょう。両者の間に連続性があるのかどうか、それすら疑わしいのです。決定的な断絶、ないしは決定的な屈曲があるとする方が自然でしょう。すなわち科学は間違いなくくつがえされるのです。

要するに、科学が平板なユークリッド空間に沿って進歩しうるのは、局所的な時空構造の中でだけなのです。今日の我々は残念なことに、局所ユークリッド性の制約を破ることができません。広大な時空を一望するのは不可能です。ですから、百万年後の科学を正視することなど、そもそもできないわけではないのです。

科学はくつがえされるのです。天の川は神の射精の跡、これが真理だとされる日が来ないと誰に断言できませんか。耳の中にコンピューターが流し込む音響こそが真の音楽だと、誰もが認める日が来ないと言い切れる人はいないでしょう。

ああ、ぼくはまたもや、自己陶醉とモノローグの悪い癖におぼれてしまったようだ。気がつくとき、マラーはとうに終わって耳の中がジージー鳴っている。

そうだった、ぼくはとにかく行くことにしたのだ。行けばどうにかなる？ いやならない？ そ

れは誰にもわかりっこない。だからとにかく行くことにしたのだ。

コンピュータをシャットダウンすると、大きく深呼吸した。時計は二時。約束は三時半だ。約束の前に会いたい人もいるから、そろそろ出かけよう。

電車とバスを乗り換える手もあるが、今日は自転車で行こう。安手のセーターをひっかぶってね。なまじあつらえの背広など着ると、かえって胸の内を読まれてしまう。焦燥、悔恨、熱望、卑下。空気に触れさせたくはないこれらが、着なれぬ背広の裾から、思わずぼろりとこぼれ落ちないとも限らない。

シヨルダーバッグに財布と手帳と文庫本を放り込むと、颯爽と自転車にまたがった。ペダルが軽い。ずんずん進む。なんと言っても下り坂なのだ。

南国の十月。それにしても今日の日差しは暑い。汗ばむ。

頭の中を何か空転し始めた。何がいったい駆け回っているのか、はじめは注視しなかったが、気がつくと、例の手紙のさわりである。何度も読むうちにそらんじてしまったあの手紙だ。

佐藤孝殿。

これがぼくの名前だ。平凡すぎる。

佐藤孝殿。貴殿のご希望に添えるかどうか、ともかくおいで下さい。当方としても、貴殿の力に期待するところ大なのです。

実は、当方からお願ひしたいとかねてより願っていたところ、あなた様からお申し出があり、恐縮に存じております。少しばかりの見定めが必要ですので、ともかくお越し下さい。

見定めときた。品評か、検分か。噂に違わぬ人間かどうか、実地検分しようというわけだ。まあそれもいい。こちらにも内に期するところ、なくはないのだ。いや、ぜひとも何とかしたいのだ。正直言えば、額を地面につけてでもお願ひしたいところ。こんな言葉の一つや二つでへこたれるつもりはないのである。

(一)

仮想空間と実空間。暴走気味の論理だったよな。数学と呼びうる代物ではなかった。まあいいさ。ぼくの相容れない二面性を象徴する、偽りのない心境だったと言っておこう。

三日前、ぼくは四十歳の峠を越えた。なんの色どりも躍動感もない、平凡な峠だった。ひたすらぼくが来ることだけを待ち受けていた峠だった。ぼくだけにわかる疑心暗鬼の峠であった。たどりに着いたぼくに用意されていたのは、眼下に広がる箱庭のような風景。それは目にする、たちまちにして収斂し、眼底深く消えてしまった。

ふっと息をついたぼくは、言いようのない厳肅な心持ちにおそわれた。目の前にどろっとした水が流れてきた。音もなくそれは押し寄せてきて、気づいたときにはすっかり水に囲まれていた。水面にはちかちかと鋭い光が満ちていた。

これが四十歳になったぼくの心象風景だった。月光が静かに波に揺れていた。

そうだ、眺めているうちに、すっかり忘れていた一つの出来事を思い出した。二十歳のとき、ぼくは一度死んだのだ。琵琶湖の水に吞まれて死んだのだ。

夏も終わりに近づいたその日、岸を離れて沖に向かっていたぼくの手足が、引き返さねば思ったとたん、凍ったように痙攣した。筋肉が固く収縮し、どうにも制御できなくなった。もがくことも

浮くこともできず、身はひたすら、足先を下にして沈んでいった。目の前に湖水のさざ波が迫ってきた。

ぼくは夢中で叫んでいた。

「助けてくれー」

岸边は遠く、声は虚空に吸いとられるばかり。時は容赦なく進行した。視線が湖面に重なった。視線の先に比良の山並みが浮かんでいた。その美しかったこと。この世の見納めか。そう思った。すがるものがない絶対的危機をぼくは悟った。

ついに視線が水面をくぐった。空が消えた。二十年間なれ親しんだ空との別れ、太陽との別れであった。目の前には淡い土色をした混濁の世界が広がっていた。白い泡がせわしなく立ち昇っていた。ぼくは湖水に呑み尽くされた。なすすべのない死の始まりであった。

「ついに終わった」

絶望が心を捕らえたそのとき、眼前を不思議な光景が猛然たる速さで駆けめぐり始めた。生まれ以来体験した無数の場面が、早回しの走馬灯のように、流れ始めたのである。場面は光速とも言える速さで流れてきては、流れ去っていった。

そこには成長の一場面一場面が、細部に至るまでくつきりと、色彩豊かに再現されていた。ぼくはただうっとりとして見とれていった。あまりに美しかった。

思い出すこともなく忘却の棚に積み置かれていたこれらを眼前にしながらか、ぼくは懐かしさに心震わせた。これがぼくの人生だったのだ。二十年間の人生だったのだ。

連綿と続いてきたこの命。それが非常な力によって今ここで断ち切られようとしている。丸太のように断ち切れようとしている。虚しかった。

思わず泣いた。そこには母への強い思いがあった。どの場面にも必ず母がいたからである。ここまで育ててくれた母の愛の執念よ。ぼくは心の中で思い切り叫んだ。

「母ちゃん、ごめん。ぼくは今ここで死んでしまうよ。誰にも気づかれないこんなところで死んでしまうよ。せつかくここまで育ててくれたのに、すべてが水の泡になる。ごめん、母ちゃん。ありがとう。育ててくれて、ありがとう」

意識があったのはそこまでだ。その後は意識が途絶え、波間を浮き沈みしていたらしい。

それからどれだけ経ったのだろう。太陽の光の下でぼくは目を開けた。「助けてくれー」を聞いた泳ぎ達者な友人が、猛然と近づいてきて、ぼくを引き揚げ、首を抱き、それを水の上に持ち上げたまま、必死に泳いでくれていた。友人の必死の形相が嬉しかった。神の救いを見るようで、ただただありがたくてならなかった。一度死んだ命がよみがえった瞬間だった。

やがて岸に着いた。下ろされたけれども腰が立たず、水を吐いて横たわっていた。

不思議でならなかったのは、目の前を流れ過ぎていった無数の場面の中に、ただの一度も父が現れなかったことだった。何度思い出しても、そこに父がいないのが、不思議でならなかった。いるのは母だけだった。

これは、子供時代に聞かされていた父の戦争体験と、なんとみごとに一致していることだろう。父は衛生兵として日中戦争と太平洋戦争に動員された。そこで毎日何人もの兵士の死に立ち会った。

兵士はいよいよ死ぬと悟ると、必ず「おかあさん」と叫んだという。「おとうさん」と叫ぶ者は一人もいなかった。ぼくの臨死体験がまさにそれを物語っているのではないか。

あのよみがえりの日から、さらに二十年の歳月が流れた。二度目の二十歳を迎えた。ぼくはそれなりに努力してきた。そのつもりだ。だけど遅すぎた。遅すぎたんだ。

人並みの暮らしはしている。妻はこれでいいという。

「あなたは立派にやってきたわ。人にできないこともたくさんしてきたじゃない」

たしかにそうなんだ。人から見れば、不平や不満を口にする理由など、どこにあるというのだろう。人並みにがんばって、それなりの結果も出した。学校のコンピューターシステムをゼロから作り上げたことなど、評価されるなら、されてもよい仕事もやって来た。

だけど、ぼくは虚しいんだ。後悔はそこから発しているのだ。究極の劣等意識の海にぼくは浮かんでいるのだ。妻に言ってもわからない。誰に話してもわかってもらえない。

君ならわかってくれるだろうか。たぶんわかってくれるよね。

二十五歳のときだ。退社時だった。ロッカールームで一緒に着替えをしながら、何かの拍子に君は言ったね。覚えているだろう。

「俺はまだ書かない。四十歳になったら始めるよ。それまでは経験と勉強だ」

何と醒めた言葉。ぼくは驚いた。いま書かないでどうするんだ。一冊読めば、二冊書きたくなるのがぼくだ。君はよく冷静でいられるね。

そのころすでにぼくは激しい劣等意識の海を渡っていた。もうほとんどおぼれるくらいにね。もがけぼもがくほど沈んでいく。何もしないでじっとしていれば、浮かぶだけは浮かんでいられる。死ぬことはない。だがそれでは得るものは何もない。

対岸の見えないジレンマの海だった。

ぼくから見ると、君はなんと世渡り上手なんだ。君にはおぼれる海なんてなかったんだ。

ぼくのアパートで読書会をやったことがあったよね。同期に入社した連中が五、六人集まってきた。みな理系の連中だった。物性やら、情報やら、回路やら、数学やら、そんなことを専門にやってきた人間ばかりだった。それが小説を読むことで和気藹々になれたんだ。不思議な集まりだった。

女の子も誘おう、そう言い出したのは君だった。文管の女の子を二人も連れてきた。君の腕には目を見張ったよ。

男たちはカフカをやっていた。『変身』やら『城』やら読んだよね。ところが君の連れてきた女の子たちは、

「えーえ、カフカあ。窮屈そうね。遠藤周作にしない。『海と毒薬』を読みましよう」

ぼくらはしぶしぶ同意して『海と毒薬』にした。あと何だったか、二、三冊読んだよね。そうそう『神田川』も読んだかね。それで終わりになった。読書会は結局十回を数えるか数えないかで終了したわけだ。

どうして終わったんだろう。男だけのしょっぱい水に、甘ったるい砂糖が混じったからだろうか。それもあったかもしれない。特にあの少し脂肪がついて口の達者な、名前は何といったかな、忘れちゃったけど、あの子。誰にでもすぐ、十年もつき合った間柄のようななれなれしきで話しかけてくる子。あの子の甘えかかる押しつけには辟易したものだ。まるで自分の意見は神様の意見と言いたそうな自信で、けだるく押しまくられたら、もう誰もものが言えなくなってしまうたよね。

君は女の子を連れてきたことを、あとでぼくに謝ったことがあった。そのときぼくは何も言いはしなかったけど、読書会が終わった理由は実はそんなじゃなかったんだ。なんと言ったらいいか

なあ、言うのが辛いんだけど、すべてはぼくに責任があったんだよ。君に責任はなかった。それどころか、君は立派に責任を果たしたじゃないか。連れてきたうちの一人と栗谷君がカップルになり、後に二人が結婚したことを思えば、君は立派に仲人の役を果たしたわけだ。

ダメなのはぼくだった。何がダメだったんだろう。要はぼくという人間がダメだったんだ。引きつけるものがないんだよね、ぼくには。情けないけど、そうなんだ。

彼女らは君に誘われて、楽しい場を期待してきたわけだ。読書なんて名目にすぎなかった。ところが、会の中心にはぼくがいて、面白くもない話を、それも聞きかじったり、読みかじったりしただけの実存主義や構造主義や、宇宙の神秘などを語ったりするものだから、彼女らについては行けなくなった。足が遠のいてしまった。栗谷君も来なくなり、三崎君もやめて、会は自然解散となったわけだ。

その後、一度復活したけど、またダメになった。

ああ、ぼくは何を言おうとしてたんだろう。そうそう、四十になったということだ。あのころぼくは、四十なんて地球の裏側くらい遠いものと思っていたよ。見はるかしても見えやしない。そこまで行き着くぼくを想像することさえできなかった。

ところが君はちゃんと見てたんだね。夢ばかり追うぼくには見えなくて、現実に立脚した君にはちゃんと見えてたんだ。一段一段階段を上がると、その先に何かがあるのか、君はちゃんと見てたんだ。ぼくはただ一足飛びに飛び上がることはかり考えて、結局は何も見えず、ちっとも進歩もなかった。笑い話だよ、これは。

(三)

ぼくは尋問場への道を急いでいる。面接などと呑気な言葉で片づけられるものではない。触れられたくない過去が根こそぎ暴き立てられる尋問なのだ。急所をちくりちくりと突つつかれ、痛さに堪えかねて逃げ出すそばで、尋問官が

「それ見たことか」

とほくそ笑んでいる。そんな場面が目に見えるようだ。今なら間に合う。くるりと身をひるがえして、逃げ出したいくらいなのだ。

だけど、四十というこの節目、これがもつ重みはぼくにとって特別なものだ。何ごともなく、ただ平穩に通過することを、自分自身が許さない。続く二十年を今度こそは、自分の意志と力で生き抜きたいのだ。ぼくにとって意味あるものとしたいのだ。よみがえってからの二度目の人生を、ぼくはあまりに平易に、怠惰に、無目的に歩んでしまった。あれやこれやとやってはみたが、極めたものは何一つなかった。大いなる悔恨が今ぼくを苛んでいる。

焼けるような後悔をポケットの奥にしまい込んだまま、なおも安易な道を歩み続けるくらいなら、今ここで死んだ方がましだ。危険は覚悟なのだ。いや危険どころか、大上段に振りかざした刀を元の鞘に収めざるを得なくなったときの空虚感も覚悟の上なのだ。ともあれ、持てる力をぶっつけてみたいのだ。ぼくの過去に一度としてなかった挑戦にぼくは燃えている。

君は笑うだろう。今ごろになって何を言うのだとね。それならそれで準備をしておけばよかったじゃないか。やればできた準備をことごとく放棄したのは君だよ。怠慢を柵に上げて、今ごろ人生

の悲運を嘆くとは、あまりに虫がよすぎやしないか。そう君は腹の中でつぶやいているだろう。

先を読み、周到に計画を立てる君の人生観からすれば、ぼくの出たとこ勝負の人生なんて、子供が作った紙飛行機くらいのもかもしれない。夢を盛り込み、意気込んで作ってみても、風が吹けば墜落するし、飽きればぐしゃぐしゃとつぶされてしまう。降りかかってくる現実の重みを乗せる力なんてどこにもありはしない。

ディレタントと言われれば、なすすべもなくそのひと言で括られてしまうぼくの過去。ぼく自身が、誰よりもよくそれを知ってるよ。後悔はその一点からとめどなくあふれてくるのだからね。とはいえ、ぼくの過去に万に一つの価値ある何かが落ちていやしないかと、それを今まさぐっているのだ。一片の価値もない人生なんてあるはずはないからね。神様はそこまで無慈悲なお方ではあるまいよ。

期待しているのだ。道化を演じることになろうとも、笑いものになろうとも、今をおいてありえない可能性に賭けてみたいのだ。

自転車をこぐ足が少し辛くなってきた。歳を感じるよ。頭の中ではマーラーがまだ響いている。シンフォニー六番がいまだに鳴りやまないのだ。足が鈍るにつれて曲のテンポは確実に落ちてきたがね。

いまソプラノが静かに空から降ってくる場所だ。待ちかまえている対決のときに向けて、氣息を整えよう。

踏切を渡った。大きな鳥居が見えてきた。鳥居には躍るような文字が刻まれている。鳥舞い、魚躍るか。いい言葉だ。言葉の通り、文字も跳ね躍っているんだよね。何ともいえない気分だ、これを見ると。

鳥居はそこにあつて、もう何百年も、同じ言葉を人々に語り続けてきたわけだ。いや、文字を書いた三輪田米山は幕末の人だから、何百年は大げさか。でもまあ、これを見ていったいどれだけの人が、人生の倦怠から跳ね起きたことだろう。生きる決意を新たにしたことだろう。神社の価値はこの文字に集約されていると思うんだ。他に何がなくても、この神社には存在価値がある。鳥舞い、魚躍る、この一点から噴き出す価値によって、神社はゆるがぬ存在を主張している。

曲がりくねった古い遍路道をぼくは進んでいる。背中に秋のやわらかな日差しをほくほくと受けながら。

ため池が見えてきた。結構広い蓮池だ。冬には水が枯れ、その年の権利を買い取った一家が、泥に足を取られながらレンコンを引き抜いている。そのシルエットは、まるでミレーの落ち穂拾いだ。ぼくは土手に腰を下ろし、日がなそれを眺めたことがある。何年前だろう、スケッチブックを手にした画家気取りでね。

真剣だったのだ、あのころ、ぼくは。

ああ、だけどこれだよ、これがディレタントなんだ。ものにならない素人芸だ。

中学生のとき、学校で金賞をとったことがある。それをなんだか宝物のように思い出し、教師になってから、十年ばかり絵を習ったのだ。でも、ものにならなかった。ディレタントは、どこまで行ってもディレタントだった。

今、午後の日を浴びた蓮池が、淀んだ水面を仰向けにして眠っている。ときおりフツフツと気泡が立つ。自転車を止めて木陰に入った。気に入りの木陰だ。おそらく千年の昔から、ここに行く遍

路や旅人たちが一息入れた木陰だ。彼らがふうつと安堵して吐いた息が、ここかしこに去りもせず、とどまっている気がする木陰だよ。

岸辺近くで、小さな魚が群れをなして泳いでいる。一匹がさつと向きを変えると、他の連中も一瞬にしてそれに従う。反射神経の素早さには感嘆するね。まるで群れ全体が一匹の魚だ。彼らに意志はあるのだろうか、それとも反射機構を備えた自動機械にすぎないのだろうか。

一匹や二匹、群れを無視するアウトサイダーがいてもおかしくはないよね。そう思って、じつと眺めているが、そんな連中はいそうにない。一匹が右に折れれば、他の連中もみな右に折れる。それも瞬時にだ。躊躇などありはしない。自我を主張する魚なんて、どうやらいないものらしい。

自分の分身を眺めているようで悲しくなってきた。心は常にアウトサイダーなのだ、ぼくは。だけど勇気がない。力がない。そして結局は何もなしえないまま、しんがりについて歩くインサイダーになり果てている。不承不承の悲しきインサイダーだ。

せめてあの敏捷さだけでも我が物が物にできればいいのにな。魚にも劣るべく。

一休みして、ふたたび自転車にまたがった。ああそのときだ、例のあれが来た。二、三年に一度訪れるあれ。今どこにいるのか、どこに行こうとしているのか。脳内の認知機構が突然破壊され、呆けたようにすべてが遠く霞んでしまう。右を見ても左を見ても、ここがどこなのかわからない。見なれた風景のようでもあり、初めて来た地のようにもあり……。天からいきなり異空間に投げ出された感覚。激しい不安がつきまとう。

じつとしてはいられない。どこかに向かわねば。どちらに向かえばいいのかもわからないまま、ただ歩く。じつとしている選択肢などない。これは意志というより、焦りだ。あてもなく、ともかく歩く。この道を行けばどこに出るのか。それがさっぱりわからない。しかし、ただ歩く。歩けば見覚えのある何かを見つけるかもしれない。

これがなんと、勤めている学校の中でさえ起こることがある。いつも見なれている学校の廊下で起こるのだ。あるとき、生徒との面談で小さな面談室にもついていた。三十分ほどで話は終わった。先に生徒が出た。ぼくはドアに鍵をかけ、あとに続いた。ところが部屋を出たとたん、そこがどこだかわからなくなった。背を向けて歩いていく生徒の姿が一瞬見えた。彼は角を折れて見えなくなった。だのにぼくは、ここがどこかさっぱりわからない。どうしてここにいるのか、彼がどこに消えたのか、さっぱりわからない。じつとしても始まらない。とにかく歩かねば。生徒の姿が消えた方へと歩いてみた。闇をまさぐるように歩いてみた。どこに向かうのかもわからないまま……。しばらく歩くと、職員室の扉が見えた。なんだここだったのか。だけどもまだ確信がない。そつと扉を開けて入ってみた。異世界につながっているようで、心が落ち着かない。だが、見なれた同僚がいる。そうだ、やはり職員室のようだ。ようやく落ち着いてきた。夢遊病者の気分で進むと、我が仕事机があった。やつと靄が晴れてきた。

我が家の中でさえ起こったことがある。トイレから出た瞬間、そこがどこだかわからなくなったのである。

明らかにこれは、二十年前のあの出来事の後遺症だ。湖に沈み、半死状態に陥っていた間に、脳の神経細胞が百や二百は壊れたのだろう。もつとかもしれない。奇跡の生還を果たしたのが、あの日の損傷はいまだに脳内深く刻まれているはずだ。それが何年かに一度、むっくり起き上がった、認知機能の突然の喪失という悲痛な現象を生むのであろう。

この認知喪失状態は長くは続かない。せいぜい数秒から、二、三十秒。やがて、目が醒めたように、視界が認知の領域に入ってくる。切れていた回路がつながった感覚。だから心配はしていない。しかし、それが生じた瞬間は、「またあれか」で済ませられるほど生やさしいものではない。あらゆるものが認知の縁からこぼれ落ちるのだから。頼るもののない胸苦しき。気が狂うほどだ。

今また、それが起こった。今の今まで目的をもって自転車をこいでいた。こいでいたはずだ。だが瞬時にそれを忘れてしまった。ここがどこなのか、どうしてここにいるのか、どこに行こうとしているのか。何とか糸をたぐろうともがくが、認知の扉は閉じられたまま。

不思議なことだが、これが起こると、ぼくは必ず移動してしまう。ここがどこなのか、はっきりするまでじっと待っていていればよいようなものだが、なぜだかそれをしない。抵抗できない無意識の衝動が、ぼくを歩かせる。今の場合は、自転車で走らせる。どこに向かっているのかさっぱりわからないまま、とにかく移動する。

今、自転車にまたがり、暗闇の中を手探りで進むような感覚で、とにかくこぎ始めてしまった。漕ぐうちに、視界の片側が開けてきた。遠く市街地が一望できる。それを見たとき、意識が突然晴れた。眼前を蔽っていた霧が吹き払われた。ああそうだ、約束の場所に向かおうとしていたのだ。思い出した。

あとわずかだ。行き先は、とある私立大学の学長室である。

門をくぐった。まずは事務長に会わないとな。事務長はぼくの友人である。高校時代の同級生だ。何かのことに、ぼくのことを学長に話したらしい。そのときなぜだか学長は興味を示し、彼からそれが伝えられた。一度学長にコンタクトをとったらいとも彼は言った。突然の幸運が舞い込んだ気分になって、ぼくから学長に手紙を書いた。対して学長が、

「少しばかりの見定めが必要ですので、ともかくお越し下さい」

と返事をよこしたのである。経緯を記せばこういうことだ。君は信じないだろうね。話は妙な具合に、途切れもしないで、ここまで進んでしまったのだから。

要は見定めなんだよ。尋問なんだ。いい結果が得られようとは、正直、考えてもいない。学長のメガネにかなう価値がぼくの内部にあるとも思えない。それに、院も出ていないぼくを大学が雇うとはちょっと考えがたいしね。頼りはただ一つ。ぼく自身が気づいてもいないぼくの内面価値を、学長が発見してくれること。それだけだ。それが唯一の頼りだ。

事務員に事務長室のありかを尋ね、ノックした。

(四)

なんだかあの日を思い出してしまったよ。君と一緒に部長を訪ねたあの日だ。

読書会が自然消滅してしばらく経ったころ、君はぼくのアパートにやって来て、言ったね。

「最近社長が代わっただろう。それが大変なことを生んでいる。人事異動が次々と下に及んできているんだ。知ってるかい」

ぼくにとっては、社長なんぞ雲の上の人。社長が誰になろうが関わりない。いや実際のところ、社長が代わったことさえ知らなかったのだ。

社長の顔を見たのは、入社式の日に一度きり。大卒だけでも千人を超えるマンモス入社式だった。最後尾に近いぼくの席からは、豆粒のような社長の顔は、ただそこにいるという事実だけが存在感。

それ以上のものではなかった。生きて呼吸し、何かを考えている社長というものを、ぼくは知らないに等しかった。

社長の交代は社内報で知らされたらしい。だが、無造作に読み飛ばしてしまった。マスコミのニュースにもなかったらしいが、それにもまともな関心は示さなかった。ましてや交代の理由が何であるとか、次期の社長が誰になったとか、まったく知ろうとも思わなかった。

そういう雲の上のトップ人事を、我がことのように語る人物が自分の周辺にいたことが、ぼくには信じられなかった。不思議でならなかった。もちろん君のことだがね。

君は言ってたね。

「前の社長はT大だった。今度の社長はK大なんだ。まずトップレベルの人事異動で、重役の過半数がT大からK大に入れ替わったそうさ。今は、トップの首のすげ替えが一段落し、人事異動がその下のレベルに降りてきているところらしい」

いかにも見てきたように、君は語った。

「会社に学閥などあったの？ 知らなかった」

「常識だよ、そんなこと」

「それにしても、そこまで徹底してトップが交代してしまうとはね。SFの世界のような気がするよ。つまり無意味なことが現実になるという意味だけど」

「保守や販売の地方拠点は全国に、いや全世界に限りなくあるよね。子会社化された技術部門や製造部門も各地にある。だけどそれらはぼくらからは見えないうし、事実、会社のトップからも遠い存在なんだ。トップとのつながりが密なのは、何と言っても事業所だよ」

君は組織に通じる間諜でもあるように、これまで知ることのなかった組織の内幕を明かしてくれた。事業所はすべて東京周辺に集まっている。五、六カ所だけど。事業所ごとに一万とか二万とかの社員と、付属する子会社の社員を数千人単位で抱えている。事業所というのは、敷地も広大だが、組織の規模も大変なものなのだ。

「今までぼくらの課長だったNさんが、昨年末、部長になったじゃないか。これは人事異動の前ぶれだね。そのNさん、近々、本部長兼事業所長になるそうさ。とんとん拍子の出世だよ。言うまでもないけど、NさんはK大だ」

「へえーっ、あのNさんがねえ。初耳だ。あの人、訥々としゃべって、親しみやすい人だよ。ぼくらがもっていた書類に目を通すと、必ず一つだけクレームをつける。二つ以上はつけない。それでいて技術的問題が生じることは絶対ないんだ。肝心の一点を指摘しているから、それを直せばすべてがよくなる。しかも、その一点を直そうとすると、関連する他のいくつもの項目を直さないといけなくなる。それですべてがよくなるという仕掛けなんだ。そんなクレームのつけ方だった。すごい人だよ」

技術部門の組織は次のようになっていた。最小単位は、十数名からなるチームだ。チームの名称は、責任者の名前をそのままとって「原田チーム」とか「赤川チーム」などと呼ばれている。チームには必ず一人ずつ書記がいて、事務全般の手助けをしてくれる。チームのマドンナ的存在だ。こうしたチームがいくつが集まって課になり、課がさらに四つか五つ集まって部となる。特有の名称がつくのは部からだ。「……開発部」、「……計画部」などと。一つの部には三、四百人の社員が所属している計算になる。部がさらに十個近く集まって本部を構成する。ぼくらはコンピューター技術

本部というのに属していた。事業所にはこうした本部がいくつがある。

以上が技術および製造部門だ。そのほかにサポート部門として、さまざまな事務や医療部門などがある。図書館もサポート部門の中にあつて、よく利用させてもらったものだ。

これらすべてをひっくるめて一つの事業所となる。

「Nさんは、部長を一年も経験しないで、いきなり本部長兼事業所長になるらしい。それも近々ね」

「すごい人だから、トップもその力量を認めただろう」

「そうも言えるけど、K大でなかったらなれなかったこともたしかだね。学閥力学で押し上げられていったわけだ」

君はぼくらの部だけでなく、周辺の部の事情もよく知っていた。ぼくには空をつかむような話ばかりだったけど。

「隣の文書管理の部長はね、息子をNさんの娘と一緒にさせたいとねらっているらしい。どうやら見合いまで行ったらしいよ。ほら、読書会に来ていたおしゃべりな子、あの子が偶然現場を見かけたそうだ。彼女、ぼくには何でも話してくれるんだ」

学閥力学は、水面下のあらゆる所で珍妙な現象となつて揺れ動いているらしい。君はなおも続けた。

「ぼくは、どうせ会社に勤めているのなら、流れに乗らないと損だと思う。君のように理想を追い求めて唯我独尊を貫くのもいいけれど、ぼくは先々のためには時流に乗る努力をすべきだと思う。今日来たのはね、実は、一緒にN部長の自宅を訪ねてみないかと誘うためなんだ。事業所長になつてしまったら、敷居が高くて近寄りがたい存在になる。今がチャンスなんだ」

「そういう話はどうもぼくには苦手だなあ。小細工をしてまで出世したいとは思わないからね。それに、出世が重大な価値を持つとも思えない。外面の肩書きなんかより、内面の満足と充実感をぼくは求めるよ。行くなら一人で行つたらどうだ」

「それができるならそうするよ。だけど、ぼくだけではちょっと無理なんだ。たしかにNさんは去年までぼくらの直属の課長だった。直接指導していただいた人なんだから、一人で行つても、まさか門前払いを食らわされることはないだろう。だけど、学閥の点で、ぼくはダメなんだ。君の助けがいるんだよ」

「なんだか後頭部を花ビンでぶん殴られたように痛烈だった。ぼくの出身大学がこういうところで効力を持つとは、あまりにおぞましい。こんなことのためにぼくはK大に入ったわけじゃないよ。高三のときに末川博の『彼の歩んだ道』を読み、「K大反戦自由の伝統」と呼ばれる学風に強い感銘を受けたのだ。何が何でもK大に入ろうという気持ちを抑えたのだ。自分で言うのもなんだけど、クラス担任からは、T大を受けたらどうかと再三薦められていた。だけどぼくは拒み続けたんだ。これはぼくにとつて、譲ることのできない清廉潔白の一線だったのだから。

「悪いけど、そういうことのためにぼくと一緒に出かけるのは、いくら何でもお門違いだよ。ぼくの人間性が許さないね」

「やはりそうか。君はえらいよ。しかたない、ぼく一人で行くよ」

こうしてその夜は別れたのだが、後日、もう一度君は誘いに来た。ぼくのためにもなるのだからと、強い勧めだった。

筋を曲げたわけではないが、根負けした。友だちのためという心も働いた。それに、一緒に行くことで、実際、話がどう進むのか、見てみたい思いもあった。

こうして、ある土曜の午後、ぼくたちは出かけた。事前にアポを取っていたらしいね。しかも驚いたことに、君は奥さんへのプレゼントまで用意していた。小さな箱に入ったものをさ。中身が何だったかは知らないが、正直言って、発想があまりに公式的すぎた。アメリカのホームドラマを見ているようで、辟易したよ。いや、ちよっぴり恥ずかしかった。我がことではないが、恥ずかしかった。でもそれが君の人生観なのだからと、ぼくはあえて異を唱えることはしなかったがね。

Nさんは会社では、白のワイシャツと紺のネクタイで押し通し、堅物丸出しだった。だが、ぼくらの前に現れた姿は、ジーパンにライトグレーのトレーナーだった。それだけで度肝を抜かれたよ。Nさんの素顔を見たと思った。それがNさんの演技だったと気づくには、ぼくは若すぎた。

本がずらっと並んだ書齋に通されたよ。応接間ではなくて書齋にね。あれはたしかにNさんの勉強部屋だった。研究室というべきかな。目の眩むような専門書がたくさん並んでいた。

そういえばNさん、T大の非常勤講師でもあったのだ。我らが原田チームの原田さんだって、週に一度、W大の講師として出かけていた。アカデミックな雰囲気にも包まれた職場であったことはたしかだった。

あのと時何を話したのだろう。細かいことは思い出せない。ぼくらがNさんの肩書きに何かを期待してやって来たことを、Nさんはとうに察知しているものだから、わざと話をそらせていたとも思えるんだ。釣りや旅行の話をしては、

「若いうちに、やれることは何でも経験しておいたらいいよ」

と何度も口癖のように繰り返していた。

「ぼくらの歳になってしまおうと、やりたくてもできないことがいっぱいあるからね」

「できないって、部長、何でもやっておられるじゃないですか。趣味は豊富だし、専門の学問だって」

君は言った。

「いやいや、それは表向きだよ。新しい研究にはもうついて行けなくなった。細かい仕事を根を詰めてやることができなくなった。できるのは若いうちだよ。どんな小さなことでも、興味を持つたらとことんきわめてみることだね。徹底してやるのが大事なんだ。事の大きい、小さいは、やってみないとわからないんだから。入り口は小さくても、進んでみたら、内部に巨大な地底湖が開けていることだってある。滾々とわき出る泉かもしれない。それは、即物的な結果に目をくらまされる人間にはわからないことだ。根気よく掘り進んだ者だけに与えられる褒賞なんだよ」

そう言うと、Nさんはなぜか寂しそうな顔になった。右手の指に目を落とし、

「しかもそれはね、若いころに基本の勉強をしつかりやった者だけに与えられる褒賞でもあるんだよ。ぼくは少し遊びすぎた。だから結局、人まねしかなかった。それをいかにも自分の仕事であるように、とり繕って発表する技術は身につけたけどね。もしも二十年若返れるなら、今度こそはと、いつも悔やんでいるよ。」

そうか、Nさんのような人でも、ぼくとまったく同類の悩みがあるのか。それを聞いてなんだか少しほっとした。Nさんに親しみを感じたのも事実だったよ。

だけどそのとき、Nさんの言葉の裏側にある真の意味を察するには、ぼくはやはり若すぎた。額

面通りにしか受け取ることができなかった。

今振り返ってみると、Nさんに独創的な仕事ができなかったなどということはあり得ない。そんな軟弱な人ではなかったよ。あの言葉は、巧妙なトリックをはらんだ、大人の謙遜だった。

さらに言えば、トリックをわざとぼくらに気づかせて、実はもう一步奥底にある真実を吐露していたとも考えられる。NさんにはNさんなりの、ぼくらには推し量りがたい悩みや苦しみがあったのかもしれないだろう。

君は気づいていたはずだ。それが何だと言いついてはできないにしろ、何かあるな、くらいなことは。打算の匂いにはことさら敏感な君のことだからね。

いよいよ暇乞いという段になって、君はついに言ってしまった。君にしては珍しく、少々焦り気味にね。ここで言わなかったらもう言う機会がないとでもいうような、思いつめた焦りの色を露わにして、言ったんだ。

「部長、この佐藤君は部長と同じK大の出です。いつもはやる気なさそうな顔をしているんですが、いいアイデアを出して、チームに貢献しています。独特のひらめきがあるんです。できましたら、少し目をかけてやって下さいませんか。私も佐藤君の同期として、一緒にがんばりたいと思います。よろしくお願いいたします。今日はためになるお話をどうもありがとうございました」

Nさんは一瞬眉をしかめたが、すぐに表情を変え、苦笑いともとれる笑みを浮かべてぼくを見た。もちろん君をもね。

(五)

ぼくは事務長室を訪れ、ドアをノックした。二階の学長室に向かうにはやや遠回りになるが、この種の回り道は、事に当たってぼくがいつもとる手続きなのだ。

たとえば碁を打つとき、ぼくはいつもこの手を使う。碁盤をはさんで相手と向き合おうと、必ずそつとメガネを外す。ハンカチでレンズをぬぐう。慌ててごしごしぬぐったりはしない。ゆっくり、ゆっくりと。そう、本当にゆっくりと、裏も、表も、フレームも、鼻当ての裏側までも、丁寧に拭く。拭き終わると、こんどは、まぶたに指先を当て、軽くもんでやる。眼窩の周囲はやや強く。このときのしびれるような快感がたまらない。

この回り道が、ぼくを無理なく対局という別世界に導いてくれるのだ。

そう言えば、アマのトップであり、プロにも匹敵する力を持った菊池氏の対局を、いつだったか、すぐそばで観戦する機会があった。彼は対局の前、必ず瞑想するのだった。目をつぶり、下を向いて二、三十秒、静かに瞑想する。これで対局という別世界に入っていく。

いつになく心臓を高鳴らせ、事務長室のドアを開けた。事務長はぼくが来るのを待ちかまえていたようだ。

「やあ」

と声をかける間もなく意外なことを言いだした。

「実はね、俺もつい先ほど知らされたんだけど、今日はどうやら君だけじゃないらしいよ。谷口君が来るらしい。ほら、E大の谷口君。彼には学長の方から電話をかけたらしいんだ。大事な相談があるとか何とか言ってるね。しかも、なぜか君と日時をダブらせている。要するに、君と谷口君と学長と、三人で密談をしようということなんだ。妙な話だね。もっと変なのは、谷口君には君が来

ることを伏せており、君には谷口君が来ることを伏せていることだ。」

驚いたが、さもありませんという気がした。

谷口は、事務長ともども、高校時代の同期生だ。よく知っている。今は教養部で保健を教えながら、学内診療所で所長をしている。診療というより、健康相談のような仕事の方が多らしい。これを聞いたとき、辺境に弾かれたなど、正直、ぼくは思った。彼には医学部で活躍する道があった。その力は当然あった。だが本道からはずされ、診療所長になってしまった。本人は今の仕事を

「自由な時間がたっぷりあっていいよ」

と案外楽しんでる風でもあったが……。

大学が国立から独立行政法人になるに当たって、さまざまな問題を洗い出しては対処する責任者をやらされているとも言っていた。はつきり言って雑用係か、そんな気がした。

とはいえ、彼はぼくから見れば圧倒的な成功者だ。彼を思うと、いやでも自己嫌悪に陥らざるを得ない。

実を言うと、谷口は高校の同期生というだけではないのだ。小学生のころからの友人なんだ。五、六年生で同じクラスだった。なぜか気が合った。彼は生き物に興味があつて、庭の大きな池でさまざまな魚や川ガニなどを飼っていた。

卒業式が近づいたある日、学校の屋上でフェンスに寄りかかって話したことがある。少し大人になった気分だね。ミシシッピー川の見習い航海士になった少年マーク・トゥエインが、デッキの手すりに寄りかかり、得意げに足を交差させて水面を見つめている、そんな心持ちだった。

そのときすでに、谷口とぼくは同じ私立中学への進学が決まっていた。二人並んでフェンスの上にアゴをおき、三角にとがった裏山を見上げながら、谷口がぼくに聞いた。

「たかしちゃん、大人になったら何になりたい？」

ぼくはすでにそれを卒業文集に書いていた。それをそっくり繰り返しかえした。

「大学教授になりたい。教授になって何か研究するんじゃない？」

大学教授という言葉をいっただけで覚えたのだろう。それに対してどういうイメージを持っていただろう。具体的なことはさっぱりわからない。だが、当時のぼくにとって、大学教授という言葉は、将来のあらゆる可能性をおしのけて輝く、燦然たる憧れの星だった。それはまちがいないかった。

「そうか、たかしちゃん、勉強好きじゃもんな」

「けんちゃんは何になりたい？」

「ぼくかあ。ぼくもなあ、たかしちゃんとおんなじこと考えとるんよ。魚の研究がしたいんじゃない？」

「魚？ そんなことまでもう決めとるん。けんちゃん、すごいなあ。ぼくは何をやりたいかまだなんにも考えとらんが」

いま思うと、この違いが決定的だった。谷口は着実に目的を達成した。魚ではないが、医学部に入って、ついには本当に博士になった。

ぼくはというと、大学受験まではまじめに勉強したよ。K大の電子工学という、当時の最難関学科に入った。偏差値という点では、T大を上回って全国一位だったように思う。だがそこまでだった。入った途端、学問への情熱が冷めてしまった。その背後には、一ヶ月間、寮にもぐり込んで居候生活をしたという、思わぬ出来事があった。それがぼくを学問から別の道に連れ去ったんだ。同

室の先輩達が、大学というところは高校のように必死に机にしがみついて勉強するところではないぞと、よけいな知恵を注いだのだった。思い出すのもつらいから、それについては、これ以上語らないことにするがね。

授業をさぼることが多くなった。その分、たしかに本はたくさん読んだけど、専門の勉強からは遠ざかっていった。たまに講義に出てみても、もうわからない。わからないから、ますます足が遠のく。悪循環だった。

教授とのつながりなどできるはずがない。疎外感を味わうようになったね。学内に居場所がないという感じだった。

まあそれでも、どうにかこうにか、一年留年しただけで卒業はした。試験直前の間に合わせの勉強で、単位だけは取ったわけだ。卒業研究は、指導教官がやっていた研究の端っこをかじらせてもらっただけの代物だった。自分で研究したという実感はなかった。

指導教官から学んだことと言えば、先生が大事にしていたコンピューター・アーキテクチャーの原書を借りて、下宿で必死に読んだことだった。それによってコンピューターの内部原理を、細かいレベルまで初めて得心することができた。卒業研究でやったプログラミングにも、それは大いに役立ったよ。これらは先生から学んだというよりも、すべては独学に近かった。

ところがその原書、卒業後、会社にまで先生から督促の電話がかかってきたというのに、いい加減な返事をしたまま、だんまりを決め込んだというおまけまでついている。返そうにも紛失してしまつて、返しようがなかったのだ。罪悪感は今にいたるまで消えていない。

谷口とは、二人が地元に戻って来るようになってから、つきあいが復活した。と言っても、せいぜい年に一、二度会うくらいだけだね。

谷口とぼくには似たところがある。外見にまったくこだわらないことだ。服装や持ち物にはさらさら関心がない。ある人が谷口に言ったらしい。

「先生、助教授になったんだから、そろそろそれにふさわしいステータスシンボルを持たないといけませんね。ラフな格好が好きなら、それはそれでいいんですよ。しかし、バーゲンのセーターはいけません。見る人が見れば一目でわかるんです。ブランド品を身につけないと」

谷口は困惑げに答えたそうだ。

「ブランドなんて言葉、俺の辞書のどこを探してもないよ。第一、シンボルを要するようなステータスが俺にあるとも思っていないからね」
これが誤解の種になったという。

「谷口先生は、教授の口利きで助教授の地位を得ておきながら、助教授なんて目じゃないと、早くもその上をねらっている」

そんなあらぬうわさが立ったらしいのだ。

人前で自己を強く主張できないところも、谷口とぼくは似ている。

自己主張できないことと、自己主張がないことは同義じゃない。いやたいていの場合、両者は相補的であつて、正しくは、両者を足すと一定値になるという関係にあるようだ。

つまり、外に對する自己主張の強い人は、案外、内に抱えている主張は根が浅い。思想が軽々で、その人の人生の悲しみにつながっていないのだ。ひと言で言えば、口先だけだ。

それに対して、外に向かつて自己主張しない人の内面の主張は、人には語れないほど根が深い。

人生そのものであって、深刻なのだ。表に出すことがはばかられるほどなのだ。はばかられると言ふより、人に知ってもらふことなど、その人にとっては価値外なのだ。自己の充足感が伴えば、それで十分なのだ。

ぼくも谷口も、内面の自負心は人一倍強い。だが、それを口にするには滅多にない。無口で弱々しくって、穏やかな人という評判が通り相場になっている。にもかかわらず、心の奥底では決して人に譲らない。その分、鬱憤をため込みやすい。晴らすには、自分に近いタイプの人間との一体感が不可欠となる。

外洋船が長い航海を終えて、年に一、二度、母港に戻ってくるように、二人がときおり気兼ねない出会いのときを重ねているのは、どちらからともなく似たものを求めているからに違いない。嫌なものをごろつと吐き出せる安心の場を求めているわけだ。

この話は一片の真実から発したフィクションだ。フィクションがフィクションを呼んだメタフィクションだ。もうここらでいったん打ち切るときが来たようだ。

最後に、一片の真実がなんであつたかという、種明かしだけをして、終わりにしよう。

谷口とぼくと学長が顔をつきあわせて密談をしたというのは真実だ。だけど、それは正しく言えば、学長室ではなかつた。学長行きつけのスナックだつた。学長は神父でもある。神父に行きつけのスナックがあるというのが、まずもって驚きだつた。

同窓会の帰り、神父があまりに強く誘うものだから、谷口とぼくはさほど乗り気でなかつたものの、このこついて行つた。神父はすでに会合の場でありでかあがつていた。その上、スナックでは、ずいぶんほろ酔いになるまで飲み、かつ話し込んだのである。

その場で神父はいきなり軍歌を歌い出した。「同期の桜」だ。

「貴様と俺とーは、同期の桜。同じこーくーたーいの庭に咲く。……………」

というやつだ。この「同じこーくーたーい」を、谷口もぼくも「同じ国体」と聞き違えていた。昔から聞き違えていた。なんと軍国調極まる歌だろうと思つた。それを帰り際に二人で話し、神父に、つまり学長に、妙な軽蔑の念さえ覚えたのだつた。

だが後に歌詞を読んでみてわかつたよ。まず第一に、こーくーたーいは国体ではなく、航空隊であつた。歌の三番と四番にそれが出てくる。

三、貴様と俺とは同期の桜。同じ航空隊の庭に咲く。

仰いだ夕焼け南の空に、未だ還らぬ一番機。

四、貴様と俺とは同期の桜。同じ航空隊の庭に咲く。

あれほど誓つたその日も待たず、なぜに死んだか、散つたのか。

軍国調といえば軍国調だが、戦争に伴う悲しい現実が背景にある。それを歌っている。

実は私の父は、太平洋戦争において、ジャワにやられ、そこで陸軍航空隊付きの衛生兵になっていた。そのときのことをときおり父が語り、この歌と同様の悲劇を何度もぼくは聞かされていた。

「十機飛び立って、八機しか帰ってこんような日もようあつた」

などとね。特に仲のよかつた戦友が帰つてこなかつたときには、ベッドに向かつて手を合わせながら、あふれる涙を抑えられなかつたとも言つてたよ。

神父も、年格好から見て、戦争中、こういう体験があつたとしてもおかしくない。神父も坊主も

動員されたのだから。

まあそれはそれとして、スナックで三人は、まさに三人三様、期するものを腹の底に抱いたまま、なかなか本質には入らないで、周辺をぐるぐる回りつづけていた。本質というのは、谷口かぼくを大学に取りたいという学長の思いであった。いや、谷口かぼくというのはまちがいで、「谷口を」であった。谷口を取るために、ぼくを添え物にしたのであった。

だけどぼくは勘違いをした。谷口と一緒にぼくも取ってくれる、そんな気になってしまったのだ。谷口さえ「うん」と言ってくればの話だったが……。

ところが谷口にそんな気はさらさらなかった。今のE大学での呑気な日々と、そこでできる自由な研究とで満足していた。学長の誘いに乗らないといけない義理も必然性もなかったのだ。

三人それぞれの思いがすれ違ったまま、その場はお流れとなった。結果としては、何ごとも起こらなかった。一瞬浮かんだ期待が裏切られ、空虚感、無残さに打ちひしがれたのはぼく一人だった。君のように、自ら自分を売り込む勇氣など、はじめからぼくにはなかったし、それに、それはぼくの人生観に逆行することでもあったから、しかたない結果ではあったわけだ。

所詮は高校教師をつづける以外、残された道はないのかと、諦めに似た悟りを得たのもそのときだった。プロの道などありはしないのだ。どこまでもディレッタントなのだ、悲しくなった。夢だけで現実の扉が開いたりはしない。これは厳然たる事実だった。ぼくは徹頭徹尾、絶望に追いやられたのである。

ああ、今ぼくは、なんてことを言い出したんだろう。誰にも内緒にしておきたかったのにな。それというの、四十歳になった今、君はあのロッカールームでの決意をどう処理したのか、ひれを知りたかったからだ。

しかし、聞かないことにしよう。うまく処理した場合には、とても妬みに堪えがくて、狂わんばかりになるだろうから。逆の場合の優越感もまた空疎きわまりないことを知っているから。いずれにしても、知らないに越したことはない。知りたいというのも、馬鹿げた空想だったんだ。

■五十代は第二の青春

(二〇〇五年十一月三日《木》)

夏以来、なんだかすごく勉強意欲が湧いてきた。というか、不勉強と怠慢にようやく気づき、学生時代に戻ってもう一度勉強してみたいと、そんな謙虚な気持ちで夏から秋へと進んできた。

思えばこの二ヶ月間、試験やらレポート書きやら、そんなこんな追い立てられ通しの毎日だった。文字通り学生になっていた。ときどき試験を受けながら、なんとレポートを十本書いたのだ。放送大学の司書教諭コースを受講したのである。

夏休みのあらかたはテレビによる受講でつぶれてしまい、それが終わるとレポート書きと試験が待ち受けていた。苦しい毎日だった。

さらに十月、別の試験を受けた。司書教諭を受講した際、その存在を知ったのだが、放送大学の大学院を受験したのだ。やはり修士さえ取っていないようでは、ぼくの履歴になにがしかの疵がついていると思え、これは肩書きを気にしない谷口や君に笑われそうで、あきらかに人生観に反することではあるのだが、これだけはなにがなんでも過去のあたる時期に当然通過しておくべき道だった

んだと、悔恨を晴らす気分で自分を奮い立たせたのだった。

試験科目は数学と英語だった。なんとか合格した。この先、どんな生活が待ち受けているのか、波の向こうに何があるのか。今はまったく見えもせず、茫漠としている。ただ、楽しみな日々だけ言っておこう。

勤め先の学校では、生徒達を相手に、楽しくもあり、辛くもあり、苦しくもあり、ときには意欲の漲ることもあり、悄然と落ち込むこともあり、やめたいと思うこともあり、朝が来ればけろりと忘れて忙しさに自分を追い込むこともあり、人なつっこい彼ら彼女らを見てみると煤けた心が濾過され澄んでいくこともあり、我慢がならず怒りをぎゅゅと嘔み殺すこともあり、挙げ句には、所詮坦々たる日々、変わらない日々のくり返しだと、あきらめの境地に身をまかせせることもある。

五十七歳。昔ならそろそろ定年であろう。だのに今はまだ残す日々が五年と少々。それをただ坦々とやり過ごしてよいものか。そのときをただ待つだけの日々をおまえは自分に許すのか。

五十代は第二の青春。たしか神谷美恵子さんが言っていた。

折り返し点は過ぎた。今は第二の青春の出発点だ。

後悔ばかりの過去だったが、希望の風船の一つか二つは、まだ破れずに残っているだろう。それをポケットにまさぐって、そっと息を吹き入れてみよう。朽ちて裂ければそれもよし。膨らんでくれればなおよしだ。

希望とはこういうものだ。結果ではない、過程なのだ、そこに向かう意欲なのだ。

まあ気張るのはやめよう。気張っていいことは何もない。

庭のキンモクセイは、十月初旬に一度目が咲き、いい香りを放ち、そして散り、十月下旬、再び咲いた。さらに強く芳醇な香りをもたらしてくれ、今はそれも散りはじめている。

時はこうして移ろうのだ。昨日は、ここ数年お世話になってきた人が亡くなった。多くのことを教えていただいた。学んだことは数えきれない。時の無情を思わざるをえない。

毎日、日が沈むのが楽しみだ。日没直後の六時から七時、空に壮大なパノラマが展開される。西には巨大な金星の涙、東には燃える火星。競いあって燦然たる輝きを放っている。こんなぜいたくな宵はない。毎夕、ぼくを散歩にいざなう犬どもにも感謝だ。

■追憶という重たい荷物

(二〇〇五年十一月四日《金》)

おととい亡くなったT氏。彼の最晩年にあたる六、七年のおつきあいだった。わずかな歲月ではあったが、実に多くのことを学ばせていただいた。それまでまったく無縁だった演劇の世界を垣間見させてくださったのである。あるクリスマス・ページェントで端役をやらされた際、T氏が演出指導をしてくださった。演劇という虚構の世界のあやしげな魅力。そのほんの一端に触れることができた。これはT氏からいただいた大切な贈り物となった。

照明や音響の技術も教えられた。床へのコードの張り方から、マイクのセッティング、照明器具や音響装置の操作。さらにはマスコミ回り。何から何まですべてを一から教えられた。

今日の葬儀の弔辞を聞き、知らなかったT氏の若い日の活躍ぶりを知った。ぼくが接したT氏は、すでに人生に達観し、枯れた美を呈し始めていたころ。どろどろした闘いの場に身を置くT氏のこ

とは知らなかった。かつての姿を、今日初めて知った。

愛媛に劇団を立ち上げること、それがT氏の若き日の夢であった。いくつも脚本を書き、演出し、若者を指導し、全国レベルの大会で上位入賞を果たしたこともある。T氏の夢は苦闘の末に実ったのであった。

劇団は今も次世代に引き継がれているという。

今日はまた、別の一人が亡くなった。

「口だけ達者なお喋りおばあちゃんよ」

が口癖の、ぼくとよく長話をした女性だ。その人とのつきあひも五年間ほどだった。主流とは一線を画し、野にあって自由にものを言う、そんなおばあちゃんだった。それがぼくと気心の合う所であった。

いつもにこやかで、それでいて言うことはきつい。痛烈な社会批判。聞いていてこれくらい愉快なことはない。権力や金銭関係のしがらみから解き放たれているから、あらゆることに自由なのだ。憲法、靖国、イラク、……。滔々としゃべるおばあちゃんだった。そのすべてにぼくは同感できる。安心してうなずいていられる。若々しいおばあちゃんだった。

最後に話したのは四十日前。あれが最後になった。まだまだ元気に見えたのに、体はすっかりガンをむしばまれていた。自分でも

「私って、しゃべっていると元気になるのよね。意外に若く見えるでしょう。けどもうすっかりガンにやられているの。ガンにむしばまれたお喋りおばあちゃんよ」

そんなことを言っていた。

「まさかそれはないでしょう。冗談でしょう」

ぼくが言うと、にこっと笑って話題を変えた。

T氏もお喋りおばあちゃんも、最後は物言わず去っていった。残されたのは追憶という、なつかしくて重たい荷物だけ。それをさりげなくぼくの首に掛け、彼らはあつけらんかと遠い国に旅立っていった。

■城北散策

(二〇〇五年十一月六日《日》)

昨日は、ほかほかとあたたかな小春日和の中、松山・城北方面の史跡巡りに出かけた。生徒数名と案内の先生、それと付きそいの二人の教師(うち一人がぼく)。これが一行だ。

コース前半はかつての我が家から遠くない、上一万界隈の辺縁部だ。子供のころの遊び圏内でもあった。

日赤前で市電を降り、北に向かって歩く。左に愛媛大。右に日赤病院、さらにその北隣に東雲小学校。六年間通ったわが母校だ。西門からグラウンド、体育館、校舎を眺める。昔に戻ったよう。当時としては珍しい鉄筋三階建ての校舎が二棟、向かい合っている。四十数年前とちつとも変わっていない。

変わったのはぼくだ。そこで学び、泣き、笑い、遊び回った、かつてのぼくはもういない。すっかり歳を食ったぼくが校門から中を覗き込んでいる。校庭の向こうに、雲梯にぶら下がってサル渡

りをしているぼくがいそうに思えて、じっと見つめる。

道が突き当たったところに護国神社がある。何度も遊びに来たところだ。境内左手に、万葉苑がある。万葉集に出てくる草花が出典の歌とともに並んでいる。昭和四十二年にできたという。道理で子供時代の記憶にないはずだ。

万葉苑の奥まった所に、

「熟田津爾船乗世武登月待者潮毛加奈比沼今者許芸乞菜」

という額田王の歌碑がある。万葉集元暦校本（一一八四年）の文字をそのまま刻んだ歌碑のと。

「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかないぬ今は漕ぎ出でな」

と読む。母が好きで何度も口ずさんでいるのを聞くうちに、ぼくもまた暗唱できるまでになった歌だ。

六六一年、新羅との戦いで九州に向かった斉明天皇が、途中しばらく道後温泉に遊んだ。数日後、ふたたび船で出立しようとしたとき、額田王がこの歌を詠んだという。

護国神社の西にある一草庵は、漂泊の俳人・種田山頭火が晩年住んだ庵である。昭和十四年、五十七歳になった山頭火は、長い長い旅路の果てにここを終の住み処と定めたのだった。

「濁れる水のながれつゝ澄む」

という句碑が立っている。長い旅路の果てに、澄んだこの地に住むという山頭火の思いが背景にあるのだろうか。句としての動的なイメージがなんとも印象的で、味がある。

続いて、千秋寺など、いくつかのお寺の歌碑・句碑などを巡りつつ、情趣たつぷりの樋又川沿いを歩く。樋又川は思い出の多い川だ。このあたり、子供時代には南側一帯が田んぼだった。

晩春のある日曜日、友達数人と魚採りにやって来た。そのとき一人の友人が麦畑の畦に分け入った。何気なく川土手で眺めていたぼくの視界の先で、友人はすくと姿を消した。鬼にでもさらわれたのだろうかと思ううちに、頭が現れ、胴体が出てきた。そして突然、

「うわあーっ」

と激しく泣き出した。野壺に落ちたのだった。急いで樋又川で全身を洗う。

そんな思い出のある樋又川沿いの道。今でも独特の風情がある。

少し歩いて、山側に入るとロシア人墓地がある。墓地は見事に清掃されていた。塵一つない。いやそれどころか、砂粒一つない。なんだかよそよそしいほどだ。近くの小学生が定期的に掃除をしているという。

百年前、日露戦争の捕虜が松山に集められ、数千名のロシア兵が寺や公民館に収容された。自分たちの肉親を殺したかもしれない敵兵であるにもかかわらず、松山の人は、彼らを手厚くもてなした。捕虜というより、お客さんであった。収容中に病気や戦傷で死んだ兵士が葬られたのがこの墓である。一人一人に日本風の墓石が立てられている。後にロシア人墓地と呼ばれるようになった。

次は市電に乗って、阿沼美（あぬみ）神社と庚申庵へ。

庚申庵は、栗田樗堂（ちゅうどう）という江戸中期の松山の俳人が建てた庵だ。空襲からも地震からも火事からも不思議に守られ、当時の姿を今に残している。建てられたのは樗堂五十二歳の時（一八〇〇年）。荒れ果てていたのを松山市が数年前に解体・修理し、当時の姿を再現した。使われている木材はす

べて当時のままである。

かつて一茶が伊子を訪れた際、栗田樗堂の世話になり、阿沼美神社境内にあった二畳庵という樗堂の庵に滞在した。今はないその跡なども見学した。庚申庵は一茶がやって来てから数年後に建てられた庵ということだ。二畳庵よりはずいぶん立派。

樗堂たちが俳諧に興じた座敷でお茶をいただき、樗堂の視線で庭を眺めてお開きとなる。

二時間余りの散策だった。付きそいのぼくには実に興味深い半日となったが、一緒に歩いた高校生にとっては、はたしてどうだったのか。大した感動顔もせず、ただぞろぞろと疲れ切った足取りで、ついて歩いた彼ら彼女ら。こんな旧跡巡りを計画したのは失敗だったかなと、後悔の念なきにしもあらずの半日ではあった。

■職人芸

(二〇〇五年十一月十二日《土》)

鍛冶師・白鷹幸伯さんの話を聞く。白鷹さんは、「千年の釘」で、薬師寺の修復・再興に貢献した人だ。再興した建物が次に解体修理されるのは千年後だという。その日まで錆びずに残る釘、それが「千年の釘」だ。

この業績によって、吉川英治文化賞や建築学会文化賞を受賞した。

伺えば伺うほど、白鷹さんがただの鍛冶師でないことが見えてくる。情熱的な職人であり、鉄の研究者であり、古代史のプロであり、古代の風を腕と肌で感じとることのできる超越人であり、文明批評家であり、ロマンの人であり、平和を愛する人であり、……。

白鷹さんが職人の腕を発揮する場合は、学者の机上の計算からは不可能としか見えない世界である。錆びない、衝撃で折れない、堅い木材に打ち込んでも変形しない、中心軸に狂いが無い、これらすべてクリアする釘を試行錯誤で作りに上げるのに二十年を要した。素人目には、単純に硬ければよいのではと思われるが、硬すぎると衝撃でポキッと折れる。粘りがありすぎると変形する。二律背反の間隙を縫う綱渡りのような職人芸。それに加えて、決して錆びない工夫。

話の最後に、時代物の木のふいごを見せてくれた。

「これは鍛冶師の命なんです。火事になれば真っ先に抱えて逃げないといけない。だから、両手で抱えられる大きさに作られている」

見かけはただの木箱だ。

「これが、改良に改良を重ねた末に最後に行き着いた最高傑作なんです。これ以上のものは作れない。箱は一見立方体に見えるでしょう。ところが、部位ごとに微妙に幅が違う。それが使うときの力の入れように影響する。使った人でないと何を言ってるのかわからないでしょうが、これは世界に二つとない最高のふいごです」

「技術は計算ではない。職人芸は計算をはるかにしのぐのです」



生徒達と一緒に話を伺いながら、目から鱗が落ちる思いがしたのだった。

■根岸の子規庵

(二〇〇五年十一月十四日《月》)

昨日は幕張の放送大学で大学院の面接。

二人の教官が面接官になっていた。一人はベテラン、一人は若い。先日の筆記試験の答案を見て、「数学では少し減点されていますね。だけど英語はほぼ満点です」

とのこと。数学の減点は予想していた。論理的に書くべきところを、少しばかりいい加減に書いた。失敗だったなど、試験室を出るとき反省したのだった。

どうやら面接官の二人が指導教官になるようだ。月に一度ゼミをやっているので、ぜひ参加してくださいとのこと。すでに合格が前提だ。松山からは遠いですね、とも言われたが、可能な限り参加したいと思う。

本当を言えば、放送大学の特性上、指導の大方はリモートで行われるものとはかり思っていた。月に一度のゼミ出席が、義務とまでは言わないものの、半強制であることを知って、きつい指導教官に当たったものよと、一瞬、不運を嘆いたのだった。

しかし、この不運はきつと大きな宝をもたらしてくれるはず。楽天的にそうとらえれば、先々への期待もふくらんでくる。きついけれども、人生の新しい道が開けてきそうな気にもなってくる。帰り、最終便に少し間があったので、根岸の子規庵を訪れた。鶯谷で降りれば近かったようだが、それを知らず、上野から歩く。二、三十分歩くうちに、ピンク色のあやしげな看板が立ち並ぶ一角が現れ、そこに子規庵が古色蒼然と鎮座していた。狭い路地が曲がりくねった奥だ。

着いたのは三時四十分。受付の女性に聞くと、四時に閉めますとのこと。あぶない、あぶない。門前払いを食らう寸前だった。

『病床六尺』などで、子規の家はぼくの頭の中に、見てきたようにイメージされていた。子規が縁側に座っている写真とか、子規の死後、母親や妹律さんが縁側で庭を眺めている写真とか、そんなのもたびたび目にしていた。

だけど、やはり百聞は一見にしかずだ。この部屋で病床の子規が物を食い、眠り、仰向けで新聞を読み、片肘をついてものを書き、庭を眺めたかと思うと、何とも言えない郷愁のようなものが見上げてくる。目がうるむ。

庭の売店で本と絵はがきを買い、裏口から出る。わずか二十分の子規との邂逅であった。

■人間五十年も生きていれば

(二〇〇五年十一月二十一日《月》)

毎年この季節、つまり十一月下旬になると、愛媛県高校総合文化祭囲碁・将棋大会がある。会場は県民文化会館。子供のころの思い出が詰まった農事試験場の跡地に建っている。

不思議なことに、この大会の日が雨になった記憶がない。澄みきった青空のもと、秋色に染まったケヤキと銀杏の葉っぱが、ときにはすでに散りはじめ、ときにはたつぷりと枝々を埋め尽くして、今年もよく来たねと、迎えてくれる。ああ、また一年が巡ってきたかと、二階ロビーの大きなガラ

ス窓から、大樹たちに向き合うのだ。

おとといがその日であった。一年の時の流れを一瞬に濃縮した気分で、窓から外を眺め渡す。すべては同じ。一年前も、三年前も、十年前も、二十年前も……。

樹々が色づき、空は青く晴れ、高校生があふれて、ぼくは審判長などと呼ばれて囲碁会場の戦いを見て歩く。すべてが十年一日、いや二十年一日のごとくした。

変わったのは人。高校文化連盟囲碁部会で長く苦楽をともししてきた各校の顧問の先生が、定年といういやおうのない力によって、一人抜け、二人抜けして、今やなじみの人が一人もいなくなった。仲間意識の強い集団だった。気がつくとき現役で残っているのはぼくただ一人。人はすっかり一新されて、ぼくが最ベテランになってしまった。そのぼくが抜ける日も遠くない。

窓に映る自分を見つめる。紛れようなく老いてきた。内面にたぎる意欲は、まだ未来に向かう火を絶やしてはいないが、外から見れば、なすことをすっかり終えた老人だ。

「人間五十年も生きていれば、誰だって自分の顔に満足と自信めいたものを感じるようななるものか」

いつだったか、誰かがそんなことを言っていた。戦い終えた安堵の満足というやつだろうか。そう言える人はしあわせだ。だが、ぼくには信じられない。とても信じられない。いまだにぼくは、鏡に映る自分の顔に満足を覚えたことがない。嫌悪さえ覚える。なすべきことをなしえないでここまで来てしまった後悔が、ぼくの顔から満足を消している。

ああ、そんなぼくなのに、今年からついに囲碁部会の最年長者だ。学校に囲碁部ができた二十年前、

「よろしくお願いします」

と新米顧問として挨拶した、あの日が昨日のことのように思い出される。

歳を食ったものだ。

ぼくは特段なにも教えないのに、生徒達は入れ替わり立ち替わり、毎年よく頑張ってくれる。教育というのは、教師が何かをなして成立するものではないと、近ごろ強く思うようになってきた。心の支えになつてやりさえすれば、教えなくても彼らは伸びる。

尻をたたいて無理やり引っ張るのが教育ではない。無理やり引き伸ばしたゴムはやがてプチって切れる。教師にとっては、無理やり引き伸ばすことほど楽なことはない。繊細な心のやりとりよりも、仕事ははるかに一方的だし、効果が容易に見えもする。やった気になる。

だが、それを教育だと見誤ると大ごとになる。教師も生徒も、力ある者だけが傲慢になる。弱者が隅に追いやられる。

教育は、各人の伸びる力を見守り支えるだけでよい。そう、支えになればよいのだ。それが教師の真の力量だ。そのためのあうんの呼吸こそが教育だろう。難しいけど……。

これに気づくのに、ぼくはいつたい何年かかったことか。

■夜明けの風

(二〇〇五年十一月三十日《水》)

ローズマリー・サトクリフの『夜明けの風』を読んだ。日本で言えば、ちょうど推古天皇、聖徳

太子といった時代（六世紀末）のブリテンの話だ。衰退したローマ帝国が様々な遺跡を残してブリテンから引き上げ、あとにはローマ化されたケルトが残された。そこへゲルマン人が侵入してきてケルトを滅ぼし、さらには残存ケルトと和睦する。そんな時代である。

ローズマリー・サトクリフのケルト物語としては、『ケルトの白馬』、『ケルトとローマの息子』に次ぐ、ぼくにとっては三作目となる。

主人公はいずれもケルトの少年だ。滅び行く宿命を背負われた民、そして少年。本来なら“少年”には未来への希望のイメージが付きまとうはず。ところが彼はいつでも滅びの宿命とともにある。ローズマリー・サトクリフが描くケルト物語には共通して、滅びと希望、生と死という、相反する二様の風が吹き流れている。

心理描写や情景描写に字数を使わず、さらっとした筆致でストーリーが展開されていく。それもローズマリー・サトクリフの魅力の一つだ。その心棒には先の二様の風が吹いている。この心棒が重低音となって、物語は軽薄にならず進行していく。

また長編にもかかわらず、巧妙な仕掛けが最後まで維持されている。うまいものだと思う。

「おまえさんも、わしくらいの年になれば、どんなこともそう大した問題ではないとわかるだろう。人生とは若者には酷なものだが、年よりにはやさしいのだよ。もつとも、若いときには、常に希望があるがな。いつか、何かが起きるかもしれない、ある日、小さな風が吹くかもしれないという希望が……」

ぼくはこの物語で言えば十分な年よりだ。だけど、なかなかこうは達観できない。わずかな風にも舞い上がりかねない存在だ。すっかり干からびたシャボン玉の割れカスを、いつまでも後生大事にポケットに忍ばせているぼくなのだから。

■ありがとう、金星

(二〇〇五年十二月十三日 《火》)

金星は九日、最大光度を迎えた。残念ながらその日、松山は曇り空。きらめく金星は姿を見せなかった。しかし昨日と一昨日、雲の隙間から姿を現した。まるで夕空に灯る電灯のように。

巨大で神々しい光が空に浮かんでいる。

見つめていると、すうっと光が減衰していくことがある。手前を雲が流れるのだ。ほんの一、二秒、白熱灯が切れたときのような減衰の過渡期を経て、金星は姿を隠す。しばらくは暗黒だ。やがて雲が去り、先とは逆の静かな過渡現象を経て、巨大な金星が姿を現す。だがこれも長くは続かず、次の雲がやってくる。こうしたことを何度もくり返すうちに、ついには西に沈んでしまう。

じっと見上げていると、宙に浮く金星が親しい友に見えてくる。実在があまりに生々しくて、リアルである。

「ああ、そこにいる。そこにいるんだ。君は今そこにいる」

つつい独り言を言って話しかけてしまう。次々に浮かぶ言葉は、何を言っているのかわからない。

「ありがとう、ありがとう」

そんな感謝の思いを吐いているのはわかる。ひたすら太陽を巡って止まることのない金星のけな

げな姿。それがいつもぼくを楽しませてくれることに対して、ただ「ありがとう」と感謝するのみ。金星はいま、日を追って太陽に近づいている。近づくとつれ、やせ細り、今の三日月状からやがては新月状になる。そのとき、金星は日没後のほんの一瞬、姿を見せるだけとなる。そして内合のときを迎える。もはや姿はない。それが一月中旬。

それまでしばらく、夕空に巨大な金星を楽しむことができる。

■涙とともに悔いる人生

(二〇〇六年一月十四日《土》)

冬休みなんて、すんでしまえばあつという間だ。しかも今回は例年より短く、正味二週間ほどだった。それでも「なんと贅沢な」と思われそうだが、教師というのはストレスの多い仕事だ。心身をリフレッシュするには、これでは少々短すぎる。

しかも、休みの始めは将棋の四国大会があった。県代表になった三人の生徒を連れて坂出まで出かけた。四国大会は十二月二十四日と二十五日。世間の暦ではクリスマスのはず。こんな日に大会を組むなんて信じられない。

しかも、勝負をするのは自分ではない。野球とかサッカーの監督ならば、試合途中で指示を出したり、励ましたりでき、一緒に戦っている感がある。だが、将棋や囲碁ではそれは御法度。じつと見つめるしかない。この「じつと見つめる」ことほど疲れる仕事はないのである。

ふと思った。囲碁や将棋の大会に、ぼくはこれまでいったい何度生徒を引率したのだろうと。ざっと数えてみると、県大会がさまざま合わせて八十回ほど、全国大会が三十回ほど。よくぞやってきたもの。

全国大会では、あちこち旅行ができていいではないかという人もいる。だが、これはあくまで生徒の引率だ。自分の旅行ではない。楽しみよりも気疲れの方がはるかに大きい。もちろん、ちょっとした空き時間に付近を歩き回ることにはある。だけど、それを旅行とは呼べない。

自分の試合なら、かえって楽だが、生徒たちの盤側で、(たいていは立ったまま)勝負を見つめる仕事には、相当の体力がいる。体力に加えて、精神的な忍耐力も。そろそろこういう仕事の限界に近づいてきたなと痛感するこのごろである。

正月も、はや二週間が過ぎた。この歳になると、正月をありがたく思う気持ちがどんどん薄らいでいく。大した感動も湧かなくなってくる。その上、今年は新年を迎えた晴れ晴れしさを味わうことなく、いつのまにやら年の瀬から新年に移っていた。

なぜだろう。これを老化というのだろうか。

そう思って振り返ってみると、ずっと本を読んでいたことに気がついた。年越しも、新年もなく、ずっと本を読んでいた。

何を読んだかというと、ローラ・インガルス原書のシリーズだった。『LITTLE HOUSE IN THE BIG WOODS』とか『LITTLE HOUSE ON THE PRAIRIE』とか『THE FIRST FOUR YEARS』とか、いわゆる「小さな家シリーズ」である。

読んでいくと、達成感も手伝って、なかなか楽しい。彼女の作品は全部で九作ある。日本語訳は全部読んでいるのだが、原書はこれから。楽しみが待っている。

休みが終わると途端に忙しくなった。試験の採点、休み中の宿題のチェック、それにもちろん授業。息つく間もなく働いて、やっと今日、目の前にのしかかっていた当座の重荷から解放された。

こんな繰り返しで歳をとるのはいやだなあと、つくづく思ったこの新春、学生時代の友人からさまざまな年賀状が届いた。見ると、「学長になった」とか「学会の会長になった」とか「長年の研究で賞をもらった」とか。

たしかにそういう歳なのだ。ジェラシーを感じないではいられない。

ぼくとはもう住む世界が隔絶してしまった彼ら。かつては下宿で夜通し人生を語り合った仲間だ。その連中が、今こうして実りの秋を迎えている。その間ぼくは何をしていたのだ。ぼんやり過ごしてきた人生を涙とともに悔いがないわけではない。

■新車に乗って

(二〇〇六年一月二十六日《木》)

昨夜、古巣に戻った懐かしきで、市民コンサートを聴きに行った。数年前までは、職場に市民コンサートグループがあった。年に六回のコンサートを欠かさず聴きに行った。ところが時は無情だ。避けようのない高齢化の波がグループを襲い、一人、また一人と定年で去っていった。気づいたときにはグループの維持すら困難な人数になっていた。

「そろそろ潮時だな」

そう言ってグループを解散したのが三、四年前。以来、市民コンサートからは足が遠のいていた。昨日、知り合いから電話があって、

「行くのなら貸してあげますよ」

とのこと。急用ができて行けなくなったから、会員手帳を貸してあげるというのだ。一も二もなく飛びついた。

こぢんまりしたコンサートだったが、なかなかよかった。渡辺玲子のバイオリンと江口玲のピアノ。二人ともぼくにとっては初めての人。普段はアメリカで活動しているらしい。

バイオリンは力強く、繊細で、気持ちよく響く。ピアノの調子もよい。

プーランクのバイオリン・ソナタ、ファリアのスペイン民謡組曲、バルトークのラプソディー二番、フランクのバイオリン・ソナタ。これがプログラムの全曲。

緊張感を維持して聴き入った。終わると、ふっと夢から醒めたように解き放たれる。すばらしかった。

昨日は、それに加えて、お初のものがあった。車を買換え、届いたばかりの新車を初めて運転して出かけたのがコンサート会場だったのである。燃費の悪い大きな車をやめて、小型車に買換えた。犬をたくさん飼っているの、彼らを連れてどこかに行くのに都合がよからうと、何年前か、大きなワゴン車にしてみたのだが、結局その大きさを活用したのはほんの数回。たいていは一人で乗るだけだ。ガソリンばかり食ってもつたいない。その上クッションが硬くて乗り心地が悪い。

それでも十萬キロほどは走った。そろそろ買換えても車は文句を言わないだろう。でかい車とおさらばだ。

そう思って車を見に行った先日、店先に並んでいた小型の普通車に一発で飛びついた。これぞ望

んでいた車、そんなテレバシーを感じた。他の車を見ることもせず、較べてみることにしないで、即、契約してしまった。だいたいいつもこうなのだ。

■シリウス

(二〇〇六年一月二十九日《日》)

星を見ていると、なぜか心がいつも落ち着く。星は誰のものでもない。見る人のものだ。見る人の気分にしたがい、見る人の内面のありようを映してきらめいている。

いまは夕空から金星が消えている。火星は小さくなったがまだ健在だ。

秋が深まった頃、日が落ちてから東の空を眺めると、オリオンが地平に這いつくばっていた。カニが空にへばりついている感じ。落ちないように必死に踏ん張っている。ぞっとするような実在感だ。

一月末の今、オリオンは東の空にすでに高い。その三つ星を少し伸ばした先に、キラキラ輝く星がある。シリウスだ。全天で最も明るい恒星だ。金星が消えたいま、ぼくの散歩の楽しみは、シリウスである。

ああ今日もいるな。キラキラとまたたきながらそこにいる。昇ってきたばかりのみずみずしきでそこにいる。空を見上げて、その存在をたしかめたとき、ウインクしながらシリウスは必ずぼくを見つけてくれる。子供のようにぼくはほっとする。

シリウスよ、君はいつたい何人の人間を見つけてきたことだろう。君を見上げて苦悩を癒やした人は何人いるだろう。

長女の結婚相手の父親と先日初めて会った。

「娘さんをいただくことになって」

開口一番向こうさんは言った。なに？ いただく？ 驚いた。見解の相違だ。差し上げるとは思ってもいなかったし、言ったこともない。

まあいいさ、なるようにしか事は運ばないもの。世間の常識ではこれを差し上げると言うらしい。

こんなことがあった晩も、シリウスはやはり煌々ときらめいていた。小さな苦悩をシリウスにぶつけてみた。シリウスは何も言わず、永遠のウインクを返してきた。

まあ、どうってことないよ。そんな苦悩は、どうせ薄れて消えて、当たり前前の日常になっていくのさ。シリウスは無言でそう言っていた。たしかにそうだね。シリウスと目を見合わせた。

■よしもとばななのいよ

(二〇〇六年二月五日《日》)

ここ二週間ばかり、よしもとばなな中毒になっている。毎日一冊、いや二冊のことも。読みだすとやめられない。かっぱえびせん状態だ。勤め先の図書館にあるよしもとばななは全部終えてしまった。まだ書架にも並んでいない購入したばかりのものまで、今日は、生徒らには悪いけど、先に読ませてもらった。

だいたい私は流行を追うことを好まない。生理的に避けてきたとさえ言える。これまでの読書生活振り返ると、たいていはカビが生えたような古典ばかりを読んできたように思う。その方が安

心だから。

『電車男』みたいに、大騒ぎをして、われ先に皆が飛びつく本なんて、私はちょっと手にする気になれない。

読んでおかないと話題に乗れない、取り残される。そんな気分でみんな飛びつくのだろう。話題の本、はやりの本というのは、集団ヒステリーだ。もっといえば精神的ファシズムだ。調子を合わせない人を非国民呼ばわりしておとしめる。自らが下す良し悪しの判断などはそこにはない。あるのは、ただ心の安定、安全だ。皆に同調して催眠に引き込まれることが、なぜだかわからないが、心の安堵をもたらすのである。そうして初めて、安心して一緒にいられるようになるのである。

我を張って対極にいるのは愚かな者だ。そんな気にさえなってくる。

ならば、どうして私は流行ものを頑なに手にしなかったのだろう。心の底には、集団的催眠には乗らないぞという気位のようなものがあつたと思う。よしもとばななが「TUGUMI」の中で書いている、「気が弱く、それでいて気位だけは高く」という主人公の父親程度の、ほとんど無価値な気位なのだが、私はそれを「自由」という言葉と同義語だと信じ込んで、過去の半生の背骨にして生きてきたように思う。

よしもとばななは、二十年ほど前だつたらうか、始めて一気に人気作家となり、どんどん売れ、どんどん書き始めた。書けば書くだけ売れる作家になった。私の気位からすれば、これは当然避けるべき対象。そして、事実避けてきた。

どうして今ごろ、突然よしもとばななを手にしたのだろう。きっかけは綿矢りさだつた。綿矢りさなど、私の気位からすれば、よしもとばなな以上に、真っ先に拒絶すべき対象だつた。実際、十七歳で衝撃的にデビューして以来の四、五年間、拒絶し続けてきた。だが、あれだけ評判なのだからちょっとだけ覗いてみようかと、まるで不倫をするような興味で読んでみたのが「インストール」と「You can keep it.」だつた。

嘩然とした。これはすごい。たしかに高い評価を受けるだけのことはある。天才ではないかとさえ思った。ポツと出のアイドルとは明らかに違う。そして、巻末の解説を読むと、よしもとばななの比較めいたことが書かれていた。これではよしもとばななを読まないわけにはいかないではないか。

こうして、ここ二週間、よしもとばなな潰けになってしまったのだった。

綿矢りさにはまだ天才が実証されるだけの実績がない。今後を見ないとわからない。よしもとばななはもう立派に天才だ。私の読後感である。

■それぞれに真実

(二〇〇六年二月十二日《日》)

薄曇りの昨日、いくら探してもカリンの新芽を見つけられなかった。今朝、ぱあーっと明るい朝日に照らされると、なんとここかしこに芽が吹き出している。落ちずに残っていた一つの果実も、きらきら輝く朝日を受けて、いま熟したばかりと言わんばかりに、つやつやとした真っ黄色な光沢を放っている。シミだらけの老人の顔と思っていたのは幻視にすぎなかったのか。

包みこむ空気、飛び交う光、わずかな気温や湿度の違いで、ぼくらは異なる世界を見てしまう。

その瞬間／＼、ぼくらはそれを真実だと信じ、そのみが世界の正しい姿だと、疑いもせず受け入れる。

真実はぼくらの前ではまぼろしだ。感性に合わせて変幻自在、感覚が向かうところへ、どのようにも姿を変える。

真実とは、ぼくらが作るぼくらの信念、安心の土台、たぶんそんなものだろう。

瞬間／＼のぼくらのありようがそれによって裏づけられるなら、それは実在の土台、すなわち真実となる。ぼくらのありようにそぐわなければ、それはぼくらにとって、真実とはならない。明日の真実とはなりえても、今日の真実とはなりえない。

今朝、カリンを前にして、そんなことを思った。昨日のカリンは、あれはたしかに昨日の真実だった。そして今朝のカリンは今朝の真実。それぞれに真実。

ぼくが見ている世界が、そのまま見たままの姿でそこに実在すると、いったい誰に保証できよう。煌々と生命体のように輝いている銀河。宇宙にはそういう銀河が数千万個あるという。ぼくらは一つの銀河の中にいる。銀河の中の太陽という一つの恒星の周りを回っている。そのような恒星が、この銀河には、これまた数千万個あるという。だのにぼくらの目には、この銀河はちっとも煌々たる光を放っていない。煌々と輝く遠方の銀河のように輝いていない。銀河の中にいるという事実さえ見えないくらいに、すかさずかの真空が広がるだけだ。まばらに小さく星が瞬き、隣の星にさえ行き着くことができない。

同じ銀河が、どうしてこんなにも違って見えるのだろうか。

今朝のカリンをぼくは限りなく愛おしく感じた。季節の変化、空気の変化を敏感にありのままに受けとって、ぶつとと新芽を膨らませている。これはぼくの真実だ。

「そう、あなたの真実は、あなたから見たぼくらの土台なんだよ。それはあなたの土台でもあるんだよ」

カリンはぼくにそう語っている。

■ホログラフィック理論

(二〇〇六年二月十九日《日》)

昨日、猛烈な寒気の中、校内マラソン大会があった。走る生徒たちに狂ったようにカメラを向けながら、ぐぐつと感傷が走った。

そう言えば数年前までぼくも毎日走ってたんだよな。二十数年走り続けたんだよなあ。

走るきっかけになったあの日を思い出す。あの日から、ぼくはジョギング漬けになったのだ。二十数年走り続けることになったのだ。

東京の府中でN社に勤めていた二十代半ばのことである。

仕事が終わって、気の合う同期の一人とロッカールームで帰り支度をしていた。作業着を脱ぎ、並んで一緒に靴下を履いた(帰り支度でなぜ靴下を履く必要があったのかは思い出せない)。二人とも立ったまま、同じ姿勢で靴下を履いた。そのときだ。同時にぐらつときた。「あれれれっ」と言いながら、重心が崩れてびよんびよん飛び跳ねた。ロッカーの扉にぶつかり、尻餅をついた。

二人とも声を上げて笑った。

「立ったままで靴下が履けなくなったらもう中年だよなあ」

ぼくは言った。

「そうだよな」

彼も言った。その言葉が、今もこだまのように頭の中を駆けめぐっている。

中年が何なのか、いつ来るのか、まったく予感も想像もできなかったころだ。なぜ突然、中年などという言葉が出たのかわからない。はるか遠い先に、縹雲のように鈍い光を放って浮かんでいる何かを感じとったのかもしれない。

その瞬間だった、一つの決意がぼくの背中を押したのである。よし走ろうと。

帰り道、スポーツ店でジョギングシューズとウエアを買った。翌日会社を持って行き、昼休みに走ってみた。会社をぐるっと周回する道が二キロだった。毎日大勢走っていることは知っていた。その日からぼくも仲間になった。ベテラン猛者たちは、昼のわずかな時間に、軽々と二、三周はする。

「休日には必ず三十キロ走ることにしてるんだ」

そんな言葉も聞こえてきた。

ぼくは一周でへとへとだった。走り終えると、ハハハ、ゼーゼー。

翌朝、足がパンパンに張っていた。筋肉だか筋だかわからないが、じんじんして痛くてたまらない。もうやめようかとさえ思った。

だが、あの痛みこそがジョギング中毒の引き金だった。

「たった二キロでこんなことに？」

新発見だった。好奇心と征服欲が津波のように押し寄せてきた。

と書きながら、最近読んだ「ホログラフィック理論」とどこか通じるものがあるのを感じている。

征服欲は内から押し寄せてきて外に至る。津波は外から押し寄せて、内に衝撃をもたらす。働きも現れも異なるが、実は両者は一つなのかもしれない。

ホログラフィック理論は、空間内部のできごとが、その周縁の境界面上で起こるできごとと同値だと主張する。次元を一つ減らした境界面上の物理学、たとえば重力を仮定しない物理学。それによって、空間内部の重力が説明されるという。現代の物理学では説明困難な重力が、ホログラフィック理論で説明できるかもしれないというのだ。ホログラフィック理論が正しいとすると、重力は幻、つまり境界面上で起こっている現象に対する影にすぎないのかもしれない(理論のイメージをぼくかなりの解釈で描いたにすぎないから、たぶんかなり不正確)。

まあそれはともかくも、二キロを楽に走りたいという内から湧き出した好奇心と征服欲は、ジョギング中毒という後々の生活空間(境界空間)の引き金になったのであった。引き金というよりも、両者はそもそも同じものであったのだろうか。

■結納の儀

(二〇〇六年三月一日《水》)

先日、結納の儀なるものを初体験した。我が家の座敷が舞台である。

結納なんて単なる一つの通過儀礼。形式なんてどうでもよいと、私は勝手に思いこんでいた。手

順やらしゃべる言葉やらがこと細かにマニュアル化されていていようとは、想像もしていなかった。家内がデパートに受け書用ののし袋を買いに行ったとき、そのマニュアルめいた書き付けをもらってきた。見て驚いた。

あらゆる所作、あらゆる言葉が、まるで芝居の台本のようにこと細かく書き記されている。

「お父さん、ちゃんと覚えてよ」

家内は言うが、書き付けには相手のセリフも載っている。そもそも台本は出演者全員に共通のものでないという意味がない。相手がこの台本を使っていなかったらどうなるのだ。

それを思うと、馬鹿らしくてとても覚える気にならなかった。たとえ覚えたとしても、

「幾久しくお受けいたします」

などと私の口から吐き出せというのは、どだい無理。その場に臨めば、それらしい日常用語で対応しようと腹を決めた。

いよいよそのときが来た。相手の両親と娘のボーイフレンドがやってくる。こちらも三人で出迎える。

座敷に通して、向き合つて座る。最初に口火を切るのは男の側の父親だとマニュアルにはあった。向こうもそれは知っているようで、一瞬の間を置いて向こうから言葉が出てきた。そしてハツとした。

何やら覚えのある言葉だ。そう、まさしく家内がもらってきたマニュアルそのものではないか。向こうはちゃんとセリフを覚えてきたのだ。そして臆することなく、その堅苦しいセリフを吐き出してくる。

これには参った。対する言葉を私は覚えていないのだ。

いよいよ私の番が来る。向こうはびたりと言葉を切つて、私の言葉を待った。空気が張りつめた。正直言うと、私も多少はセリフを覚えていた。ここで言うべき言葉も頭に浮かんではいた。しかし、形式に形式で応じることに私は明らかに抵抗感を覚えた。向こうがぎくばらんに来たならば、こちらは形式で返したかもしれない。向こうが形式で来たのだ。

「ていねいな結納の品、ありがとうございます」

くらいなことは言った。しかし、

「幾久しく……」

とはとても言えなかった。あえて言わなかった。横で家内が「幾久しくよ」と小声で言うが、「お受けします。これからもよろしく願います」

とかなんとか、ぐだぐだと言う。形式を踏めば短い、はずせば長くなる。

こちらがマニュアルのセリフをはずしてしまったものだから、向こうも次のセリフを言い出すタイミングがつかめない。私は言うべきことを言ったつもりで黙っているが、向こうもまた黙ったまままだ。

娘も言うべきところで言葉が出ない。

とうとう、

「まあ、ぎくばらんにいきましよう」

と台本無視の気楽な会話に移つて、受け書を渡す。目録を改めるといふ所作は、わざと飛ばしてしまつた。目録なんて単なる形式。それを見て、

「○△が足りませんね」
などという人はどこにもいない。改めたって意味がない。

後で思い返すと、少々後味の悪さが残らないでもなかった。形式に形式で返して、ちっとも悪くはなかったのだ。でも、これでよかったのだと、自分で自分に言い聞かせている。こういう家庭だと知ってもらった方がいい。「こういう」で「どういう？」と聞かれると、答えようもないが、まあ要はフリーな家ということ。その程度。

そうそう、結納がいよいよ明日だという前日、厳密には当日の午前零時を過ぎてから、私はせりふを覚える代わりに、一人で雛人形を飾っていた。娘が子供の頃には毎年飾っていたのに、ここ何年もしまい込んだままだった。それを納戸から引っ張り出して飾った。飾りつけると人の背丈ほどにもなる七段飾りだ。家内も娘も翌日の準備に夢中になっていて、私にかまったりはしない。私は一人ひっそり飾ったのだった。

段を組み立て、緋毛氈を敷き、人形を一体一体箱から出しては据えつけていく。ままごとのような小道具もセットする。なかなかの手間だ。丸々一時間はかかっただろう。もったかもしれない。いいひとときだった。長く会わないでいて顔つきさえ忘れかけていた昔の恋人に出会ったような、胸の高鳴りを覚えるひとときであった。

雛壇と共に写ったかつての自分の写真を見つめ、あの頃は若かったなとつくづく思った。時は移ろい、はや娘は結婚なのか。

■陰影のない世界

(二〇〇六年三月十八日《土》)

目覚めると、雨音がする。二階から外を見る。歩道のへこみに水たまりができ、雨粒がピチピチ地面を打っている。うっとうしい朝だ。空は白濁し、目の前の山が霞んですっかり見えなくなっている。

車が走ると、ジャジャジャーと無機質な音がする。次々と車がやって来るたび、テープを引きはがすような、堪えがたいジャージャーが近づいては去っていく。それが耳の底を数秒間占有する。残響が消えないうちに、また次のジャージャーがやってくる。

こんな音は百年昔の日本にはなかったものだ。屋根や木々を打つ雨音ならいい。雑音ではあっても、すがすがしい。

車という人工物が、アスファルト道という人工の構造物の上に置き残していく雑音は、耳を引っ掻くだけだ。アスファルトの適度な堅さとざらつきと、そこに薄く張った水と、それを蹴散らかすタイヤの粘着構造とが作る不協和音。ジャジャジャーという音はかなりのデシベルだ。

雨の日の空間を占有するこの音。絶え間ない刺激にさらされると、人の感性は次第に慣らされていき、刺激を刺激と感じなくなる。それを無意識の彼方に追いやってしまう。それが恐い。

音にかぎらない。電磁波にも言える。百年前、空間を満たす電磁波は光以外になかったはずだ。赤外線から紫外線まで、おしなべて光だ。もちろん遠い宇宙起源の高エネルギー放射や地球内部から発せられるかすかな放射線は、今も昔も変わらず我々の周囲に満ちている。だが、せいぜいそこまでだ。

今は違う。テレビ、ラジオ、ケータイ、はては、衛星が発するGPS電波まで。人工の電磁波が空間を縦横無尽に飛び交っている。人にはそれを感じとる感覚器官が備わっていないから、どつぶりと電磁波に漬かっている、雑音とも、有害とも、気になるとも、何とも感じはしない。平然としていられる。

考えれば、恐いことだ。人工の電波も、波であり、同時にエネルギーをもった粒子だ。波長が長いから、粒子は低エネルギーにはちがいない。有害度は無視できるほどだろう。紫外線のようなことはない。だけどやっぱり心配ではある。

居ながらにしてリアルタイムに、世界中の誰とでも連絡しあえる、素晴らしい文明の利器を我々は手に入れた。インターネットという媒介がこのようなことを可能にしたのは、ここまだ数年のこと。だのに、我々はこれを抜きにはもう何も語れない。

何十年、何百年もこの環境の中で生きてきたような顔で、それらを利用している。

そのために犠牲にしてきたことも、おそらく少なからずあるだろう。百年前の人たちが当たり前に享受していた何かを、私たちは失っているのだろう。

たとえば、澄んだ空気、汚濁のない水、山の緑、低エネルギーの静かな空間。

もつと言えば、知ることへの努力、ワクワク感、知り得たときの喜び。

今はインターネットという無尽蔵の情報源によって、知するための労力を払わなくても、何でも知り得てしまう。知識のありがたさを忘れてしまう。感動がない。だから、知ったことが身に沁まない。いつでも無尽蔵の情報を手にできるから、身体で覚える必要がないのである。私もきっとその一人だ。

松原正毅氏（元国立民族学博物館長）の『青蔵紀行』に次のような文章がある。

青蔵高原には、東南部などのごく一部をのぞいて樹木がまったくない。その大部分を草原がしめる。これを、高寒草原とよんでいる。

樹木のない世界は、陰影をなくした世界に似ている。このなかでは、むきだしの日射に、さらさらされている感じがする。陰影のない世界では、すべてのものが透明感をおびてみえる。

樹木がいかに風景に陰影感をあたえているか、あらためて実感させられる。

私たちの暮らしは、インターネットによってすっかり透明になった。すかさずと誰からも透けて見えるし、誰をも透かして見ることができると。そんな裸の王様のような人間にいたい誰がした。それが便利だからと、自らそれを選んだのである。知らないうち選ばされていたのである。

その結果、たわわに実っていた木の実や緑の葉っぱを、私たちは捨ててしまった。陰影のない世界に私たちは生きようとしている。ひとりひとりが、実体として影をなさない世界、バーチャルの中に実体が埋め込まれてしまった世界に……。

■ユルックのいと

(二〇〇六年三月二十八日《火》)

今、松原正毅氏（元国立民族学博物館長）の著書に漬かっている。机に六冊積まれている。どれもトルコや中国奥地の遊牧生活を綴ったフィールドワーク記録だ。私にとっては全く未知の世界。興味津々、一緒に旅をしている。四冊を読んだ。あと二冊だ。

となったところで小休止。またも、よしもとばなの世界に寄り道した。一月から二月にかけて、すっかりよしもとばなな潰けになっていった私は、いったい何冊読んだかわからない。だがまだまだ未読作品は多い。昨日、比較的初期の代表作である『哀しい予感』と『N・P』を読んだ。本人はあとがきで「力不足」と言っているが、私の目には、くり出される言葉の一片一片がまぶしすぎて、正視できない。

そして今日から、松原ワールドに戻った。『遊牧民の肖像』。どうやらトルコの遊牧民の話らしい。松原氏が一連の著書を書いたのは一九七〇年代末から一九八〇年代末。当時、トルコでは国の方針として定住政策が進められていて、遊牧民は偏見の目で見られるようになっていた。定住民とのいさかいが著書の各所で語られている。

トルキスタンにとって遊牧は、何千年にもわたって暮らしの主流であった。それが大きな転換期を迎えていると、松原氏は語っている。松原氏がこれを書いてからさらに十数年を経た今、はたして遊牧民は持ちこたえているのだろうか。

調べてみると、少なくとも二〇〇一年時点で、トルコ遊牧民(ユルク)は、数こそ減っているが存在し、今も遊牧を続けているようだ。なんだか少しほっとする。

(注) 私は二〇一一年にトルコを旅行した。そのとき、草原の大丘陵地帯にユルクのグループをいくつか見かけた。子どもたちも一緒だった。彼らははたして学校に通っているのだろうか、ふと心配になったりもしたが、ちょうど夏休みだったから、親元に帰省してただけのことだろう。普段は寄宿舎に入って学校生活を送っているのだろう。そんなことも考えた。

■オーダーとプライム

(二〇〇六年三月二十九日《水》)

「オーダー」という言葉、時と場合によっていろいろな使われ方をする。そのうちの一つに、「数百人のオーダーで」などというのがある。あるはず。あるのだろうか。あるはずだ。私はずっと長く、その使い方があると信じて使ってきた。いつどこで覚えたのかはわからない。

ところがだ。あるとき学校の図書館司書との何げない会話の中でそれを使うと、司書は「えっ？」と不審げな顔をした。オーダーのそういう使い方を司書が知らないだけだと、そのときは思った。さらにいつだったか、数年前だ。ある出版社に依頼された原稿の中でその表現を使ったところ、編集部からクレームがついた。赤いクエスチョンマークつきで、

「この表現でいいのでしょうか」

と問い合わせが来たのである。

あれっと思って、辞書で調べてみた。書齋にずらっと並んでいる「日本国語大辞典」を引っ張り出して「オーダー」を引く。嘩然とした。私が当然のように使ってきた上記の表現に該当する意味が載っていない。

今度は「ランダムハウス英和大辞典」の分厚い二冊本を取り出して、「order」を引いてみる。そこにもどうも、これがそれだと納得できる意味が載っていない。

国語辞典、英和辞典とも、「order」の意味として載っているのは、順序、序列、階級、秩序、命令、注文、等級などである。細かくはもっとあるが、どれも私が使ってきた意味合いとは少しずれてい

る。しつくりこない。

私が頭に描いているイメージで言えば、「数百人のオーダー」とは、数十人ではない、数千人でもない、せいぜい二、三百人から五、六百人、そういう意味だ。つまり百の単位で計れる人数のことだ。これにしつくりマッチする意味が載っていない。その種の用例もない。階級とか等級とかがそれに近いと言えは言えるが、やはりニュアンスが違う。

シヨックだった。長年疑うことなく使ってきた表現だけにシヨックだった。おそらく中学生か高校生頃、何かの拍子にとり違えて覚え込んでしまった使い方なのであろう。

それを知ってから、この表現には気をつけるようになった。ところがである。昨夜『遊牧民の肖像』（松原正毅）を読んでいて、ずばりこの表現に出会ってしまった。これはこれでまたシヨックだった。

「現在なお遊牧生活をおくるユルックの人口を推計してみると、数千人から数万人のオーダーではないかとおもえる」

こうあるのだ。まさに私の使い方そのものだ。松原氏ほどの学者が私と同じ間違いを犯しているのか。

そこでふと思った。実は松原氏と私は同じ私立中学・高校の出身なのだ。六学年違うから、同時に在籍したことはない。松原氏の卒業と入れ違いに私が入学したことになる。

ひよつとすると、この学校（今私が勤めている学校でもあるのだが）に、「オーダー」を私の思いこみのように使う先生が（たぶん一人）いたのではなからうか。その先生がこの間違いを持ち込んだ張本人ではなからうか。確信はないが、そんな気がした。その先生の間違いをもちこんだしまったのが、松原氏であり、私であるということになる。とりついて離れない怨念のようなものを感じたのだった。

それはそうとして、はたしてこれは本当に間違いなのだろうか。

気になって昨夜、インターネットで検索してみた。「千人のオーダー」を一単語として検索してみた。すると、あるはあるは、類似の表現が学者の論文にも、国会議事録にも、種々の報告書にも、エッセイにも、わんさと出てくる。

たとえば、第一五九国会国土交通委員会における質疑の中に、

「ドラスチックに交通事故死者は減らせる、数千人のオーダーで減らせるとも申しております」とある。ずばり私の使い方ではないか。

こうした使用例が山のようにあることを知ると、これを安易に間違いだと決めつけるわけにはいかない。少々自信が湧いてきた。どこにでもある当たり前の表現という方が当たっているのではないのか

元々は明治初期にでも、“order”の意味を誰かがうっかり勘違えて使ったのかもしれない。それが日本全国に広がったのかもしれない。そしていつしか当たり前の表現になったのかもしれない。ちやうど数学における「ダッシュ」と同じように。

“a”などの右上にチヨンをつける、これを日本では普通「aダッシュ」と読む。正しくは「プライム」だ。「aプライム」と読まねばならない。それをいつの頃にか、やはりたぶん明治初期だろう、西洋の数学が入ってきた頃、誰かが間違えてダッシュと読んでしまったのだろう。帝大の先生だったのかもしれない。その先生に学んだ学生が地方に散って中学や高校の教師になったとき、日本全

国に「ダッシュ」を蔓延させてしまったのだろう。

「ダッシュ」は元来、英語では、マイナスを少し短くしたような記号で、ハイフンに似て、二つの単語をつなぐのに使う。プライムとは明らかに別記号だ。

この「ダッシュ」も、思えば中学時代に数学教師から教わった言葉だ。誰とは言わない。すべての数学教師が使っていた。以来、何の疑念もなく延々何十年も使い続けてきた。生徒たちにもそのように教えてきた。

ところがあるとき、同僚の数学教師から

「ダッシュは間違いで、プライムだ」

と教えられたのである。最初は、何を言っているのか意味不明であった。しかし、そう言えば文字の右肩にチヨンをつけた記号はたしかに「プライム」だ。それは私も知っていた。

TeXのコマンド名を学ぶ中でそれに気づいていた。数学の場合にのみ、それをなぜか「ダッシュ」と呼んでいたことになる。その矛盾を矛盾とさえ気づいていなかった。

これだけなら、

「そうか、間違いだったのか」

と、長年の思い違いを正せばそれで済んだはずなのだが、もっと重大かつ決定的な場面に突き当たってしまったのである。

それを教えてくれた同僚教師と二人、東京で開かれた数学の会に出席したときのこと。演壇に立った東大の数学教授が、聞き間違いのような不明瞭な発音で、なんと

「aダッシュ」

と言ったのである。これは大変なことを聞いてしまった。私はそう思った。そして思わず隣にいた同僚の肘をつついた。見ると相手もニヤツとしている。それからは、誰はばかることなく「ダッシュ」を使うことにしたのである。

ちなみに日本国語大辞典で「ダッシュ」を調べてみると、

①として、語句と語句の間に入れる記号「—」とある。だが②として、数学などで文字の右肩につけて親和価を示す記号とも書かれている。

つまり、親和的な文字（ある場面で、よく似た意味に使われている文字）には、右肩にチヨンをつけて、それがよく似た意味を持っていることを強調することが数学や物理ではよくあるのだが、それがなぜか、いつからか、本来の正しい「プライム」ではなく、「ダッシュ」と読まれることになったのである。

ならば、英語の辞書はどうだろうとランダムハウス英和大辞典を調べてみると、「dash」の項にはそのような意味は載っていないが、「prime」の項の長々しい説明の最後に、

「aをaダッシュと読むことがある」

と記されている。

そこでぜひOXFORD ENGLISH DICTIONARYを調べてみた。そこにはなんと、

a' is usually read a dash.

と明確に記されている。つまり、「aダッシュと読むことがある」どころか、「通常はaダッシュ」と読むというのである。本場の英語圏でそうなのである。こうなるとはや、読み間違いでもなんでもないではないか。不思議なことがあるものだ。

中学の、とある先生が読み違いを教えたなどというのでないことも、これで明らかだ。

■エヴァ・ブラウンの日記

(二〇〇六年三月三十一日《金》)

『エヴァ・ブラウンの日記』を読んだ。

「ヒトラーの愛人」、このひと言で片付けられてしまうことの多いエヴァ。

公の場に姿を見せることはなく、「影の女王」とささやかれていた。

おそらく何人もいたであろう愛人の一人。

にもかかわらず、真の愛人は彼女一人。

それがエヴァ。

そしておそらくヒトラーの子を産んだ唯一の女性。

ソビエト軍に包囲された総統官邸地下室で一九四五年四月二十九日、ひそかにヒトラーと結婚し、翌三十日、ヒトラーとともに自殺。ヒトラーの遺言にしたがって、ただちに官邸中庭で生きた痕跡がなくなるまで焼き尽くされ、灰となってヒトラーとともに埋められた。

それがエヴァ。

死に先立つ冬、敗色濃厚となって死を覚悟したエヴァは、一人の映画監督に小さな包みを託した。敗戦後、公証人の手でそれが開けられた。出てきたのは、ヒトラーとの関係を綴った八年間の日記だった。

映画監督は一九四九年、それをイギリスで出版した。だが、あやしげなナチ本などが、当時のイギリスで注目されるはずはなく、話題にもならず埋もれてしまった。

五十年たった二〇〇〇年、再び英訳されてイギリスで出版された。二〇〇二年には、英訳版から翻訳した日本語版が出版された。それが『エヴァ・ブラウンの日記』だ。

信憑性は、ぼくの知るところではない。捏造説もあるだろう。細かな分析は専門家にまかせるとして、素人目には実に興味深い内容だった。

独裁者を独裁者たらしめるものは、公的にプロパガンダされた民衆向けの顔ではなくて、側近をも引き込んで成り立つ私生活の方だ。それをこの日記を読んで強く印象づけられた。

ゲッベルス、ヒムラー、ゲーリング、ヘス、その他、ドイツ第三帝国を構成する主要な顔ぶれは、外向きには各部署の権力を掌握した小独裁者の風貌を持つが、所詮はヒトラーに私的に仕える子分にすぎない。側近という聞こえはよいが、やはり私的な子分だ。仕える場は、各部署ではなくて、ヒトラーの私室だ。

彼らは実際、理念も野心も持ってはいない。ひたすらヒトラーの機嫌をとることだけに憂き身をやつす。必然、外向きには過激なナチズム実践者とならざるをえない。彼らにはそれしか身を守る術がないのだから。

彼らにとってのひとときの逃げ場は、文字通り女の尻を追うこと、そのみである。一般民衆の窮乏を尻目に、彼ら上流階層はことあるごとに派手な宴会を催した。そこが女の尻を追う何よりの場であった。そこにはもはやモラルも理性もありはしなかった。

いよいよベルリンが陥落するという最終盤、ヒトラーの力もここまでと見限れるときが来た。側

近の中から裏切る者が続出した。ヒムラー、ゲーリング、そしてヘス。

当然だろう。崩れるときはもろいのだ、独裁権力というものは。

超新星爆発を起こした恒星のように、内圧が崩れた瞬間、ぐしゃっと重力崩壊を起こしてしまう。外から壊されるより先に、内部崩壊する。

それにしてもエヴァはなんと魅力的な女性だろう。ヒトラーをとりこにしたのもうなずける。ヒトラー五十六歳の道連れになった彼女は三十三歳。女盛りだ。

知性で防御されたレニ（女優で映画監督。ベルリンオリンピックの記録映画を撮ったことで有名）とは真反対だ。レニもヒトラーの愛人の一人とされるが、近寄りがたい。ヒトラーはこの種の女性に対して潜在的に劣等意識を持っていたようで、気持ちの上で負けてしまう。

やはりエヴァのようなフェミニンなタイプを好んだのである。内気な男は特にそうなのだ。

「ときどき異常なほど内気になる。きっと過去のいやな体験からきているのだろうと思うけど、あの人の内気さは普通じゃない。とくに人前に出ると、内気な自分を悟られまいと必死になっている。わたしにはそれが手に取るようにわかる」

エヴァにこう書かれる男、それがヒトラーであった。

■惰眠からの覚醒

(二〇〇六年六月二十日《火》)

気がつくとき、ここ三ヶ月、課題に追い立てられ通しの毎日だった。毎日の猛烈な勉強や研究、月に一度の東京通い（研究の進捗状況をレポートにしてゼミに出席）。その繰り返しの中で生きてきた。脇見するゆとりもなかった。こんなことはいまだかつてなかった。

といっても、誰に文句のつけようもない。自分が選り、自分で覚悟し、自分で自分を投げ入れた道なのだから。

振り返れば、無我夢中で走り通してきた壮年期だった。その割には、大した収穫はなかった。ひたすら身を粉にしただけの人生だった。そんな思いに苛まれることの、とみに多くなっていたこのごろ。

定年という、人生の区切りも遠くない先に見えてきた。このままじっとしていたのでは、じり貧と消耗あるのみ。残るのは、削られ粉にされ朽ちていく、老いというこの塊だけだ。あまりに情けないよ、これでは。

澳の温もりがまだ少しは残っているうちに勉強しないと、本気で。

これまで細々ながらもやってきた蓄えがないわけではない。それらをまとめるのも残された大事な仕事。

そんなことをあれこれ考えた末、見かけの暮らしは変わらなくても、内面の転換を図ろう、そう決心して院を受けたのが去年の秋だった。

以来、内面生活はたしかに変化した。大いに変化した。結果は、猛烈な忙しき。錆びついていた頭がギシギシと動き始めた。知らぬが仏でやり過ごしてきた学問の世界のめざましい進展が、少しずつが見えてきた。独力でこのニューウエーブに立ち向かうことなどとても無理。よい水先案内人を得たことがありがたい。

還暦が二年後に迫った今になって始まった新生活である。長く惰眠をむさぼっていた生活からの覚醒である。

■夏至

(二〇〇六年六月二十一日《水》)

夏至。何となく気分の浮き立つ日だ。昼が一番長い、要はそれだけのこと。だのになぜか、心が浮き立つ。どうしてだろう。

脳内に、日の光を喜ぶ何かが組み込まれているのだろうか。ギリギリした真夏の日盛りに立つと、むっと来る暑さに衝撃を覚え、目を細め、日陰を求めるその一方で、人はたしかに、感性の奥で限らない解放の悦びを感じる。「人は」と一般化するのには早計だろうが、少なくともぼくはそうだ。

夏至の悦びは、しかし、真昼のギリギリから来るものではない。静かに暮れていく、いや、なかなか暮れていかないしっとりとした長い夕空の中に、その喜悅はある。

夜八時、犬を連れて田の畦道を歩いた。町の灯は届かない。いつもなら、月のないこの刻限は無限に深い闇の底だ。だのに今日、つんつん伸びた雑草の茎が見分けられる。たっぷり光が空に残されている。群青の青みが全天に満ちている。

そうだ、これが夏至なのだ。今日は夏至なのだ。そう気づいた瞬間、昼間の疲れは吹っ飛んで、体が空に溶けてしまった。

■田は大宇宙の受容体

(二〇〇六年六月二十四日《土》)

田植えの終わらない田はなくなった。

江戸末期、横浜に住み始めた西洋人にとって、田植えはよほど珍しい光景だったようだ。

「初夏の日本の水田ほど風情のある光景はない」

日本に滞在する西洋人の一人がそう書いている。たしかにそうだ。

田植えから半月もすれば、稲の緑はうんと勢いづいてくる。その時期の田は、漲った水と初々しい緑の均衡がすばらしく、「ほおーっ」と思わず立ち止まって深呼吸したくなる。

今はまだ田植えが終わったばかり。緑は淡く弱々しい。空の色がのしかかって、鮮やかに照ったり、泥色に曇ったり。田は大宇宙の受容体だ。

夜、車のライトが水面を照らす。幼い苗が闇に浮く。田植機がたどった蛇行の跡が生々しい。光の帯が私を目指す。

ぐんぐん近づく。蛇行の跡は平行線の夜行列車。

車が過ぎる。サッと光が拡散する。破局の恐怖。と思った瞬間、視界から光が剥ぎ落とされて、再び闇があたりを包む。

目に焼きついているのは、ただ幾筋もの平行線。深呼吸する。

ジャンボタニシの真っ赤な卵が闇の奥にぽつんと一つ貼りついている。

■夢

(二〇〇六年六月二十五日《日》)

近ごろ夢を見なくなった。いや、見ないのではない。夢とともに目覚めることがなくなったのだ。目覚めの瞬間の夢だけが、

「ああ夢だったか」

と自覚される夢だ。その意味で、私はずいぶん長く夢を見ていなかった。

昨日、久しぶりに夢を見た。

「親父も歳をとったな」

そう思いながら、縁側でスイカを食っている。親父はそこにはいない。庭をぐるつとめぐった奥に親父は腰掛けてやはりスイカを食っているらしい。姿は見えない。だけどイメージションがそれをたしかな実在と感じさせている。

スイカを食っている私はまだ二十歳かそこら。大学の夏休みで帰省している。そのころ親父は五十代半ば。元氣バリバリで働いていたはず。だが、イメージションの親父はすっかり老けて、白髪のお爺さん。

私は空を見上げて、相変わらずスイカを食っている。背中に親父を感じている。親父がプツと種を吐き出した。イメージションの中にそれが見える。私も種を吐いた。種はジェット機のように空に向かって突き進んでいった。

白い航跡が真一文字に空に突き刺さる。親父はふつと笑った。

「何だ、起きてたのか」

突然、声が響いた。それが親父の声なのか、自分の声なのか、判然としない。なんだか不思議な感覚をまさぐっているうち、私は目覚めていた。

夢

■街角の郷愁

(二〇〇六年六月三十日《金》)

書斎の壁に貼られている絵。カレンダーから切り取ったうすっぺらな絵だ。気に入っているから、もう四、五年も貼ったままになっている。

描かれているのは、一九世紀半ばと思しきヨーロッパの街角。往來を馬車が行く。犬と男の子が歩道を走る。花屋の店先に小太りの女将。母親に手を引かれて、小さな女の子が花屋に向かう。川べりで老人が釣りをしている。

画家が向こうを向いて絵を描いている。薄ぎたないスモックとベレー帽。川に向かってイーゼルを立て、足を踏ん張り、背はやや丸めて……。

まわりの喧嘩から孤立したこの無個性の背は、画家自身の自己投影だ。画家のそばで、赤子を抱いた母親が人待ち顔でキャンバスを覗いている。

川面にはボートをこぐ若い男女。これは形象をかき消されて、さっと引かれた光の筋だ。

机に向かうと、いつも目の前にこの絵がある。これはもはや絵ではない。貼りついた実在だ。背景に溶けた夢。つまりは山だ。遠景だ。微動だにしない郷愁だ。

ものを思うとき、頭の後ろに手をやるのが私の癖。そして体を後ろに反らす。すると郷愁が見え

てくる。百年前のその瞬間が……。視線は郷愁をまさぐり、徘徊する。

今日もまじまじとそれを見た。そして、ハツとした。

これは私ではないのか。この子供は。この若者は。この蝶ネクタイの紳士は。この老人は。ここに命がある。すべては、今は尽きた命。夢だ。遠い遠い夢だ。

今から百年後、私はこうして心象の一風景となるだろう。そしてこの絵の中に棲むだろう。思い起こしてくれる人などいない絵。貼りついて動かぬ郷愁の中に。

生ける者には想像もつかない時の流れよ。命あるかぎり、それは届かぬ先だ。

画家が画家を描いた絵の中に、私は私の夢を見る。永遠にかなわぬ夢を見る。どこまでも在りつづける私を見る。

■奇跡としか呼べない偶然

(二〇〇六年九月十六日《土》)

自分の意志にはかかわりのない何かある力が、多くの本の中から、たまたまある本を手にとらせる。それがその人の人生を変え、神秘とも見えることがある。そんなことは誰にだってあるだろう。私にもこれまで何度かそういうことがあった。

数日前にも驚くような体験をした。

学校の図書館でのこと。二階にキリスト教関係の本が集められている。何気なく手に取った本は『細川ガラシャ夫人』。開くとどうやら戯曲だ。偶然目に飛び込んだ最初のセリフに引き込まれた。

「京原か」

「はい」

「この美しい蓮の花をごらん。朝の陽に輝いて、その気高いこと。かすかに香りまでたてて」

「まあ、花びらが、玉の露を宿して、幾つも幾つも、まるで奥方様のために、きそって咲いているかのようでございます」

「けさの花は、また格別。泥水の中から咲きいでる身の、汚れもせずに、美しい色合いで、やがて、しばまねばならぬ時もあるうに」

言葉が澄んで魅惑的だ。このまま書架に戻すのはもったいない。大切な本に出会った思いがして、腹の底がぐるぐると動き、一刻も早く落ち着いた場所で読みたい、そんな思いに突き上げられた。ずいぶん古い本だ。全体が黄色く変色している。出版は一九六六年。四十年前。

その本を握りしめたまま一階に下り、館内を巡視しながら一般書架を物色しているうち、『人生の秋に』という随筆集が目にとまった。読んでみたい衝動に駆られて書架から抜き出した。『ガラシャ夫人』と重ねて手にかかえた。

こうして借りて帰ったその晩、まずは『細川ガラシャ夫人』を読んだ。読み始めて気がついた。著者はヘルマン・ホイヴェルスという人。日本人ではない。だのどこにも、訳者が載っていない。どうしてだろう。裏も表も、あちこちひっくり返すが、訳者がいない。そしてハツとした。これはヘルマン・ホイヴェルスが日本語で書いた戯曲なのだ。翻訳物ではないのだ。この驚くばかりみごとに日本語が、外国人の手になるものなのか。啞然とした。

本体の戯曲部分は全体の半分、百ページほど。すぐに終わった。強い感動が残響する。翌晩、後

半に付加されているパードレ（神父）たちの書簡を読む。

腰元の姿で屋敷を抜け出し、教会に駆け込んで教えを請うガラシャ夫人（細川玉子）に直接面会したパードレをはじめ、同時代のパードレたちがガラシャ夫人に関して記した書簡は、資料としても一級品だし、実に興味深い。

ガラシャ夫人の末期の姿も、まるで新聞記事を読んでいるように、生々しく伝わってくる。

少し紹介しよう。「イエズス会年報」である。ガラシャ夫人が死んだのは関ヶ原の合戦前夜。年報は合戦直後。時はほとんど隔たっていない。

石田三成が大阪に残った諸大名の奥方を人質に取りはじめ、細川ガラシャにも出頭を求めた。それをガラシャ夫人が断ったため、主君（細川忠興）が出兵して留守の細川家に、三成勢が攻め寄せた。その日のことを記した記事だ。

ガラシャ夫人は真に召使いたちから慕われていたので、召使いたちが死の供をしたいと望んだのであったが、奥方は無理に命じて邸の外に逃げさせた。その間に家老小笠原殿は家来共と一緒に全部の室に火薬をまき散らした。侍女たちが邸を出てから、ガラシャ夫人は跪いて幾度もイエズスとマリアの御名を繰り返してとえながら、手づから髪をかき上げ、頸をあらわにした。その時、一刀のもとに首は切り落とされた。家来たちは遺骸に絹の着物を掛け、その上にさらに多くの火薬をまき散らし、奥方と同じ室で死んだと思われる無礼のないように、本館の方に去った。そこで全部切腹したが、それと時を同じくして火薬には火がつけられ、これらの人々とともにさしもの豪華な邸も灰燼に帰したのである。

ガラシャ夫人の命令によって邸の外に逃された侍女のほかは、誰一人として逃れようとした者はなかった。これらの女たちは泣きながら、パードレ・オルガンチノのもとに行って、この事件のいっさいを知らせた。その報知を得てわれわれは非常に悲しみ、かくも人の鑑として、とくに改宗してからはまれに見る徳の高い、高貴な夫人を失ったことを非常に悲しんだ。また、次のような記事もある。

翌早朝、オルガンチノ神父は、愛する奥方の遺骸を探しに出かけた侍女たちに加わって、まだくすぶっている廃墟へと赴いた。彼らは遺骨を壺の中へ恭しく集め、これを教会へ携えて弔う準備をした。

瞬く口ウソクの真ん中には、ローマ字で鮮やかに「ガラシャ」と描き出され、花で縁取られた額が飾られていた。遺骸はオルガンチノ神父が荘厳な鎮魂曲を奏てる中に安置された。葬儀の翌日、埋葬に際して捧げられた「天に向かつて」の聖歌は、悲しみに閉ざされたガラシャの生涯の伴侶たち（侍女たち）の心にかつてなきまでに美しい響きを与えた。

ガラシャ夫人について長々と述べてきたが、本との不思議な出会いにはまだ触れていない。「ガラシャ夫人」を読み終え、続いて『人生の秋』に取りかかったとき、私は背筋がぞくぞくと凍りつくのを覚えた。

『人生の秋』の著者が、なんとヘルマン・ホイヴェルスだったのである。その瞬間まで、同じ著者の本だともまったく気づいていなかった。別の書架からタイトルに惹かれて引つ張り出し、手にするや、「これも読まねば」と何か私を突き上げた。たしかに誰かが突き上げた。そんな気がする。不思議なことだ。

ヘルマン・ホイヴェルスは、一八九〇年にドイツで生まれ、一九二三年来日。上智大学で教鞭を

執る。日本に来てちょうど一週間後に関東大震災に遭う。その後、一九七七年までの五十四年間、日本で宣教し、文筆面でも活躍した。こういう人だ。それにしても何という偶然だろう。こんなことって起こりえるのだろうか。まったく別の書架から、たまたま同じ著者の本を引っ張り出し、しかも、それを「読もう」と思う。確率はほとんどゼロだ。奇跡としか呼べない偶然ではないか。

■風を切る感触

(二〇〇六年九月二十四日《日》)

何年ぶりだろう、軽くジョギングしてみた。風を切る感触が懐かしい。

振り返ると、ジョギングを始めたのは二十五歳のとき。以来、大病で入院する五十歳まで、二十年間走り続けたことになる。テニスは三十歳で始めて二十年間。水泳は四十歳から十年間。それらすべてを五十歳で捨てた。捨てざるを得なかったのだ。五十歳の声を聞いてほどなく、持病であった腸の病気が悪化して瀕死の重症に陥ってしまった、その後二年間は、入退院を繰り返す羽目となった。

病状が悪化していた二年間のうち、勤務したのは一年目の年度初めの十日間と、九月から十二月までの四ヶ月だけだった。年が明けた一月には最悪の状態になった。それから春が来るまで、生死の境をさまよい続け、その後、少し持ち直しはしたものの、夏まで入院し、二年目は丸々一年間休職することになった。

元気が戻ってからでも無理はできず、運動は散歩だけ。

仕事に復帰して六年半になる。このところようやく体力に自信めいたものがよみがえってきた。一週間前、台風一過の秋晴れの日、重信川の土手を歩いてみた。かつてよく走った道だ。土手の芝草を踏む感触が懐かしかった。

その懐かしさが突如、走ってみたいという気持ちを生発した。三日前、ついに我慢できずに駆けだした。すっかり忘れていた風を切る感触。ついつい速くなりがちな足を、

「ゆっくりゆっくり」

と言いつながら走る。

といつても、初日はせいぜい七、八百メートル。二日目と今日は一キロ半ほど。ジョギングと呼べる距離ではない。

途中で心臓が止まったらどうしよう、そんな心配が頭をよぎる。しかし、どうやら大丈夫。それよりも、つまっていた栓が開いて、血管の中を何か心地よく流れ出したのを感じる走りだった。

■キンモクセイの香り

(二〇〇六年一〇月八日《日》)

松山の秋祭りは曜日にかかわらず十月七日と決まっている。そして重信町(今は東温市)の秋祭りは、松山の秋祭りが済んだあとの最初の日曜日と、これもまた決まっている。今年はその今日だった。我が家は東温市と松山市のちょうど境目に位置しているため、毎年二つの祭りの騒音に責め立てられる。しかも今年は二日連続だ。

今朝、暗いうちから町内放送が大音声に宮出しを告げ、三橋三智也のミコシ音頭が狂ったように流されてくる。このミコシ音頭、かつては一日中、町内に響き渡っていた。頭の中にガンガン三橋美智也がうなりを上げて、頭は半ば狂騒状態。今はさすがに苦情が出たためか、そこまではやらない。おかげで昼間は静かなものだ。

昼前、隣の団地の子供ミコシがやってくる。ミコシと一緒に獅子がついてくる。獅子とは言うっても、舞う獅子ではない。舞わないで肩にかつぐだけ。宇和島の牛鬼のような大きな張りぼての獅子である。

ミコシと獅子と三、四十人の子供たち。それに、大勢の母親連。

ミコシは毎年決まって、我が家の裏のスーパーにやってくる。駐車場でひとしきりかき狂ったあと、しばらく休む。子供たちがキャッキヤと走り回っていると、やがてスーパーの店長が現れてお菓子を配る。すぐには現れず、走り回って遊ぶゆとりを与えるところが、小憎らしい演出だ。

その間約十分。ミコシは再びかつき上げられ、ぞろぞろと駐車場から去って行く。

この一部始終を書斎の窓から眺めている私。

すべては年に一度、この日この時間のきまりの光景だ。重信町（東温市）の祭りは必ず日曜日だから、毎年これを窓から眺めることになる。

秋祭りには決まってキンモクセイの香りが添えられる。

今年は少し開花が遅い。彼岸花も遅かった。数日のことではあるが、明らかに遅い。

我が家のキンモクセイは、今朝、香り初めた。金色の花が、まだわずかにほころんだばかり。とさおり風に乗って、香りがふつと窓から吹き入ってくる。

キンモクセイの香りには思い出が多い。独特の芳香が鼻腔をくすぐると、私は一瞬にして子供のころに戻っている。

雨上がりの水たまり。空は明るい光を放っている。キンモクセイの香りがどこからともなく漂ってくる。こちらの水たまりでは男の子が、向こうの水たまりでは女の子が遊んでいる。

そのころ私には気になる女の子がいた。魚屋の子だ。向こうの水たまりで水を蹴散らかしている。やがてキンモクセイは二度咲きをし、二度目の香りさえもが消えてしまったころ、その子はふいといなくなってしまった。切ない喪失感。

キンモクセイが香ると、今でも私はあの水たまりを思い出す。七色に輝いてよみがえってくる。

■老化は一方通行ではない

(二〇〇六年十月十日《火》)

人の体は不思議なものだ。「老化現象」と言えば、誰もが一方通行の典型のように考える。実際、私もそう考えてきた。



ところが案外そうでもないらしい。若返ることだってある。

私は半月ほど前、ジョギングを再開した。病気を境に八年半のブランクがあった。中断していた八年半の歳月は重かった。ジョギング生活二十五年で蓄えた持久力はきれいさっぱりなくなってしまう、ゼロからの出発となった。走り始めてそれを知った。痛烈に、激烈に。

ゼロに戻っただけならまだしものこと、現実には、マイナスへの後退だった。ジョギングを始めた二十代半ば、初めて会社の周回道路を走った日、苦しみながらも二キロの道を完走できた。今は二キロが走れない。

おそらく何百回、何千回と走ったであろう重信川の土手でジョギングを再開した私。走ることが日常であった頃ならば、息が苦しくなることなどありえなかったわずか一キロ地点で、今はもう限界を迎える。肺と心臓が締めつけられる。もはや一歩も進めない。立ち止まって歩くしかない。二〇〇メートルばかり歩くと、少し息が整う。すると、あと半キロほどは走れる。そしてついに本当の限界にいたる。

再開後のジョギングは、いつもこの調子だった。それでも、風を切る感触は何物にも代え難い。歳のことなどすっかり忘れて、気分だけは昔のまま。自然と一体になる喜びに浸る。

今日は少し楽に走れそうかな、そう思って走る日もあるが、一キロ地点まで来ると、ああやはり今日もだめ。

やっぱりな、これが五十八歳の宿命的な重みなのか。昔の粘りはどこにいったのだ。あつという間に燃え尽きる線香花火ではないか。

情けないけど、「二キロ完走」を当座の目標にした。

だが、一キロ地点で燃え尽きてしまう現実の壁はあまりに厚い。二キロ完走などありそうにない。届かぬ夢、夢のまた夢。老いとはこういうことか。

坂道を下り始めたとき、人は人生に達観する。達観とはあきらめること。望みを捨てること。いや、捨てることまでは言うまい。かなわぬ彼岸に望みを追いやることだ。それを人は、欲望に惑わされないなどとも言って、悟りとはそういうことだと言う人もいる。

初めのうちは何度走っても同じだった。だがついにおととい、革命が起きた。一キロ地点に苦もなく達したのである。「ええっ？」と信じがたい思いがした。昨日までは必ず心臓と肺が締めつけられていた一キロ地点。なのに、えらく軽い。まだ走れそう。かつての自分がよみがえってくる。

そうそう、こんな感じだよ、こんな感じ。

もう少し走ろうか。二キロ半まで来てしまった。まだやれそう。どこまでも走れそう。だが無理は禁物。突然心臓が止まったら大ごとだ。どこでやめようか。決断がつかないけれども、とりあえず二キロ半でやめておいた。

どうしてそんなに正確にキロ数がわかるのかって？ それは二百メートル間隔で標識が立っているから。ここは公認の散歩・ジョギング・サイクリングコースだ。だから丁寧に標識が立っているのだ。

二キロ半がおととい。昨日はなんと四キロ走った。なんのことはない、足はまだまだ軽い。心臓も肺も大丈夫。

まさしく革命だった。体の中に何かが起こった。老化は一方通行ではない。ビリビリと私の中を何かが走った。

身体がこれなら、頭も同じだろう。使えばきつと老化は防げる。若返れる。そう言えば何かに書かれていたぞ。脳細胞は壊れる一方ではないと、使えば復活すると。

希望を持って。夢は捨ててはいけない。

「歳だからもうだめ、手遅れ」

これはいくつになっても言ってはならない禁句なのだ。人はそうそう簡単に限界地点に来るはずはない。亀の歩みであっても、必ず前に進むものなのだ。

■二足のわらじ？

(二〇〇六年十一月二十三日《木》)

このところ毎日、自分の勉強で頭がいっぱいだ。もちろん日常は、教師として教壇に立つのが仕事。労力の大半はそちらに注がれる。これは仕方ない。長年の習性、というより暮らしの糧だ。根幹だ。

だが、校門を一步出ると、かぶっていた教師の仮面を車の助手席にかなぐり捨てる。そのとき頭は別空間でうごめき始める。

二足のわらじとまでは言うまい、思うまい。主体はこの自分、一つなのだから。自分の中ですべては一つに統合されている。わらじが二足あるわけではない。

こういう毎日ではあるが、歩きたくない日もある。怒濤のように突き進む日もある。突進し始めると、寝食を忘れ、十日も二十日も熱中することがある。

今日は、熱中してきた勉強（研究）に一区切りついた。とてつもなく難しく見えていた計算が、あれよあれよと驚くほどスムーズに片付いた。

そうそう、先日、休日を丸々休日にして、妻と一緒に面河溪に出かけた。久しぶりに澄んだ溪谷を眺めて、山歩きと森林浴を楽しんだ。

あのリラックスが今日の思わぬ発想を生んだのだろうか。

■芬々たる春

(二〇〇七年二月二十日《火》)

今日、通勤途中の道にピンクの寒桜が五分咲きになっているのを発見した。毎年、春を先取りして咲く桜だ。

さらに勤め帰り、学校近くの抜け道で、ふっと一瞬いい香りがした。

「沈丁花！」

頭の奥が叫ぶ。瞬間だから確信はなかったけれど、たぶんそうだ。

そして夜、犬の散歩で近所の小道を歩きながら、

「この先に沈丁花があり、時期が来ると毎年いい香りがするんだよな」

と、まるで同行者に説明しているような調子で、頭の中で独り言つ。

「でもたぶんまだだろうな。だけど帰りの車で匂ったんだから、ひよつとしたら咲いてるかもな」
 なおも独り言ちながら近づいていく。そして、あつと驚いた。想像がそのまま現実になっていた。

昨日まではなかった香りがあたりに芬々と満ちている。

十キロも離れた沈丁花でありながら、微妙な季節感の変化に敏感に感応し、同時に一齐に咲き始めたようだ。なんと不思議。

その家の塀は低いから、背伸びしなくても沈丁花は目の高さ。この時期にはいつもするように、塀の奥に顔を差し入れる。薄暗い闇の底に、ぼわっと沈丁花が浮かび出た。目の先、いや鼻の先だ。赤紫の花弁から惜しみなく放たれる芳香を、胸いっぱい吸い込んだ。

梅は今日が咲き始めというのではないけれど、小道の入り口で盛りを迎えていた。かつてそこは小さな梅園だった。数十本の紅梅と白梅が初春の美を競い合っていた。だが、今はすっかり切られて駐車場になり、白梅を数本残すのみ。その白梅が、ふわっと綿の衣を着たように柔らかな白を身にまもっている。精一杯の存在感でほのかな香りをまき散らしている。独特の甘酸っぱい香りが漂ってくる。

梅は長く咲く。しかし匂いはほのかで、花びらに鼻をくつつけないと味わえない。まるでオーケストラの中のチェンバロだ。今夜のように、あたりに甘やかな香りを放つのは、真に勢いのあるときだけだ。今夜はチェンバロの独奏、いや梅の独奏だった。梅の青春真っ盛りだった。菜の花も盛りだ。土臭い香りを、野道にこれでもかこれでもかとまき散らしている。

ああ春だ、春だ。今年の春のなんと早いこと。早春の気を堪能する間がないまま、気がつくとはや芬々たる春だ。「春は名のみ」の早春賦は、知らないうちにどこかに奪いさられたらしい。

■解き放たれた一週間

(二〇〇七年三月三十一日《土》)

ここ一週間ほど、他のことは忘れて読書にひたっていた。

まず、西行と一遍の伝記を読んだ。西行の歌にえらくモダンなものを感じた。

風になびく富士のけぶりの空に消えて行方も知らぬわが思ひかな

これを西行みずから、生涯を通して最高の出来と自認している。たしかにそうだ。千年の垣根を越えて、彼の息づかいが生々しく伝わってくる。モダンな感性と、はるか彼方に思いを寄せる虚無の心のみごとさ。

次いで『新大陸の女性たち』。アメリカ近代の女性史だ。西部に夢を追うパイオニアガールたちの生き方に興味を覚えて手に取った。ローラ・インガルス物語の背景を知りたかったのが動機だった。

婦人参政権運動が一九世紀後半のアメリカを嵐のように吹き渡ったという。功を奏して参政権を獲得できたのは、西部のいくつかの州だけであつたらしいが……。

ローラの物語で、母さんが唐突に、

「そうは言っても、私は自分が投票したいとまでは思わないけどね」

と言う一節がある。ほとんど脈絡もなく飛び出してきて、唐突に消えてしまふ一節なのだが、それがどういふ背景を持っていたのか、ようやくわかった気がした。西部の開拓村の一婦人にまで、なにがしかの影響を与えた婦人参政権運動であつたわけだ。

ローラは夫になるはずのアルマンゾに対して、

「夫に生涯従順を誓います」

という慣習的な決まり文句を牧師の前で言わないことを条件に、結婚を約束した。十八歳のローラがどこからこの独立思想を獲得したのか、これも私には謎だった。その謎が解けた。それを言わない運動が、当時、東部でひそかに進行していたというのだ。その運動の小さな波紋が、東部からときおり届く新聞や雑誌を通して、敏感なローラの心を震わせたのだろう。それを彼女は強く心に焼きつけたのだろう。

続いて、ローラの物語を原書で読んだ。彼女が自ら出版した本は九冊。死後、娘のローズが出版したローラの日記(旅日記)を含めると十冊。これがローラの筆になる本のすべてだが、半分はすでに読んでいた。読み残していたうちの二冊を、この間に読んだ。

還暦が近くなっても、頭は働くものだ。当然のことだが、それを実体験したこの一週間だった。「脳細胞は年とともに一方通行で死んでいったりするものではない。使っていれば活性化するし、復活もする」

いつか読んだ本にそうあった。たしかにそれがまやかしないでないことを痛感し、うれしくなった。一年半前の秋、この言葉を信じて、もう一度本気で勉強してみようと決意した。そしてここ一年、学ぶ楽しさと苦しさを存分に味わってきた。

今年度は研究テーマをしぼり、論文を最終的に仕上げないといけない。これがなかなか困難で、産みの苦しみを味わっている。この苦しみも、やがては喜びに転化するときがくるだろう。その日を夢見て、いましばらくは苦悶にあえぐことにする。

■血圧のこと

(二〇〇七年四月八日《日》)

昨日、職場の健康診断があった。

五十歳を過ぎたころから、一四〇、一五〇、ときには一六〇と、高血圧の症状を呈していた。健康診断はいつも花冷えの朝。それも、レントゲン検査に続いて、薄着のまましばらく順番を待たされる。そして冷えた体でいきなり測定する。だから血圧が高くなる。自分で勝手にそう決め込んで、心配などしていなかった。だが、昨年のこと、

「これは高すぎますね。放置しておく、ある日突然、命があぶなくなる、なんてことがありますよ」

と検査の看護師に脅された。

「自覚症状がないから大丈夫というのは、自覚症状を待っているだけのこと。危険です。自覚症状は徐々に出てくるのではなくて、いきなり出るんです。出たときには、もうとことん進んでいて手遅れなんです」

そんなことも言われてしまった。

徹底的に脅されてしまい、戦々恐々、近くの内科医に行き、心臓を精密検査してもらった。心臓に弁膜症の兆候があることがわかった。低い方の血圧が高いと弁膜症には危険なのだ。そんなわけで、血圧を下げる薬を飲むことになった。

以来、一年間飲み続けてきた。そして昨日の検査。一二六と七五だった。言うことなしの正常値だ。

朝は例年通り、寒い中、薄着で待たされた。この分だとずいぶん高い値が出るだろうなと、まな板の鯉の心境で測ってもらった。その結果がこれである。やはり去年までが異常だったわけだ。

それにしても不思議な気分だった。例年なら、測定する看護師が決まって首をひねり、「おかしいから測り直しましょう。しばらく深呼吸して楽にしておいて下さい」

そんなことを言われて、一、二分後に測り直し、「やっぱり高いですね。じゃあこの数値を書き込んでおきますよ」

立ち上がろうとすると、

「緊張してたんでしょね。心配ないですよ」

親切な看護師なら、そう一言つけ足してくれたものだ。

ところが今年はあるけなくパスしてしまった。十歳くらい若返った気分になった。といっても、高血圧が解消されていることは、かかりつけ医で毎月定期検査をする中で、すでに知っていた。弁膜症の症状もほとんど消えていた。それも知っていた。

だけど、職場の検査で現実在去年までと異なる結果が出たことは、やはり驚きだった。寒い中で待たされるという、あの環境下でも、血圧は下がったのだった。

毎日飲んでいる血圧降下剤のおかげと、言ってしまうはそれだけのことなんだけど、やはり結果は結果だ。嬉しいではないか。

■嫌な言葉だ、「団塊の世代」

(二〇〇七年四月十九日《木》)

団塊の世代。私もその中にドブんとつかっている。それにしても、いやな言葉だ。十把一絡げに括られる世代、いつでも塊になって走ってきた世代、酸いも苦いも甘いも辛いもみんな一緒。そんなイメージだ。堺屋太一の小説『団塊の世代』に始まる言葉らしいが、言われ出してもう三十年という。

一つ思い出がある。二十年あまり前、朝日新聞の「文章教室」という通信講座を一年間受講したときのこと。毎月、原稿用紙数枚の文章を送って添削してもらうのだが、あるとき、「団塊の世代」という言葉を不用意に使ってしまった。それが主テーマというのではなく、何かのはずみにふと使ったのだった。当時のはやり言葉で、新聞や雑誌にたびたび現れるものだから、つい何気なく使ってみた、そんな安易な使い方だった。

案の定、

「流行語を不用意に使うのはよくない」

と、朱が入れられて返ってきた。

流行語には、言葉がもつ本来の意味空間や共鳴力とは別の、一種の同時代的共感が付与されている。だから、読む人を瞬時に特定の了解域に到達させる。それを使えば易々とイメージを構成できるし、しかもそのイメージにはぶれがない。言葉足らずでも意は通じる。

その場限りの会話には適した手法である。

しかし、文章においては、それは一過性のイメージにすぎているだけとなる。各人の内面に沸き立つ固有のイメージを、固有の言葉で照らし出さないと、永遠の輝きをもつ文章とはならないの

だ。そのための表現を探し出し、絞り出さないといけない。一時的に共感者が多くても、流行語を安易に用いるのは、やはり危険なのである。

書き入れられた朱筆を見て、強くそう思った。

内面に浮かんだ固有のイメージを照射する最適の表現が流行語である確率はほとんどゼロだろう。人が流行語を使う場面を想像すれば、間違いなく、流行語の側から主体への働きかけが先にある。内面の躍動した思索や概念が先にあつて、それを必死に表現しようとして流行語に行き着くことはまずないだろう。型どおりのものしか、そこからは生み出されない。

これと似た体験がもう一つある。三十年もの昔、短歌を始めたばかりの頃である。歌会に提出した歌の一つで「みかんの白き花」云々という表現を用いた。すぐさま結社の主宰者の厳しい評が飛んできた。

「みかんの花は白いに決まっている。あえて白と言わなくても白のイメージは共有できる。冗長だ。それにこの歌は誰もが浮かぶありきたりの感慨をありきたりに詠んでいるだけ。これでは歌になっていない」

新米に何もここまでと言わんばかりの手厳しい指導だった。もちろんそれが新米の作だとわかつての批評ではなかったのだが……。

ここでもやはり、固有の内面のイメージと、それを表現する固有の言葉、その両面の大切さを教えられたのであった。

こうした視点に立ったとき、決まり文句やことわざを文章の修辭に使うことは、怖くてとてもできないことになる。決まり文句によって概念は固定化され、それが安心と、ある種の(一過的)普遍性をもたらしはするが、心の内部にわき上がっているイメージは、ことわざや決まり文句で表現できるほど定型的なものであるはずはないのである。

話がそれた。団塊の世代に戻る。

団塊の世代とは昭和二十二年から二十四年にかけて生まれた人たちをさす言葉らしい。戦地からの兵士の引き上げは、昭和二十一、二年がピークであった。

私の父はジャワで一年余りの捕虜生活を送った後、昭和二十一年、クリスマスの日、母が待つ我が家に帰ってきた。ひげはぼうぼう、背中には大きなリュック、頭には山高の軍隊帽、だぶだぶのズボン、大きな軍隊靴、どこからどこまでサンタだった。母は、突然玄関先に立った父を見て、神が遣わしてくださったサンタだと、一瞬本気で思ったという。

こうして男たちがどっと帰ってきて、待っていた女たちとの間に子供がどさっと生まれた。昭和二十二、三、四年は子供の誕生のピークになったのである。

私が生まれた昭和二十三年は、団塊の世代の中でも、ど真ん中だ。町は同世代の子どもたちであふれていた。

いつも不思議に思うのは、私が子供だった頃の大人たちだ。私の家の近所には職人や商売人が多かった。彼らは日中も家にいて、常に私たちと共に、私たちに影響を与えながら、働いていた。

今は大規模区画整理で町の面影は跡形もなく消えてしまったが、頭の中には鮮明に当時の町並みが焼きついている。八百屋、荒物屋、うどん屋、ブリキ屋、大工、左官、貸本屋、米屋、燃料屋、豆腐屋、油揚げ屋(これが私の家)、クリーニング屋、駄菓子屋、自転車屋、植木屋、魚屋、定食屋、ラジオ屋(電気店などと言わなかった)、ダンスホール、新聞配達所、たばこ屋、……。私の家が

あったせいぜい二、三百メートルの町筋に、こうした小店がぎっしり詰まっていた。サラリーマン家庭はせいぜい数軒だった。

どの家でも、大人はみんな元気で活気にあふれ、家にはさらに年寄りもいた。

こうした大人たちが、小川をさらえたり、道路に水たまりができると砂利を入れたり、ときには私らのキャッチボールの相手をし、毎日生き生きと働いていた。

その彼らが、今はもういない。どこにもいない。この世から消えた（あるいはうんとお年寄りになって、どこかにおられるかもしれないが）。これが不思議だ。

「何を不思議がってるんだ」

と逆に不思議がられそうだが、私には不思議でならない。あの活気ある世界が消えてしまったことが不思議でならない。

記憶に痕跡だけを残して、彼らはどこに行ったのだ。

百三十数億年もの昔、宇宙ができて、やっと光が小さな空間から解き放たれたばかりのころの姿でさえ、我々は背景放射として見ることができる。そのころできた初々しい銀河すら、百三十億光年の彼方に我々は見ることができない。わずか数十年前の姿をどうして我々は見ることができないだろう。不思議だ。

私は今ここにいる。幼いころから連綿とした時間を走り抜き、幼い日々の記憶を鮮明に保ち、今も私はここにいる。

これもまた不思議なことだ。夢のようだ。今が夢なのか、かつてが夢なのか。それさえよくわからないが、夢の中ではすべてが現実だ。ひとつながりにつながった濃厚な現実だ。

■追憶の星

(二〇〇七年六月十八日《月》)

笑い花が匂う

さざめきが立つ

缶蹴りの子らが

雨に濡れた幌をはがしている

向日葵を生ける娘の膝に

カリンの影が

ふわりと落ちて

永遠の小窓から

橙色の時が

古びた本と

生まれたばかりの太陽を差し入れる

追憶の星が

ぼくの下で
ふたたび瞬きはじめる

■ ああよかった

(二〇〇七年八月四日《土》)

ここ数日、なんと多くの重大事が通過していったことだろう。実感できるのは、そのときそのときを必死で闘ったこと、それだけ。それらが早くも回顧のぬくもりへと変わろうとしている。

一週間前、私は午後の半日を大学の一室で過ごしていた。小さなゼミ室。やわらかなイスに身を沈め、三人掛けの長テーブルを一人で占有した。

ときおり誰かが入ってくる。そして誰かが出ていく。常に不思議な平衡が保たれている。

「缶詰だな」

私はふと思った。缶詰のふたのわずかな隙間から、空気の分子はちようどこれくらいのペースで出入りしているのではなからうか。まさにそう思わせる間延びした人の出入りだった。

新入りが来ると、彼(彼女)は疎水性油脂のように、既存の在室者との斥力安定点を瞬時に割り出して、そこに向けて音もなく進む。イスを引く軽い雑音とともに、バッグから本や書類を取り出す。数秒後には彼(彼女)もまた永劫の既存者だ。シルエットが固まる。

私は明治黒糖キャラメルをなめる。窓の外から、ひっきりなしに軟式テニスのバシバシとひしゃげた音がこだましてくる。硬式テニスの軽やかなスコンスコンではない。軟式テニスのバシバシは痛々しくてやりきれない。

その音もいつしか背景に溶け込み、気にならなくなった頃、ケイタイを取りだす。メールを確かめる。まだだ。三十分後、再びメールを見る。まだか。そろそろのはずだが……。心配と不安がよぎる。

その日、私はある論文試験に臨んでいた。午後の早い時間と夕方と、二回に分けて……。空き時間は、外出するには中途半端。控えのゼミ室で過ごすことにした。

開始十分前、死刑囚になった気分です試験室に入る。心は澄んでいる。後ろ手に縛られ、目隠しされ、段を上り、太い綱を首にかけられ、たばこを一口吸わされ(おそらく麻酔剤入りのたばこだ)、永遠の生命の存在を教誨師から約され、声なくうなずき、数秒の静寂の後に突如足元の床が抜ける。その瞬間の覚悟を私は知っている。そのとき何が起るのか。私はすでに体験済みだ。

「いま死ぬんだ。人生はここで終わるんだ」

二十歳の夏、琵琶湖の沖で手足がつり、全身が水中に沈み、目の前から空気が消えて水ばかりとなったとき、私は死と直面した。そして不思議な体験をした。

今が最期と悟ったそのとき、猛然たる勢いで目の前を人生のあらゆる場面が駆け巡ったのである。生きてきた場面が、壮烈に、美しく、鮮やかに流れていった。かつて一度として思い出すことのない場面、しかしたしかに憶えのある場面が、なつかしく現れては去った。いずれもなんと明るく輝いていたことか。そしてなんとなつかしかったことか。

私はそのときの心持ちで試験場に入り、椅子に座った。

準備はやって来たつもりだ。自信と諦念が入り混じった静かな心で瞑想する。時が来た。配られ

た課題を読む。ああ、予想は見事に外されていた。心がざわつく。

一つ目は、

「日本ではITインフラが整備されているにもかかわらず、eラーニングによる高等教育が進展しないのはなぜか。その理由を考察せよ」

次は、

「ヒトの腸内細菌とヒトとの間、および腸内細菌相互の間に働く相互作用について述べよ」

予想もしていなかった課題だ。準備に没頭した時間は何だったのか。ぶっつけ本番の思考回路にすべてをゆだねる。後者は単純に生物現象を問うているとは思えない。数理的な考察が求められているはず。

これでよしという自信がないまま、終了時刻の六時四十五分、不燃焼な筆をおく。

筆箱にペンをしまい、ともかくも解放の安堵で試験室をあとにする。結果については考えない。どうにでもしてくれ。すべてはわが手を離れた。離ればもう他人事だ。どこへでも好きに飛んできいけ。巣立ちを促す親鳥の気分。

廊下を歩む自分が信じられない。何をしているのだ、この俺は。何故こんなところにいるのだ。表に出て駐車場に向かう頃、ようやく自分を取り戻した。空はまだ明るい。

そうだ。ポケットからケイタイを取り出した。メールを確認する。まだ来ていない。難産なのか。生まれたらすぐ妻からメールが来る手はずになっている。そろそろのはずだが……。苦しむ娘の姿が目に見えぬ。落ち着かない。

とりあえず病院に急ぐ。

信号待ちの間にもう一度ケイタイを取り出した。アッ、来ている。

「生まれた。女の子。母子ともに元気」

とたん力が抜けた。目が潤む。この喜びと安堵は何だろう。たとえる言葉がない。

「よかった、よかった」

心の中で何度も「よかった」を繰り返す。

病院に着き、対面した。横になった娘の腕にちっちゃな生命がいる。

初めて目にする孫という存在。つい先ほどまでお腹の中にいた証しの胎脂が髪の毛に白くはりついている。顔は赤黒くて、しわくちゃだ。

聞くと、出産は六時四十五分。えっ、と思った。論文試験を書き終えた、あの瞬間ではないか。そうだったのか。難産の末に産み落としたのは私の方だったのか。娘の方は結構なお産だったという。

「よかった、よかった」

心の中で繰り返す。

翌日、出雲に。全国高校総合文化祭将棋部門の引率だ。松山からJRに乗る。岡山経由で七時間。遠い遠い地の果てだった。

成績は三勝一敗。あと一步で決勝トーナメント入りだったが、逃す。でも大健闘。祝すべき結果だ。

夜、ホテルで参議院選挙の開票速報に見入る。この選挙で自民党が勝てば、日本は真一文字に戦前に逆戻りするだろう。その道をとるか平和の道をとるか、日本の進路を決める天下分け目の関ヶ

原。私にはそう思えた。結果はこれも満足だった。民主党がどういう政党なのか。はたして期待に届えてくれる政党なのか。それは知らない。まったく知らない。だけど、自民党の勝利だけはあってはならないシナリオだった。それを阻止できたことに満足した。

民主党にも改憲派がいる。戦争容認派がいる。今回の選挙ではこの問題が幸か不幸か争点にならなかった。もしも安倍首相が憲法問題を参院選の最大争点にしていたならば、民主党ははたして一枚岩を維持できたかどうか。

平和への道は、まだまだ先行き不透明。心配は多い。

出雲から帰ると、疲れた頭で締め切り間近の原稿を仕上げる。ここまではすべてが予定通り。

この先もはたして予定通りといくのかどうか。それはわからない。八月いっぱい修士論文の骨格を仕上げる。そういうことになっている。無我夢中の八月にするつもりなのだ。

さてさて、仕事に取りかかろう。そう思った今朝、まずは英気を養ってからと、ふと目に入った『聞けわだつみの声』を書棚から取り出した。死地に向かう学生が、この世の名残にと『ツアラトウストラ』を耽読する。そんな話が載っている。生の震えを感じつつ手記を読む。

■生命って？

(二〇〇八年一月七日《月》)

日本語で「いのち」と発音すると、それは個体の生命を指すことが多い。それを漢字で「命」と書くか「生命」と書くかは問題でない。「いのちが絶えた」と言えば、個体の活動が死をもって果てたことを意味する。

それに対して「せいめい」というと、個体の死を超えて存在する何らかの連続した流れを指す印象が強い。これは漢字では「生命」と書くしかない。「地球外生命を探す」と言うときの「生命」は、個体としての一つの生命体というよりは、複製能力を持って連続と続く生命(の一端)を探す意味だろう。

ある世界に生命と呼びうる実体があるとすれば、それには代謝と複製能力が最低限の条件として備わっていないければならない。なぜなら、環境との接点において生命体は必ず破壊や変形を受け続ける。それを何らかの方法で修復する必要がある。修復は、短期的には代謝を抛り所とし、長期的には複製を抛り所とする。これらの能力がない物体はもはや生命体とは言えず、無機物であり、死そのものである。

基本的には複製によって、生命体は長期にわたって途切れることなく持続する。しかも、「一」が死を迎えるまでに「多」を生むシステムが必要である。でないと、偶然の事故によって個体数が減少し、その生命体はやがて死滅するだろう。また、多を生むことによって生命体は(無尽蔵に)増殖し、繁栄することになる。もちろん各個体には、代謝のための原材料となる一定の大きさの空間が必要であり、個体数には必然的に上限がある。

ともあれ、このようなシステムが、生命の起源の第一歩においてすでにできあがっていなければ、その生命は直ちに絶滅する。生まれてから身につけたのでは遅いのである。

地球の生命の痕跡は、探していくと四十億年もの過去にすでにあるという。地球ができてわずか

数億年のころである。精妙な複製システムがわずか数億年の間に作られ、しかもそのシステムの基本原理はその後四十億年間変わっていない。

私にはこれが不思議でならない。数億年で生み出されるものならば、その後の四十億年という歳月のうちに、別システムで成り立つ生命体が生まれていてもおかしくはないだろう。それがありません。最初に生まれたシステムが唯一絶対のシステムであったのなら、原子や分子の、偶然的離合集散の中から、ほとんどありえないような奇跡的現象が生じたことになり、これもまた不思議である。

環境による絶えざる破壊攻撃に代謝という修復手段で対抗し、個体の死に至る前に複製によって真新しさを取り戻す。しかも、環境そのものにとけ込んでしまわないために膜による境界をもつ。つまり、個を保つ。このような複雑精緻な仕組みをもった生命体が、単純な物理・化学的原理だけで動いている死の世界からわずか数億年の間に生み出された事実を、どう受け止めればよいのだろうか。

多くの現象の中から当たりっこない当たりくじを引き当ててしまったのがこの地球であったという事だろうか。その後の四十億年の中で同様の現象が二度と生じなかったという事実が、希有な偶然性を証明しているとも言える。

「わずか数億年の間に」というのは、ほとんど意味はないのかもしれない。何億年かけようが、何十億年かけようが、まず絶対に起こりえない現象。それがたまたまこの地球上で起こってしまったのである。

そこに何らかの意志が働いたという考え方もある。目的性を持った意志が、無数の偶然の中から一つの可能性をこの地球にもたらした。そう考えるのである。ただしそれはかなり勇気のいる発想である。

地球が（あるいは人類が）特別に選ばれた存在であるという発想は、やはり捨てた方がよいだろう。ほとんど確率ゼロに等しい偶然がたまたま生じたのが、この惑星、つまり地球であったと考える方が自然である。その地球で進化した生命体として、我々はこの地球に住まわせてもらっている。地球を大切に守る使命が我々にはあるのだろうか。

生命の根源は、原始地球に大量に降り注いだ初期太陽系の構成物質に、すでに含まれていたとも言われている。すでに含まれていたということは、それは太陽系を作った星間物質にすでにあったということだろう。ということは、元をたどると、太陽系以前の恒星系に存在していた生命体が、恒星の崩壊とともに分子レベルまで分解されて宇宙空間に飛び散った痕跡なのかもしれない。

もしこれが正しければ、その後の四十億年の間に別の生命が生み出されなかったことにも納得がいく。初期太陽系の構成物質が大量に降り注ぐのは、初期地球に対してだけだろうか。

同時にまた、こうした流れによる生命の連続性があるとすれば、生命は宇宙空間においてこの地球だけの特殊現象ではないことを、これは告げていることにもなろう。

考えれば考えるほど、生命というのは不思議である。

■ウェルズが描く未来

(二〇〇八年一月二十日《日》)

ここ何ヶ月も、読書どころではなく過ごしてきた。年明けとともに鎖が解けて、ようやく読書を
楽しむゆとりが戻ってきた。

まずはサンIIテグジュペリ。みず書房のサンIIテグジュペリ・コレクション(全七巻)をひと
まず四巻まで。『南方郵便機』、『夜間飛行』、『人間の大地』、『戦う操縦士』の四冊。卓抜した文章力
に圧倒された。

大空と砂漠、夜と星、友情と殺戮、……。

自然との孤独な闘いに生死をかけた飛行士ならではの、すさまじい洞察力と感受性。

一瞬一瞬を命の限界まで生き抜いた者だけが知る力とロマン。

これらが文章のあらゆるところにみなぎっている。

続いてウエルズの短編集。『タイム・マシン』、『水晶の卵』、『新加速剤』、『扉についた扉』など。

百年以上も昔に書かれたものだが、これらはどれも「ドラえもん」の世界だ。ドラえもんは、ひょ
っとするとウエルズからヒントを得たのだろうか。

時間軸を自由に行き来したり、空間的に遠く隔たった世界(たとえば火星)との同時相互作用を
したり、あるいは時空間の枠を超えた異次元空間への扉があったりとか、とにかく斬新なアイデア
がいっぱいだ。百年という時の隔たりが信じられない。

興味深かったのは、ウエルズほどに時代を超越した人でありながら、自らがどっぷりつかってい
る一九世紀末という文明の大枠からは抜け出せていないことだ。

例を挙げれば、未来人も農耕主体という発想。土と水と緑に囲まれて暮らす農耕社会だ。

しかも、移動手段は馬車という発想。

ウエルズの頭には、今日見るような高速道路網や地下鉄網は存在しない。彼の時代、汽車や電車
や電灯はすでにあった。だがやはり、生活の基盤はどこまでも土と水と緑であった。その臭いから
は、彼の発想も抜け出せていない。

■不思議な世の中

(二〇〇八年五月二日《金》)

昨年孫ができ、今年二月には還暦。そして春からは年金受給者に。怒濤のような年寄り組への移
行である。三月には大学院の学位授与式があり、苦勞が実を結ぶ喜びも味わった。

身は一つだが、取り巻く環境は大変化だ。

世間に目を向けると、ガソリンが異常な高値をつけ始めた。物価の高騰ぶりは尋常ではない。か
つて、私が壮年と呼ばれていた時代にも、物価はどんどん上がった。けれども、暮らしが悪くなる
実感はなかった。なぜなら、物価の高騰を吸収するだけの賃金の上昇があったから。今はそれがな
い。物価だけが不気味に頭をもたげていく。

戦後初期の混乱期を除くと、ここ数十年で、今ほど暮らしが逼迫し、未来への夢が描けない時代
はないのではないか。政治の貧困きわまりだ。

しかし一方、世は戦後最長の好景気という統計もある。どこに好景気がひそんでいるのか、私の
目にはちっとも見えないのに……。

たしかに、いくつかのトップ企業は、庶民の苦しみを尻目に、「創業以来最高の収益」を上げたり

している。

不思議な世の中だ。金の回りは、エントロピー増大の法則を完全に覆し、あるところにはますます溜まり、ないところからは逃げていく。

■人生はフラクタル

(二〇〇八年五月三日《土》)

今朝、生徒たちを引率して将棋の県大会に。例年なら夕方までの一日仕事になるのが常だ。それを覚悟で出かけることになる。

将棋にしろ、囲碁にしろ、自分が対局するよりもそばで見ている方が何倍も疲れる。立ったままというのも辛い。これがなかなかの重労働なのだ。歳とともに、その重労働が骨身にしみるようになってきた。

ところが今日はなんと楽だったことか。

事前の力量推察から、一回戦を勝ち上がれば御の字というのはわかっていた。昼食前に終わる確率八十%と踏んでいた。ふたを開けると、推察に寸分の狂いなし。全員一回戦で討ち死にした。わずか三十分ほどで終わってしまった。生徒たちには申し訳ないけど新記録だ。

正直言って、情けないというより、半日得をしたとの思いの方が強かった。間違いなく、例年なら手にできなかったはずの半日の自由時間を獲得したのだから。

この種の県大会は年に数回ある。大会ごとに時期も会場も決まっている。たとえば今日の将棋の県大会は、M工業高校で行われ、時期は五月初旬の土曜日と決まっている。

大会に参加するたび思うことがある。

年に一度、同じ時節に同じ会場を訪れる。そして、同じ部屋の同じ窓から同じ風景を眺める私。校庭の鮮やかな新緑と色づいたツツジが、まるで去年のすかし絵のように、一年前の、あるいはもっと昔の光景と重なり合い、響き合う。何も変わっていない。一年という時の流れが夢だったように思われる。夏の蝉の声も、秋の落葉も、冬の木枯らしも、この瞬間、溶けて流れて、消えてしまっている。

あつ、と声を上げそうな胸苦しさを覚える。これぞフラクタルではないか。凝縮と拡散が相似形を保って転移する。これが人生なのかと怖くなる。すべては何も変わらないまま、分解し、砕かれていく。それが人生なのかと。

■胃カメラ

(二〇〇八年五月十六日《金》)

「胃カメラを飲む」とはよく聞き、それが堪えがたいほど痛いとも聞いていた。しかし、昨日初めて胃カメラを飲んだが、検査は麻酔の中、記憶の外だった。飲んだ実感もない。

まずは控え室で、小さなカップに入った液体を渡された。

「飲まないように喉の奥にためておいてください、三分間」

唾が出て、今にも飲んでしまいそう。苦しい。涙を浮かべて我慢する。ああ、飲んでしまう、どうしよう。そう思って究極の我慢の底に沈んだころ、うまい具合に喉がしびれて、我慢が我慢でな

くなってきた。苦しかったのはそこまでだった。

続いて腕に注射針が刺され、そのままゴロゴロ押されて処置室へ。薄暗い室内はまるで悪魔の巢窟のような機械室。

「それでは薬を入れますよ」

先ほどの注射針からゆっくりと薬剤が注入される。それを感じていたのが数秒。注射針にふと目をやった記憶はあるが、その先がない。

次の瞬間、夢のない目覚めを迎えていた。無からの目覚め。時間が突然動き出す。

明るい。目がくらむ。控え室のベッドの上だ。看護婦が

「お目覚めですね。どうぞ」

と、めがねを差し出してくれた。ベッドに横になるとき外したことを思い出す。

そうだ、胃カメラだ。胃カメラを飲みに来たのだ。

「もう終わったんですか」

思わず聞く。

「はい、先ほど」

気がつくときそばに妻がいて、

「どこにも悪いところはないそうよ」

「見ていた？」

「ええ、ずっとそばのモニターで」

なんとということ。いったいどれだけの時間が私から奪い取られていたのだろう。

■或教授の退職の辞

(二〇〇八年五月二十一日《水》)

還暦を過ぎ、多少は期するところのある私だが、西田幾多郎が還暦で京大を退職した際に書いた『或教授の退職の辞』には、人ごとでない哀愁と、どこか不思議な親しみを覚えたのだった。読後しばらく、しみじみとした火照りから醒めることができなかった。

話は、幽体離脱のように、退職慰労会の場にいる自分を俯瞰する場面から始まる。

一団の人々がここかしこに卓を囲んで何だか話し合っていた。やがて宴が始まってデザートコースに入るや、定年教授の前に座っていた一教授が立って、明晰なる口調で慰労の辞を述べた。定年教授はと見ていると、彼は見かけによらぬ羞かみやと見えて、立って何だか謝辞らしいことを述べたが、口籠ってよく分からなかった。宴が終わって、誰もかれも打ち寛いだ頃、彼は前の謝辞があまりに簡単で済まなかったとも思ったか、また立って彼の生涯の回顧らしいことを話し始めた。

こうして、彼の訥々とした話が、今度は速記者が記録したかのような「私」を主語とした話となつて、記されていく。

回顧すれば、私の生涯は極めて簡単なものであった。その前半は黒板を前にして座した、その後半は黒板を後にして立った。黒板に向かって一回転をなしたといえ、それで私の伝記は尽きるのである。

単刀直入に、ここまで簡潔に自己を振り返ることは、はたして誰にもできることだろうか。学ぶことから教えることへの転換。その後の西田を今にして思えば、還暦のあとに再び学ぶことが始まって、それは旺盛に書き直すことへと続いていくのだが……。

幼時に読んだ英語読本の中に「墓場」と題する一文があり、どの墓を見ても、よき夫、よき妻、よき子と書いてある、悪しき人々は何処に葬られているのであろうかという如きことがあったと記憶する。諸君も屍に鞭打たないという寛大な心を以て、すべての私の過去を容ゆるしてもらいたい。

これで「私」の話は終わり、再び俯瞰の図に戻る。

集まれる人々の中には、彼のつまらない生涯を臆面もなくくたくたと述べたのに対して、嫌気を催したのもあったであろう、心ひそかに苦笑したのもあったかもしれない。しかし凹字形に並べられたテーブルに、彼を中心としてしばらく昔話が続けられた。そのうち、彼は明日遠くに行かねばならぬというので、早く帰った。多くの人々は彼を玄関に見送った。彼は心地よげに街頭の闇の中に消えていった。

文章はここで終わる。

「明日遠くに行かねばならぬというので、早く帰った。彼は心地よげに街頭の闇の中に消えていった」

彼の後ろ姿がいつまでもまぶたから消えず、長い余韻の中に沈められてしまった。

退職後に期するものが、羞かみの心と相まって、なんと鮮やかに語られていることか。気負わず、飄々と、過去と分かれて未来へと歩んでいく。私にそんなことがはたしてできるのだろうか。

■遊びの普遍性

(二〇〇八年六月十八日《水》)

子供のころよく遊んだ遊びに「クチク」というのがあった。

誰かが「クチクをしよう」と言い出すと、それまで三々五々道ばたに散って遊んでいた子供たちが、突然吸引器に吸い込まれるように集まってくる。そして彼らは、路地という路地を縦横無尽に徘徊し、時を忘れて遊びに熱中するのだった。

路地のいくつかは袋小路になっていた。その奥に連絡路などなかった。しかし、子供たちの目には、板扉やブロック扉は冒険心をくすぐるアスレチック用具にすぎなかった。彼らは平然と扉に飛びつき、よじ登り、向こう側に飛び下りる。向こうはたいていどこかの家の庭だから、おばちゃん目を盗んで走り抜け、裏の通りに去っていく。ニュートリノが易々と地球を通過するようなものだった。

それにしてもこの「クチク」。妙な響きの言葉だなとは、子供心にも思っていた。ひよっとするとあれは駆逐艦の「クチク」だったのでは？ そう勘づいたのは、大人になってからだ。そして、想像が的中していたと確信したのは、実は今日のことである。

あの遊びに普遍性があったことも、今日初めて知った。昨日まで、あの遊びは私の住んでいた町筋の、私たちの仲間うちだけの特殊な遊びだったと信じ込んでいた。

今日『中学生の満州敗戦日記』（今井和也）を読み、偶然、このクチクのことを知ったのである。

こうある。

当時、学校ではやっていたのは「海軍遊戯」である。二組に分かれて、帽子のかぶり方で戦艦、駆逐艦、潜水艦などの役割を決めて校庭を走り回る、集団鬼ごっこである。

名称は「海軍遊戯」となっている。「クチク」ではない。だが、これは私たちがやっていた「クチク」そのものだ。

「帽子のかぶり方で戦艦、駆逐艦、潜水艦などの役割を決めていた」とある。『中学生の満州敗戦日記』の中で、この遊びに関する記述はわずかこれだけだが、私たちのクチクは、

「帽子のつばが前を向いている人は横を向いている人に勝ち、横を向いている人は後ろを向いている人に勝ち、後ろを向いている人は前を向いている人に勝ち」という三すくみのルールだった。これが、

「戦艦は駆逐艦に勝ち、駆逐艦は潜水艦に勝ち、潜水艦は戦艦に勝ち」

という、軍国少年にとっての常識を下敷きにしたものであったことが、はっきりとそうは書かれていないが、明らかだ。

「クチク」がこのような、海戦における三すくみの力関係を背景とした遊びであったことを、今まで私は知らなかった。

今井和也氏が「当時、学校で」と言っているのは、ハルビンの日本人学校のことである。満州には日本各地から人が押し寄せていたから、これが元々の地方から持ち込まれた遊びであったかは、この記述だけではわからない。

そこで、ネットで調べると、「くちく水雷」という遊びに突き当たった。遊び方は次の通りである。

二チームに別れ、各チーム「艦長」を一人きめ、ほかの人は「くちく」役、「水雷」役に分かれる。

各チームの陣地をきめ、「くちく」役は「くちくくちく」と言いながら「水雷」を追いかけ、「水雷」役は「すいらいすいらい」と言いながら「艦長」を追いかけ、「艦長」はだまって「くちく」を追いかける。

「くちく」は「水雷」を追いかけ捕まえることができるが、「水雷」は「くちく」を追いかけ捕まえることができない。

捕まえられた人は敵陣につれて行かれ、一列になって味方が助けにくれるのを待つ。味方が助けにくて、切ったところから逃げ、陣地に戻ることができ、見張り番にタッチされたときはまた捕まったことになる。

「艦長」がつかまったり、「艦長」を捕まえる役の「水雷」が全員捕まったりしてしまったチームは負けとなる。

これは私たちがやっていた「クチク」とほとんど同じである。私らは、口で「くちく」とか「水雷」とか言い続ける代わりに、帽子のつばを前にしたり横にしたりしておくのである。捕まえたり、切ったりするところも、まったく同じである。

私たちの「クチク」が「くちく水雷」と大きく異なっていたのは、開放的な運動場を走り回る鬼ごっこ的な遊びではなく、町全体の入り組んだ路地を遊び場とした、一種の冒険的、行軍的な遊びだった点である。大規模なかくれんぼとも言えた。敵に遭遇したとき、そのときだけ、帽子のつば

の向きがものを言い、鬼ごっこに変身するのである。

もちろん帽子の向きは、一度設定したら途中で変えられない。これは紳士協定で厳正に守られた。また、帽子の向きだけですべてが決まるから、必然、艦長が一人だけというルールは私たちになかった。

「くちく水雷」の場合、遊びの時間は十分程度と書かれているが、私たちの「クチク」はとてもそんな時間では終わらなかった。日が沈むまで延々と続けられた。誰かが、

「暗^{くら}くなったけん、もうやめよや」

と言いつつまで続くのだった。

「くちく水雷」にしろ「海軍遊戯」にしろ「クチク」にしろ、海軍に駆逐艦が登場してからの遊びであったことは言うまでもない。日本で駆逐艦が作られたのは日露戦争の頃だという。戦艦が水雷艇に苦しめられるようになり、それを退治する必要性から、機動性の高い小型の駆逐艦が開発されたのである。

したがって、「くちく水雷遊び」が始まった最も古い可能性は明治末期ということになる。だが個人的な感覚で言えば、昭和になって日本の軍国化が顕著になってからの遊びであろう。

はつきりしているのは、この遊びが子供たちの中から自然発生的に生まれたものではないことである。もしそうならば、全国各地に同一ルールの遊びが自然発生したことになり、それはあまりに不自然だ。

考えられる可能性はただ一つ。学校教育の一環として、遊戯とか体育の時間に全国の子供たちに教えられたということだ。日本に軍国色が濃くなってからの話でしかありえない。

こう考えると、四国の松山と、満州のハルビンで、ほぼ同じ遊びが子供たちを熱中させていたことにも納得がいく。

戦争が終わると、学校でこの遊びが教えられることは、もうなかったろう。しかし、子供から子供への遊びの伝承として、これは次の世代へと引き継がれていった。そのとき、遊びの名称を、たぶん周囲の大人たちが、多少とも戦争色のないものに変えさせたのだろう。軍国的な「海軍遊戯」から、意味不明な「クチク」になり、役名もまた本来の意味を失って、ただの「前」とか「横」とか「後ろ」になったのだろう。

ともあれ、自分たちの仲間うちだけの特殊な遊びと信じていた「クチク」が、このように全国的広がりをもつ遊びだったと知ったのは、大きな驚きだった。

■エジンバラ

(二〇〇八年八月)

久しぶりに海外旅行に出かけた。妻と二人で。目的地はイギリス。まずはエジンバラから。

エジンバラはスコットランドの首都であり、同時に、古い戦いの歴史に血塗られた堅固な城塞都市でもある。

五世紀初めにローマ軍が撤退すると、大陸からアングロ・サクソンが進入し、ローマ以前から牧畜等で安定した暮らしを立てていた古いケルト系の人々は周辺部に追いやられた。

彼らが逃れた地は、北はスコットランド、西はウェールズ、南はコッツウォルズ、さらには隣の

島のアイランド。コッツウォルズは早い時期にイングランドに吸収されてしまったが、その他の地域は長くイングランドの抵抗勢力であり続けた。

この構図は現代にいたっても基本的には変わっていない。文化面・精神面においても、政治面においても、さらにはスポーツなどにおける対抗心においてさえ、この構図はイギリスを深く支配している。

情けないことだが、私は今回の旅で空港に降り立つまで、イギリス人が自分たちの国をどのよう呼んでいるのかわからなかった。空港の案内表示には、どこを探しても "England" や "British" に類した表現がない。やたら目につくのが、"UK" という文字だ。町を歩いても、"UK" がいたるところに氾濫している。

実は、それがイギリスの国名だと気づくまでに、しばらく時間がかかった。UKとは "United Kingdom" の省略形である。日本語に直せば「連合王国」。「連合」とは、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイランドの連合のことだ。

USA (United States of America) における州の独立性とは本質を異にしている、UKにおける各自治国の独立性は、はるかに長い歴史的確執を背景としており、根深く強固だ。北アイランド問題のように、いまだに戦火を交えることさえある。

日本ではまずお目にかかることのない "UK" という呼称。これがイギリス人が自国を指す正式名称なのであった。この表現の中に、一步も退けないスコットランド魂、ウェールズ魂、アイルランド魂がこめられている。もちろんイングランド魂も。

さて、エジンバラだが、私がエジンバラに憧れるようになった直接のきっかけは、ウォルター・スコットの小説『ミドロジアン』の心臓』だった。二百年ほど前の作品である。

スコットの作品は、『アイヴァンホー』、『湖上の美人』くらいしか日本では読まれていないかもしれないが、『ミドロジアン』の心臓』はなかなかの名作である。イギリスではたぶん、これがスコットの最高傑作とされているのではなからうか。

若い頃、たまたま古本屋の書棚に並んでいた岩波文庫の『ミドロジアン』の心臓』を手に取り、そのおどろおどろしいタイトルに惹かれて買ってしまったのだった。上・中・下三冊の長編だったが、読むうちにずんずん引き込まれ、夢中で読み終えた記憶がある。

作品の舞台はエジンバラ。その中で、ヒロインのジニー・ディーンズはエジンバラからロンドンまで、さらにロンドンからエジンバラまで、艱難辛苦の徒歩旅行をする。死刑判決を受けた妹の無罪を国王に直訴するためだった。

道中生じるさまざまな出来事を通して、私はジニーの魅力のとりこになり、いつしかイギリスの田園風景、さらにはイギリスそのものに憧れるようになったのだった。そして何よりも、作品の背景をなすスコットランド魂とエジンバラの町に、強い憧れの念を抱くようになったのである。

エジンバラでぜひ見たかったものの一つが「ミドロジアン」の心臓』の石だった。ミドロジアンというのはエジンバラの旧名だ。小説『ミドロジアン』の心臓』に何度も出てくるトラスブラス監獄（かつて旧市街の中心にあった）の前に、その昔、心臓の形をした石が置かれていたらしい。解放の日を心待ちにする囚人たちの願いがこめられた石であった。

スコットはエピローグで、「ミドロジアン」の心臓は、いまはもはや存在せず、エジンバラの町外れに移されてしまった」と書いている。

現在、「ミドロジアンの心臓の石」は、旧市街の西の外れに近い聖ジャイルズ大聖堂前の広場にある。それがはたしてスコットの言う石なのか、まがい物なのか、私にはわからない。ただ、エジンバラのガイドさんに、スコットの“The Heart of Midlothian”について尋ねたとき、躊躇なく「その石は今ここにありますよ」と教えてくれたのが、大聖堂前の石であった。

エジンバラ城には今も古い地下牢が残っている。トラブース監獄そのものだ。内部は冷え冷えとして薄暗く、通気が悪いために、心なしか酸素が薄い気がする。おそらく政治犯が収容されたものと想像されるが、ここに何年も何十年も閉じこめられた囚人を思うと、いたたまれない気持ちになった。

鉄格子の門から薄暗い石段を下っていくと、底には石で仕切られた寒々とした房がいくつもあって、もはや自然の光は届かない。

集団房には蚕棚のような何層もの木組みのベッドがしつらえられている。その一つ一つが、囚人たちにとって、物思いに沈む孤独の空間であった。

ベッドの仕切り板には、彼らが懸命に生の証しを残そうとした落書きがおびただしく残されている。もはや生きては戻れないことを覚悟した彼らの、死への案内板として書かれたおどろおどろしい落書きの数々に、私はゾクツと震えるものを感じずにはいられなかった。

■湖水地方

湖水地方 (Lake District) は、地理的にはイングランドの北西端。スコットランドと境を接するところにある。風光明媚な地として有名である。

イングランドを旅しているとまず目につくことだが、イングランドには山と呼びうるほどの山はない。行くところ行くところ、大地のゆるやかな起伏があるだけだ。

そんなイングランドにあって、湖水地方には少しばかり高い山が集まっている。といっても、スコーフエル・パイクが九七八m、ヘルヴェリンが九五〇m。これがイングランドの最高峰なのだから、たかはしれている。

スコットランドには、北のハイランド地方に一三〇〇m級の山がいくつかあるにはある。しかしそれとて、日本の感覚からすれば、中の下の部類だ。

山容がまた日本とは大きく異なっている。日本の山は森林におおわれているのが普通だが、イングランドの山(丘)は丸裸に近い。といっても、アフガニスタンのような荒涼とした岩山や、ギリシャのような干からびた赤茶色の山ではない。一面牧草におおわれた、みずみずしく開放的な山なのだ。

木がないものだから、山の形状があらさまにわかる。こんなにまでつるりとした山は日本には少ないだろう。しかも、ところどころに、バリカンで刈り残したような、細長くて直線的な森が残されていたりする。

スコーフエル・パイクやヘルヴェリンほどの山になると(といっても千メートルに満たない山だが)、頂上付近には、高山風に岩が露出し、地肌が紫がかかっているとある。紫の地肌は、剥き出しの土の色ではなくて、独特の草やコケのせいである。

イングランドの山に木が少ないのは、自然がなせる業ではない。千年単位の歳月をかけて人間が

なした業なのだ。羊を飼うために木を切ったのである。はるかケルトの時代から刈り取られ始め、切り開いた草地で人々は羊を飼うようになった。ローマ軍進駐後もそれは続き、いつしかイングランドは全土牧草地と化していった。

そうしたイングランドの風景とはひと味異なった雰囲気を湖水地方はもっている。木があり森があるのである。風景の基本的階調はあくまで明るくて開放的な牧草の山なのだが、ところどころに鬱蒼と茂った森や林がある。そしてすばらしい湖がいくつもある。

この湖水地方の自然を、詩人ワーズワースの妹ドロシーは "woody meadow country" と日記に記している。彼女の認識においては、イギリス全土は meadow country なのだが、湖水地方だけは、頭に woody がつく。直訳すれば、「森のある牧草地」であろうか。

湖水地方が、ワイルドな自然を楽しめる類い希なりゾート地として脚光を浴び始めたのは、それほど古いことではないようで、十九世紀ころかららしい。十九世紀初頭、詩人のワーズワースは自分の生まれ故郷のすばらしさを『湖水案内』という本に書き記した。名所案内的なガイドブックだ。湖水地方が注目されるようになったのが、彼のガイドブックのおかげなのかどうか、それはなんとも言えないのだが……。

■『チップス先生 さようなら』

同じ小説を二度読むことは滅多にない私だが、『チップス先生 さようなら』だけは不思議な魅力に誘われて三度読んだ。最初は二十年あまり前、同僚の英語教師にいただいた原文で。二度目は新潮文庫の日本語訳で。三度目はつい最近、またも原文で。

一度目はまだ若かったので、チップスの悲哀が実感としてつかめず、教師としての自分の前途にかすかな不安の予感を感じとっただけだった。

二度目はチップスの弱さが妙に実感でき、三度目は、過ぎ去った自分の過去と重ね合わせて、切実な共感の思いで読むことができた。生徒や同僚たちから軽く見られ、ときにはからかわれることさえあったチップス。自分自身でも、思いの遂げられなかった人生だったと振り返ることの多いチップス。だが、その奥に何と深々とした自信の海があることよと、感嘆の思いさえ抱きながら読んだ三度目だった。

物語の舞台はロンドンだ。だが一度だけ湖水地方に舞台が移る。チップス四十八歳の夏、生まれて初めてロマンスを経験した地、それが湖水地方なのだ。

相手は二十代半ばの活気あふれる女性キャサリン。出会いの唐突さに加え、年齢、性格、思想、あらゆる点で不釣り合いな二人の恋は、とまどうチップスの気持ち置き去りにして燃え上がった。九月の新学期には早くも二人はブルックフィールド校の舎監室で新婚生活を始めていた。

妻の深い愛情、進歩思想、激しい行動力に圧倒されたチップスは、生来の保守性と引込み思案を一変させ、生徒の前でも努めて明るく振る舞うようになった。その上、周囲の反対を押し切って信条を貫き通す積極性すら身につけた。

議論では常に妻に圧倒され、彼女の思想と行動力に従わざるを得ない日々。さらには自分自身の内面性までも彼女の意のままに変貌させられていく日々。そうした従属の日々ではあっても、それは過去のチップスには考えられもしなかった夢のように楽しい日々であった。まるで自らそれを選

んだかのように、新しい道を歩み始めるチップスなのであった。

未来への希望に輝いたこの新生活は、しかし、わずか一年で悲劇を迎えてしまった。新しい命を宿した妻が、一陣の風に吹き流されたように、あっけなく届かぬ世界に去ってしまったのである。新しい命ともども……。

再び一人になったチップスは、妻に荒々しく刻み込まれた生き方を胸の奥にしまいこみ、その影響を巧みなジョークに残しながら、元の人生に戻っていく。

人生がくるっと反転する舞台として、作者ヒルトンが湖水地方を選んだ理由、それを私はこれまで意味あるものとして考えたことがなかったが、今回自分の足で湖水地方を歩いてみて、

「そうだからだ」

とわかった気がした。

湖水地方はワーズワースの妹ドロシーが *woody meadow country* と表現したとおり、二面性を持っている。

一つは牧草の緑の丘の連なりと、それを映す湖。どこまでも明るく開放的な側面だ。湖に沿って小道を歩いてみると、道はいつしか高みにのぼり、眼下にはさえぎるものがない牧草地のゆるやかな斜面が開けてくる。ここかしこで白い斑点のように羊の群れが草を食んでいる。さらにその下では、澄み透った湖面が空と緑を映して輝いている。

風景はどこまでも明るく開放的だ。立ち止まって眺めていると、夢の世界に迷いこんだようで、幸福感に満たされてくる。

チップスとキャサリンの唐突な恋は、湖水地方の名山の一つであるグレートゲブルの岩場で始まって、麓の緑豊かな牧草地で育まれた。どこまでも明るく開放的な光景が、行く手の輝かしい希望と幸福を映し出していた。

だが一方、湖水地方には、*meadow country* の明るさと対照的な *woody country* の暗さが秘められている。牧草地の斜面を歩いていると、目の前に唐突に森が現れることがある。大きくはない。ものの十分も歩くうちには抜けてしまう森だ。しかし、ひとたび森に足を踏み入れると、たちまち鬱蒼とした木々に空を奪われ、じめじめとした薄闇の支配下に入る。眼下に横たわっている湖水も、木陰の奥に姿を隠す。倒木がコケにおおわれ、横たわっている。

小道の両脇は湿気の世界を物語るシダの林だ。その中に、千年も昔からそこにあっただかと思われ崩れかかった石積み壁が、斜面を一直線に山頂へと伸びている。壁は今ではただの遺跡にすぎないとも見えるが、それはかつてのエンクロージャーのあとだ。領主や富農が自分の領土を石で囲って、そこを自分の土地だと宣言した。その中で羊を放し飼いにした。

この異様な暗さと、真一文字に斜面を駆け上がる石積み壁に、私は圧倒された。

森には、暗い死のイメージと、死こそが命の連鎖の源泉であることを暗示する、何か深く力強い永続性が保持されている。

チップスとキャサリンの新生活にやがて訪れる悲劇。それを暗示する深い森が、湖水地方には散らばっている。牧草地がもつ開放的なメロディーに、森が秘める死のイメージが重低音となって作用してこそ、『チップス先生 さようなら』の劇的場面が人を感動させる力をもつのだと、湖水沿いの小道を歩きながらつくづく思ったのだ。

■ワーズワース詩集(一)

深い感性で自然を見つめるワーズワースの詩は、私の心に強く響くものがあり、愛読書の一つとなっている。

ワーズワースは、一七七〇年、湖水地方に生まれ、生涯のほとんどを湖水地方で過ごした。外に出たのは、十代後半から二十代前半にかけての学びの期間、つまり、ケンブリッジ大学時代とそれに続くフランス、ドイツ旅行の間だけだ。

湖水地方に戻ってからは、妹ドロシーや親友のコールリッジらとともに、山や湖、牧草地、小さな町々を散策するのを日課とした。彼らは何十キロという距離を毎日平気で歩いたのだった。月明かりがあれば、夜さえ苦にできなかった。

散策の目的は詩作であった。詩の題材探しとインスピレーションの獲得、つまり創作に対する絶えざる情熱が、ワーズワースの頭を離れることはなかった。代表作のほとんどが書かれたとされる二十代後半から三十代にかけての十数年間は、生活全体が詩とともにあった。散策によってインスピレーションを得、帰宅後それを作品に仕上げ、さらにドロシーやコールリッジに読んで聞かせる。これが毎日の日課であり、大きな楽しみだった。

彼らは陽のあるかぎり、月明かりのあるかぎり、自然の中を歩き回り、人を訪ね、詩を作り、朗読し、読書をし、本について語り合ったのである。これが彼ら知的青年の楽しみのすべてであった。受動的娯楽のなかった時代の一日は、今に比べると何と充実して長かったことだろう。

私がワーズワースに深い親しみを覚えるようになったきっかけは、自伝的長編叙事詩『序曲』であった。

今回のイギリス旅行には、『序曲』に描かれた情景を自分の目と足で確かめたいという思いが強かった。もちろん二百年前と今とは、情景はずいぶん様変わりしているだろうが。

『序曲』に描かれているひなびた渡し場が、そのまま今もひなびた渡し場であるはずはない。行ってみると、そこは賑々しいヨットハーバーになっていた。しかし、建物や自然は想像をはるかに超えるレベルで、そのまま今につながっていた。

建物がいつまでも残る。これが木の文化に対する石積み文化の決定的な特性なのだ、つくづく思った。家も塀も牧場の柵もすべてが石積みだ。スレート状の石を積み重ねている。これは二百年やそこらで崩れたりするものではない。

ワーズワースの生家は、今は住む人こそ違えど、そのまま当時の姿をとどめている。

ある家は、十七世紀に建てられ、十八世紀に一部増築されたが、それ以降は手を加えていないとのことだった。三百年以上にわたって現役として使い続けられている家。日本にはこういう民家はまじないだろう。英国では珍しくない、当たり前前の光景なのだ。

『序曲』から、私が気に入っている詩をいくつか引き抜いてみる。原文はなかなか難解なのだが、つたない私の訳だけ載せることにする。

少年ワーズワースが夏休みを終えて、自宅から、学校があるホークスヘッドに戻ってくる場面から。学校のそばに、ワーズワースが寄宿している家がある。

夏の日盛り、

足どり軽くヒースの野を越え、

牧場の丘に登り、
 高みに一人立つと、まるで城壁に立ったように、
 眼下にウインダムミア湖が姿を現し、
 大河に似たその水面が、太陽に輝いている。
 歎び躍る心で、私は
 湖を、島々を、岬を、照り輝く入り江を、
 それら自然のもろもろの形象が、
 一瞬の光景の中に融合して、誇らしげに、
 荘厳で、麗美で、華やかな姿を現すさまを、
 足下に眺めた。
 私は丘を駆け下りながら、カ一杯、
 渡し守のおじいさんに声をかけた。
 その声は岩にこだまし、
 川を渡ろうとしていたおじいさんは、
 櫂を止め、渡し場に舟を戻した。
 顔見知りのおじいさんにお礼を言って舟に乗ると、
 舟は早や対岸に着き、私は丘を駆け上がって、
 甘い香りのホークスヘッドへと向かう。
 そこは私が育ったところ。
 少し歩けばもう、道が曲がりきらないうちに、
 丘の上に白い教会が見えてきた。
 女王様のように、
 慈悲深いまなざしを投げかけてくれる教会。
 町は青くたなびく煙の奥にひそんでいるが、
 はやる足どりは軽く、
 たちまち私は家の入り口に着いた。
 うっすら涙を浮かべたおばさんが、
 迎えてくれる。
 おばさんは本当のお母さんのように優しく、
 誇らしげに私を見つめる。

■ワーズワース詩集（二）

ワーズワースの父親は地元の貴族の顧問弁護士をしていて、ワーズワースが生まれた家は、その貴族の持ち家を借りたものだった。コッカマス（湖水地方の北部の町）ではひとときわ大きな家だ。二百数十年（おそらくもっと古い）を経た今も当時のまま残されている。建物のみならず、敷地を囲む石塀も門も、すべてが当時のままだ。

幼少期のウイリアム・ワーズワースは幸せだった。一つ年下の妹ドロシーと付近の川や森を散策

するのを楽しみにしていた。二人は幼い頃から、すでに他の兄弟たちとは異なる道に進み始めていた。後年、ウィリアムは詩人になり、ドロシーは生涯それを手助けし続けたのに対し、他の三人は法律家、東インド会社の船長、大学教授と、進む道は大きく異なった。

ウィリアムは六歳で小学校に入學し、そのまま何事もなく少年期に進んでいくかと思われたが、八歳のときに母親を亡くし、生活が一変した。

母親の死を機に、ドロシーは親戚の家にやられてしまい、ウィリアムは湖水地方中部の村ホークスヘッドのグラマースクール（十六世紀創設の古い学校）に入れられたのだった。仲のよかった兄妹がバラバラになったつらさについては、ドロシーが親友に書き送った手紙に何度も綴られている。

「母が死んでから父が死ぬまでの六年間、私は一度も実家に戻ったことがありません」

とも書かれている。父が死んだときに戻ったのもおそらく葬儀のための一時的な帰宅にすぎず、ドロシーは母の死後、コッカマスの生家で暮らすことははやなかった。祖母の家、伯母の家などを転々とし、親の愛情を味わうことなく育ったのだった。

大人になってから二度か三度、生家の前を通りかかったことがあり、庭やテラスの様子を垣間見て感慨にふけたことが、日記や手紙に書き残されている（父の死後、生家は他人の手に渡っていた）。

ウィリアムに戻るが、ホークスヘッド・グラマースクールには寄宿舎がなく、彼は近くの民家に下宿しなければならなかった。その下宿が、先の詩に出てくる「おばさん」の家だ。おばさんの名はアン・タイソン。八歳で下宿するなど考えられないことだが、父親は息子を里子に出した感覚でいたのかもしれない。

母を亡くしたワーズワースは、アンおばさんに深い愛情と慈しみをもって育てられた。アンおばさんは幼いワーズワースにとって、母親そのものだった。欠乏しがちな愛情のすべてをアンおばさんからもらったのである。

夏休みが終わって学校に戻らないといけなくなる日は、子供にとってはつらい日のはず。だけどワーズワースの心はまるで逆だった。離れていた我が家に久しぶりに戻るように、心躍らせて下宿に帰っていくのである。

この詩の場面を体験してみたいというのも旅行の一つの目的だった。ただし、渡し場があるのはウインダムミア湖畔のウインダムミアと呼ばれる町で、今や湖水地方最大のリゾート地だ。昔の姿がそのまま残っているとはとても期待できなかった。

案の定、渡し場は賑やかなヨットハーバーになっていた。何十隻もの色とりどりのヨットやボートが岸边に舳い、渡し場のおじいさんのんびり船をこぐ風情などあるはずがない。

しかし、嬉しいことに、渡し場を見下ろす斜面の牧草地には、ワーズワースが駆け下りたであろう小道があって、詩の一片にかすかに触れることができた。

対岸のホークスヘッドでは、グラマースクールは容易に見つかった。町の真ん中にある。想像していたよりも小さな学校だった。門を入るとすぐ右手に二階建ての校舎があり、造りから見て、教室はたぶん一階と二階に一つずつあったと思われる。今は一階の教室だけが昔の姿をとどめており、二階は資料展示室になっている。

教室にワーズワースの落書きが残されていることは、前もって知っていた。大正初期に学校を訪れた高木市之助という人が『湖畔（ワーズワースの詩跡を訪ねて）』という本に書いている。

「机に "W. Wordsworth" と彫り込んだ落書きがあり、今では訪問者にいたずらされないよう、その上にガラスのふたがかぶせられている」

と、市之助は書く。

それからほぼ百年。時間が止まったように、ワーズワースの落書きとガラスのふたが、市之助の記述どおり、私の目の前に現れた。ガラスのふたを留めている木の枠が年代ものだ。机そのものは、二百数十年の時を経て、造りはすっかりしていて、今どきのちゃんな机ではない。ワーズワースはその上に小刀で深々と自分の名前を彫り込んでいた。他にも名前を彫り込んだ落書きがたくさんあるところを見ると、子供たちは卒業記念のつもりで彫り込んだのだろう。

この学校は十六世紀に設立された伝統ある学校だ。しかし、市之助の時代にはすでに一種の博物館となっていた。ただし、これが決してワーズワースが学んだことと、彼の落書きがあることだけを売りにしたものでないことは、訪れてみるとすぐにわかる。イギリスにおける古いグラマースクール制度を学び、その実態を知る博物館として、今も多くの学生や子供たちを引きつけている。もちろん建物は、十六世紀の創立期のままだ。

入り口には門番がいて、来館者から料金を徴収している。市之助は、

「まだ門番が来ない早朝に入ったため無料だった」

と書いているが、私の場合、玄関を入ろうとすると首からバッグを提げた門番が近づいてきた。

"How much?"

と聞くと、

"Two pounds. But if you are over sixty years old, half of that."

そうかそうかと嬉しくなって、

"Oh yes, I'm just sixty."

と、一ポンドを支払った。歳をとるところという得もあるのかと、そのときは生まれて初めて体験する老人料金というものに感激したのだが、教室に入る石段に足を乗せたとき、その足が急に重く感じられた。

「そうか、俺は老人なのか」

重い現実を直視させられた瞬間であった。

自分では、老人なんて遠い遠い先の話だと思っていたのに、門番の目には、この男、きつと六十を過ぎた老人にちがいないと映ったのだ。ショックでならなかった。

■ワーズワース詩集(三)

ワーズワースは、グラマースクール在学中に、父親の死という第二の悲劇に見舞われた。十三歳のクリスマス休暇中のことだ。そのときを思い起こして書いた詩を紹介する。その後の彼にとって原風景とも言える光景がここに歌われている。やはり私のつたない訳である。

クリスマス休暇を前にしたある日、

迎えにくるはずの馬車を待ちきれなくて、

私は原っぱの方にまっしぐらに駆けていった。

村にやってくる二本の道が交わるあたりに岩山があり、

そこからどちらの道も遠くまで見渡された。
馬車はどちらから来るのだろう。

斥候のような気分で進んでいき、岩山を登った。
その日は風がひゅーひゅーと吹き荒れていた。

私は吹きさらしの石壁に身を寄せ、草の上にしやがんだ。
見ると右手に羊が一匹うずくまっており、

左手には冬枯れの山査子が一本さびしく立っていた。
霧が出てきた。眼下の林や野原は今にも視界から消えそうになった。

私はひたすら目をこらし、馬車の姿を追い求めた。
帰省して十日も経たない、打ち萎れた季節に、父が死んだ。

私は兄と二人の弟とともに、父の遺体を野辺に送った。
深い悲しみのうちにことは進み、

すべては私にはむごい懲罰に思えた。
そして、あの日のことが思い出されてきた。

岩山の上で期待に胸を震わせていたあの日のことが。
あのはやはやる気持ちを思い起こすと、

ありきたりの道徳的反省などでなく、
もっと奥深いところの感情がこみ上げてきて、
私は思わず神に頭を垂れた。

神は私に、希望や欲望の何とはかなく虚しいものであるかを教え諭した。
成長してからも、

あの日の風雨のさすまじさ、自然の威力、
一匹の羊、冬枯れの木、

石壁を打つ寂寥とした風の音、
森や水辺のざわめき、

二本の道を進んでくる霧のありありとした姿、
これらすべてが一つの光景、一つの響きに結ばれて、

何度も何度も私はそこに立ち返り、
泉のようにその水を飲むのだった。

冬の夜、激しい風雨が屋根を打ちすえるとき、
夏の日盛りの森で、

生いしげる大木を見上げるとき、
風に打たれる巨岩を目にするとき、

私の心には決まってある働き、内面の震えが訪れるのだ。
それがいかなる意味を持つとも、

日々の煩わしさを避けるためだけのものではあったとしても、
むなしい安逸のひとつときに一瞬の生気を吹き込むだけのものではあったとしても、
こうして彼ら兄弟は、最年長のリチャードが十五歳、次男のウィリアムはまだ十三歳のとき、早

くも両親をなくしてしまったのだった。しかも、父親が遺言を残さなかったために、金銭トラブルにさえ巻き込まれることになった。

ウィリアムにとっては、母親の死はまだ八歳のとき。悲しみもそれほど深刻ではなかっただろうが、父親の死による衝撃は計り知れないものだった。クリスマス休暇で迎える馬車を待っているときの荒涼とした牧草地の風景が、引き続き父親の死という衝撃によって彼にとっては生涯忘れられない記憶となり、その後も、折に触れて脳裏によみがえる深層部の原風景となったのである。

ワーズワースはホークスヘッド時代、校長先生から詩人としての才覚を高く見込まれ、自らも、将来進む道を「詩人」だとはつきり自覚するようになっていた。

父親の死から半年後の詩を紹介する。

サンデイズ師が偉大な使命感に燃え、

私立学校として創設したホークスヘッド・グラマースクール。

私はこの学校をこよなく愛する。

そこで子供たちは古典的金言に触れ、

その精神は理想郷へと導かれる。

永遠の科学の御代に王冠を授ける理想郷、

出し物は、荘厳な灯明に照らし出された

神聖な真実。

そこでは、好奇に燃える心が、駿馬の翼に乗って

天空を自在に駆けめぐりつつ、

物事の神秘の根源を探り、

自然の秘密の泉に導かれる。

サンデイズとは、ホークスヘッド・グラマースクールの創設者エドウィン・サンデイズのこと。

一五一九年にホークスヘッド近郊で生まれ、ケンブリッジ大学で学んだ後、学者として名をなし、大学副総長まで務めた。その後さらに聖職者の道に進み、ついには英国国教会の大主教の座にまで昇り詰めた。そんな彼が使命感に燃えてホークスヘッド・グラマースクールを開いたのは、一五八五年、六十六歳のときだった。

詩は、少年ワーズワースの生き生きとした学びの日々を彷彿させる。同時に、彼のような俊才の向学心をも十分に満たしてくれるホークスヘッド・グラマースクールのすばらしい教育内容と教授力も、この詩から読み取れる。

グラマースクールを卒業したワーズワースは、ケンブリッジ大学に入学し、さらに大学卒業後は、語学の勉強のためにフランスに渡った。そこでフランス革命に遭遇し、ある女性との間に娘をもうけることとなった(後に、イギリスでの正式な結婚を前に、妹ドロシーとともに再度渡仏し、娘にも会い、しかるべき後処理はしたようだ)。

イギリスに戻った一七九五年、後見人の叔父から父親の遺産をもらい受け、詩と文学に没頭できる経済的なゆとりを得ることができた。同じ一七九五年には詩人としての生涯を決定づけることとなるコールリッジとの出会いがあり、一七九七年、コールリッジと共に最初の詩集『抒情詩集』を出版した。ところが、詩集の評判を見ぬうちに、ワーズワースとコールリッジはまったく別個にド

イツ旅行に出かけ、ワーズワースは一七九九年になってようやくグラスミア湖のほとりに一軒の家を借りて定住生活に入った。ドロシーと二人で住んだその家を「ダブ・コテージ」(鳩の家)と名付け、ワーズワースの創作活動は、そこで最も充実した時期を迎えることとなった。その頃の彼らの生活ぶりは、ドロシーの日記や手紙から生き生きと伝わってくる。

■ドロシーの日記と手紙(一)

ワーズワース兄妹がダブ・コテージに移り住んだのは一七九九年の暮れだった。コールリッジとともに湖水地方を散策していたとき、グラスミア湖畔に空き家を発見し、借りることにした。それがダブ・コテージだった。

ダブ・コテージが建てられたのは一六〇〇年代前半だと言われている。最初は民家だったが、一七〇〇年代にはDove and Oliveと呼ばれる旅籠になった。その旅籠が一七九〇年頃廃業となり、ワーズワース兄妹がその前を通りかかったときは、貸家になっていた。すでに築二百年に近い家だったわけである。

彼らはこれをDove Cottageと名づけ、さまざまに手を加えて住み心地のよいものにした。そうした様子が、一八〇〇年九月の手紙に記されている。

湖(グラスミア湖)には自分たちのボートがあります。小さな果樹園と庭もあって、手入れは自分たちでやっています。誇らしくて、とても気に入っている庭です。

庭は道路から隔てるために石垣で囲みました。そして、庭と果樹園を仕切っていた垣根は取り払いました。果樹園は奥まったところであって、眺望がよく、とても気持ちのいいところです。

家は小さいのですが、私たち二人が住むには十分な広さです。家の中はきちんと整理して住み心地のよいものになりました。

外観も素敵なものになりました。というのは、外壁にバラとスイカズラを這わせていたのがようやく咲いて、緑の葉っぱと真っ赤な花が壁面をびっしりとおおったのです。また、糸を張って深紅の実のなる豆も這わせました。これは見た目にも美しく、しかもたくさん実をつけるので実益にもなっています。

この家の唯一の難点は道路に少々近すぎることです。しかも家が狭く、物音が端から端に突き抜ける構造になっているため、来客があると病人は静かに休むことができません。

一階には客間と寝室があります。石の床なので、部屋いっぱいマットを敷き詰めました。寝室にはゆったり二人が寝られるほどのキャンプ用簡易ベッドを置いています。

二階には私たちの居間があります。また、シングルベッドが二台ある寝室、がらくた部屋、それと低くて天井のない小部屋もあります。小部屋には壁紙代わりに新聞を貼り、カーテンのない小さなベッドを置きました。

ボートは、散歩の行き帰りに使ったり、ボートこぎ自体を楽



ダブコテージ

しんだり、彼らにとつてはなくてはならない愛用品だった。

果樹園のことは、今回の旅行で認識を新たにした。どの家にも必ず果樹園と庭があり、しかも、両者は垣根で仕切られている。果樹園があるのもイギリス風なら、庭と果樹園がはつきり仕切られているのもイギリス風なのだ。

庭には、人がようやく歩ける程度の細い小道があつて、その周囲に一面びっしり花が植えられている(イングリッシュガーデン)。果樹園に植わっているのは、たいていリンゴだ。日本よりは小振りの、赤くないリンゴ。ニュートンの家にも、当然ながらリンゴの果樹園があつたのだろう。その実が落ちるのを見て、万有引力の法則が発見されたというわけだ。ダブ・コテージの果樹園もリンゴである。

家の外壁には、ドロシーが植えたバラの子孫かどうかは知らないが、今もバラがからみついて鮮やかな彩りを添えている。

ドロシーは家の狭さをしきりに言っている。しかし、日本の家からすれば広い部類だろう。旅籠として使われていたくらいだから、狭いはずがない。

食事や書き物など、ふだん最も頻繁に使われたのは一階の客間だった。一階には台所、食物貯蔵室、仕事部屋(アイロンかけなどに使う)などもある。一階の寝室は、最初はドロシーの寝室だったが、ウィリアムが結婚してからはウィリアムとメアリー夫婦の寝室になった。

二階の寝室は、最初はウィリアムが使い、ウィリアムの結婚後はドロシーの寝室になった。がらくた部屋と呼ばれている部屋は、コールリッジなどが訪問したときの寝室だ。

おもしろいのは天井のない小部屋。壁紙に新聞を使ったと書かれているが、今も当時の新聞が貼られている(まさか当時のままとは思わないが、日付は当時のもので、いかにも年代物だ)。子供が生まれてからは、子供部屋になった。

私たちは毎日グラスミア周辺の散策を楽しんでいます。散策のコースはいろいろあるのですが、中でも好きなのは山です。親しめば親しむほどますます山が好きになってきました。

弟のジョンがここ八ヶ月一緒にいます。その間にさまざまな友人がやってきました。たとえば、メアリー・ハッチンソンが五週間、コールリッジが一ヶ月、そしてまたコールリッジ夫妻と小さな男の子が約一ヶ月、といった具合に。

ウィリアムの健康がすぐれません。彼はアルフォックスデン時代から、多くの詩を書きすぎました。アルフォックスデンはドイツに行く前に一、二年住んでいたところでした。そこで多くの詩を書き、イギリスに戻ってからもまた多くの詩を書きました。彼は感性をこき使い、ほとんど興奮状態で詩を書くので、それが精神にもたらす苦痛は大変なものです。

コールリッジがケジックにやってきたので、一週間彼の家で過ごしました。彼の家はすごくいい場所にあつて、奥さんと彼のどちらの都合をも満たしているのです。というのは、奥さんは町の近くがよく、彼は田園がいいのですが、家はケジックから半マイルほどしか離れていないにもかかわらず、谷全体を見渡すことのできる位置にあるのですから。

私たちがやっていることはいつもほとんど変わりません。でもこれは普通の人の目には少々異常に映るはず。一日ずっと、あちこち歩き回ったり湖でボートをこいだりしているので。夏は、果樹園のリンゴの木の下や湖畔の森に長くいます。そこでウィリアムは詩を書き、ジョンは釣りをします。また、自分たちの本や人から借りた本を読みます。私は今、翻訳

したい気持ちもあって、ドイツ語の本を読んでいます。でも翻訳の仕事は私一人には荷が重すぎるし、かといってウィリアムは忙しいし。結局のところ、いつになったら実現できるのかわかりません。

ジョンはドロシーのすぐ下の弟である。東インド会社の船乗りで、滅多に陸に上がることはないが、上がると長い休暇を楽しむことができた。彼はやがて船長になり、この手紙の五年後、船の難破で命を落とすことになる。

メアリー・ハッチンソンは、ドロシーやウィリアムの幼なじみだ。この手紙の二年後、ウィリアムと結婚することになる。

コールリッジは、ワーズワースを語るとき、欠かすことのできない親友である。コールリッジは、自分とワーズワース兄妹のことを次のように書いている。

"We are three persons, it is but one soul." (私たちは三人だが、心は一つだ)

彼らが初めて出会ったのは、ウィリアムとドロシーがイギリス南西部を旅した一七九五年であった。やがて一七九七年、ウィリアムとドロシーは、コールリッジが住んでいたネザー・ストーイという町から五、六キロしか離れていないホルフォードという町に家を借りて移り住んだ。それがアルフォックスデン・ハウスと呼ばれる家である。ブリストル海峡南岸のクオントック丘陵にホルフォードの町はある。

彼らの散歩狂は湖水地方に始まったわけではない。クオントック丘陵でも、昼であれ夜であれ、一日中歩き回っていた。付近の人からはフランスのスパイではないかと疑われ、変人扱いされていた。

そうした有閑青年の暮らしを通して、彼らは膨大な詩を書いた。そして結実したのが二人の共著である『抒情詩集』だった。

ところが詩集が世に出るか出ないうちに、一七九八年、ワーズワース兄妹もコールリッジも、それぞれ独立にドイツに旅立ってしまう。あえて詩集の評判からは目をつむったのである。

ドイツ旅行から帰ると、ワーズワース兄妹は湖水地方に定住の地を求め、一七九九年ダブ・コテージに引っ越した。それから一年もせず、今度はコールリッジが湖水地方北部の町ケジックにやってきた。ダブ・コテージとケジックは二十キロ以上も離れているが、彼らはそんな距離はものともしないで、徒歩で行き来した。

■ドロシーの日記と手紙(11)

ドロシーの日記には物乞いの話がよく出てくる。住む家がなく、放浪の旅をする家族、これが物乞いの実態だ。社会的背景はわからないが、ワーズワース兄妹のような有閑青年がいた反面、その日をしのぐために物乞いをせざるをえない人たちもいたわけである。

一八〇〇年七月十日

二週間前、こんなことがあった。並外れて背の高い女の人が玄関先に物乞いに来た。長い茶色の外套を着、日よけのない白い帽子をかぶった女性だった。顔は薄黒く日焼けしていたが、かつて美人だったことは一目でわかった。二歳ぐらいの小さな素足の子供の手を引いていた。夫は鑄掛け屋をしていたが、子供たちを連れて出て行ってしまったと言っていた。私はパンを

少しあげた。

それからしばらくしてアンブルサイドに行くために出かけると、ライダルの橋のたもとで彼女の夫らしき人を見かけた。道ばたに腰を下ろし、そばに二匹のロバがいて草を食べていた。二人の幼子が草の上で遊んでいた。物乞いをする風はなかった。

通り過ぎて数百メートル行ったとき、前方に二人の男の子の姿が見えた。十歳と八歳くらいの子で、蝶を追っかけて遊んでいた。だらしない恰好をしているが、決してぼろを着ているわけではなかった。ただ、靴も靴下も履いていなかった。上の子は帽子を黄色い花で飾っていた。下の子は縁なしの山形帽の周囲に月桂樹の葉を刺していた。

二人は夢中になって遊んでいたが、私がすぐそばまで近づくと、突然哀れっぽい調子で物乞いをした。

「あなたたちのお母さんに今朝、施し物をしましたよ」

と言うと、

「えっ？」

と上の子が驚き、

「そんなはずないよ。母ちゃんはもう死んじゃったもの。父ちゃんは隣町で焼き物作りをしてただけだね」

と言った。私の目には、この二人は玄関で物乞いをしたあの女性そっくりだった。間違うはずはなかった。私は、

「絶対間違いはないんだから」

と言い張って、子供たちには何も施しをしなかった。すると突然、

「逃げるぞ」

と上の子が叫び、二人は稲妻のように駆け出していった。

しかし、姿を消したあと、また長い道中をぶらぶらしていたようで、アンブルサイドまで行かないうちに再び彼らを見かけた。二人はマシュー・ハリソンさんの家に行こうとしていた。上の子は肩にずだ袋を担ぎ、わざと辛そうに足を引きずっていた。

アンブルサイドからの帰り道、今度はロバを追い立てながら歩いている母親を見かけた。二つある荷カゴのうちの一つには小さな子供が二人入っていた。母親は、ロバを追い立てる杖を振り上げながら、子供たちを叱りつけていた。

彼女は朝、スコットランドの出身だと言っていた。訛りからもそれはわかった。ウィツグタウンに住んでいたようだが、家を維持することができなくなって旅に出たらしい。

アンブルサイドはワインダムリア湖の北岸にある美しい町である。グラスミア湖畔にあるダブ・コテージからは、グラスミア湖、ライダル湖を横に見ながら南に約一時間(五キロほど)でアンブルサイドに着く。ワーズワース兄妹にとってはほんの腹ごなし程度の散歩コースだった。

グラスミアからアンブルサイドまでの五キロほどの道中を、十歳を頭に四、五人の子供を連れた夫婦が物乞いしながら旅していたわけだ。しかも、一緒にではなくバラバラに。大きな荷物はロバの背中に乗せ、おそらく野宿をしながらの旅だったのだろう。父親は物乞いには加わらず、もっぱら母親と上二人の子供が物乞い役だったようだ。

悲しい光景だが、これは一般庶民の旅の常態だったと言えそうに思う。今では旅は楽しいレジャ

ーだが、昔は人生の辛さの象徴だった。ワーズワースたちのように親の遺産で暮らす有閑青年はともかくとして、生活のゆとりをなくしたからこそ旅に出ざるをえない人にとっては、道中をしのぐ手段は物乞い以外になかったのだろう。

十歳と八歳の子供が蝶を追いかけて遊んでいたこと。帽子を花や月桂樹で飾っていたこと。これを読むと、まっすぐに無邪気な子供心と、彼らを育てた親の几帳面な生活習慣が感じられ、よけいに悲しみが増す。

ダブ・コテージでは子供たちのダンスパーティーも開かれていた。

一八〇五年十二月二十六日

私は呼び出されてジョニーと台所で踊った。息が切れるまで踊り続けた。毎年のことだが、グラスミアのバイオリン弾きがこの日、家々を流して回る。それで、私の家の近所では、子供たちがみんな我が家の台所に集まってきて踊ることになっている。ジョニーはかなり前から、いつバイオリン弾きが来るの？ と、そればかり尋ねていた。そのくせ彼は恥ずかしがり屋で、私以外の誰とも踊ろうとしない。私が階下にいるときには元気な顔をしているのに、私がいなくなると、もう誰も彼を動かすことはできない。

それにしても、子供たちが小さな足で石の床を踏みならす音は気持ちよいものだ。男の子や女の子たちが五、六人集まっている。ドロシーは夢中になって踊っている。ジョニーはまるで老人のようにしかめっ面。

毎年、クリスマスの翌日にバイオリン弾きがやってきてダンスパーティーを開くのが、ダブ・コテージの習慣になっていたようだ。主役は子供たちだ。

ここに出てくるジョニーとドロシーは、ウィリアムの息子と娘だ。日記の書き手であるドロシーからすれば甥と姪である。

今では、音楽はいつでもどこでも聞けるが、録音技術のなかった昔は、生でしか聞けないものだった。考えてみると、この違いは大変なものだ。家に楽器があつて、それを弾く人がいる場合は別として、一般の家庭では音楽を楽しむ機会などほとんどなかったと思われる。

年に一度のこの日が、しかめっ面のジョニーにとってさえ、待ち遠しくてたまらなかったのだ。バイオリンに合わせて踊る子供たちの愉快な足音が今にも響いてきそうである。

順序が前後するが、同じ一八〇五年の春、弟のジョンが船の難破によって溺死した。それを記した手紙がある。

一八〇五年三月十六日、グラスミアにて、マーシャル夫人へ。

私は泣くことによってようやく耐えています。他の人たちが彼のために泣くのを見ることによってもです。その人たちに祝福あれ。

今こうして書いている間も涙は止まりません。谷間を歩きながら泣き続けています、かつてはあんなにも喜びに満ちていたこの谷間なのに。見るものすべてが私に喪失感呼び起こします。どこを見ても、彼が愛し、喜びを感じなかったものはないのです。

.....

私の慰めは、静かにゆるやかに呼び起こされるのではなく、激しい感情の突風とともにやってくるようです。

今ちようど、夕日が山の頂に美しい光を投げかける時間です。その光には今までと変わらぬ

純粹の喜びが満ちています。しかし、私は同じ喜びを感じる事ができません。できるはずがありません。だのになぜか、私の心はこれまでもまして穏やかに静められています。もし彼がこの美しい光景をもに眺める事ができたなら、どんなにか彼は幸せだろう、そう思うと私の心は和らぐのです。

私の中に彼は生きています。しかし彼が、悲しみや苦痛とは無縁の世界に行ってしまったことも私は知っています。彼はもはや私たちのために泣くことはありません。私たちの感性の中に目覚めている彼の繊細な心は、ひたすら私たちの幸せを願いつづけているのです。

彼は、人生の最もはつらつとした時期に召されてしまいました。純粹で、子供のように無垢な人でした。彼ほどおごることを知らない人はありませんでした。彼の勇氣は、もはや語る必要ありません。最後の試練の時、彼は勇氣をもって行動しました。船が沈むわずか前、わざと明るい表情を浮かべて一等航海士と会話していた姿が目撃されています。そして、いよいよ打つべき手段がなくなったとき、最後に彼は「神のご意志のままに」とつぶやいたそうです。自分の死が避けられないことを悟った瞬間にも、彼の心はいつもと変わらず冷静だったと私は信じています。残された私たちが受ける苦悩を思つて心が痛むことがなかったとしたらの話ですが。

彼と共有した喜びがいかなるものであったかを知らない人や、彼と一つ屋根の下で過ごした八ヶ月間、私たちがいかに幸せであったかを知らない人には、私たちの喪失感の大きさは推しはかれないと思います。

彼は孤独を愛し、また社交的でもありません。彼は一人で何時間も山を歩き回りました。釣り道具を持っていくこともあり、歩くことをただ楽しむだけのときもありました。ウィリアムと歩き、私と歩き、あるいは三人連れ立って歩くこともありました。彼はいつも、子供にしか見つけられないさまざまなこと、大人が普段見すごしてしまう小さなことを発見しては、喜んでいました。彼の目は鋭くて、どんな小さなものをも見分けられました。また彼の感性は非常に繊細でしたから、何を見ても、それをつまらないと感じることはありませんでした。夕方彼に誘われて、一緒に月や星や雲や、月明かりに照らし出されたこの谷間を眺めたことが何度あったことでしょう。星や月を眺めることが、彼にとつての最大の喜びだったのです。海の上でも彼はそれらを友としていました。夜の静けさが紡ぎ出してくれるさまざまな想像の世界で、彼は退屈することがなかったのです。

私たちの家にいるとき、彼は暖炉のそばで幸せそうでした。どんなに小さな家事にも興味を示し、私たちの家をたいへん気に入っていました。家具を取りついたり、庭を造ったりするのを手伝ってくれました。彼が植えた木が今大きく育っています。

彼が私たちの家にやってきたのは、引越して間もない一八〇〇年一月のことでした。九月二十九日までいました。その間にメアリー・ハッチンソン、今はメアリー・ワーズワースですが、が六週間滞在しました。ジョンはよく彼女と散歩に出かけました。二人は互いに強く心を惹かれていたのです。だからこそ彼女は私たちとともにジョンの死を嘆いているのです。ウィリアムと私が大切な人をなくしたからというだけではないのです。彼女自身、ジョンを心から愛していたし、彼のことをよく知っていたのです。彼女の心は私たちと同じく、ジョンに向けています。私はこの世を去ってしまった弟のことを考えずにはいられません。しかし、今

日は心が落ち着いています。彼をたたえ、彼を愛し、彼の思い出に心からひたっています。手紙の相手であるマーシャル夫人（ジェイン・マーシャル）はドロシーの少女時代からの親友で、不幸せだった頃、ドロシーの心の支えになってくれた人だった。

ドロシーはおそらくこの手紙を、ダブ・コテージに近い、ジョンとの思い出に満ちた谷間で書いているのだと思う。歩く道々でも涙は乾くことがなく、足はいつしかこの谷間に向かったのだろう。岩に腰を下ろすと、眼下にはジョンがいた頃と変わらぬグラスミア湖の姿があり、対岸の山々はゆるやかに空に向かって波打っている。

ひとしきり泣いたあと、便せんを取り出し、悲しみを吐き出すようにジェインに語りかけ始めた。気がつくと日は西に傾きかかって、燦然とした光が山の稜線を際立たせている。呆然とこの美しい光景に見とれていると、ドロシーは突如深い喪失感に襲われた。しかし不思議にも、それはたちまち平安の中に溶けていき、そばにはジョンがいて二人で夕焼けを眺めている幸せな自分が幻覚される。うっとり空を見つめているジョンをそばに感じると、ドロシーの心は慰められ、筆を置く頃にはすっかり落ち着いていた。

このジョンという人、ウィリアムやドロシーの弟だが、なんと魅力にあふれた人だろう。繊細な感性、無垢な心。子供のままの心を持ち続けた自然人だ。

ジョンは本で学ぶタイプではなかったようだ。どっぷりと自然につきり、自然の中で成長し、やがて船乗りとして世界の海に乗り出していった。勇猛果敢な海の猛者ではなくて、孤独を愛し、夜の星々を友とする船乗りだった。

人生の最後の瞬間、船員たちを可能な限りボートに避難させた後、自らは海の藻屑と消えはてた。その様子を、生きて帰還した船員からドロシーは伝え聞いた。船長ジョンの究極の勇氣と責任感に胸をつまらせたのだった。

■多様性の価値

(二〇〇八年九月十二日《金》)

先日、気になる新聞記事を見た。大阪の橋下知事が、全国一斉学力テストの学校ごとの結果を、大阪府下の各市町村教育委員会は公表すべきだと言ったというのだ。これが単なる私的意見なら、何を言おうと自由である。問題はそれに続く言葉にある。

「公表するかしないかで、その市町村への交付金の額に差をつける」

これは大問題だ。つまり、知事の信念に従う市町村には多くの交付金を出し、それに従わない市町村に対しては交付金を削るといっているのである。とんでもない話だ。

今、全数調査的な一斉学力テストそのものは是非が問題になっている。仮にそれを是としたとしても、その結果をどう使うか（公表するかどうか）については、意見は大いに分かれるところだ。当事者の文部科学省ですら、公表方法を一律に規定できないでいる。実施は強制するが、それをどう使うかは各自治体（の教育委員会）まかせというのである。これは「自主性」という名のもとに従順度を観察する、いかにも官僚の発案らしい、方策にも見える。

そもそも文科省が知りたかったのは、現在の小中学生の学力水準とその動向であろう。自らが大々的に推進してきた「ゆとり教育」や「総合的な学習」が、案に相違して学力の低下を引き起こし

ているのではないかとする懸念が、PISA（国際学力調査）の結果をきっかけに、多くの教育機関や研究機関からわき上がってきた。文科省自身もそうした意見を追認する方向に向かった。つまり、十年にわたって現場の尻をつつき回した挙げ句、ようやく根づきかかった「ゆとり」と「総合学習」の方針を、一夜にして大転換する必要に迫られたのだ。転換に対する根強い反対論者を説得するためにも、小中学生の学力の実態を把握しなければならなくなったのである。

全国一斉学力テストが何十年ぶりかで復活した背景はそのようなものだったと思う。

だが、現状を把握するためだけでなく、全数調査でなくとも、抽出調査で十分である。それで十分な精度の結果が得られる。統計学のこの原理を知らない文科省ではない。それをあえて全数調査にしたことには、単なる現状把握以上の目的があった。その目的は見え透いている。地域間、学校間等の成績の優劣をはっきりあぶり出そうというのである。場合によれば、クラス間の優劣まではつきりさせ、それを教師一人一人の指導力の差に起因させようというのである。

こうした動きに対して、「無用な競争心をあおる」という論点で対抗することが多いのだが、問題の本質をそこに置くのは正しいことではないだろう。本来「競争」は資本主義の基本的駆動力であって、過去において一定の効力を発揮してきたのは事実である。今の時代は、それに代わりうる新しい原理が確立しないまま、競争が失せつつある時なのかもしれない。心ある人からは、競争はよき時代の懐かしい「正義」とさえ思われ始めているような気がするのである。

というのは、近年の風潮として、「成功」は、苦労や努力を前提とした正当な競争によって勝ち取るものではなくて、狭間を突いたり裏をかいたり、賭け事めいた運に賭けたりと、一種のゲーム的なずるがしこさによって獲得するものという発想が広まっているように思われるからである（ライブドア事件や、大分の教員不正採用などにその先鋭例を見る）。まじめなコツコツ型が隅に押しやられている時代と言ってもよい。

では、地域間、学校間、クラス間等の成績の優劣を公表することになぜ問題があるのか。

一つには、それが勝者（優者）と敗者（劣者）の色分けにつながり、どこかに必ず悲嘆に苦しむ人を生むからである。

仮にもし、東日本と西日本との成績の差が発表されたとしよう。その結果をもって苦しむ人はおそらくどこにもいない。責任の受け手があまりに漠然としていて、それを個人に帰する手だてがないからである。しかし仮に、東日本管轄の教育委員会と西日本管轄の教育委員会があったとすれば、事態はまったく別ものとなる。両者の成績に有意の差が見られたとすれば、まず劣者の側の委員長が大きなプレッシャーを感じるだろう。その人が弱い人なら、責任を一身に背負って、辞任ないし、極端なケースだと自殺などというケースにまで追い込まれるおそれがある。もしも強い人（図太い人）なら、責任を自分よりも下位の者に押しつけるだろう。そしてこれまで以上の締めつけを計ることになる。

押しつけられた下位の者は、またその人の性格の強弱によって同様の二道をとる。この連鎖はどこかで止まるだろうが、下に行くほど該当者はねずみ算式に増え、結末は必ず、ある特定の個人の悲劇となって終わる。「組織の責任」という漠然とした形で終わることは稀である。仮にそう見えたとしても、必ずどこかに劣者と位置づけられて苦しむ人が生み出される。数年前、広島で校長先生が自殺した事例があったが、あのケースは下位の者に責任を転嫁できなかった良心的な（弱い）個人の例であったろう。

東日本と西日本は仮想例にすぎないが、地域間、学校間、クラス間となれば、現実の問題である。いずれの場合もたいていは、最末端の教師が責任の受け手となる。そして、その指導力が問われる。名指しまではされなくとも、大きなプレッシャーと苦悩を背負わされるのである。

別の見方をすれば、どこかにそのような劣者（スケープゴート）を生み出すことで、他の者は精神的な安泰を得るのである。これが勝者と敗者の色分けである。それによって何か大きな教育的前進が計られるかと言えば、実は何もない。

全国一律の学力テストという一度きりのペーパーテストの結果が、教育という無辺の裾野をもつ人間活動の実態を正しく反映しうるかと問えば、一〇〇人中一〇〇人までが、まずまちがいに「そんなことはない」と答えるだろう。

劣者とみなされた人が、はたして教育者として他の者よりも劣っているのか、無能なのか、指導力不足なのか。これは誰にも分からない。劣者と判断された学校が、他の学校よりもレベルの低い教育しか行っていないのか、これも分からない。正直に現状のまままで試験に臨んだ学校と、姑息な手段で成績を上げる工夫をして試験に臨んだ学校の差が、結果の違いを生んでいる可能性だってある。

数十年前に今回同様の全国一斉学力テストが行われ、それが自壊したのも、要因の一つはそのようなところにあった。担任が試験監督で机間を巡視しながら、間違いの答えを書いている生徒の間違い箇所を指でトントン叩いたりとか、試験当日、平均点を明らかに引き下げると思われる生徒を強制的に休ませたりとか、種々の問題が明らかになったのである。

教師一人一人の教育成果を短絡的な数字で判断する発想からは、その人が行っている教育の全体像は見えてこないのだ。それに対する正しい評価などできるはずがない。根拠のない優越感や劣等感を生み出すのが関の山である。

もっといけないのは、結果を目先の数字に短絡させて評価する体制の下では、教育方法を改善するための工夫や、長期ビジョンに立った試行錯誤の余地がなくなってしまうことである。

「あの教師がある方法をとってうまく結果が出た」

「じゃあそれを制度化して、みんなで実行しよう」

そんな教育になってしまう。

本来、教育というのは、教師と生徒との微妙かつダイナミックな受け答えのもとに成り立つものである。ある教師がある生徒集団を相手に、ある方法をとってうまく結果が出せたとしても、翌年その教師が別の生徒集団に対して同じことをやって、同じ結果が出せるかというとは、そんな甘いものではない。ましてや、別の教師が同じことをやって同じ結果が出せるなどは、期待する方が無茶である。

今日成功した方法が、明日は成功しないことだってあるのである。

ところが、管理者の立場に立つと、何かを制度化しないと自分の仕事の成果を残せないものだから、うまくいった事例を、地域全体とか学校全体の制度として定着させたくなる。それが管理者の宿命的志向性なのである。しかし、成功事例であるとはいっても、それがいったん制度として固定され、強制されると、とたんにそれは腐ってくる。成功事例が成功事例たりうるのは、それが臨機応変の工夫によって生み出された瞬間のみである。成功事例は一過性なのである。

臨機応変の工夫や長期的視点に立った工夫がなければ、教育は生きたものとして成長しない。も

しも仮に、教育の世界に「これがベスト」という方法があるのだとすれば、長い教育の歴史の中でそれが確立していないわけがないだろう。そして全教師がそれに忠実にしたがえば、あらゆる現場で教育はベストなものになるはずである。しかし、現実はそのようになっていない。理由は一つ。「ベストな教育方法」と呼べる手法は存在しないからである。ベストな教育方法は、いつでも、その場で流動的なのだ。教師に固有であり、時と場合に固有なのである。あらゆる教師、あらゆる時と場合に通用するベストな教育方法などありはしないのだ。

教師一人一人が最大限の工夫を發揮するためには、なにはともあれ、それが許される環境が存在しなければならぬ。

「今日の成果を明日の数字に出せ」

こういう近視眼的な目でしか物事を見ない環境下ではそれはできない。自分が最大限に生かされ、評価されているという安心感とプライドが持てる場所でなければ、思い切った試行錯誤はできない。大きな飛躍はのびのびとした心からしか生まれぬ。明日の結果にのみ気を遣い、それに怯え、汲々としている環境下では、のびのびとした教育はできないのである。

まっとうな自立者同士の、まっとうな競争、しかもその結果を勝敗の帰趨にかかわらず互いにたたえ合うことのできるような競争。負けても、それはある面で負けたのであって、他の面では勝っている。勝ってもそれはある面で勝ったのであって、他の面では負けている。それを互いが謙虚に認め合うことのできる競争。切磋琢磨。これが教育の世界にあれば、教育はもつとのびのびとしたものになるだろう。

残念ながら、いまの教育界は、縦の指令系統に縛られた世界になっている。現場にはまっとうな自立者は少なく、しかも彼らが自由に働ける体制も、またない。

もう一つ考えたいのは、多様性の価値についてである。いろいろな考えの人がいて、いろいろなことをやっている、そのこと自体がすでに大きな価値なのであって、仮に正しいとされる見解であったとしても、全員がそれ一色に塗りつぶされると、その組織なり社会なりは、一瞬にして窒息し、腐ってくるのである。

全国一斉学力テストの結果をどのように扱うか、それに対していろいろな意見が出、いろいろな考える人がいる。それでいいのであって、そのうちの一つの見解をトップに立つ人が押しつけることは、すでにその人自身の腐った体質と窒息の実態を証明しているのである。そこからはなんらの価値も生み出されない。

トップが強制力を發揮すれば、当然ながら、へつらう人が出てくるだろう。反発する人が出るだろう。そして最も多く、苦悩と涙の人が出るだろう。

そして、やがて体制は自壊する。北朝鮮を見ていてもそうだ。権力があまりに強いから、いまはへつらう人の天下だが、これが永遠のものだと思う人はいないだろう。アメリカのブッシュ大統領が全世界を、「対テロ同盟」に参加する国と参加しない国に色分けし、参加しない国を事実上テロ支援国とみなすと恫喝したのも、同じ発想に立つ。

そもそも、今日の世界的危機の根源は、多様性の価値を認めないところから発しているように思えるのである。自分と異なる考えを容認しない狭量さ、自分と異なる見解をもつ人を敵対者とみなす短絡性。世界にはさまざまな対立の局面があるが、そのいずれにおいても、「多様性の価値を認めない」という点で共通しているように思えるのである。

地球上に生物が繁茂し、人類が栄えてきたのは、過去において多様性の確保がなされてきたからであろう。一面的な勝ち負けや、一面的な優劣をもとに他者を排除する原理は、勝者が力を持つかぎりにおいて、同調するものを加速度的に増強させる効果がある。かつて、セイタカアワダチソウが繁茂したときも、そうだった。セイタカアワダチソウは他者を押しつけ、日本の国土を蹂躪した。だがやがて、多様性のなさ故の嫌地現象によってそれは力を失い、滅んでいった。

人類の過去の歴史においても、同様の現象は数多い。安定的に栄えた例は滅多にない。まったくないと言ってよい。たいていはシロアリに食われた家のように内部から腐っていき、最後には外部的一撃で倒れてしまう。

考えると、究極のところわれわれに必要なのは「謙虚な他者への愛」、これに尽きるのではなからうか。自分をも他人をも、一つの価値ある存在として認める精神である。相違点を敵対点と即断しない寛容さである。

橋下知事の発言に欠けているのが、この寛容さであろう。

もっとも知事は、発言の後、目を追ってトーンを下げていき、最後には

「間違いました。すいませんでした」

ですませようとしているようにも見える。イギリスならさしずめ「軽薄懺悔王」の称号をもらうところであろう。

■窓辺

(二〇〇八年十二月八日《月》)

書齋は二階にあり、隣に日本間がある。その日の気分でどちらを使うかを決める。書齋が二間あるという言い方もできる。新築したのは三十六歳の時だった。早いもので、もう二十四年だ。

三十六歳という年はぼくにとって忘れられない年である。三十五歳で何があったか、三十七歳で何があったかと問われても、即座には答えられないが、三十六歳は自分史の中で真っ赤なアンダーラインが引かれた年なのである。大きな出来事が二つあった。

ひとつは、もちろん初めて家を新築したこと。それまでの十年間は、M市に隣接するT町に住んでいた。二十歳代の若夫婦にはもったいないような庭つき一戸建ての公団住宅だった。四年間の東京暮らしが水に合わずM市に引き上げ、当初は妻の実家の離れを仮住まいとしたのだが、二、三ヶ月した頃、たまたま新聞チラシで庭つき一戸建ての安い公団住宅の募集を知り、申し込んでみた。抽選会場に出かけると、人気の家は三、四〇倍。ぼくが申し込んでいた家は二〇倍ほどの競争率だった。

じゃんけんを三人でやっても滅多に勝てないぼくのこと。二十倍は、宇宙のあなたにもう一つの地球を探すような果てしない不可能に思えた。妻に引かせてもよかったのだが、どうせダメなら自分の手でダメにしようと、ぼくが引いた。

商店街の歳末福引きでよく目にする、カラカラと取っ手を回すと玉が転がり出る装置が正面のテーブルに置かれていた。中に1個だけ赤玉があり、残り白玉である。自分が申し込んだ家の番となり、列に並んだ。ぼくは後ろから五番目。自分が引くまでには決まってしまうだろうと醒めた目で見つめていると、出る玉出る玉どれも白ばかり。とうとう自分の番となった。残りの玉はもう五

個しかない。だが、まだ三人のじゃんけんよりは確率が低い。願をかけようかどうしようかと、とりあえず取っ手を握ると、まだ回してもいないのに玉が出てきてしまった。今にも落ちそうに引っかかっていたのが取っ手を握った拍子に落ちてしまったらしい。これは何かの間違いだろうと取っ手を回そうとすると、係の人の手がすつと伸びてきて止められた。

「当たり前ですよ」

周囲が騒がしくなった。転がり出た玉は、ぼくが確認するより先に係の人の手に握られていた。開けられた手のひらに赤い玉が載っていた。

こうして、妻の両親との同居という気詰まりから解放され、丁町に住むことになった。それから十年の歳月が流れた。二人の娘が生まれた。下の娘は生まれたときから重度の障害を負っていた。生まれ落ちるや、産院では手に負えないので日赤病院へ。さらに大学病院へ。入院生活が続き、手術もした。妻は上の子の面倒を見つつ病院に通う日々となった。ミニバイクの免許を取り、バイクで通うようにもなった。痛々しくもいじらしい妻の毎日だった。

上の子が幼稚園年長組になったところ、下の子はようやく退院し、養護学校の幼稚部に入った。入ったら入ったで、送り迎えという新たな仕事が始まった。背中に負ぶってミニバイクで通うのである。その上、大学病院への通院も続いていた。病院と養護学校は同じ地域にあって、家から遠い。毎日の通いは骨身にこたえた。

「近いところに引越そう」

妻と何度も話し合った。空き地や空き家を見て回るようになった。そして、三十五歳の夏、病院や養護学校からさほど遠くないところに適当な土地が見つかった。家を建てることにした。十年前にくじ引きで安く手に入れた家が存外高く売れそうで、それが新築費用の助けになった。

着工は秋だった。図面が徐々に形をなしていくのが楽しみで、何度も何度も見に行った。骨組みだけの家の二階にはしごをかけて上ってみて、ここが書齋などと、机に向かっていている自分を想像するのも愉快だった。そのころ人生は明日に向かって無限に開かれていた。

三月に仕上がり、年度があらたまる直前に引越した。三十六歳になったばかりの春だった。

家が完成するひと月あまり前のこと、脇腹に錐で刺されるような痛みが走った。瀬戸内には珍しく雪が舞う日だった。毎日ジョギングをしないではいられない状態に陥っていたぼくは、雪を突いて走りに出た。目の前が真っ白く霞み、灰色がかかった雪片が無数の飛跡を散らしていた。視界はきかず、走っても走っても世界はただ舞い狂う雪ばかり。夏の蚊柱のように執念深くつきまとう雪だった。

一瞬、乱れる雪の万華鏡を美しいと思った。時間が止まった感覚だった。走っている感覚もなくなった。そのときだった。ちくつと脇腹が差し込まれた。数回それが続いた。その後も鈍い痛みが断続する。きりきりと差し込んでくる。こんな痛みは初めてだった。

深刻な事態を想像できず、それでもとにかく走り通した。

数日後、便が赤く染まった。驚いて家庭医学書を取り出した。症状がすべて大腸ガンへと集中する。血液混じりの下痢が続き、腹の底に重苦しい痛みがある。便はいくら出てもすすきりせず、かえって染み入るような痛みと冷や汗が残るばかり。ねっとりとしたような血便だった。

翌日大学病院に駆け込んだ。何日もかけてさまざまな検査をした末に、下された診断結果は潰瘍性大腸炎だった。ガンではなかった。ただし、

「これは難病です。治す手だてはありません。良い時期と悪い時期を繰り返しながら一生つき合
って行かないといけない病気です」

聞いて唖然とした。

「進行するとガン化することもあるので体をいたわってください。しんどいな、おかしいなと思
ったら無理をせず、体を休めることです。食事にも気をつけて、良質のタンパク質をとってくださ
い。繊維質の多いものは腸壁を傷めるのでとりすぎないように」

いろいろ言われたが、「治らない難病」、「一生つき合っていく病気」、それだけで頭の奥が灰色に
なり、胸は激しく動悸を打った。

「最悪の場合、大腸をすべて切除します。そうなると人工肛門です」

こともなげに人を脅す先生だった。取り憑かれてしまった以上は観念しろ、覚悟しろ、未永く一
生つき合っていくのだ、無駄な抵抗はせず従順になれ、そういうことだろう。結婚とどこか似てい
るなと思った。ときどき疼痛が来たり、どうしようもなく打ちのめされたりするのも、結婚生活と
似ているではないか。

こうして三十六歳はぼくにとって大きな転換点となった。走ろうにも、とことんがんばることの
できない人生。一歩手前で控えないといけない人生。抗うことのできない宿命を負った人生の始ま
りであった。

K町で過ごした最後の冬、こたつに入って家庭医学書の大腸ガンの項を顔面蒼白で読んだ冬、大
学病院で潰瘍性大腸炎との宣告を死刑判決のように聞いた冬、三十六歳の誕生日が病気記念日とな
った冬、その冬を何とか越して、春には今の家に移り住んだ。三十六歳のあのころを、ぼくは生涯
忘れることができないだろう。

あれから十四年が過ぎ、新築した家はいつしか中古ハウスになってきた。潰瘍性大腸炎からは、
もちろん縁が切れない。緩解期と激甚期を繰り返しながら、ここまでやってきた。

とはいえ、長い付き合いのうちには病気のクセもわかり、わずかな悪化の兆候を芽のうちに発見
できるようになってきた。新米患者のころから見ると激甚期といえどもずいぶん楽になった。もう
このまま歳とともに、不治の病と宣告されたこの病気も衰えてくれるのではと、甘い期待を抱くよ
うにさえなってきた。

ところがだ、五十歳になったばかりの四月だった。今から十年前だ。潰瘍性大腸炎が突如火を噴
いた。死火山ではなかったのだ。休火山の大噴火だった。

とんでもない高熱に襲われた。全身がふるえて、じくじくした血便が止まらない。立つことも歩
くこともできなくなった。トイレに行くにも這うしかない。直ちに入院した。やがて少しよくなっ
て退院し、また悪くなって入院しと、それが三度続いて、初年度は出勤したのが四ヶ月間。二年目
はまるまる一年間休職した。

入院のたびに症状は進行し、あとわずかで五十一歳の誕生日というところが最悪だった。高熱と腹
痛に全身が麻痺してしまい、生きているのか死んでいるのかもわからない。意識がぼやけ、死の淵
を何度も転び落ちそうになる。

主治医が妻に言ったらしい。

「これはもう保たないかもしれないから、今のうちに娘さんを呼んでおいた方がいいですよ」

と。ふと気がつくと、東京にいる上の娘が目の前に立っていた。どうしてこんなところに？ 夢

か幻に思えた。現実だと気づくのに数秒かかった。

口からは水も食べ物も摂れなかった。命は点滴でかすかに保たれていた。じっと体を丸め、小やみなく続く腸の痛みと高熱にひたすら耐えていた。いつまでの忍耐だと、終わりがわかっていたなら、人はどんな苦痛にだって耐えられよう。しかし、終わりのわからない苦痛をじっと耐えるのは、一秒一秒が一時間にも一日にも感じられるほど。ただただひたすら我慢するのみ。

窓をよぎる小鳥の群れと、形を変えつつ流れる雲だけが、心からの友だった。

熱が少し引いたある日、ベッドに腰掛けて、窓から春の芽吹きを見たいと思った。ところが、筋肉をどう使うと体がベッドから起き上がるのか、それがわからない。手すりを握って、徐々に徐々にと体をずらす。五分もかけて息を荒らげるうちに、ようやく足がベッドの外に出た。体をひねってベッドの端に腰掛けるまでに、さらに五分を要した。窓の外は桃畑だった。

今、書斎の窓から外を眺めつつ、ふとその日のことを思い出していた。命ある身で生き返ったその日、葉を落としたままの早春の木々に、ありありと「命」というものを見たのだった。手を広げた彼らと喜びを分かち合った。

書斎からスーパ―とその駐車場が見下ろせる。出ては入る人の流れを見つめていると、列車の窓から移りゆく景色を眺めているようで飽きることがない。

道を隔てた向こう側には県営団地がある。広大な敷地に何十棟もの建物がひしめいている。数年前、我が家に近い二階建ての小さな棟が取り壊されて、広場になった。

そこに建物があったころ、窓によく老婦人の姿を見かけた。初めて気づいたのは十年も前だった。二階の窓に身を乗り出してシャボン玉を吹いていた。シャボンの吹き棒を何度も口にくわえては、ふうーっと吹く。虹色のシャボンが空に昇るのをぼんやり見つめ、消えてなくなると、また吹き棒を液にひたして、ふうと吹く。視線は放心したように天空をさまよう。

夏だった。歳に似合わぬ水玉模様のワンピースが、肉付きのよい体にびっちり貼りついていて。気狂いしているのでは？ シャボンを吹き続ける姿に、ぼくは正気を読みとれなかった。

歳は七十前後か。顔はぶくぶくとし、半白の髪が土手の雑草のように乱れ散っている。袖は太い腕にからんで肩までめくれ、胸元からは豊満な乳房がこぼれんばかり。

一人暮らしのようだ。乱れた髪とはだけた胸元がそれを物語っていた。今にも毀れそうな危うさ。なんとかして上げたい気がする一方、醸し出される気ままさに、不思議な羨望の念も湧く。

それからずいぶん経って、シャボンのことなどすっかり忘れていた冬だった。犬を連れて散歩していると、縦横同サイズの丸い体の老婦人が手押し車を押しながら歩いていた。後ろ姿が一足ごとに左右に揺れる。どうやらスーパ―に向かっているようだ。自動ドアをくぐった。一瞬、彼女の横顔が目に入った。ぶくぶくと赤くぶくらんだ顔に見覚えがある。あつ、そうだ、あの人だ。シャボン玉の老婦人だ。まちがいない。

あのとときの危うい印象から、何という理由もなく、長くは生きられない人と勝手に想像していた。その人が眼前に現れるとは思ってもいなかった。しかも気狂いの様子などない。どちらかという和健康で、レジの女性に声さえかける。裏切られた気分がする一方で、ほっと安堵もしたのだった。

その後も二度か三度、手押し車を押して歩く姿に遭遇した。向こうはこちらのことを知りもしないし、視線に気づくこともない。ぼくがただ心の中で

「また会ったね」

と声をかけるだけ。

そして夏が来た。再びシャボンを吹くのを見かけるようになった。窓の手すりに身をもたせ、乗り出すようにしてふうつと吹く。放心した視線が美しい。やはり気狂いなのか。

仕事の手を休めて見つめていた。そして気がついた。それはシャボンではない。虹色のシャボンと見えたのは煙だった。ふうつとふかしているのはたばこである。たばこの煙が夏の日差しを受けて虹色に輝いていた。吹き棒をシャボン液にひたすと見えたのは、左手に持った携帯灰皿に灰を落とす手つきであった。

そうと気づいたとたん、気狂いの疑念とともに、夢も一瞬にして消えてしまった。何と平凡な光景なのだ。老婆が窓辺にもたれてたばこを吹かしている。それだけではないか。

だが、それはそれで一幅の絵ではあった。夏をいろどる美しい絵であった。

いまそこに老婆はいない。老婆が煙を吐いた窓もない。建物もない。空に浮かぶ蜃気楼のように、あらゆるものが消えはてた。あるのはぼっかり空いた空洞だけ。小さな空虚の広場だけだ。

■散髪屋

(二〇〇八年十二月二十三日《火》)

(一)

散髪屋に行かなくなって久しい。最後に行ったのがいつだったのかも思い出せない。

家の近くに二軒の散髪屋がある。一軒は駅のそば。歩いて三分。河北という。もう一軒は家の前の通りを反対向きに歩いて、やはり三分。増田という。

T町から移り住んだころは、河北に行っていた。自分と同年配の若い理髪師で、なんとなく親しみを感じたのが理由だった。夫婦でやっていた。何年かして、

「髪が薄くなりかかってますよ」

と言われた。だが、まだ三十代後半だ。髪が薄くなるなど、考えられもしなかった。

「気をつけてください。兆候が始めてますよ。養毛剤を塗っておきましょうか」

そんなふう言われたが、答えようがなかった。

「どこがどんなふうに？」

と聞く気にもなれない。なんだか追加料金を請求されそうな心配さえ感じて、

「いいです、いいです。まだそんな歳じゃないですから」

と言ったものの、実はその瞬間が、歳という得体の知れない宿命に取り憑かれた最初だったのである。

帰って、妻に

「髪が薄くなりかかってると言われたよ。頭のとっぺん見てくれるか」

妻は見るなり、

「とっぺんもそうかもしれないけど、このごろ額が少し広がってきたと思う。昔は額が見えないくらい髪が垂れてたんだから」

言われるとそんな気がする。だけどそれっきり気にかけることもなく、忘れてしまった。次に河北に行ったとき、ふたたび同じことを言われた。なんだか催眠にかけられているようでいやな気分

だ。

「薄くなりましたね」

と言われる筋合いもないではないか。

次は増田に行ってみた。背の低い小太りのおやじさんだった。いかにも理髪師一筋という、眼光鋭い人だった。河北は少々浮薄な感じがしていた。腕はたしかだが、ギャンブル好きという噂もあった。手早く仕上げる河北に対して、増田はゆっくり丁寧で、終わるまでにたっぷり一時間はかけてくれた。

すべてが終わってエプロンがはずされ、さてと腰を上げようとする、「ちょっと待って」というそぶりで肩に手を置き、大きな重そうな板を取り出して背中当てた。スイッチを入れると板がぶるぶる震えだし、全身に快感が伝わってくる。それで終わりかと思ったら、さらに、とろけるような指先技術で後頭部から頸、肩を入念に揉んでくれた。たまらない心地よさだ。

以来、すっかり増田派になった。増田のおやじさんは

「髪の毛に兆候がある」

などとは決して言わなかった。黙々と髪を切り、ひげを剃り、洗髪してくれた。

流行っている様子はなかった。先客がいた記憶がないのだ。ちりんと鳴るドアを開けて中に入ると、ソファで新聞を読んでいたおやじさんがこちらを見上げ、立ち上がる。

「いらつしゃいませ」

と言われた記憶もない。手で椅子を指し示すだけだ。だが、おやじさんの腕はたしかなもの、髪に指が触っただけで、早くもボクは快感に酔いしれるのだった。

ときに相客が来ると、おやじさんは店の隅のドアを開け、奥に無言で合図を送った。するとドアが開き、中からおばさんが出てくる。ソファで待っていた相客を鏡の前に座らせ、首にタオルを巻き、エプロンをかけ、ほかほかと湯気の立ったタオルで顔を拭き、頭をしめらせ、万端整う頃合いに、ボクの頭をいじっていたおやじさんの仕事が一区切りつく仕掛けになっている。絶妙のタイミングだ。

おやじさんが相客の髪を刈り始めると、今度はおばさんがボクの髭を剃り、シャンプーする。別に腕が悪いというのではないが、できるものならおやじさんに剃ってもらいたい。リズムカルな刃先の刺激に酔いしれたいのだ。

おばさんはよくしゃべった。客にテレビ番組や人気タレントのうわさ話を持ちかける。客が「あー」とか「うん」とか生返事をしようものなら、すっかり同感者と見なされてしまって、話題がさらに深化する。返事が返って来ようが、来なからうが、おばさんは一人でどんどんしゃべり続けた。

「昨日の歌謡ショー見た？ よかったよねえ。ひばりちゃん、歌もうまいし、語りもうまいね。子供のころ歌ってた港町なんとかいうのもよかったけど、今のもええねえ。どこからあんな声出るのかねえ。しびれるねえ」

ボクにはおばさんの声はBGMにすぎず、何を言われてもただ目をつぶって聞いているだけ。話の切っ先は自然相客に向かう。おばさんの話に乗ってきたなら、

「そうよ、そうよ」

と話が弾む。乗ってこないと、おやじさんは決まって得体の知れない小さな声で

「しっ、しっ」

とか

「ちっ、ちっ」

とか口走り始める。森の奥から遠い鈴の音が聞こえてくるような、あるかなきかのかすれ声だ。最初に気づいたときには幻聴かと思ひ、自分の耳を疑った。だが、ハサミがシャツシャツと滑る音に同調している。これは間違いなくおやじさんだ。おばさんはそれでもかまわずしゃべりつづける。

(二)

やがてボクは河北で言われた兆候というやつに気づき始めた。髪が伸びないのだ。妻が先に感じていた。妻に言われてボクも知った。

「お父さん、最近薄くなりかかってきてるよ。前の方だけじゃないのよ。てっぺんも。自分で見てみたらいいわ」

そう言うって、妻は手鏡をもってきた。洗面所の前に立って、それを頭頂部に当ててみる。二回反射して、頭頂部が目の前に生々しい。生まれて初めて見る自分の頭頂部に「あっ」と声を上げた。丸く地肌が透けている。髪がないわけではないが、あまりに薄く、しかも短い。よもやここまでとは。想像を絶するありさまだった。

当時高校生だった娘も言った。

「これは大変。お父さんとおじいちゃんになってる。頭の上、本当に薄いよ。おおごとだよ、これ」

逆戻りできない一方通行の「歳」というものを、この瞬間ほど痛烈に思い知らされたことはなかった。

その日を境に、散髪屋に行くことがなくなった。四十代半ばだった。前髪は伸びないし、頭頂部も伸びない。伸びるのは後頭部の首元と側頭部だけ。伸びてくると妻がチヨキチヨキとハサミで切る。それで済んでしまう。散髪屋に行くまでもないのだ。手間も技術もまるでいらぬ。

伸びないというのは、本当は的を射ていない。現実には生えもするし、伸びもする。だが、保ちが悪いのだ。長くならないうちに抜けてしまう。だから細くて短い幼毛ばかりとなる。養毛剤には、発毛を促すだけでなく、脱毛抑制の効果もある。そう気づいたときには、時すでに遅かった。誰より早く兆候を見抜いた河北の忠告の、なんとずしりと重いことか。

増田で刈ってもらった最後の日というのが思い出せない。いよいよこれで最後と自覚して刈ってもらったわけではないから、思い出せないのも当然だ。ポケットから千円札を二枚取り出して支払った記憶はある。だが、その記憶も何層にも重なっているから、やはりどれが最後なのかはわからない。

「いくらですか」と聞くと、「二千円で」。語尾の「す」は聞こえない。しかも、この会話は最初の一度きりだった。二度目に同じことを聞くと、「前と同じで」と言われ、ボクは二千円を支払った。客の顔は覚えてなくても、頭を見れば、初客か二度目かは簡単に見分けられるものなのか。三度目からは聞くこともなく二千円を手渡した。それが最後まで続いた。

おやじさんは二千円を必ず両手で受け取った。手のひらを上にしてみぞおちのあたりにささげ、頭を下げた。「ありがとうございました」とも「またどうぞ」とも言わなかった。かすかに唇が動い

たから、心の中ではつぶやいていたのだろうか。ボクにわかったのは、一つの仕事をやり終えた職人の満足であった。それに対する客の礼を手のひらで受け、何も言わずに入り口の扉を開ける。外に送り出すときの細くまぶしげな目が、満足と感謝のすべてを表していた。

(三)

増田の店は道路に対して四十五度斜めを向いているため（実際には道路の方が東西南北から傾いている）、出勤時の車からは裏側しか見えない。だが帰宅時にはよく目についた。毎夕、ほんの数秒ではあるが、ガラス戸越しに店内を覗き見るのがボクの習性になった。考え事をしていたりして、気づかぬまま通り過ぎてしまうこともないわけではないが、たいていは車が近づくくと、磁力に引かれるように視線が店に吸い寄せられていく。直前まで別の思いに集中していても、あるいはラジオの「夕焼けジョッキー」を聞いていたとしても、運転席の視界に店の姿が入ってくると、瞬時に注視の回路にスイッチが入る。今日はどんな様子だろうと、ガラス戸越しに中をのぞいてしまう。

といっても車は数秒で走り去ってしまうから、視線をスキャンして内部をまさぐったりはできない。突然白い光が空に流れ、意識したときにはもう消えている流れ星同様に、たまたま視線がぶつかった先の店内の一点を、ぼんやりした残像として網膜に焼きつけるだけだ。走り過ぎた後で、その残像を吟味してみる。ソファア、鏡、椅子、明るく輝く照明、柱にかけられた真つ赤な花、……。たいていはどこにも人影はない。だがときに、ぼやけたおやじさんの姿が浮かび出ることがある。立ち上がって伸びをしていたり、客の背後から髪を刈っていたり、背を丸めてソファアにもたれていたり、新聞を拡げていたり。おやじさんの影が窓辺に浮かんた日には、宝くじにでも当たったように体の芯が熱くなる。今日一日がその瞬間のためにあったかのような、諸事万端が整った本源的安堵を覚えるのであった。

おやじさんの姿がいつの頃からか見られなくなった。若い男に代わっている。大阪で修行していた息子だと妻が聞きつけてきた。独身らしい。

店の装飾にも変化が出た。貼り紙一枚だったガラス戸に、大胆な構図のもじゃもじゃ頭の男が描かれた。「KAMIKIRI2000」と横殴りの文字が走っている。顔の5倍もありそうな巨大なもじゃもじゃ頭と激しい殴り書き。インパクトは十分だ。

おじさんのころには、車でやって来る客などいなかった。店の前の空き地には季節の花々の鉢植えが並べられていた。それが今、二台分の駐車場となり、ときには満杯になっていることさえある。常連らしい白のスポーツカーがよく駐まっている。客層は明らかに変化した。

おやじさんは仕事を息子にまかせてしまったらしい。店にも出なくなっている。それがわかると、車で店先を通ったときのと きめきがなくなってしまった。店内の様子が視線を吸い寄せることもない。気づかぬうちに走り過ぎていることが多くなってきた。実際のところ、覗き見ようにも、巨大なもじゃもじゃ頭に邪魔をされ、中が覗けないのであった。

遠くから姿を見かけるだけでときめいていた片思いの恋人がいつの間にか去ってしまったような、切ない空虚感、喪失感、……。

そうしたものからようやく立ち直ろうとしていたある日、意外なものを発見した。

(四)

市立図書館で何気なく書架から引き抜いた『絵本の歴史』という本を繰ったとき、見覚えのある絵に遭遇したのである。これはあの増田の店のもじやもじや頭ではないか。赤煉瓦色のマントを羽織り、小さな顔の何倍もあるもじやもじやの頭。困惑したようなまなざし。ガラス戸の男にそっくりだ。ハインリッヒ・ホフマンという人が書いた百年以上も昔の絵本らしい。「ボウボウアタマ」と訳されている。

あまりに似ているので、ページをコピーした。そして翌日さりげなくガラス戸の絵と見比べてみた。ぴったりだ。若干のデフォルメはあるものの、髪の毛の色具合といい、ぼうぼうと伸びた髪の毛の形状といい、顔がやや左にかしいた様子といい、悲しみとも戸惑いともとれる目の表情といい、偶然の一致とはとても思えぬ似通い方である。

ガラス戸の絵は明らかにこの絵本が下絵になっている。というより、そっくり真似ている。どこから仕入れたのだろう。それが不思議でならなかった。ドイツでこの絵本が書かれたのは十九世紀半ば、日本に翻訳されて入ってきたのは十九世紀末。おやじさんの幼年時代にはすでに廃刊になっていたであろう時代物だ。それを息子が斬新な店の装飾としてみごとに復活させた。

息子は高校を卒業すると、ただちに大阪に修行に出たらしい。好きな女性の一人や二人はいたであろうが、結婚もせずに働きつづけた。そして二十数年。腕も磨かれ、向こうで自分の店を持つにいたったのではなからうか。一方おやじさんは、田舎の小さな理髪店で細々と仕事を続けた。身につけた新しい技術をおやじさんと競い合う気にもなれない息子は、大阪でいつともなしに年を重ねた。

そのうち、元氣だったおやじさんが倒れた。

「いつまでもは続けられん。お前こっちでやってくれんか」

そんな電話が息子にかかってきたのではなからうか。息子は大阪の店をたたんで故郷にもどった。そして新生増田理髪店を開いたのである。「KAMIKIRI2000」の2000は、やがて来ようとしていた西暦2000年を先取りしたのか。それとも、一つの勢いある流れの象徴なのか。激しい筆跡には力がみなぎっている。

こうしたことが容易に想像できた。だがどう考えてみても、ぼうぼう頭は不思議でならない。どこで出逢ったのだろう。絵本とはいえ、今となっては希少価値のある古典的名著だ。そうそうどこにでもない。散髪修行に明け暮れている息子が手にするような代物ではなからう。不自然すぎる。増田の息子には何かわけがありそうに思え、興味が引かれた。

といって、心にかけて調べるほどのことでもない。時とともにいつしか忘れ去られていった。

(五)

話が少し遡行する。町内会の催しには疎遠なボクだったが、昔一度、囲碁の大会に出たことがある。十数年も昔のことだ。そのころ熱心に碁を打っていて、さまざまな県大会にもよく参加していた。一度は勝ち上がって県代表となり、全国大会に出たこともある。それが大きな顔写真とともに新聞記事になった。おそらくそれを見たのだろう、町内会の役員が

「囲碁の集まりがあるので出てくれませんか」

とわざわざ我が家まで頼みに来た。断るのも悪いと思ひ、公民館に出かけていった。対局相手は腕自慢のお年寄りばかり。居丈高な手で挑発してくる。だが、しよせんは田舎の道楽碁だ。脇が甘

い。

優勝賞品のビール券をもらって帰ろうとした。と、そのとき、

「毎月やっとなるけん、またやろうやのう」

腕自慢の一人から誘われた。

「時間があつたらまたお願いします」

曖昧な返事をしたが、それっきり、行くことはなかった。

それから長い年月がたち、腕自慢との対局のこともすっかり忘れていた頃、再び町内の囲碁大会に誘われた。散歩をしていてばったり出会ったお年寄りからである。どうやら、

「またやろうやのう」

と言ったあの人らしい。あのお年寄りだと思った人が、今もそのままお年寄りであった。一瞬、狐につままれた気がした。あのころボクは若かったから、大したお年寄りでもない人をお年寄りだと錯覚したのだろうか、それとも自分も一緒に歳をとったため、ずいぶんお年寄りを並のお年寄りだと感じるだけなのか。ともかく、あのおきのままのお年寄りが目の前にいた。

「いつかの貸しがあるんじゃけん、あしたは来てくれやのう」

そこまで言われると、行かないわけにはいかない。それにしても、よくもボクのことを覚えていたものだ。あのおきの負けがよほど悔しかったものと見える。

行ってみると、まだ会が始まらないうちから、年寄り二人を前に座らせ、二面打ちをしている男がいた。町内碁会の師匠格といった風貌である。さっそく横に座って見せてもらった。背筋が伸びて、自信に満ちた手つきである。着手から、なかなかの打ち手だと一目でわかる。

時間が来て会が始まった。トントんと勝ち進んだ末に、決勝戦でその男と当たった。手ごわい相手だと覚悟はしていたが、序盤の手数でそれを実感した。強手を打たれたじじとなる。早くも形勢不利となった。中盤以降は無理を承知でがんばるしかない。その無理が通ったのか、それとも相手が優勢を意識して、難しい戦いを回避してくれたのか、差が縮まってきた。

これは囲碁ではよくあることだ、勝ちだと思っただけでも安全策をとれば、差は一気に詰まってしまうのだ。

結局、細かいヨセの勝負となって、結果は半目勝ち。ラッキーだった。

「いやあ、お強いですねえ。序盤から厳しく打たれて、押され通しでした。勝てたのは偶然です。中身は完敗でした」

「いやいや、そんなことないですよ。私の負けです。こんな強い人がこの町にいるとは、思ってもいませんでした」

「ボクもです。久しぶりに力のこもった碁を打たせてもらいました。本当に強くてびっくりしました。昔から近くに住んでたんですか」

「子供のころはこちらでした。碁は中学時代から多少はやってたんですけど、高校を出て大阪に行き、本気でやりだしたのは向こうです。道場に通って、プロの先生にも教わるようになりました。何年前かに帰ってきて、町内会の碁の先生みたいなことになったんです」

それを聞いて、ひよっとしたらとの思いが走った。理髪店に人影を感じることはあっても、顔つきまではわからなかった。目の前のこの人がひよっとしたらおやしさんの息子？

KAMIKIRI2000をやってる人じゃないですか、というつもりで

「カミキリ2」

そこまで言うか言わないうちに、

「そうです、そうです。親父がダメになったんで、跡を継いでやっています」

「そうでしたか。お父さんには昔よく刈ってもらいました。腕がたしかで、まあファンみたいなものだったんですよ。今は薄毛になって、プロの手が要らなくなりましてね。ときどき家内が切っているだけです」

「あはは、そうでしたか。親父は昔気質の職人でした。新しい技術は受けつけませんでした。若い人の注文には乗れなくなりました。客が離れていくとよく言っていました」

碁の検討はそっちのけでおやじさんのことを話題にした。数年前、仕事の途中で倒れたのだという。細かい仕上げの最中に、突然ふらっと倒れたらしい。脳梗塞だった。

「幸い命は助かったんですが、右半身に麻痺が残って仕事はできなくなりました。倒れたと聞いて、向こうの店はやめさせてもらって、こちらに帰ってきたんです。店を閉じてたのはせいぜい一週間ほど。すぐに私が引き継ぎました」

「それで今、お父さん、どうされてますか」

「それが、まあ……」

ちよっと口ごもった。言いたくない事情がありそうに思えて、それ以上は聞かないことにした。ぼうぼう頭のことにも気にかかっていた。この人、碁盤をはさんで話していると、雰囲気からも、話しぶり方からも、散髪修行だけの人とは思えぬ理知的な深さを漂わせている。常連客のスポーツカーから想像していたヤンキーな人物とは明らかに違う。そこで聞いてみた。

「お宅のお店のガラス戸に大きなぼさぼさした頭の絵があるでしょう。ユニークでいつも面白い絵だなと思ってるんですが、あれ自分でデザインされたんですか」

口にしたとたん、しまったと思った。あなたが正直な人かどうか試験をしている、そんな後ろめたさを感じたのだ。一瞬間唾を飲んで答えを待った。

「あれですか。実はですね、ちよっと言いにくいんですが、私が考えたんじゃないです。盗作です」

「はあ？」

「ある本からとったんです。絵本ですけどね」

ボクは心底頭が下がる思いがした。ボクならここまでではっきりとは答えないだろう。少しはぼやかしてしまおうだろう。ひよっとしたら、自分が描いたことにしてしまうかもしれない。

「私の夢なんです、あの絵は。叶うことがなかった夢なんです」

言いつつも、周囲の目や耳を気にしているそぶりが感じられた。絵の話はそれだけにして、碁の検討をして帰った。

(六)

数日後、「もう一局やりませんか」と増田に電話してみた。自分から人を碁に誘うことなど滅多にないのだが、そのときはなぜか無意識の衝動に動かされていた。快諾してくれた。休業日の月曜日にといいことになった。こちらは冬休みだから、いつだってよい。我が家で碁盤をはさむことにした。

前の碁よりも彼はいつそう本気を出してきた。力の差がひしひしと感じられた。押しこめる圧力のなんとこの厳しき。こちらはただ必死に防戦するのみ。なんとか腰砕けにならないで食らいついたものの、勝ち目がなくなったため、投了するしかなかった。乗り越えがたい力の差であった。終わると、家内の手料理をつつきながら語り合った。

彼は高校を出て大阪の理髪専門学校に入ったものの、昔から美術に興味があつて、その夢を捨てきれず、おやじさんの反対を押し切つて専門学校をやめてしまった。二年間、全国を放浪しながら絵を描いたという。

「美大に入る力がないことはわかっていたから、せめて子供の絵本でも描いてみたいと思つたんです。全国を放浪しながら目に入るものを片っ端から描き、美術館をめぐり、日銭は路上の似顔絵描きでしのいでいました。うちの店の絵は東京の絵本展で見つて衝撃を受けたものです。一目見たとたん、どうしてもほしくなり、古本屋を探し回りました。探し当てたときには嬉しくつてね、予約したまま二週間飲まず食わずで似顔絵書いて、ようやく代金を稼いで買ったんです。私の宝物ですよ」

放浪しつつも、漫画や絵本の新人コンテストにせっせと作品を送つた。だが、入賞作品は生み出せず、ついにあきらめて理髪専門学校に入り直した。

「夢の残骸であるスケッチブックとボウボウアタマの絵本は、死ぬとき棺桶に入れてほしいと思つています。人生でもっとも真剣に生きた二年間の証ですから」

ボクは、ぬくぬくとすごした自分の人生と照らし合わせて、発する言葉がなかった。

おやじさんは息子が専門学校をやめたことに腹を立て、勘当したという。仕送りはいっさいしないぞと。

回り道の末に理髪技術の身につけた息子は、大きな理髪チェーンに雇われた。それでも、おやじさんは息子を許そうとはしなかった。

彼が本気で碁をやり始めたのは、放浪から帰つた専門学校時代だったという。といつてもおやじさんも田舎初段程度にはたしなんでいて、中学時代から多少の手ほどきは受けていたらしい。高校を出たときにはおやじさんに二、三子置かせるくらいにはなつていた。大阪の関西棋院支部に通うようになり、プロの指導を受けるなどしながら頭角を現していった。支部の大会でたびたび優勝し、アマチュアには珍しい七段の免状をもらったのだという。

「おやじは倒れた夜、私に帰ってきてほしいとおふくろに言つたらうれしいんです。声は出なかつたけど、目でそう言つたとおふくろは言つています。それまでは、うちの店では絶対に仕事をさせないと言つてたんですがね。自分の技術が時代に合わないことを一番よく知つていたのはおやじ自身でした。負けん気の強いおやじだから、元氣なうちは私と一緒に仕事をしたくなかつたんでしょね」

(七)

「それでお父さんは今どうされてるんですか」

数日前と同じ質問をもう一度ぶつけてみた。どうしても知りたかつたのだ。彼はやはり躊躇してゐた。料理に箸をつけ、ビールをぐいと一飲みすると、そのまましばらく天井を仰いだ。そして、

「もう一杯お願いします」

空になったグラスを満たしてあげた。それを再度飲み干すと、ようやく口を開いた。

「いなくなっただんですよ、おやじ」

ボクは思わず、

「いつ亡くなったんですか」

と聞いてしまった。

「いや、死んだんじゃないくて、いなくなっただんです。もうすぐ一年になります。おふくろにはときどき手紙が来るから、死んでいないことはたしかです」

「どこにいるのかわかってるんでしょう」

「それがよくわかりません。消印の局がいつも違うんです。野宿をしているのやら、都会の駅で段ボール生活をしているのやら、田舎の安宿をめぐっているのやら。私が昔やった放浪暮らしが親父に感染したんでしょうかね。置き手紙があつて、『ちょっと外の空気を吸ってくる。気分がよくなったら戻ってくる』みたいなことが書かれていました。馬鹿ですね。子供じみてます」

「不自由な体でやっていけるんでしょうか。お金はあるんでしょうか」

「多少の麻痺は残ったけど、歩けるし、左手で何でもできるし。それに銀行カードを持って行つてるので、おふくろが預金の補充さえ忘れなければ、何とかなっていると思います。おふくろが言うには、ときどき引き出しにはいるけど、大して使つてはいないらしいです。ひよつとしたらどこかに二号さんでも作つて楽しく暮らしていたりするんでしょうか」

ボクはその夜、さまざまに思いをめぐらせてみた。巨大な指ダコができるほどに打ち込んだ仕事ができなくなった辛さ、息子に店を譲つた空虚感、働くことだけだったこれまでの人生に、ふときざした自由を求める気持ち。

季節が来ると渡りを始める鳥の衝動が、おやじさんの心にあるとき突然芽生えたのではなからうか。

「さあ、あなたの番が来ましたよ」

何かがそう告げたのではなからうか。

西に傾く三日月を眺めながら、この月を今おやじさんも見上げているにちがいないと思った。夕刻の寂寥の中に金星も輝いている。空は濃い群青に染まって静かだ。しばらくすると東にシリウスがきらめく光を現した。オリオンがその上でほほんでいる。スバルが天頂をほのかに照らす。

ボクにはおやじさんの心がわかる気がした。そうなんだ、この星々のように空を自由に駆けめぐりたいのだ。静かに孤独を愛する人は、だれでもみんな星になりたいのだ。

■はじまりの香り

(二〇〇八年十二月二十八日《日》)

(一)

朝は得意な方でない。目一杯寝ていたい方だ。五分おきに鳴る目覚ましの四回目あたりでようやく起きる。これ以上寝ると、もう間に合わないという極限の時間だ。

だが、休日となると話は別なのだ。目が覚めたとき、

「あつ、今日は休みだぞ。自由だぞ」

そう感づいたらもうじつとしていられない。理性の方は、
「まだ寝ていた方がいいぞ、頭の芯が疲れてるんだから」

と懸命に叫んでいるのに、自由を満喫したい衝動が黙っていない。
起き出して、キッチンに下り、コーヒーを淹れる。これは何十年も変わらない休日の日課だ。ゆ
っくりと豆を挽き、コーヒーメーカーにかける。ハンド・ドリップでもよいが、たいていはコーヒ
ーメーカーだ。わざわざそのために値の張るコーヒーメーカーを買ったという思い入れが、そうさ
せる。

休日に妻は起きてこない。朝食はセルフサービスだ。手間のかからないものをあり合わせて作る。
それがなかなか楽しい。適当な食材がなければ、隣にコンビニがある。門を出れば歩いて二十秒。
マイ冷蔵庫だ。九時には、徒歩一分の裏のスーパーが開く。値段からも品揃えからも、ぼくらの世
代にはスーパーが似合う。

食事を済ませ、新聞を読み、テレビのトーク番組などを見ていると小一時間になる。それから書
齋に上がって机に向かう。自由の宝庫の幕開けである。

とまあ、休日はこんな案配で始まる。ところが、師走も半ばを過ぎて、朝がキューンと冷え、夜
明けが日ごと遅くなると、なにやら別の衝動が頭をもたげてくる。夜明け前の澄み切った空気を吸
って、暗い道を歩いてみたいという衝動である。トイレの窓から、まだ曙光の見えない東の空を眺
めるていると、決まってこの衝動が、まるで空の一点から流星が吹き出すようにわき上がってくる。
矢も楯もたまらず上着を重ね、外に出る。

気管から肺に染み入る冷気。夜明け前の冷気には独特の香りがある。子供のころから変わること
のない香りだ。この香りこそがぼくの衝動の源である。遠い遠い太古の香り。その香りに誘われて、
ぼくは冬の早朝をずんずん歩く。

(一)

この衝動が四歳の早春に起源をもっていることを、ぼくは知っている。四歳になったばかりの三
月初旬、星が瞬く午前四時。かすかな衝撃で夢から揺り起こされた。目を開けると、眼前に母の顔
があった。

「ごめんね、起こしてしもうて」

ぼくは毛布にくるまれるところだった。くるみ終えると、土間にいた父に手渡され、父はぼくを
抱くなり、表に出た。表では、真っ暗な道に、自転車が引き出されていた。大きな荷カゴにストン
と据えられた。

荷台をくくっているゴムチューブの隙間から首を差し出した。あたりは真っ暗だった。隣の八百
屋の雨戸が星明かりにかすかに光っていた。向かいのブリキ屋は闇の底だった。しーんと静まった
道を、締めつけるような冷気が流れていた。それを胸一杯に吸い込んだ。何とも言えぬ心地よい香
りがした。冷気の香りだった。

空には星が隙間なく輝き、きらめいていた。

父は自転車をこぎ出した。夜道を四、五軒先の四つ辻まで進んだあたりまで記憶にあるが、そ
の先がない。荷カゴに身を沈めて眠ってしまったようだ。

目覚めたとき、そこは見も知らぬ世界だった。布団を足で蹴散らかし、体を起こすと、

「ああ、起きたかえ、いい子だねえ。父ちゃんも母ちゃんも向こうにおるけんね。心配せんでえんよ。ばあちゃんと遊ぼうかいね」

後ろから声がした。振り向くと、まん丸な笑顔のおばあさんがこたつに当たって縫い物をしていた。見たことのないおばあさんだった。

部屋は三方を板で囲まれ、奥の小窓から朝の光が差し込んでいた。

一方だけは板壁がなく、薄暗い土間に面して開かれていた。父ちゃんと母ちゃんがいると言われた方に歩いて行った。上がり口には、不思議なことにぼくの靴が並んでいた。

それを履き、左手に広がる土間を見回した。もうもうと湯気が立っていた。湯気の向こうに人の気配がした。近づいてみた。すると湯気の中に母が現れた。そばまで行くと、

「起きた？ ちょっと待ってて。朝ごはんにしようね。あぶないから来たらいかんよ」

母の奥に父の姿もあった。

その日、父と母は、近々廃業予定の油揚げ屋に、油揚げ作りの見習いに来ていたのだった。おそらく、道具一式も譲り受ける手はずになっていた。

敗戦から一年あまりたった昭和二十一年十二月、父はジャワから復員した。そして休む間もなく、すぐ上の兄と共に戦前から経営していた下駄工場に復帰した。だが、兄はすでに敗戦後、間もなく腸チフスで死んでいて、経営の実権は兄嫁が握っていた。

その兄嫁との些細な気持ちのすれ違いから、父は工場を飛び出したのだった。戦後生まれのぼくが二歳になったばかりの昭和二十五年春だった。

飛び出したものの、父には次の職のあてがなかった。それまでの蓄えと兄嫁にもらったわずばかりの退職金で古家を買った。借金が残らなかったのがせめてもの幸이었다。その日その日を食いつなぐ仕事を転々としながら、定職を求めて模索した。当時、巷には戦地帰りの男たちが職を求めてたむろしていた。職探しは容易ではなかった。

やがてぼくが四歳になったばかりの三月初め、父は一つの話聞きつけた。油揚げ屋が廃業し、道具一式をタダ同然で手放すという。父は飛びついた。技術の見習いに行くことにした。こうして先ほどの場面となったのである。

油揚げ屋は朝が早い。ぼくが起こされたとき、夜道はまだ真っ暗で、星空の世界だった。早朝のあのひっそりとした暗い道と、胸一杯に広がってきた冷気の心地よい香りとが、後々までも、冬になるとぼくを早朝の外気へと誘う強い衝動の源になっている。これはまちがいないことだ。

(三)

まだ明けない冬の早朝のキューンとした冷気が放つ独特の香りは、昔も今も変わらない。その香りの原初体験は、たしかに四歳の早朝であった。しかし、それが体内に深く宿ってしみついたのは小学生時代であった。

ぼくが住む町筋では、冬休みになると子供たちが朝早く、暗いうちから集まってきて、早朝マラソンをするのが習いであった。年上の子たちがやっていたこの伝統行事に、三年生のころから参加するようになった。他の地域で同種の行事が行われていたのを見たことも聞いたこともないから、これはぼくらの町筋だけの特別な伝統であったようである。

六時ごろ子供たちは集まってくる。冬のこの時期、六時の空はまだ真っ暗で、星が瞬いている。

手がかじかむような寒さだった。すでに冬至を過ぎてはいるが、なおも夜明けは遅くなっていく。早朝マラソンの体験から、子供ながらにそれに感じていた。ぼくの感覚では、夜明けが最も遅くなるのは一月初旬。たぶん十日ごろだった。

冬至とは何だろう。辞書を引くと、「北半球では一年中で昼がいちばん短く、夜がいちばん長くなる日」とある。そこには決して「夜明けがいちばん遅い日」とか、「日の入りがいちばん早い日」とかは書かれていない。実際、日の入りに目を向ければ、冬至の頃にはすでに日は相当に長くなっている。最も早く日が落ちるのは十二月のはじめである。

この理由を考えてみたのは最近のことである。

理由の根幹は、地球の公転軌道が円ではなくて楕円であることにある。しかも、現在のところ（どれくらいか）のタイムスパンにおける現在なのかは知らないが）、近日点がたまたま北半球の冬至のところに当たっている。それによって、地球の公転角速度は冬至のころには大きくなって、見かけの一日が時計の二十四時間（年間における一日の平均時間）よりも長くなる。つまり、冬至のころには、夜明けや日の入りが少しづつ遅れていく（前日の夜明けから二十四時間経っても次の日の夜明けが来ない）。これが、冬至を過ぎても、まだしばらくは夜明けがさらに遅くなっていく理由だろう。同じ理由で日の入りも遅くなっていき（いわゆる日が長くなり）、トータルすると、冬至の日に夜はいちばん長く、昼はいちばん短くなるのである。

話がそれた。朝の六時ごろ、十二、三人の子供たちが集まってくる。これが早朝マラソンのメンバーである。

早く来た子は、かじかむ手をもみながら小猿のようにじゃれ合っている。水たまりに氷が張ってあれば、足で踏み割って、かけらを拾って相手の顔にこすりつけたりして遊ぶ。

全員そろくと、よいいドンだ。電車道を東へと、つまり道後方面へと向かう。手ぬぐいを首に巻いて必死な走る。

やがて電車道は道後公園の外堀に突き当たる。線路は左に折れて終点の道後温泉駅に向かうが、ぼくらは線路を横切り、外堀も抜けて、公園に入る。内堀に沿って北に向かう。めざすゴールは公園の北の端。当時、そこに新湯と呼ばれる温泉があって、その前に湯煙の形をした大きな石のモニュメントがあった。そのてっぺんにタッチすればゴールである。

トップでタッチしようとみんな懸命に走った。冷たい風に顔が赤らむ。耳たぶはいまにもちぎれそう。朝の冷気に独特の香りを感じながら走ったのであった。

ゴールが近づくころには、もう寒さは感じない。額から噴き出す汗を、手で拭い拭い走る。

湯煙にタッチすると、さらに汗が噴き出してくる。距離はせいぜい一キロあまり。小さな子でも走りきれぬ距離だった。

帰りはもう走らない。電車通りも通らない。一筋北の小川沿いの小道を歩く。大声で歌を歌い、小川の流れを追い、農事試験場の牛小屋で牛を見る。ぶらぶらと帰るこのひとときが大きな楽しみだった。

やがて背後の空が明るみ始める。

日はまだ地平の向こうだが、濃紺の空に最後の星が寂しそうに光っている。横にたなびいた雲がかすかに赤く色づいてくる。

「来るぞ」

と誰かが叫ぶ。それを合図に、みんな振り返る。雲はゆっくり赤みを増していく。それが瞬時に、血の色に染まるのをぼくらは知っている。その瞬間を、息をひそめて見守っている。瞬きもせず見守っている。

時がひたひたと近づいてくる。空が濃度を増して、もはや凝縮に堪えられなくなった瞬間、雲間からぐあつと鮮血がしたたり落ちる。

「うわーっ」

恐怖とも感嘆ともつかない叫びが上がる。

それが過ぎると、子供たちは何事もなかったように、またぶらぶらと歩き始める。いつしか空は白々と明け、あたりは光の世界に変わっている。冷気の香りもすっかりどこかに消えている。

いたずらっ子が、通りがかりの家のチャイムを押し逃がす。それを見て他の子も一斉に走り出す。ちっともやましくはないのに、見つかつて叱られるのはいやだから、一緒に逃げる。

配達されたばかりの玄関先の牛乳を飲み干す大悪党もいる。このいたずらは、ぼくには見るに忍びなかった。やがて家の人が牛乳を取りに出てくるだろう。そのときの悲しげな目を思うと、たまらなくつらかった。

草舟流しもよくやった。細長い葉っぱを舟の形に折りたたみ、小川に流す。舟は揺られ揺られて下っていく。淀みにはまり、渦に巻き込まれ、滝を落ちしながら流れていく。自分の舟が引つかかって流れなくなると、小石を投げて助け出してやる。

思えば、遠い遠い昔の思い出。あれから半世紀、マラソンのゴールとなった湯煙のモニュメントは、もうそこにはない。新湯という温泉もなくなった。農事試験場はそっくり取りつぶされて、県民文化会館になっている。朝焼けに歓声を上げたあの小道は、今ごろコンクリートの土台の下で長い眠りに休んでいることだろう。

(四)

早朝の冷気の香りをまたも味わうときがきた。潰瘍性大腸炎が悪化して一年間休職した十年前だ。死に瀕した闘病の末に、徐々に元気が回復してきた冬、復帰への準備にと、早朝ウォーキングを始めたのだった。

子供のころと同様に、毎朝六時には起きた。町はまだ闇の中。星が冴え冴えとまたたいている。

黎明の気配などない。

息を吸うと、あつ、あの香り！ なつかしいあの香り！

「そうだ、これ、これ」

思わず涙して深呼吸する。一瞬のうちに幼い時代に戻っていく。

形あるものは思い出の中にその像を残す。そして、ときにはそれを照らし出す。

形をもたない香りは、それ自体として存在しつづけるしかない。夏の雨が立てる土埃の匂い、秋の長雨が竹藪を滴る匂い、オシロイバナの清楚な香り。すべてそうだ。ぼくらはそれを前にしたとき、そのときにのみ、はるかな郷愁とともに、それを味わった原初の瞬間に引き戻される。

六時を過ぎると早い家では窓に明かりを灯し始める。遠くの家ポツツと明かりが灯ると、

「あつ、あの家の一日が始まったんだな」

歩いているこちらまでもが、出陣準備の興奮を覚える。

ある家では、煌々と灯した一室のカーテンが開け放たれ、外の歩道からすっかり丸見えの中で、一家の主人が下着で手足を動かしている。毎朝のことだ。低い塀越しのステージ・ショーという雰囲気。今日はどうだろうと、家の前まで歩いてくると、やはりやっている。当の本人は、外から丸見えとはちっとも気づいていないのか。というより、この時間に外を歩く人がいようとは夢にも思っていないのか。パンツ一つで一、二、三とやっている。

畑の中に一軒の廃屋がある。いい雰囲気。庭の前に畑がある。小さな家庭菜園だ。それがまだ荒れていない。この夏まではナスやキュウリが植えられていた。そんな姿で、支柱が立って、細いビニールひもが垂れている。軒下には竹カゴや農具がつり下がっている。明日また使うからと、ひよいと引っかけられたまま風に揺れている。

だけど人はいない。いつ見てもいない。あぜ道からその家へ細い引き込み道がある。歳月をかけて踏み固められた道だ。長さは二、三十メートル。だがそれを踏んで庭に入るのはためらわれる。住む人はいなくなっても、明らかに私有地だ。あぜ道から風情を楽しむだけにする。

塀はない。実のなる木が数本周囲に植わっている。畑の中の一軒家だ。戦前風の小さな農家。次男か三男が嫁をもらって独立し、親に建ててもらったこぢんまりした家。そんな感じ。子供たちがこの庭で戯れていたころもあつたらう。ほつとするような落ち着きのある家だ。

子供というのが、ぼくと同世代だろうか。やがて彼らは巣立っていき、老夫婦二人だけが残された。庭の前に自分たちが食べるだけの畑を作り、細々と暮らして何年経ったことか。どちらが先に逝ったのだろう。残された一人も、子供に引き取られることなく住み慣れた家で暮らし続けた。小さな畑があれば食べていける。ある日、一日の仕事を終えて、明日また使うからと竹カゴを軒下につるし、横になったところで睡魔のように死がやってきた。安らかな往生であった。と、これはぼくの想像だ。

こうして、住む人のいない、畑の中の一軒家となった。

子供たちは独立していて、この家に戻る気はない。といって、取りつぶすには忍びない。しばらくは置いておこう。こうして何年かが過ぎた。ときには見に来て雑草を刈ることもあるのだろう。庭が荒れずに、昨日まで住む人がいたという生々しさが残るのは、そのためだ。

この家の前を通ると、なぜか心が和む。不思議な安堵をもたらしてくれる。朝露を踏み、何度あぜ道を通ったことか。家までの引き込み道の何と清楚なことか。平屋の小さな家だ。戸口を入ると、おそらく奥まで土間が続いている。座敷や茶の間には土間から上がる。炊事場は土間の突き当たり。たぶん井戸が掘られている。座敷の南面にはガラス戸がはまり、割れたところに板が打ちつけられている。

こぢんまりした生活感がすがすがしい。人の世の巡りの中で無人の家になってしまった。でも、それはそれでよいではないか。住んでいた人の無限の思い出が宙に散ってしまったことも、それはそれで世の象徴だ。よいではないか。

朝の冷気にふさわしい家。キューンとした冷たい香りが、この家をくまなく包んで、静まっている。

(五)

今朝のこと、あたりは始まりの予兆を帯びてはいるが、まだ暗い。冷気が深く沈んでいる。朝の香りを味わいながら、家並みを抜けて、小川を渡った。東の空が白んでくる。畑中の道が一直線に伸びている。視界の先にゴールデン・レトリバーと老人がいる。近づいていく。ゴールデン・レトリバーはリードを口にくわえ、老人の後ろになり先になりして、おとなしく歩いている。

ぼくは彼らを追い越した。少し行くと、後ろからタツタツと足音がして犬が横をすり抜けた。追い越して行って、振り返る。老人が犬の名を呼ぶ。犬はすたすたと戻っていく。しばらくするとまた犬がきた。老人が呼ぶ。また戻る。

あたりは朝靄にかすむ麦畑だ。さえぎるもののない大地の向こうに冬枯れの林が靄っている。

いつの間にか犬も老人もいなくなった。朝露が光る農道を一時間ばかり歩いて帰ってくる。家並みが近づいた。すると突然、曲がり角から小さな犬が顔を出した。犬だけかと思ったら、続いてリードを引く老人。さらに後ろから老婦人が現れる。

「怖いわね」

老婦人が話しかける。

「そうだね」

前に行く老人が答える。老婦人の足許にサッカーボールが転がり出た。それを追って少年が現れた。

「ああ怖かった。いやじゃなあ、あんなの」

少年が老婦人に言い、

「ほんとな。ああ、いやいや。見るだけで怖いわ」

老婦人が振り返って答える。彼らとすれ違い、角を曲がると、目の先は自衛隊のフェンスだ。細い散歩道沿いに延々何百メートルも続くフェンスである。遠くで起床ラッパが鳴る。

長年、見慣れ、聞きなれてきた光景だ。

独身隊員用の宿舎が小高い丘の上にある。そこからなだらかな斜面が下っている。斜面の下は広々とした草地。草地は隊員の訓練場であり、装備置き場でもある。散歩道と草地を仕切っているのは有刺鉄線付きのフェンス。延々と伸びている。

そこまではいつもの光景だ。別に驚くことはない。

ところが今朝はいつになくカーキ色の車が多い。草地が隙間なく埋め尽くされている。こんなことはこれまででない。そうか、あの三人連れの会話はこれだったのか。

何ごとだろう。迷彩模様がほどこされた装甲車、トラック、砲台車、さらには巨大な戦車。それらがずらりとびっしり並んでいる。これは壮観を通り越して、恐怖だ。戦車にはすっぽり迷彩カバーがかけられていて、キャタピラだけが剥き出しになっている。それがなんともすさまじい。異形の悪魔にみえてしかたがない。

これほどの戦車がこの隊に配備されたのは初めてのこと。理由はなんであれ、付近の住民への威圧としか見えない。これを見て戦慄を覚えない人はいないだろう。国を守る頼もしさからはほど遠い、寂寥たる威圧である。

■よみがえるメッセージ

(二〇〇九年一月七日《水》)

(一)

半世紀も忘れ去られたまま、ただの一度も思い出されなかった記憶なんて、もはや記憶の体をなしていない、溶けて流れて無に帰しているはずと、昨日までなら考えていただろう。だが、人の記憶というのは、時間とともにたやすく風化してしまうものではないらしい。人生におけるある瞬間、ある対象に意識が照射されたなら、その後、たった一度もかえりみられなかったとしても、それは決して記憶の棚からこぼれ落ちたりはしない。何十年も経って、何かの拍子に突然それに意味が付与されたとたん、ふたたび活性化して意識の表層に浮上してくる。そんなことがたしかにあるようだ。

忘れられていた記憶に意味を与えたいきっかけは、先日読んだ『パタゴニア探検記』であった。著者の高木正孝という人物について、何の予備知識もありはしなかった。というより、読んでみようと思ったとき、著者名など見もしなかった。パタゴニアという地名が、いつか読んだサンIIテグジュペリの『夜間飛行』の舞台として記憶に残っていたため、ちよつと懐かしいと思った。手にした動機はそれだけだった。

ある本を書棚から何気なく引き抜いてページをくったとき、それを書棚に戻してしまいか、読んでみようと思うか、それはコイン投げに等しい偶然の手にゆだねられている。だが、読み終えた結果、そこにはコイン投げに帰せられない、必然の糸の導きがあったことに気づかされ、驚いたことは、過去に何度もある。

高木正孝は戦後日本を代表する登山家の一人である。それはこの本によって初めて知ったこと。彼の名前も、彼が迎えた謎の死についても、事前には何の予備知識も持ち合わせていなかった。それはたしかにその通りなのだが、案外そうとも言えないのである。半世紀の間、死んだように沈黙したまま記憶の隅で眠り続けていた人物、それが高木正孝であったとも言えるのである。

(二)

記憶の発端は一九六二年七月にさかのぼる。中学三年の夏休み。ぼくは毎日、午後になると友人たちと学校のグラウンドで野球に汗を流していた。指導者などいない。典型的な草野球である。十人も集まれば、五人ずつに分かれて三角ベースのゲームをした。足りなければ、シートバッティンク風に、交代で打ったり、投げたり、守ったり、……。

雲一つない炎天下だった。じりじりと太陽に焼かれながら、夢中になってボールを追いかけた。目もくらむ真っ青な空と、立ち上る熱気。ぼくらのほかには誰もいない森閑とした空間。

夏休みという無限の解放感に呑みこまれ、ぼくらははてしなく愉快だった。そんな日々が一週間ばかり続いたころ、神戸大学の学生であった七歳年上の兄からハガキが届いた。

「八月に帰省するから、その前に一度神戸に遊びに来ないか」

父や母も、行ったらよかろうと言ってくれた。嬉しくなって、翌日さつそく、野球を途中で抜けて事務室で学割をもらった。担任の先生が不在のため、日直で出校していた物理の先生が印鑑を押

してくれた。

「どこに行くの？」

「神戸です。兄がいますから」

「誰かと一緒？」

「いいえ、一人でいきます」

「一人で？ 気をつけんといかんよ。子供の一人旅は危ないからね」

「はい」

「まあしかし、なにごとくも経験、経験。はい、ハンコ。いろいろたくさん見てくるんだよ」

心配りのやさしい先生だった。自分の非をわびることはあっても、決して生徒を叱ることのない先生であった。ぼくらを貴公子のように扱ってくれた。その先生にハンコを押してもらったことになんとか心強いものを感じた。

七月三十日早朝、松山駅から汽車に乗った。初めての一人旅だった。

朝日にきらめく瀬戸内海を見ながら、菊間、今治と、一人旅の汽車は進んでいく。窓に額をくっつけて、移り変わる景色を飽きることなく眺め続けた。雑誌や図鑑で見覚えのある地名が現れるたびに、イメージションが現実になる興奮で心は躍った。

四人掛けのボックスをぼくは一人で占有していた。隣のボックスには幼い女の子を連れた若い夫婦が座っていた。女の子は母親のリボンにさわろうと、膝の上で何度も伸び上がる。そのとき、女の子がぼくの方を見て笑った。ぼくも笑顔を返した。

二、三列向こうでは、大勢の年寄りが、村の知り合いのうわさ話や自慢話に大げさに驚いたり相づちを打ったり笑い転げたりする声が、間断なくはじけ散っていた。これが老人会の団体旅行というものか。親戚の家で聞き覚えのある言葉を胸の内でも反芻した。

やがて坂出という地名が車内放送で流れてきた。ピクツとした。海岸に塩田を見つけようと目をこらした。坂出の塩田は、小学生のころ夢中で読んだ図鑑に載っていて、頭に強く焼きついていた。坂出と言えば塩田、塩田と言えば坂出だ。

砂浜に、田んぼのように塩の田が作られている。そこに海水を流し込み、熊手のようなものでならしめている。その絵だか写真だかが頭から離れることがなく、見つけようと汽車の窓から目をこらした。だが見つからなかった。がっかりした。以来、塩田は永遠に逢えないノスタルジックなイメージションになってしまった。

高松に着く。宇高連絡船に乗り換えた。デッキのベンチで暑い日差しと潮風を浴びながら、母が作ってくれた弁当を食べた。いよいよ未知の本州に渡るのだ。気負いめいたものがぼくにはあった。

泡立つ航跡を残しながら、島々を縫って船は進んでいく。一時間ほどで宇野に着いた。大阪行き急行に乗り換える。

車窓から見る真っ平らな田畑。あぜ道がはるか彼方まで一直線に伸びている。これが本州というものなのか。心の底から感激した。もちろんこれが天然の平野ではなくて、干拓によって作られた平野であることを、知らないわけではなかったのだが、目の前にその広がりや真っ平らさを見せられると、感動するしかないのだった。

広大な大地をおおい尽くしているのは稲ではない。人の背丈ほどに伸びた荒々しい青草だ。岡山がイグサの産地というのも、図鑑で知っていた。これがきつとそのイグサなのだろう。畳表にする

というイグサだ。知識が現実になる興奮で、静かに心を高ぶらせた。ぎらぎらと太陽が目を射る播州平野を突っ切って、夕刻六時、列車は三宮駅に到着した。ホームで兄が待ち受けていた。連れ立って駅を出る。初めて見る都会だった。

(三)

翌日、兄と京都に出かけた。祇園祭の賑わいが去り、大文字の送り火にはまだ間がある、なんだか拍子抜けした時期の、ただただ暑いだけの京都だった。駅を出ると、もわっとした熱気に目がくらむ。

兄も京都には不馴れだった。駅前で観光バスに乗った。西本願寺、三十三間堂、清水寺、八坂神社、知恩院と、初歩の初歩の観光コースを巡るバスだった。知恩院で記念写真を撮った。その写真を見ると、兄もぼくも丸い帽子をまぶかにかぶり、目を細め、顔をぎゅっとしかめている。熱射とけだるさだけが写っているような写真である。

それから数日間、兄と一緒に神戸の街を歩いたり、六甲山に登ったり、ときには大阪に行ったり、姫路にも行ったりと、都会の賑わいを堪能したが、一方で、兄は卒論の準備のために何度も研究室に通っていた。

兄が研究室に行く日は、一人で神戸の町を歩くことにした。下宿は大学に近い坂の上。海に向かって一直線に坂道が下っている。すでに何度も上り下りした坂だから迷うことはない。一人で電車に乗ってどこへでも行けた。

歩き疲れた夕刻、大学で兄と落ち合うのだった。行き交う学生の姿には、主体的な輝きと自由の気配が感じられた。いつも先生に付き従っている中学生とは違うな、というのが実感だった。軽い憧憬の念と目眩のようなものを感じずにはいられなかった。

生協食堂で五十円の定食を食って下宿に戻る。これが日課だった。

大学という憧れの空間にさえ、身の置き場所を見出した気分になった。

神戸には一週間滞在した。一人で町を探索する十四歳のぼくは、いまだかつてない自由と解放感に満たされていた。

(四)

兄とともに神戸港から帰りの関西汽船に乗ったのは八月六日の夜だった。十時頃神戸を発ち、翌朝松山に着く。船はつづいて別府に向かう。それが当時の関西汽船の運航表であった。

夜、デッキで暗い海を見つめていると、神戸での一週間が夢か幻のように思われてきた。遠くで漁り火が波間に揺れて明滅している。それが遠のくと、あたりは静かな闇に包まれる。ときおり行き交う船の灯火だけが、漆黒の海に星のような残像をなす。

ざわざわとうごめいているのは眼下の白波だ。船が蹴立てる白波は、絶え間なく生まれては、絶え間なく去っていく。ゴーゴー、ザザザッと激しい音を立てながら、瞬時、存在を誇示するけれども、たちまち闇の彼方に消えていく。それがとどまることなく繰り返されている。

「今」が猛然と宇宙を突き進みつつ、瞬時にそれが過去へと捨て去られていくのと、なんとなく似ていることか。もちろん、そのような「今」も「過去」も幻想にすぎない。アインシュタインを待つまでもなく、広大無辺な宇宙に、そんなものはない。

十四歳のぼくに、それはわかるはずのないことだったが、何か不思議な感覚が胸の奥に突き当たっていた。

星空がまぶしかった。全天に無数の星がきらめいていた。天の川が豊かに流れ、輝く星々は、明るく大きく鮮やかだった。

真つ暗な海と星々を眺めながら、ドッドドッドと船体を震わせるエンジンの基調音に身をゆだねていると、いつしかここには自分一人しかいないという気持ちになってきた。船客の話し声は背景音の中に溶けてしまい、かき消されていく。

その自分さえ、本当にここにいるのか、それともこれは抜け殻で、本当の自分は空の高みから進行する船を見下ろしているのか、その見境がつかなくなってきた。

不思議な無重力感に襲われた。

気がつくと船室にいた。二等船室で兄の横に雑魚寝していた。毛布をかぶって横になっている。デッキからここまで、どうやって戻ってきたのか、それがわからなかった。記憶が飛んだ感覚だった。瞬間、時間が無になっていった感覚、一足飛びに時間を超えた感覚でもあった。

(五)

そうなのだ。半世紀もの間眠り続けていた記憶というのはこれなのだ。突然、船室にいる自分を発見し、

「デッキからここまでどうやって戻ってきたんだろう」

そう思ったときの奇妙な記憶喪失感と、言いようのない恐怖。自然界にはありえないことを体験をしたようで、兄にさえ打ち明けられなかったこの恐怖。もしも誰かに話したら、このぼくという存在は一瞬にして宇宙のどこかに連れ去られ、消えしまう。そんな気がして、震えながら、毛布をかぶって眠ってしまったその体験。

朝にはすっかり忘れていた。以来、半世紀、一度も思い出すことがなかった。おそらくこのまま、ぼくという存在の死とともに消え去る運命にあったであろうこの記憶。

その恐怖の記憶に思わぬ意味を与え、埃をかぶった棚の奥から引っ張り出したのは、偶然読んだ『パタゴニア探検記』であった。

『パタゴニア探検記』は、高木正孝が隊長となって一九五八年に実施された「日本・チリ合同パタゴニア・アンデス探検」の、本人による記録である。合同登山隊は、南米の陸氷地帯（氷河地帯）にある未踏峰アレナーレス山の初登頂に成功した。そのときのスリルとロマンに満ちた物語が『パタゴニア探検記』である。

ただし、それだけなら、半世紀もの間眠り続けていたぼくの記憶を呼び覚ますはずがない。

衝撃だったのは、序文と跋文である。序文は高木の先輩である神戸大学教授田中薫によるもの。田中は神戸大学山岳部の初代部長であり、高木が神戸大学に赴任した際、部長を高木にバトンタッチした。

跋文は高木の親友でありアルピニストの田口二郎によるもの。

二人の文章に、ぼくが調べたところを少し付加すると、高木正孝の人生はおおよそ次のようになる。

生まれは一九一三年三月十二日。これは、ぼくの父と彼とが同学年ということの意味している。

父は戦争の荒波をもろにかぶり、日中戦争、太平洋戦争という、日本の運命を決定づけた二度の戦争に駆り出された。太平洋戦争では、その始まりから敗戦までの全期間を戦地で過ごすことを強いられた。敗戦後も一年半の俘虜生活を送った。農家の四男の命は虫けらほどにも軽かった。

その父と較べたとき、高木の人生は何と恵まれていたことか。祖父は慈恵医大創設者。すでにこの一事によって、戦争の荒波からは初めから解放されているようなものだった。事実、高木の二十歳は学生故の徴兵猶予となり、一九三六年東大を卒業するや、直ちにドイツに留学した。

当時、日本の若者にとって、迫り来る戦争の危機から身を避けるのに最も適した地はドイツであったろう。もしもアメリカやイギリスであったなら、敵国人として強制収容、ないしは強制送還された可能性がある。高木は、先を読む祖父の眼識によってか、それとも結果としてラッキーだったということなのか、日本の戦争からは完全に足を洗った戦時期を送ることができた。

ベルリン大学で心理学、人類学を修め、戦争中はベルリンで人類学研究所助手、大学付属動物園の動物心理学研究員、日本大使館の翻訳官などを務めた。その間、何度もアルプスに登り、登山技術を磨いた。そのころ一緒にアルプスに登った登山仲間が跋文を書いた田中二郎である。

日本にしろドイツにしろ、庶民は苦しい戦時生活を強いられていたが、高木の生活は戦争から最も遠いユートピア状態にあった。父がなめた辛酸と対比したとき、人生にこんな不公平があつてよいものかと、腹立たしくもなるし、泣きたくもなる。

高木にとっての戦争の苦勞というのはただ一つ、

「大戦後日本に帰ろうにも適当な船便がなく苦勞した」

というもの。なんたることか。

ようやく見つけた船便は大西洋まわりで、イタリヤから大西洋を渡ってパナマ運河を抜け、太平洋を横断して横浜へ。一九四七年二月、横浜港着。スイス人の奥さんを連れていた。

しばらくは祖父の縁で慈恵医大講師を務め、一九四八年四月より東邦大教授に。一九五二年八月、今西錦司隊長とともにマナスル踏査（本登山のための予備調査）隊員としてヒマラヤに行く。ヒマラヤから帰った一九五三年一月、神戸大学に助教として迎えられる。そして、籍を神戸大学に置くやいなや、とって返すように同二月、本格的なマナスル登山に出かけたのだった。帰ってきたのは翌一九五四年四月。

続いて、一九五七年十一月から一九五八年三月にかけてのパタゴニア探検となる。

大学の教師、研究者でありながら、大半は登山に明け暮れている。その意味からも、なんと恵まれた人生であったことか。

そして、いよいよ運命の時を迎える。一九六二年、神戸大学南太平洋諸島学術調査隊が組織され、山の専門家である高木もその一員に選ばれた。同じ自然が相手とはいえ、山から海へ、この変化が彼の悲劇の遠因ではないかとも言われている。

調査隊は六月に日本を出発した。そして七月、小隊に分かれていくつかの島に分散した。高木は三名の小隊の隊長として、タヒチ島から二千キロほど東にあるマルケサス群島のファッツ・ヒヴァ島で調査を始めた。

調査を始めてひと月ばかり経った八月六日、隣のヒヴァ・オヴァ島に向かう二百トンの帆船の中に高木はいた。なぜ隊長が他の隊員に知らせもしないで一人で隣の島に出かけたのか。二名の隊員の事情聴取からも、その理由はわからなかった。

高木の姿が最後に確認されているのは八月六日午前四時半ごろ。甲板に一人で立っている姿が船員によって目撃されている。それを最後に高木の姿は船から消えた。自殺か事故死か他殺か、考えられるのはこの三つだが、いずれも証拠はなくて不明のままだ。

死因不明、遺体未発見のまま、一年後の一九六三年八月六日、裁判所で死亡が確定された。

(六)

一九六二年八月六日はぼくにとってどういう日であったかを考えてみた。そして、はたと思い当たったのが、先に書いた神戸旅行であった。マルケサス群島と日本の時差を考慮すると、現地時間八月六日午前四時半は、日本時間八月六日午後十一時半に相当する。

これはまさしくぼくが関西汽船に乗っていたときだ。そう考えて、当時の記憶をまさぐっているうち、デッキでのあのできごとにも思い当たったのだ。

空を飛んでいるような不思議な無重力感、気がついたらいきなり船室に戻っていたこと、デッキから船室までの記憶が消えていること、これを誰かにしゃべったら、自分の体が宇宙のどこかに吸い取られてしまいそうな気がしたこと、ふるえながら毛布をかぶって恐怖に耐えたこと、こうしたことが半世紀の眠りを破って一気に記憶の表層に噴き出したのであった。

間違いなくあのとき、高木正孝も船のデッキにいた。そして、太平洋のはるかな海を眺めていたはず。ぼくが夜の瀬戸内海を眺めていた、ちょうどそのとき、彼は未明の暗い太平洋を眺めていた。そしてぼくから重力が失われたと感じた瞬間、彼も自然の懷に抱きかかえられるように現実感覚を失って、海に転落したのではないのか。真っ黒な海水の塊を眼前にしたときの悲痛の叫びが、遠い遠い神戸の地まで届いてきたのであろう。

それがぼくの心に届く謂われはなからうが、一週間、まるで自分のすみかのように神戸大学に慣れ親しんだぼくにそれが届いたとしても、それもまた不思議とはいえない。

戦争中、母が同種の体験をしたこともまた、疑いのない事実として聞かされている。母が親代わりになって育て上げた六歳下の弟が学徒動員で海軍に入り、戦争末期のフィリピン戦で非業の最期を遂げた。そのとき、母の夢枕に弟が立ったというのである。

舷側の階段に立ち、母に向かって直立不動の敬礼を捧げながら、彼は船とともに海に沈んでいった。後日届いた知らせによって、あの夢は弟の死に重なっていたと母は確信した。数千キロもの遠い地から「ねえちゃん」の声がきくと届いたのだ。そうにちがいない。

それがいかなる伝達媒体によるものなのか、ぼくは知らない。しかし、高木が突然海に吸い込まれ、助けを求める間もなくサメの餌食になったであろうその瞬間、声にならない悲痛の叫びが一万キロもの距離を伝搬しえたとしても、それを馬鹿げた絵空事だと言ってしまふ気にはなれないのだ。

■ 坊っちゃん

(二〇〇九年一月十二日《月》)

昨日は入試選考会議。合否が無慈悲に線引きされる。帰宅の途中、珍しく雪が舞った。はじめはどこかの焚き火の灰かと見ていると、そうではない。どんどん落ちてくる。明らかに雪だ。はらはらと落ちる軌跡が見分けられるほどだから、激しくは吹雪いていない。北国ならば雪のうちに入ら

ないだろう。

雪片がポトンと一つフロントガラスに舞い落ちた。適度に湿ってふんわりしている。重い雪ではない。かといって粒でもない。まさにひとひらの雪だ。

フロントガラスに貼りついたそれにちらっと目をやる。細いとげがギザギザと何本も張り出している。みごとな結晶構造だ。自然の造形力がこのひとひらの中に集約されている。

瞬間、思った。ぼくらが見ているのは、世界に満ちている普遍的原理ではないのだと。雪のひとひらという具象的個物を、そのみごとな造形のみをぼくらは見ているのだと。自然がぼくらに提示するのは具象なのだ。いやぼくら自身も具象なのだ。

ぼくらの頭脳に埋め込まれた思考回路が、個物の造形美を帰納的に突き詰めていき、その先に、普遍的概念を抽出する。幻のように浮かび上がったその概念を、ぼくらは原理と呼ぶ。それをぼくらはときに実体と見誤る。見誤った瞬間、原理は先入観となり、真の実体を視界から遠ざける。

実体は目の前の雪のひとひらだ。それしかない。そこに自然のすべて、宇宙のすべてが提示されている。ぼくらもまた自然であり、宇宙である。

そんなことを思った次の瞬間、雪片は早くもぬめりとした液体に変化していた。巨大なエントロピーの塊であった雪の造形が、あつという間に元の木阿弥、エントロピーゼロの世界に戻ってしまった(エントロピーは負の数で表されるから、放っておくと、エントロピーはゼロへゼロへ、ただ増える一方となる。これをエントロピー増大の法則という)。

フロントガラスに落ちたのが運の尽きだよ。はるか天空で生まれ、厳しい寒風を堪え忍んで育ってきたお前が、いよいよ着地しようと思構えたとき、ふうーっと吹き抜けた一陣の風で横滑りし、思わず体当たりした先にぼくの車のフロントガラスがあつたというわけだ。そこは内部に暖房源をもつ、お前が生きるにはあまりに過酷な死の世界。あつけなくおまえは死に絶えてしまった。

初雪に加えて、昨夜は激しい雹まで降った。風がヒューヒューなる。ばらばらと不気味な音が窓を打つ。あたり一帯、猛烈な爆撃音に包まれた。

庭の犬たちもさぞ不気味で寒いだろうと、同情の念を抱くが、犬には犬の自然力がある。人の感覚で犬の感覚を推し量るのはまちがいだ。それに犬小屋にはしっかりとビニールで目張りがしてある。風が直接吹き込むことはない。ぼくにできることはそこまでだ。彼らはじっと丸まって、激しく吹雪く音に聞き耳を立てていることだろう。犬たちは四匹一緒に小屋にいるから、身を寄せ合えば寒くない。それ以上のことを人がしてやるのは、自然と共に生きる彼らに対して、余計な介入だ。

今朝は、昨夜の荒天が夢物語であったかのように、晴れ上がった。

庭に出ると、さわやかな風。澄んだ冷気。

■自立の舞

(二〇〇九年九月二十七日《日》)

七月に小学校のクラス会、九月に高校の同窓会。たてつづけに昔の友人に会う機会があった。生まれ月にもよるが、我々はみな六十一か六十二。

話題の中心は、今後の身の処し方だ。

今なお勤めている者は、定年という人生のターニングポイントが焦眉の問題となっている。すでにそれを迎えたという者も意外に多い。これは驚きだった。退職して悠々自適の生活を楽しんでる者もいる。天下り先で第二の勤めに精出している者もいる。もちろん現役組も少なくない。このぼくも、まだ一応は現役だ。といっても、気持ちはすでに第二の人生の方へと大きく傾いているのはまちがいないが……。

「医者に定年はないけど、六十できっぱりやめた。残された人生を精一杯自分の生き方で生きていから」

と言う者がいた。

「俺の人生はおそらく八十までだろう。残された二十年をどう生きるかが勝負。そう考えたら、聴診器をぶら下げてあくせく働いている気がしなくなってきた。居ても立ってもいられない気持ちになってきた」

そう言うのだ。

「残り二十年」

これをあまり一般化されると困惑するが、彼の生き方に心の奥で深く共鳴したのはいうまでもない。

それにしても、二十年という数字は、彼の咄嗟の思いつきではないだろう。患者の生と死を日々見つけてきた体験が言わしめた言葉なのだろう。聞きながらその重みに気づかされ、これまで呑気に

「百までは生きるよ」

などと言ってきたぼくなど、よほど致命的な誤算と打撃を食らわされることになるぞと、顔面蒼白になる思いがしたのだった。

それにしても二十年か。えらく短いなあ。これが我々に残された真実の余命、平均余命ということなのか。

で、残された二十年で何をするか、これはもう人それぞれとしか言いようがない。真の人生観が問われている。組織という、桎梏でもあり、つかえ棒でもあったものが取り外されたとき、人が初めて自立して舞う大舞台、それが残された二十年なのだ。

「五十代半ばで前の会社を定年になって、何年かはぶらぶら過ごしてたよ。二年ほど前、ひょんなことで拾ってくれる会社があってね、第二の就職をしたんだ。定年は六十五だから、それまでは働こうと思ってる」

こういう者もいた。第二の桎梏にあえて繋がれたわけだ。

「えらいなあ、ぼくにはできないなあ」

心底そう思った。

高級官僚から天下り先に横滑りしている者もいた。今も変わらず、朝な朝な黒塗りの車が門の前で待っているという。

「現役時代には味わったことがなかった経営という難しい問題に直面しているよ」

さも苦り切った顔で誇らしげに言う。中学・高校時代、一緒に草野球を楽しんだ仲間の人だ。かつてはすばらしい筋肉美を誇っていたが、今は酒焼けの赤ら顔とメタボな体型にすり替わっている。いったい誰なのか、しばらくイメージを重ね合わせることができないほどだった。

親譲りの中堅企業を経営している者もいる。数年前に会社更生法の適用を受けたため、今は現場を離れた名誉職についているという。

仕事一本で打ち込んできた者が、仕事を離れたとき、はたしてその先に、大舞台で舞うべき自立の舞を用意できているのかどうか。職人ならば、職人芸がそのまま終生、自立の舞となるだろう。芸術家もそうだ。一企業人、一官僚であった者が、組織から切り離されたとき、はたして生を謳歌する舞を舞えるのかどうか。

人生の転換点を迎えている多くの旧友の体験を聞きながら、すごいなあ、えらいなあと思う反面、不安の念も覚えたのである。それはもちろん翻って自分自身への不安なのであるが……。

定年という、人生の桎梏からの解放を喜びとせず、その自由を謳歌せず、新たな寄る辺を求めて「勤め人」を続けようとする人が意外に多いのは、正直言って驚きだった。もちろんそこには、生きるための経済的必要性がある。それはわかる。一日何もせずにいたらだと過ごすくらいなら、時間の切り売りではあっても、緊張を強いられる仕事をする方が身体にもよい。そういう現実的な妥当性もある。名誉や地位を求める気持ちもあるのかもしれない。組織が与えてくれる名誉や地位は、人によってはなんとも心地よいものらしいから。

いろいろと聞き、いろいろと考えるうちに、最後にぼくは、

「残された二十年を精一杯自分の生き方で生きたい」

という元医者者の生き方に最も強い同調を覚えたのだった。

桎梏からの解放を心底喜びたい。組織という支えがないと倒れてしまう人間ではない。そう信じる。どこまでも自分を信じたい。

そもそも遠い昔から、生きるために人との接触を必要とするタイプではなかった。孤独を好む人間だった。組織というつかえ棒は必要ない。ましてや、名誉や地位を求める気持ちなどさらさらない。

生活の問題、経済の問題、これはぼくにとっても心配事だ。妻と二人、食えなくなったら大変だから。だが幸い、それはほとんど解決されている。第二、第三の収入源がすでにあるから。

これらは、長年、人が遊んでいる時間に、一人机に向かつてなしてきた仕事の結果であって、後ろめたいものではない。加えて、ちょっとした個人経営的な仕事もある。食いはぐれの心配はない。たぶんだ。ないはずなのだ。

退職して暇になると、一日だらだら過ごしてしまうぞ。長い時間をもてあましてしまうぞ。そう言って警告してくれる人もいるけれど、その心配もない。やりたいことが山のようにある。今はひたすら我慢しているが、自由の身になったなら、それらを一つずつ片づけていきたい。

本当を言えば、今は定年が待てない気持ちでいっぱいなのだ。居ても立ってもいられないのだ。

先の医者言葉に、

「あっ、やられた。先を越された」

その思いが瞬時に強烈に全身を駆け抜けたのだった。鍋は煮えたぎっている。

■秋祭りの獅子舞

(二〇〇九年十月三十日《金》)

ぼくが住むのは松山市と東温市の境界あたり。ぎりぎり松山だ。東温市とは市町村合併でできた新市名。頭の中ではいまだに重信町だ。道路標識には「TOON CITY」と書かれている。いつ見ても「トゥーン・シティー」としか読めない。この東温市で先日秋祭りがあった。日曜日のこと。

別に祭りを見ようと思ったのではないが、昼過ぎ、自転車で重信川に向かった。途中、母の生家がある牛淵という集落を通る。豊かな歴史を感じさせる小さな集落だ。青々とした田園の中に浮き島のように浮かぶ集落。だからではなからうが、鎮守の社は浮嶋神社と呼ばれている。

集落を縦横に走る小川の水は夏も冬も涸れることがない。透きとおった水が勢いよく流れている。この透明感と水量は、重信川の伏流水が源流であることによる。

どの家も十分な広さの庭をもち、互いに寄り添って密集している。白い土塀と生け垣が独特の風情を醸し出す。

不思議なのは、集落を碁盤目状に区切って、細い小道が整然と張り巡らされていること。漂う空気には、丹精という名の心の歴史が染みついている。

世代を越えて手入れされてきたキンモクセイの巨木。ひな壇に並ぶ右近の橘そっくりの可憐な橘の木。四つ辻にそと置かれた丸石。京の上賀茂あたりによくある、小川から家への引き込み水路、……。

農村には珍しいこの整然とした区画と風情には、秘められた歴史がある。

その昔、牛淵村の人びとは度重なる重信川の氾濫に泣かされていた。そして、ついに三百年前、彼らは村ごと集団移住することを決めた。元々の村は今よりずっと川に近かった。川から離れた高台に新しい村を作り始めた。田舎には珍しい碁盤目状の区割りができたのは、そのためである。自然発生で生まれた村ではないのである。

なかなか決心のつかない人もいた。全員が移住を終えたのは江戸も末に近かった。計画から完成までに百年を要した大移動であった。

彼らを苦しめた氾濫の跡は、今も周辺に点々と残されている。その典型は、小石を積み上げた小高い塚だ。小石は洪水の置き土産である。厭うべき置き土産で塚を作ったのである。

見上げていると、濁流に田畑を呑まれた村人の悔しさが、時を超えて伝わってくる。とはいえ、彼らは洪水を呪うことはなかった。小石を積み上げて、自然の威力を畏怖し、崇めた。抗うよりも、それをおそれ、避ける道を選んだのである。

氾濫を繰り返した重信川を見下ろすように、川の向こうに皿が峰がそびえている。四国山脈に連なる山だ。子供のころ、母の里帰りの供をするたびに、

「あのお皿の形をした山が皿が峰よ」
と何度も指さし教えられた。独特の稜線だ。

それを正面に見据えながら自転車を走らせていると、どこからカリズミカルな太鼓の音が聞こえてきた。トコトコテンテン、トコトコテン。あっ、獅子舞だ。心の中が叫びだす。そして四つ辻に来た。奥を覗くと、子供たちが群がっている。太鼓の音はそこからだ。獅子は道路からへこんだ広場で舞われているから、自転車からは見えない。

勢いそのまま走り抜けてしまった。ちらっと四つ辻から奥を覗いたのはせいぜい一秒か二秒。その束の間の残像が消えないうちに、頭の中には膨大な記憶が渦のように湧き上がってきた。

あの広場は母の実家のすぐ裏手なのだ。道を隔てた公民館の空き地。四年生のぼくは、母の供をして母の実家に来ていた。秋祭りの日であった。そのとき初めて獅子舞を見た。おそらく生まれて初めての獅子舞だった。

太鼓が鳴り出すと、家で遊んでいた従兄弟たちとぼくは、縁側から飛び出した。みな一斉に柿の木に登った。枝先からさらに塀に乗り移った。塀の上に馬乗りになった。公民館の広場がすぐ眼下だ。広場にはゴザが敷かれ、それが獅子舞の舞台だった。村の大人や子供たち集まってきた。ぼくらは宇宙人のように、上空から彼らを見下ろした。

実を言えば、ぼくはブルブル震えていた。塀の上は不安定だし、裸馬の背中のようにつかみどころがない。腰が引け、腕だけを前に伸ばしてしがみついていた。

従兄弟たちは平然と塀にまたがり、足を揺すぶり、声を張り上げていた。一人ぼくだけが、身動きもできずに、命の危機さえ感じていた。

頭を支配していたのは劣等感だった。

秋空に溶け、馬の背で戯れている従兄弟たちがまぶしかった。これが自然の子なのか。自然のままのおおらかな子なのか。それに較べると、町の子はなんと哀れなことか。弱々しいことか。だが救われた。三つ年上の兄貴分が、

「もつと近くで見よう」

とぼくらをふたたび柿の木を伝って地面に下ろし、裏木戸を抜けた。外に走り出た。

人垣にもぐって座りこんだ。太鼓が目の前だ。ドンドンドンと大きな音のする太鼓と、テレックテンテンと甲高い音のする太鼓。リズムと振動が全身に響いて心地よい。

やがて獅子が躍り出た。続いて、ひょっとこお面をつけた老婆役も。獅子と老婆は、太鼓に合わせてもおもしろおかしく舞い始めた。

獅子は踊り狂うと、やがてくたびれ果てて眠ってしまった。それを見た老婆は、抜き足、差し足、忍び足で近づいていく。獅子にいたずらをする。脇腹をくすぐったり、尻尾を持ち上げたり、鼻の穴に指を差し入れたり。獅子は感づいて体を震わせる。老婆はあわてて飛び下がる。獅子は目をつぶる。老婆はまたもいたずらをする。

ついに獅子が跳ね起きた。怒り狂って老婆に襲いかかる。老婆は身をかがめ、さささと後ずさる。その拍子に、つまずいて仰向けにころんだ。獅子が大きな口を開けて飛びかかる。手を擦って命乞いする老婆を、あわや食おうとするその瞬間、太鼓が激しくドドドッと鳴って、獅子は何もかにかむんずとつかまれた。投げ飛ばされる。その姿のなんと滑稽なこと。

ぼくは瞬きをするのも忘れて見入っていた。生まれて初めて見た獅子舞だった。

そうだ、あの広場だ。あの空き地だ。たった今、通りすがりに自転車から垣間見たのは。

そこできつと、あの獅子舞が演じられているのであろう。子供たちが太鼓の音に酔いしれながら、伝統のあの獅子の舞に見入っているのであろう。同じ秋祭りの日、同じあの広場で。

■さあ前へ

(二〇〇九年十二月一日《火》)

辞表を提出したのが十月になってすぐだった。一年早い早期退職だ。あれから二ヶ月になる。

突然の辞表に驚いた校長は、来年度の数学科教員をネット公募することにした。数名が学校にやってきた。それが十一月末。学科試験と面接。その中から採用者が出るのであろう。

この事態を引き起こした張本人の私は、今、着々と自由獲得の日に向けて気持ちを高めている。心の整理をしているという言い方もできる。もちろん後悔はない。不安もない。新生の日々を思っ

て、心は期待と喜びに躍っている。

その日に向けて、やるべきことは多い。一つは心身のリフレッシュ。昨日から始めた軽いジョギングもその一つ。思えば、二十代半ばから二十五年間、走りつづけた。それがぴたとやまったのは潰瘍性大腸炎が悪化したため。

発病したのは三十六歳のとき。その後も、激甚期から抜けて寛解期に入ると、すぐ走った。ところが五十歳の峠を越えた瞬間、経験したこともない重症化が襲ってきた、高熱と、激しい腹痛、下痢、下血。立つこともできなくなった。即入院。辛うじて点滴で生かされていたが、薄らいでいく意識の底で死の淵を見た。

一時的によくになると退院。だが、すぐまた悪化。こうして入退院を繰り返す中で、ほとんど丸々二年、休んでしまった。勤務したのは、そのうちわずか四ヶ月だった。

以来、ジョギングは生活習慣から消えてしまった。長く続けていたテニスも水泳もやめてしまった。運動といえば軽い散歩だけとなった。

昨日、小春日和の陽気に誘われ、少し走ってみた。今日も走った。走ると昔の感触がよみがえる。頬を切る風。すたすたと心地よい靴の音。前へ前へと足が進む。体がぬくもり、心肺が激しく活動する。

ああこれだよ、この感覚。なんと懐かしいのだ、この感覚。

といっても、病後、ジョギングを始めたのはこれが最初ではない。何度かあった。長く続いたこともあったし、すぐにやめてしまったこともあった。はてさて、今回はどうなることか。

やりたいこと、やるべきことは山のようにある。ひと言で言えば、学びと創造。定年を一年早めた理由はこの一点に尽きる。フリーな時間を一刻も早く手に入れたかった。あと一年が待てなくなった。一年の先送りは一年の損失にとどまらない。終点のある人生を思えば、それは二倍、三倍になって跳ね返ってくる、そう思ったのだ。

学ぶこと、読むことは、ある意味単純労働だ。費やした時間に比例する収穫がある。創造はそうはいかない。それを死ぬほど知っている私だが、二十代、三十代の頃にはあった無垢な憧れを思い出し、その頃に戻って初心でやり直そうと思っている。

■退職する教職員のためのセミナー

(二〇一〇年一月一八日《月》)

年があらたまった。新生活までの日数をカウントダウンするところまでやってきた。

そんな中、「退職する教職員のためのセミナー」というのが、先日あった。退職にともなう種々の手続きやら、老後の生活設計のことやら、講習を受ける。

ぼくの場合、時が満ちてやむなく退職するのではない。自分の意志で定年を早めたのだ。会場に一樣につきまといっていた消沈したムードからは、ちょっと気分が浮き上がっていた。それでも多く

のことを学び、大いに参考になるものがあつた。

退職を目前にした人が抱いているもっとも強い心情は何か、というアンケートが(全世界で?)長年とられているそうで、それによると、日本人の場合、ひと言で言えば「不安」が心情の中核にあるのに対し、アメリカ人の場合、「待ちに待ったときが来る喜び」が最も大きな心情であるとのこと。おもしろい結果だ。

まさにこのアメリカ型心情がぼくの心情だ。

会に参加する何日前、ぼくにも同じアンケートがとられた。そのアンケート用紙に、正直な気持ちとして

「大いに学び、大いに読み、大いに書きたい。やりたいことがたくさんあって、早くその日が来ないかと待ちわびている」

と書いておいた。するとアンケートの係員から、

「こういう答えをする人は非常に珍しく、少なくとも私にとっては初めてです」

と言われた。たいていの人は、真っ先に経済的な不安や、頼るべき組織をなくして個に戻ることへの不安を書くらしい。

ぼくには係員の反応がかえって意外で、信じがたく、

「そうじゃなかったら、いったい何のために今まであくせく働いてきたんですか」

と、天地がひっくり返るような気持ちで応じたのだった。

もう何年も前から、自由になる日を夢見て心躍る日々が続いていた。

「あと少し、あと少し」

と自分に言い聞かせて我慢してきたものが、ついに昨秋、堰を切ってあふれ出た。一年を余して辞表を提出した。あと一年が、とても待ちきれなくなったのだ。

辞めたあとに不安がまったくないかと言えば、そりゃあ、あるにはある。何が待ち受けているかわからないという不安は別としても、経済的な不安、健康面の不安、時間をもてあますのではないかという不安、これまで自分を包んでいた人間関係から切り離されることへの不安等々、退職を前にした人に共通する一般的な不安は、ないとは言えない。しかしそれらは、心躍る気持ちに圧倒されて、意識に上ることもない。

妻と顔つき合わせて過ごす時間が増えることへの不安。信じがたいが、これもなかなか強い不安らしい。何十年も外で働き続けてきた者にとって、妻というのは、朝早く別れて、夜になると再会し、眠るための安息を与えてくれる存在、はつきり言うたそういうものだった。それが、退職すると昼間だって目の前にいる。息が詰まる。妻にとっても事情は同じ。

結婚して一つ家に住んでいたとは言いがたが、実情は、すれ違ったところで別々の人生を送ってきた二人であった。ところが、ある日を境に、互いが互いの人生に濃厚に介入してくる。これがさまざまな問題を引き起こさないわけがない。講師の言葉はうなずける。

こうしたもろもろの不安は、ぼくにもすべて当てはまるだろう。直ちには言わないまでも、後々、ポディーブローのように効いてくるのかもしれない。ただ、経済面においてだけは、年金が唯一の収入源でないという点で、ぼくの場合、恵まれている。

健康面の不安は、退職しようがすまいが、常にある。いつ爆発するかしれない難病を抱えている。だがこの難病も、退職によって精神的ストレスがやわらげば、多少は遠のいてくれるのではないか。

そんな気がしている。

組織から切り離されて個に戻ることに不安。これはなかなか切実で、現実的である。だが、ぼくは本質的にこの種の状況を苦にしない。孤独を好むのがぼくの本性なのだから。といっても、無理に孤独を貫く必要もないので、自由の身になれば、かつてのように油絵や短歌の会に戻ることも考えている。院のゼミに出て、研究成果を発表する楽しみもある。

あり余る自由は、それを自己制御できるかどうかで、無限の喜びともなれば、危険な凶器ともなる。人は多くの場合、パーフェクトな自由には耐えられず、適度な不自由、適度な強制力を求めるもののようなものである。

真の自由は、真の孤独からしか得られない。孤独の中に成長と変化の喜びを味わえないかぎり、その人に真の自由はありえない。組織という名の他者に依存するほか、その人に生きる道は開かれてこない。

四月から始まる第二の人生を、淡々と飄々と、第一の人生にはなかった喜びで味わいたいと思っている。孤独を友として味わいたいと思っている。

終わりに

『でこぼこだらけの道2』が終わった。

『でこぼこだらけの道3』に続く。リタイア後の人生である。ここでは、とりあえず、リタイアしてから十年あまりの『坊っちゃんだより』から抜粋することにする。

人生の終末をいつ迎えるのか、それは誰にもわからない。私にもわからない。

なんとか人生を元気に生きている間の『坊っちゃんだより』なら、抜粋できるというわけだ。

元気とはいえ、その十年あまりの約半分は、死を覚悟した新たな難病との戦いである。いったいいつまで続くのか、私の難病との戦いは。

この新たな難病にも、潰瘍性大腸炎同様に、激甚期と寛解期があつて、寛解の間には、なんとか仕事に励めるのである。それがありがたい。

寛解にも完全寛解と部分寛解があり、はじめのうちは、主治医から寛解に入ったと言われても、それは、いつ激甚期に転がり落ちるかしかない、部分寛解の意味であった。ところが近ごろ、はっきりとは言われないものの、検査の数値から、私は勝手に完全寛解に入ってきたなと思うようになってきた。少々楽天的な自己解釈だが……。

ともかくこうしたことを繰り返しながら、気がついてみたら、父の九十一歳を越えていた。そんな甘い夢を見ている今日なのである。

では、『でこぼこだらけの道3』へと道を急ぐことにする。

二〇二三年三月初旬 七五歳の誕生日直後